鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（24）

柿内遺跡
大園遺跡
西俣遺跡

平成11年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序　　文

今年度，昭和49年度・昭和54年度に実施した農地整備事業に伴う柿内遺跡・大園遺跡・西俣遺跡の整理・報告書作成のはこびとなりました。

昭和50年代前後の埋蔵文化保護行政は，県・市町村ともにその体制づくり，組織強化を図る初期の時代でありました。

この頃から九州縦貫自動車道建設をはじめ，高度経済成長の波とともに，大型の諸開発事業が進み，それに伴う遺跡発掘調査も増加する中，発掘調査にその勢力を注ぎ，現場優先で走った時勢の下，発掘調査後の整理や報告書作成を遅らさざるを得ない状況にありました。

ここに「柿内遺跡」,「大園遺跡」,「西俣遺跡」の発掘調査の成果を発掘調査報告書としてまとめました。県民の皆様を始め多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただく一助となれば幸いです。

平成11年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　吉　永　和　人

「柿　内　遺　跡」

報告書抄録

ふりがな	かきうちいせき
書名	柿内遺跡
副書名	県営畑地総合土地改良事業に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	15
編著者名	長野眞一
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター　TEL 0995－65－8787
所在地	〒899-5652 鹿児島県姶良郡姶良町平松6252番地
発行年月日	西暦１９９９年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
柿内（かきうち）	鹿児島県出水郡（かごしまいずみ）	46 46		32度 03分 05秒	130度 17分 45秒	197409～ 197410	600	県営畑地総合土地改良に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柿内（かきうち）	散布地	縄文時代中期 後期		南福寺式土器 阿高式土器 並木式土器 石鏃 石斧 磨石 叩石 石皿	

例　　言

1　この報告書は，県営畑地総合土地改良事業に伴う「柿内遺跡」の発掘調査報告書である。

2　柿内遺跡は，出水郡高尾野町上がり立に所在する。

3　発掘調査は，鹿児島県農政部（鹿児島県出水耕地事務所）からの受託事業として鹿児島県教育委員会が実施した。

4　発掘調査は，昭和49年９・10月に実施した。

5　報告書作成は，平成10年度の「報告書作成事業」として行なった。

6　発掘調査に当たっては，高尾野町上がり立自治会の協力援助を得た。

7　発掘調査については，河口貞徳先生（鹿児島県考古学会会長）池水寛治先生（故人）の指導・助言を得た。

8　報告書は第１章を戸崎勝洋，その他を長野眞一が執筆し，編集は長野が行なった。

9　報告書作成後の遺物等の保管は，埋蔵文化財センターで行なっている。

281

276

174

180

287

181

274

283

275

277

249

68

目　　次

序文
報告書抄録
例言

第１章　環境及び組織 ―― 7
　第１節　遺跡の地理的環境 ―― 7
　第２節　調査の経過及び組織 ―― 7
　第３節　報告書作成の経過及び組織 ―― 8

第２章　出土遺物 ―― 10
　第１節　土　器 ―― 10
　第２節　石　器 ―― 57

第３章　まとめ ―― 74

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置 ―― 9
第２図　春日式土器 ―― 10
第３図　並木式土器 ―― 11
第４図　磨消縄文土器 ―― 12
第５図　阿高式土器（阿高Ⅲ式土器Ａ類） ―― 13
第６図　阿高式土器（阿高Ⅲ式土器Ａ類） ―― 14
第７図　阿高式土器（阿高Ⅲ式土器Ａ類） ―― 15
第８図　阿高式土器（阿高Ⅲ式土器Ａ類） ―― 16
第９図　阿高式土器（阿高Ⅲ式土器Ａ類） ―― 18
第10図　阿高Ⅲ式土器Ｂ類・南福寺式土器Ａ類 ―― 20
第11図　阿高Ⅲ式土器Ｂ類・南福寺式土器Ａ類 ―― 21
第12図　阿高Ⅲ式土器Ｂ類・南福寺式土器Ａ類 ―― 22
第13図　阿高Ⅲ式土器Ｂ類・南福寺式土器Ａ類 ―― 25
第14図　阿高Ⅲ式土器Ｂ類・南福寺式土器Ａ類 ―― 28
第15図　南福寺式土器Ｂ類 ―― 29

第16図　南福寺式土器Ｂ類 ―― 30
第17図　南福寺式土器Ｃ類 ―― 33
第18図　南福寺式土器Ｃ類 ―― 34
第19図　南福寺式土器Ｄ類 ―― 36
第20図　南福寺式土器Ｄ類 ―― 38
第21図　南福寺式土器Ｅ類 ―― 40
第22図　南福寺式土器Ｆ類 ―― 42
第23図　南福寺式土器Ｆ類 ―― 44
第24図　南福寺式土器Ｇ類（精製鉢形土器） ―― 45
第25図　南福寺式土器Ｇ類（精製皿形土器） ―― 46
第26図　南福寺式土器Ｇ類（精製椀形土器） ―― 47
第27図　南福寺式土器Ｇ類（把手部鉢形土器） ―― 48
第28図　南福寺式土器Ｇ類（壺形土器） ―― 52
第29図　南福寺式土器Ｇ類 ―― 53
第30図　南福寺式土器Ｇ類（把手） ―― 54
第31図　南福寺式土器Ｇ類（特殊飾り） ―― 55
第32図　南福寺式土器Ｇ類（特殊突起部） ―― 56
第33図　石器（石鏃・石匙） ―― 57
第34図　石器（使用痕のある剥片他） ―― 58
第35図　石器（石核） ―― 60
第36図　石器（磨製石斧） ―― 61
第37図　石器（磨製石斧） ―― 62
第38図　石器（磨製石斧他） ―― 64
第39図　石器（打製石斧他） ―― 65
第40図　石器（打製石斧他） ―― 66
第41図　石器（打製石斧他） ―― 67
第42図　石器（打製石斧他） ―― 68
第43図　石器（打製石斧他） ―― 69
第44図　石器（剥片他） ―― 70
第45図　石器（叩き石・磨石） ―― 71
第46図　石器（叩き石・磨石） ―― 72
第47図　石器（石皿） ―― 73

図　版　目　次

図版１　春日式土器・並木式土器 ―― 77
図版２　磨消縄文土器・阿高式土器 ―― 78
図版３　阿高式土器・阿高Ⅲ式土器Ａ類 ―― 79
図版４　阿高Ⅲ式土器Ａ類・阿高Ⅲ式土器Ｂ類 ―― 80
図版５　阿高Ⅲ式土器Ｂ類・南福寺式土器Ａ類 ―― 81
図版６　阿高Ⅲ式土器Ｂ類・南福寺式土器Ａ類 ―― 82
図版７　南福寺式土器Ａ類 ―― 83
図版８　南福寺式土器Ｂ類・南福寺式土器Ｃ類 ―― 84
図版９　南福寺式土器Ｂ類 ―― 85
図版10　南福寺式土器Ｂ類・南福寺式土器Ｄ類 ―― 86
図版11　南福寺式土器Ｅ類・南福寺式土器Ｇ類 ―― 87
図版12　南福寺式土器Ｇ類 ―― 88
図版13　南福寺式土器Ｇ類 ―― 89
図版14　南福寺式土器Ｇ類 ―― 90
図版15　復元土器 ―― 91
図版16　出土石器 ―― 92

第1章　環境及び組織

第1節　遺跡の地理的環境

柿内遺跡の所在する鹿児島県出水郡高尾野町を含む出水市と野田町は，熊本県水俣市と隣接する県北の市町である。この出水地方は台地および低地を中央にもち，北東部に熊本県へ連続する矢筈岳（687m），南部には紫尾山（1067m）急峻な山地よりなり，北部は不知火海に面する。また南部はなだらかな丘陵地帯となり阿久根市へつづく。

このうち，出水地方の主要部を占める出水平野はその形成から扇状地，河岸段丘，沖積地に区分される。扇状地は標高70～80mの当たり，礫層より構成された高位段丘のもとに発達したもので，出水平野でも最広大な平野部となる。扇頂部を出水市松山，高尾野町野添とする複合扇状地で約5kmに達する。

この扇状地をとり囲むかたちで発達した河岸段丘があり，この河岸段丘は沖積地との比高約2～3mの高さで帯状にとりまくが，これを形成するのは北より米ノ津川，平良川，高尾野川，野田川である。

沖積平野は各河川の両側に開け，不知火海に達するあたりでわずかにつながり，近世以後の干拓地に続く。

このうち高尾野川，野田川は紫尾山にその源を求め，高尾野町砂原上部でいったん接近するが，扇状地で東西に大きく蛇行し，小河岸段丘を形成する。中流から下流にかけては沖積平野を発達させながら，再び出水市荘付近で接近して不知火海に流入する。高尾野町はこの両河川に挟まれた地域である。したがって出水平野のうち複合扇状地の中心より西端に至る地域でもある。

柿内遺跡は，扇状地の基部の標高約80mの溝川に南面する微傾斜地に位置する。

第2節　調査の経過及び組織

県営畑地帯総合整備事業として，県農政部（出水耕地事務所）が事業を実施していたところ，事業区の一角に土器片が発見されたことから，県農政部と県教育委員会が協議し，昭和49年9～10月に発掘調査を実施した。

調査の組織

調査責任者	県教育庁文化課長	犀川碇吉
調査企画	専門員	河野治雄
	係長	本蔵久三
調査担当	文化財研究員	戸崎勝洋
	文化財調査員	長野眞一
調査事務	課長補佐	有村八郎
	係長	中島敏光
	主事	野村和徳
	主事	長山恭子

第3節　報告書作成の組織

作成主体	鹿児島県教育委員会	
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター所長	吉永和人
	次長兼総務課長	尾崎　進
作成企画者	主任文化財主事兼調査課長	戸崎勝洋
作成担当者	文化財主事	長野眞一
事務担当者	主査	前屋敷浩徳
	主査	政倉孝弘
	主事	溜池佳子

発掘調査及び報告作成に当たり多くの方々に，ご指導・ご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

鹿児島県農政部・鹿児島県出水耕地事務所・高尾野町教育委員会

河口貞徳　鹿児島県考古学会会長

池水寛治　出水高校教諭（故人）

吉留秀敏　福岡市教育委員会埋蔵文化財課

本田道輝　鹿児島大学法文学部助教授

泉　拓良　奈良大学教授

坂本嘉弘　大分県教育委員会

高橋信武　大分県教育委員会

1	柿内遺跡	出水郡高尾野町 上り立て	昭和49年鹿児島県調査，縄文時代中期～後期(阿高式・南福寺式土器等)，今回報告
2	下蕗迫遺跡	出水郡高尾野町	平成8年高尾野町発掘調査，縄文時代晩期(黒川式土器・編布圧痕土器)，未報告
3	荘貝塚	出水市荘下	昭和54年出水市発掘調査，縄文時代前期(轟式土器・貝層・抉状耳飾)，報告
4	出水貝塚	出水市尾崎	京都大学，鹿児島県・出水市調査(縄文時代中期～後期・貝層・埋葬・標識遺跡)，報告
5	沖田岩戸遺跡	出水市	昭和48・49年出水市・鹿児島県調査，縄文時代晩期(入佐式土器・玉類)，未報告

米津港
名護港
福江港
出水干拓東工区
住吉町
今釜中
今釜東
今釜西
早馬
西新田
西福江
汐見町
福江
知識
津山
下水流
東水流
西水流
上水流
浦田町
掛腰
平和町
鹿島
文化町
知識町
横尾
沖田
黄金町
八月田町
平松東
平松上
上原
豊原
安原
朝熊
松尾
大野原
東大野原
西大野原
政所
唐笠木
諏訪山
焼山
千間山
上原
大和
大久保
高尾野
内野
武本
小原下
清水
御岳
大皷橋
昭興
内木場
郡毛野
1
2
3
4
5

第１図　遺跡の位置

第2章　出土遺物（第2～47図）

第1節　土　器

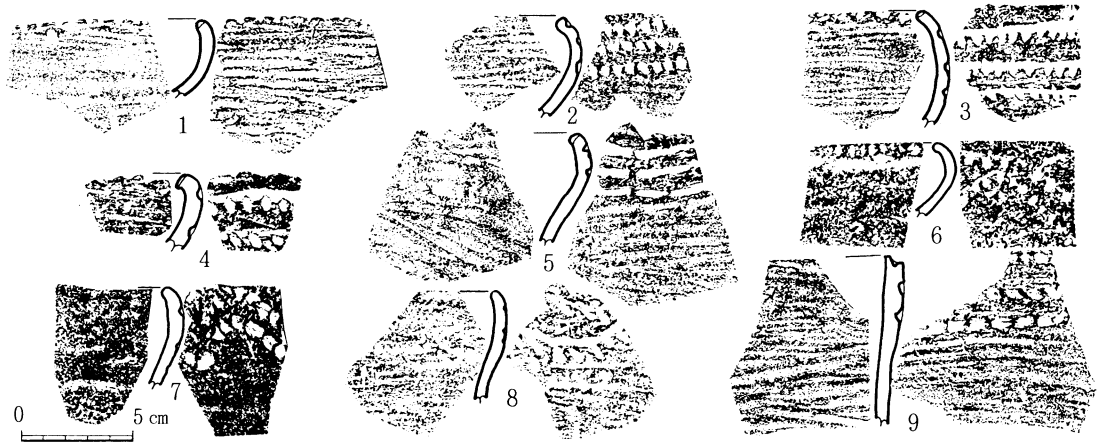
本遺跡の出土遺物（土器）は，南福寺式土器を中心に縄文時代中期から後期に位置づけられる春日式土器，並木式土器，阿高式土器，出水式土器等が見られる。出土土器の区分については，形式区分できる範囲の中で，類毎に表示した。なお，主体を占める南福寺式土器については，深鉢形土器は文様毎にA～F類の7区分，鉢形土器及び壺形土器・把手，口縁部突起等については分類できた範囲で表示することに努めた。

1類土器　春日式土器（第2図）

基本的にいわゆるキャリパー状の形状を有し，内外面の器面調整は貝殻条痕で明瞭に残される。器壁は総じて5～8㎜と薄く，粘土紐（隆帯文）を張り付けた浮文等は認められない。

1の無文土器は，口唇部は叉状工具或いは貝殻腹縁部を横位に連続刺突し，刻みを持つ。2の口縁部は平坦面を成し，口縁部に並行した3列の連続刺突文を施し，外面は丁寧なナデ仕上げが見られる。3は貝殻腹縁部で口唇部を刻み，口縁部に並行した3列の沈線上を連続して深く刺突している。4も同様の文様構成が認められる。5は波状口縁の可能性があり，口縁部の刻みは明瞭で，間延びした押し引き様の刺突文で描かれる。6の刺突は鋭利な工具で深く，7は間延びした押し引き文で波状の刺突文の組合せの文様構成が見られる。8は先行した沈線に沿って，刺突が深く刻まれる。9の形状は明確でないが，施文は間延びした押し引き文で，深く刻まれる。色調は黒灰色を呈す。

胎土には長石の混入が一般的で，3では雲母が特徴的である。色調は，薄い灰色，肌色に区分できるが，特に8の肌色は鮮やかである。



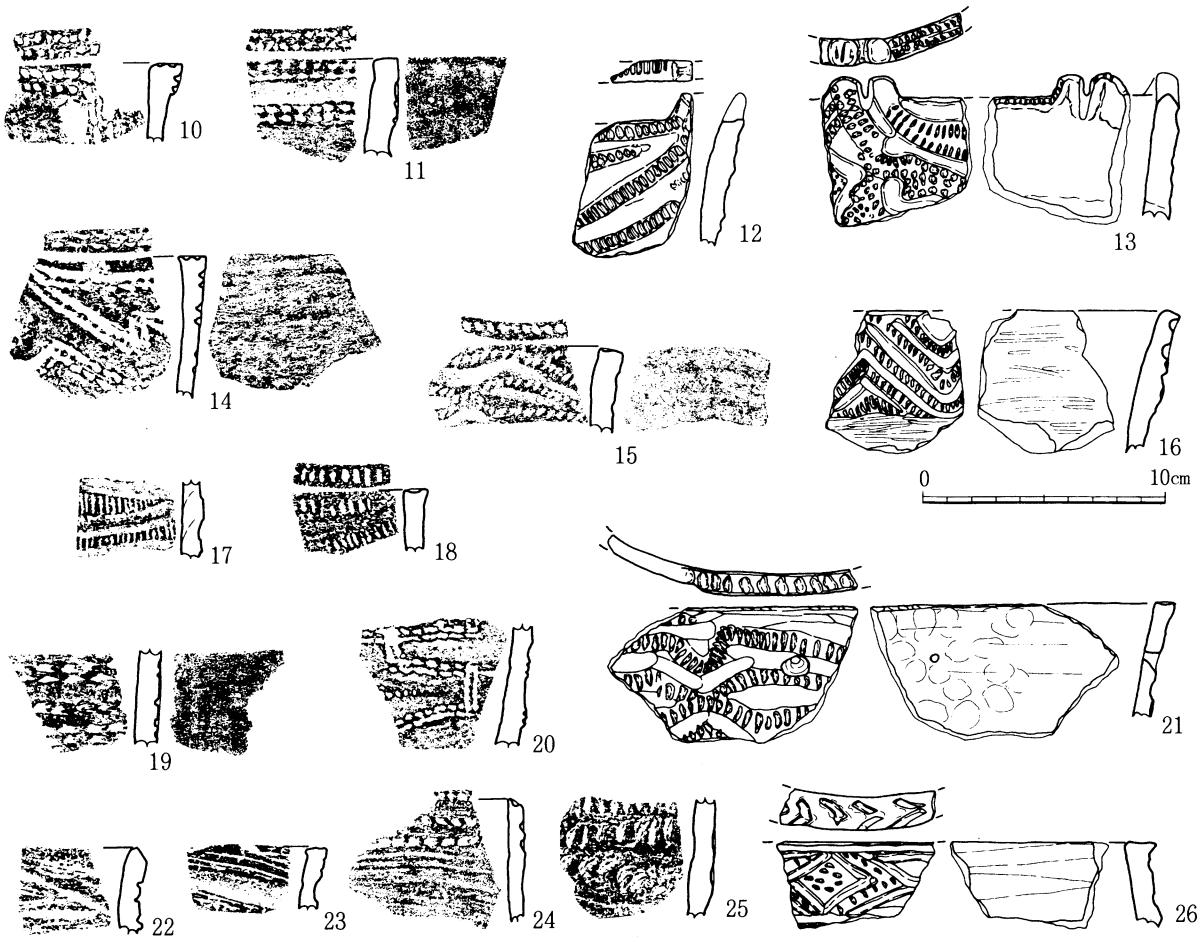
第2図　春日式土器

2類土器　並木式土器（第3図）

基本的に凹線文で文様構成した後，凹線文と凹線文間（沈線文と沈線文間・ナデ調整上）に刺突文・押し引き文等で連続刺突を行ったもので，大量の滑石を胎土に含み，石けん様のヌルヌルした器面を成している。

10の口唇部は台形状の平坦面を成し，叉状工具で連続し深く刻まれる。外面の刺突は丁寧なナデ仕上げの後凹線文で文様構成した後，同一工具で行っている。11も同様である。12の口唇部は枝状突起を持ち，貝殻腹縁部（2肋分）を連続刺突している。胎土に大量の滑石を含み，鮮やかな肌色を呈した極めて堅緻密な仕上がりである。13の滑石は少量で，刺突は叉状工具を用いている。14も

口唇部に突起を持つもので，滑石のほか雲母を混入し，堅緻な仕上がりである。15は大量の滑石を含み，貝殻腹縁部を規則的に刺突，16・17でも同様の手法が認められる。18の口唇部は狭い平坦面を成す。また口縁部の文様帯は肥厚し，先行した深い沈線文間に刺突文が連続して刻まれる。多量の滑石を含み，堅緻な仕上がりである。19はナデ仕上げの器面に間延びした押し引きを，24では指頭による爪形文が認められる。20の凹線文は深く21では浅い。なお，21の口唇部の刻みは浅く凹点状である。23は鋭利な工具の並行沈線文で，平坦な口唇部にも部分的に描いている。なお，多量の滑石を含み堅緻な仕上がりを成している。



第3図　並木式土器

3類土器　磨消縄文土器（第4図）

26～29土器をこの類に含める。4点個別に記載しているが同一固体の可能性が高い。キャリパー状の形状を成し，内外面ともに丁寧なヘラ磨きで仕上げている。

26・27の復元口径は29.6cmで口唇部は丸く仕上げている。

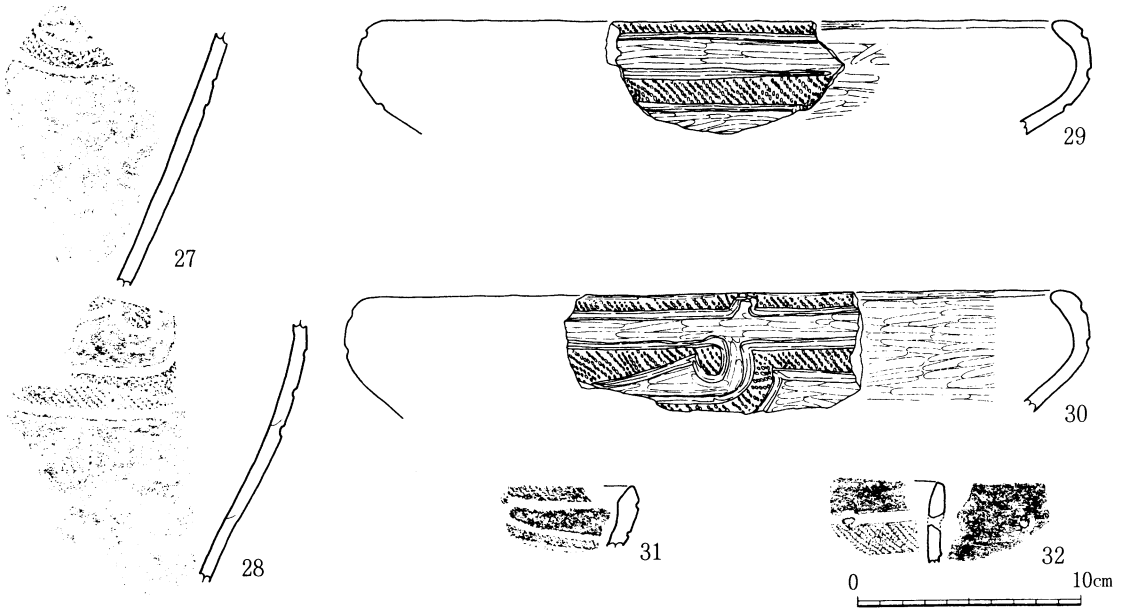
30・31は，個別の資料で細分はできていない。

4類土器　阿高式土器（第5～6図）

特徴とされる太めの凹線文で施文し，それらを施文する文様が器体全域に及ぶものを対象としている。

32口径15.5cmの小型の鉢形土器で，口唇部は器面凹線文と同一の工具で刻まれ波状を呈している。

器面は左から右方向への行動が認められ，底部近くまで施文された可能性が高い。外面は丁寧にナデられ，内面は横方向の板状工具によるナデ整形が見られる。33は５本の枝状突起で構成され，多量の滑石を混入する。34の口唇部の刻みは棒状工具で内面方向に刻まれ，外面は丁寧にナデた後棒状工具で浅い凹線文を描く。復元口径は19.2cmで，補修孔は内外面から回転して穿たれている。



第４図　磨消縄文土器

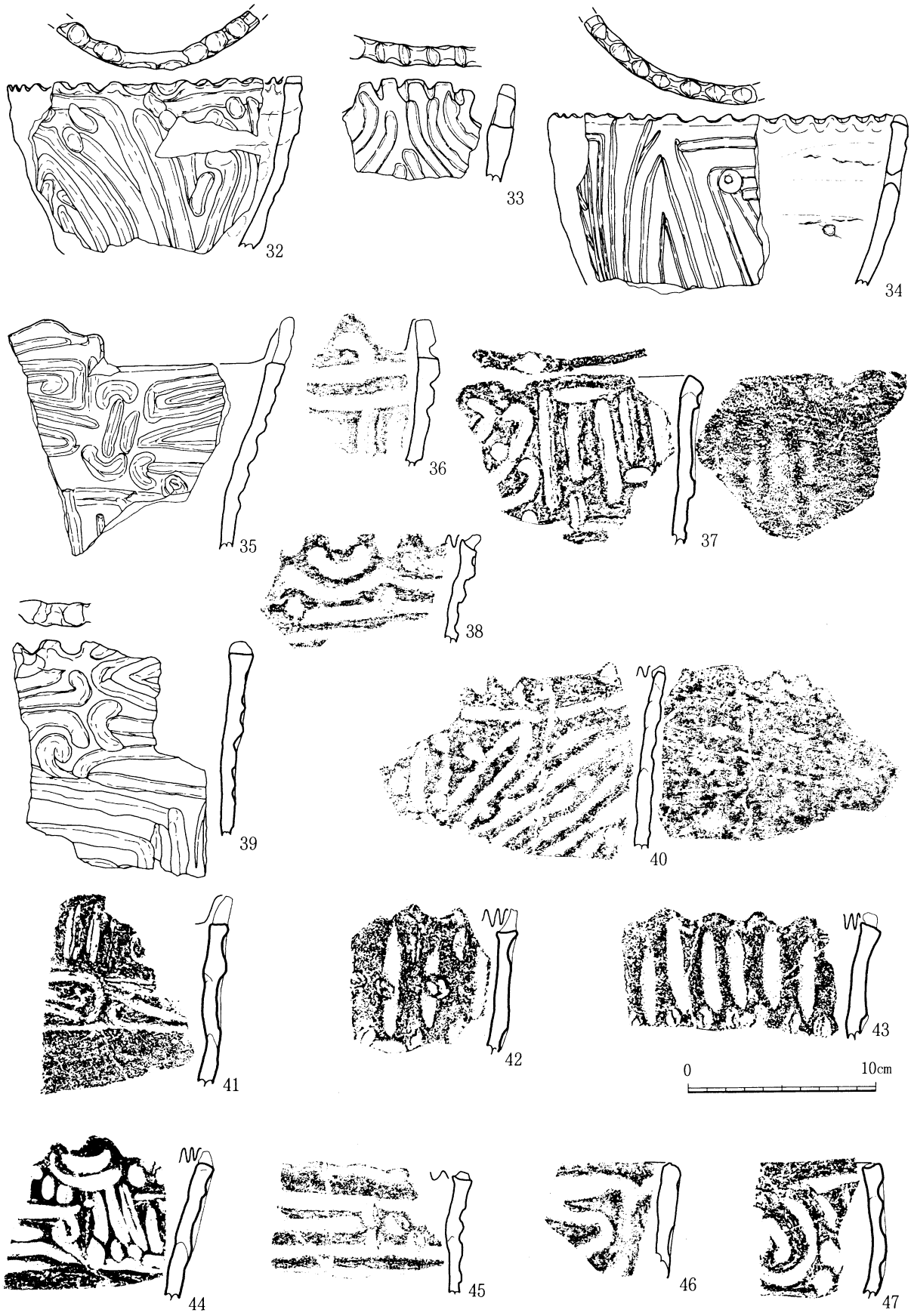
35は突起口縁を持ち口唇部は平坦面を成す。外面は丁寧にナデた後，棒状工具で凹線文を描く。滑石の混入は少ないが堅緻な仕上がりである。36の凹線文は施文の際の押付けが強く，その反作用で内面に凹凸を生じている。35同様の胎土，仕上がりが認められる。37では長石・石英・雲母を含み，施文の際の反動で内面に凹凸を生じている。口唇部は平坦で，深い押圧による深い刻みを持ち，極めて堅緻な仕上がりを呈している。38の波状口縁部は外方向に押圧し，37と同様の胎土が見られる。39の内外面は板状工具で入念にナデられ，更に外面の文様帯はナデ仕上げの後，棒状工具で深く明瞭な凹線文で描いている。一方40の凹線文は浅く不明瞭な感を呈しているが，凹線文間に凹点文が付されている。41も突起状口縁を成し，突起部に縦位の凹線文を並べ，42ではやや肥圧した口縁部に縦位の凹線文と凹点文を施文している。43の凹点文は並行した凹線文間の下端部に施され，内面は凹凸を残している。44の角状突起の下位に半月状の凹線文が，他の施文は凹線文と凹点文で構成される。なお，41～44の胎土には滑石は認められない。

48～51はいずれも滑石を胎土に含むもので，前の３点は胴部，51は底部近くの資料で重量感があり，４点共に器面は丁寧なナデ仕上げが見られ，鮮やかな肌色から赤褐色を呈している。

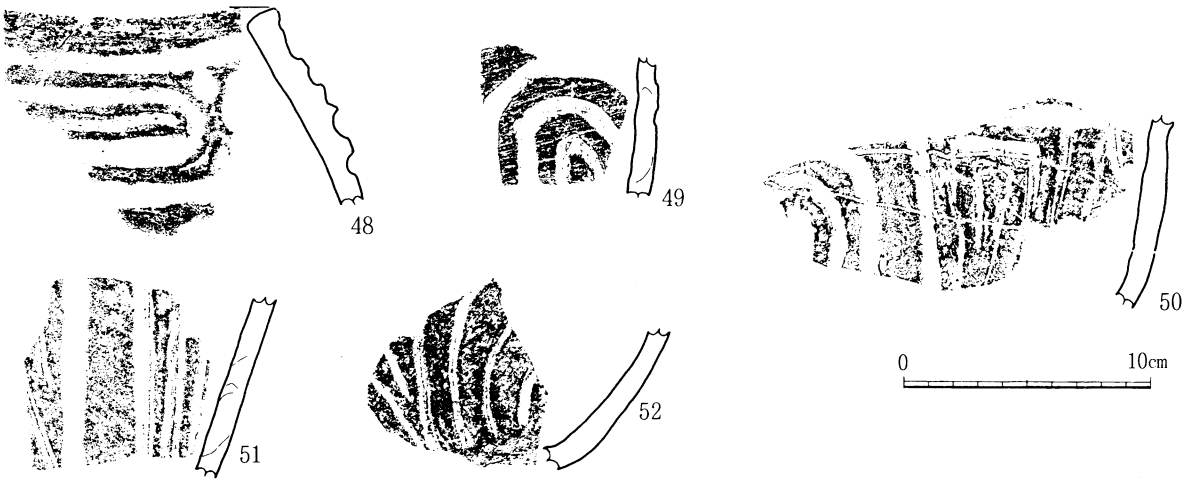
５類土器　阿高Ⅲ式土器Ａ類（第７・８・９図）(32～69)

文様帯が口縁部直下に集中するもので，指頭及び太めの凹線文で施文しかつ施文帯が肥厚することはない。文様は，直線・渦巻・三角・凹点等が描かれ，明瞭である。少量であるが胎土に滑石を含むものも見られるが，砂粒や細砂粒を主体に石英や長石・角閃石・雲母等の鉱物が見られる。

53は最大径が胴部に想定される形状を成すもので，器壁は1.7cm程と厚い。口唇部は平坦にナデられ，内側に傾く。指頭による凹線文と凹点文が深く明瞭に描かれ，長石と角閃石の胎土混入が特



第5図　阿高式土器

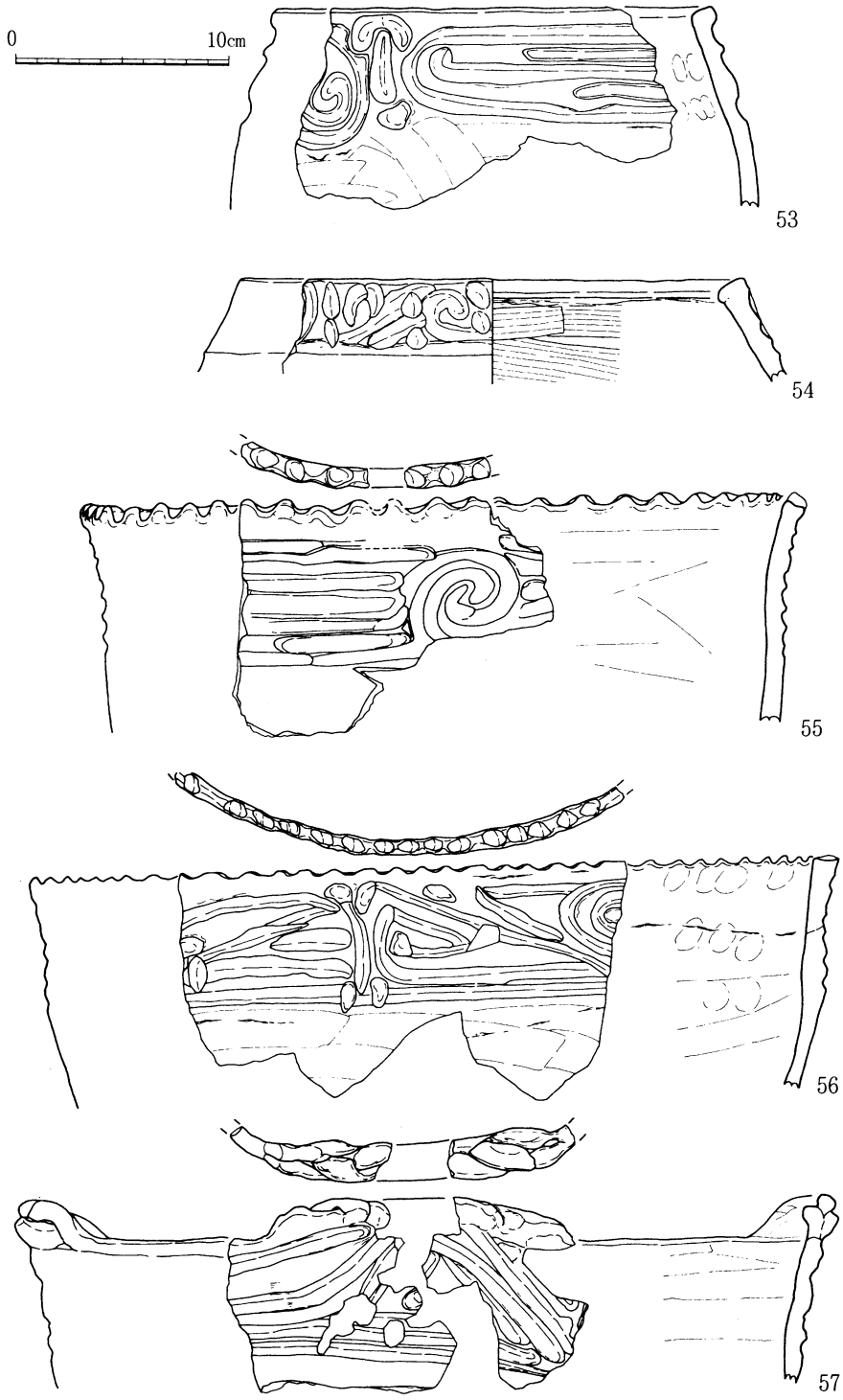


第6図　阿高式土器

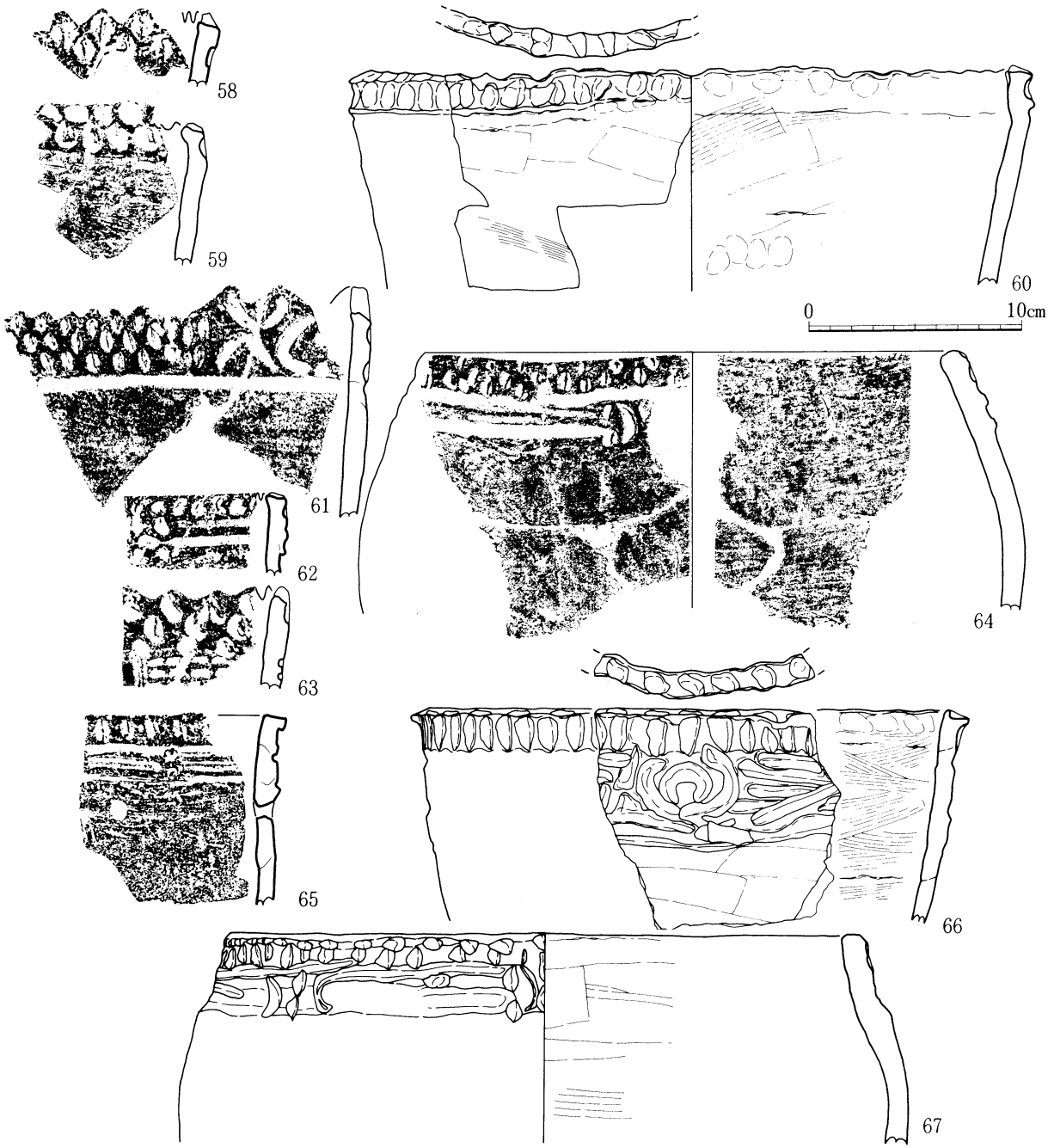
4類土器　阿高式土器

挿図	番号	器種	部位	胎土	調整	備考
第5図	32	深鉢形土器	口縁部 内弯	細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	平坦な口唇、指頭凹点・凹線文。赤褐色。焼成堅緻。 復元口径20.3cm
	33	深鉢形土器	口縁部 内弯	細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	平坦な口唇、指頭凹点・凹線文。やや暗い黄橙色。焼成極めて堅緻。復元口径23.5cm
	34	深鉢形土器	口縁部 やや外反	細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：ナデ 内：板ナデ	波状口縁。凹線文は深く明瞭。渦巻文と平行線文の組合せ。外面黒褐色。復元口径33.9cm
	35	深鉢形土器	口縁部 直行	細砂粒を多く含む、長石・石英・滑石 白色粒目立つ	外：ナデ 内：板ナデ	波状口縁。凹線文は深く明瞭。三角形文と平行線文の組合せ。濃い肌色。復元口径37.9cm
	36	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	平坦口唇、組み紐突起。平行線凹線文内外面とも灰褐色。焼成は極めて堅緻。復元口径37.6cm
	37	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・滑石 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁。深い指頭凹点（2列）で内面飛び出す。 焼成極めて堅緻。
	38	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・滑石	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁。深い指頭凹点（1列）で内面飛び出す。 焼成極めて堅緻。
	39	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・滑石 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：板ナデ・指押さえ	波状口縁。深い指頭凹点。焼成極めて堅緻。外面に炭化物付着。復元口径32.1cm
	40	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・滑石 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：ナデ	波状・台形状突起口縁。指頭凹点3列。器壁は薄い。 にぶい肌色。焼成極めて堅緻。
	41	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ・板ナデ 内：ナデ	波状口縁、端部に刺突。焼成堅緻。
	42	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、深い指頭凹点、並行刺突文。焼成極めて堅緻。
	43	深鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ 内：板ナデ	丸味口唇、端部にヘラ状工具刺突、下位に指頭凹点。 にぶい褐色。復元口径cm
	44	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	平坦な口唇部、端部に指頭凹点。並行沈線はヘラ状工具、穿孔は回転。焼成極めて堅緻。
	45	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・滑石	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	波状口縁、端部の凹点は指頭。焼成極めて堅緻。 外面位炭化物付着。復元口径26.1cm
	46	深鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・滑石 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	丸味口唇、端部は刺突他は指頭。焼成は極めて堅緻。 外面赤褐色、内面灰褐色。復元口径29.7cm
第6図	47	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板削り 内：板ナデ	波状口縁、端部の凹点は指頭。焼成極めて堅緻。 褐色。穿孔回転。復元口径31.2cm・高さcm・底部径cm
	48	深鉢形土器	口縁部 やや内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・滑石	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	波状口縁、端部の凹点は指頭。多量の滑石を含み焼成は極めて堅緻。桃色。復元口径37.2cm
	49	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・滑石	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	波状口縁、端部の凹点は指頭。焼成極めて堅緻。 外面位炭化物付着。復元口径26.1cm
	50	深鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・滑石 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	丸味口唇、端部は刺突他は指頭。焼成は極めて堅緻。 外面赤褐色、内面灰褐色。復元口径29.7cm
	51	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・滑石 白色粒目立つ	外：ナデ・板削り 内：板ナデ	波状口縁、端部の凹点は指頭。焼成極めて堅緻。 褐色。穿孔回転。復元口径31.2cm・高さcm・底部径cm

徴的である。また，内面は指頭で押さえた後，丁寧にナデ調整が加えられる。復元口径は20.3cm。54も最大径が胴部にある鉢形土器で，復元口径は23.5cm，口唇部は広めの平坦面を成し，丁寧にナデられる。内面は板状工具によるナデ仕上げが観察され，53同様器壁は厚く重量感がある。滑石の混入はなく，長石と角閃石が目立つ胎土である。凹点文は指頭に寄ると判断できる。以上の２点は赤褐色を呈している。55の波状口縁は指頭の押圧により明瞭で，直線文と渦巻文の凹線で口縁部直下に施文が集中している。胎土に滑石は含まず，表面は黒色を呈している。復元口径33.9cm。56復元口径37.9cmと大型の割には器壁が６mmと薄い。内面は指頭でナデられるが，粘土帯のつなぎが観察される。滑石は含まず，長石や角閃石の他雲母の混入が見られる。赤褐色。57口唇部に組紐状の突起を貼り付け，施文は口縁部直下に限られる。復元口径は37.6cmと大型であるが器壁は薄い。60復元口径が32.1cmの深鉢形土器で，指で口縁部直下に凹点を施した後に，口唇部を押圧し波状に仕上げている。61は波状で台形状の突起を持つ口唇で，凹線の回線で設けた施文帯に凹点３



第７図　阿高式土器Ａ類



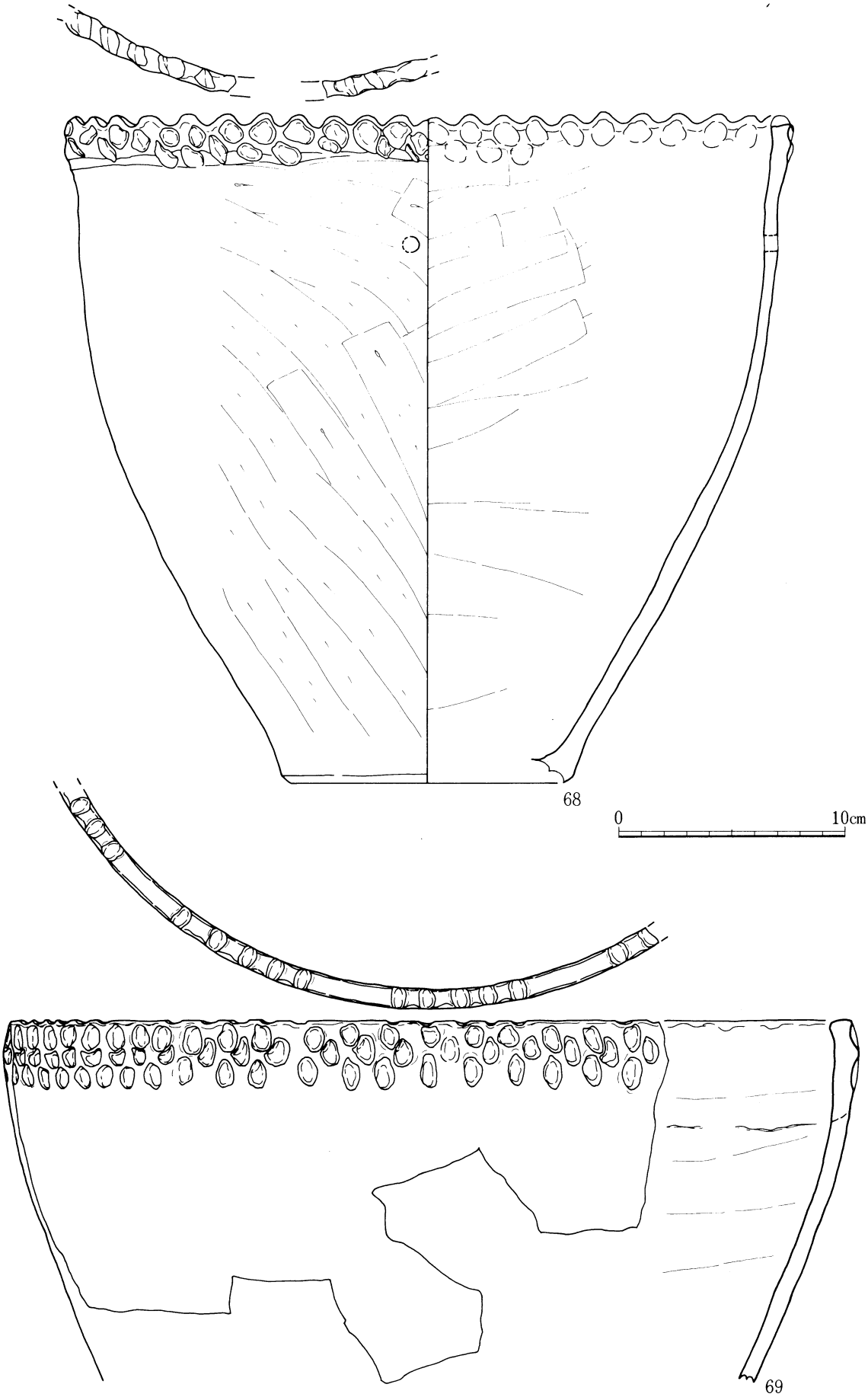
第8図　阿高式土器（阿高Ⅲ式土器A類）

列，半月状凹線文を全て指頭で描いている。なお，この資料は胎土に滑石を混入している。64口唇部は大方丸みを持ち，端部に刺突・その下位に指頭凹点，さらにその下位に凹線文を描く。口縁部が内弯する鉢形土器で，器壁が厚く，重量がある。66口唇部は指頭で強く押圧され，端部がはみ出す。直下の縦位の凹点も指頭で深く刻み，爪痕が明瞭に残される。渦巻文は指頭で，沈線はヘラ状工具を使い，復元口径は26.1cmある。67の復元口径は29.7cmで，文様帯は丁寧にナデ胴部は板で丁寧にナデられ胴部上位から緩やかに内弯する形状に仕上げている。68の口唇部は指頭の押圧により波状に刻まれ，口縁部文様帯はヘラ状工具の沈線で回線後，上下2段に指頭凹点文が描かれる。器面は，内面は板ナデ，外面は板削りの調整が見られ，底部は平底となる。復元口径31.2cm・高さ29.6cm・底部径11.7cmで，補修孔は回転で穿ち，総じて器壁の薄いことが指摘される。

5類土器　阿高Ⅲ式土器Ａ類

挿図	番号	器　種	部　位	胎　　土	調　整	備　　考
第7図	53	深鉢形土器	口縁部 内弯	細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	平坦な口唇、指頭凹点・凹線文。赤褐色。焼成堅緻。 復元口径20.3cm
	54	深鉢形土器	口縁部 内弯	細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	平坦な口唇、指頭凹点・凹線文。やや暗い黄橙色。焼成極めて堅緻。復元口径23.5cm
	55	深鉢形土器	口縁部 やや外反	細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：ナデ 内：板ナデ	波状口縁。凹線文は深く明瞭。渦巻文と平行線文の組合せ。外面黒褐色。復元口径33.9cm
	56	深鉢形土器	口縁部 直行	細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：板ナデ	波状口縁。凹線文は深く明瞭。三角形文と平行線文の組合せ。濃い肌色。復元口径37.9cm
	57	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	平坦口唇、組み紐状突起。平行線凹線文内外面とも灰褐色。焼成は極めて堅緻。復元口径37.6cm
第8図	58	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁。深い指頭凹点（２列）で内面飛び出す。 焼成極めて堅緻。
	59	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁。深い指頭凹点（１列）で内面飛び出す。 焼成極めて堅緻。
	60	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・滑石 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：板ナデ･指押さえ	波状口縁。深い指頭凹点。焼成極めて堅緻。外面に炭化物付着。復元口径32.1cm
	61	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・滑石 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：ナデ	波状・台形状突起口縁。指頭凹点３列。器壁は薄い。 にぶい肌色。焼成極めて堅緻。
	62	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ・板ナデ 内：ナデ	波状口縁、端部に刺突。焼成堅緻。
	63	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、深い指頭凹点、並行刺突文。焼成極めて堅緻。
	64	深鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒を多く含む、長石・石英・滑石	外：ナデ 内：板ナデ	丸味口唇、端部にヘラ状工具刺突、下位に指頭凹点。 にぶい褐色。
	65	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	平坦な口唇部、端部に指頭凹点。並行沈線はヘラ状工具、穿孔は回転。焼成極めて堅緻。
	66	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	波状口縁、端部の凹点は指頭。焼成極めて堅緻。 外面位炭化物付着。復元口径26.1cm
	67	深鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	丸味口唇、端部は刺突他は指頭。焼成は極めて堅緻。 外面赤褐色、内面灰褐色。復元口径29.7cm
第9図	68	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板削り 内：板ナデ	波状口縁、端部の凹点は指頭。焼成極めて堅緻。褐色。 穿孔回転。復元口径31.2cm・高さ29.6cm・底部径11.7cm
	69	深鉢形土器	口縁部 やや内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・滑石	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	波状口縁、端部の凹点は指頭。多量の滑石を含み焼成は極めて堅緻。桃色。復元口径37.2cm

69は本遺跡資料中，最も胎土に多量の滑石を含んだもので，丁寧なナデ調整も影響してヌルヌルした器面を成し，光沢のある桃色を発している。口唇部は平坦で，指頭による凹点文を３列並行する。口縁端部がやや内弯する形状で，口径は37.2cmと大型である。



第９図　阿高式土器（阿高Ⅲ式土器Ａ類）

6類土器　阿高Ⅲ式土器Ｂ類（第10･11･12･13･14図）

（70･71，73～75，77，80～83，86～93，96～99，102，107，109～111，114～116，118～126，130，133，140）

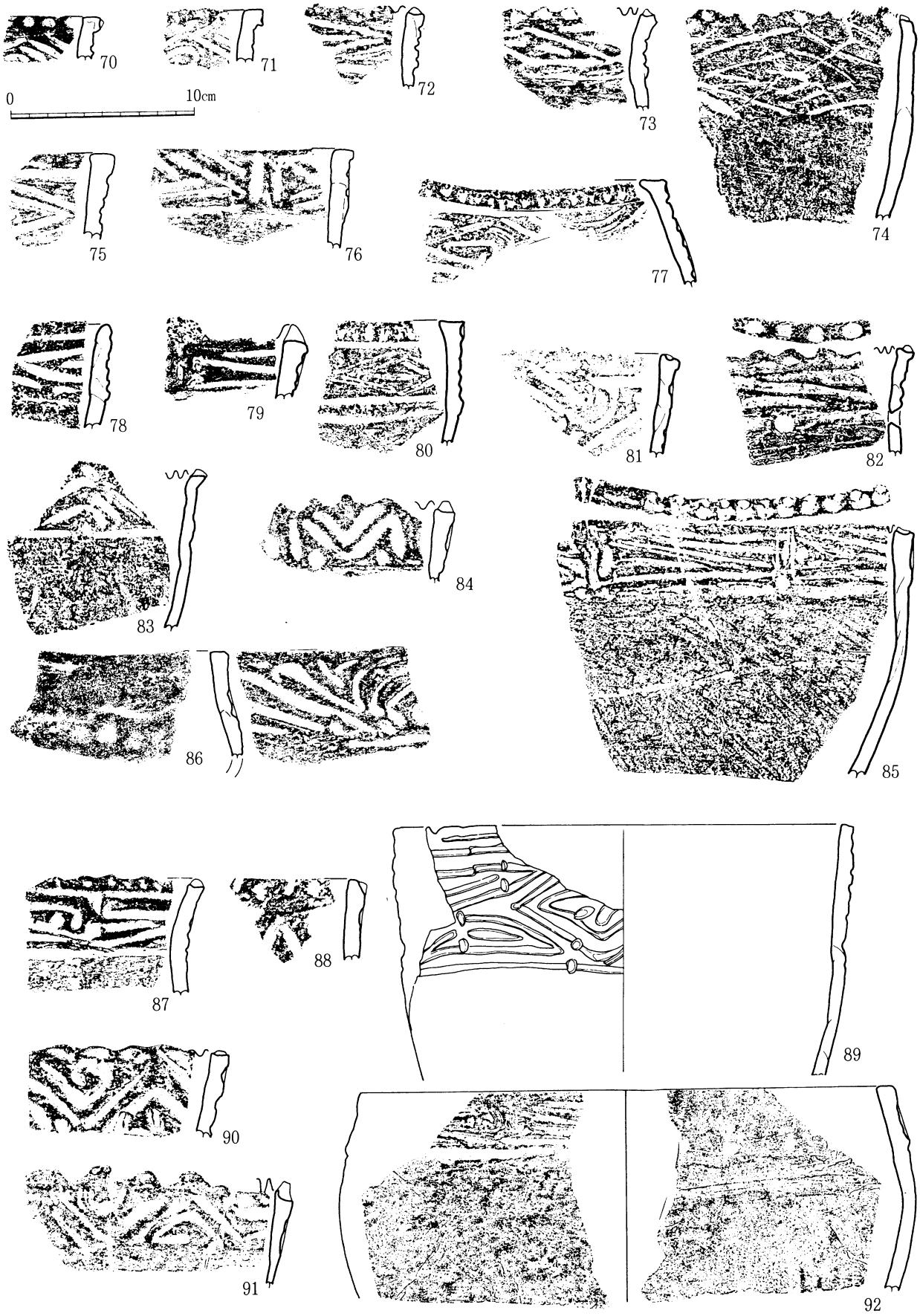
Ａ類土器同様文様帯が口縁部直下に集中するが，施文帯は更に狭くなり，凹線文はＡに比べて細くなりヘラあるいは棒状工具を用いて施文する。文様は，直線・三角形・菱形・入り組み文等が描かれ明瞭である。なお，文様帯が肥厚することはない。88の１点を除いては胎土に滑石を含まず，石英や長石・角閃石・雲母等を主体としている。70・71の口唇部は平坦にナデられ，Ｌ字に屈曲し端部は刻まれる。77は最大径が胴部上位に来る形状を成すもので，内面端部は尖り気味に納められる。口縁端部はナデ仕上げの後，棒状工具による回線で区画し，叉状工具で口縁部方向に規則的に斜めに刺突する。黒褐色を呈し，焼成は極めて堅緻な仕上がりである。89・92の復元口径はそれぞれcm・cmで，89では他に比べて広めの文様帯が設けられる。92の文様帯はやや肥厚する傾向が見られるが，意図的に粘土を貼り付けたわけではない。なお，この鉢形土器も胴部に最大径が設けられる。99も89と類似する傾向も認められるが，小破片のため疑問が残る。109の焼成は極めて堅緻な仕上がりである。121と122は同一固体の可能性が高い。93は小型の鉢形土器であるが，椀形に近い。また，施文も丁寧に行われ，器面の観察から赤色に塗彩された可能性もある。140は文様帯から口縁部にかけて大きく内弯する深鉢形土器で，文様帯は丁寧にナデるが文様帯以下の胴部は板状工具のナデで仕上げられる。内面の上位は指押さえを繰り返し，下位部は板ナデで調整される。また，口唇部の一部を組紐状の突起で飾る。復元口径はcmと大型に属すが，器壁は薄く，焼成も極めて堅緻に仕上げている。

7類　南福寺式土器Ａ類（第10･11･12･13･14図）

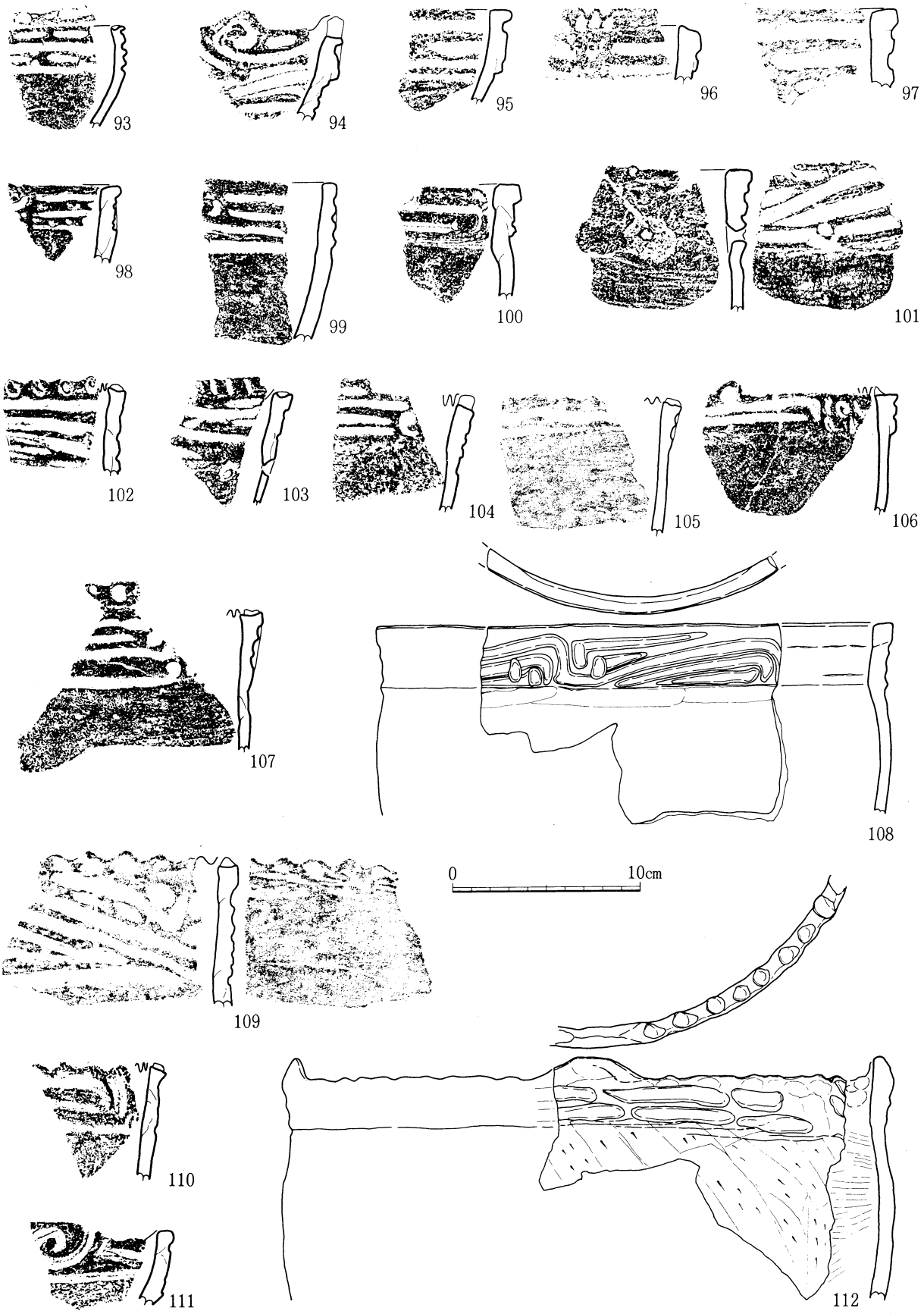
（72，76，78･79，84～86，94･95，100･101，103～106，108，112，127～129，131･132，134～139，141～144，145～149）

施文部位・文様構成は６類土器と類似し，区分しがたい。大きく異なる点は，肥厚した施文部位を設けることである。施文具は指頭・ヘラ状工具・棒状工具を用いるが，総じて文様構成は凹線や沈線・刺突等で平行線文・短沈線文・凹点文・簡略化した渦巻文・入り組み文等単純化された傾向が見られる。胎土に滑石を混入する資料は皆無で，砂粒や細砂粒を多く含み石英・長石・角閃石が主流となる。また，少量であるが，雲母を含むものもある。

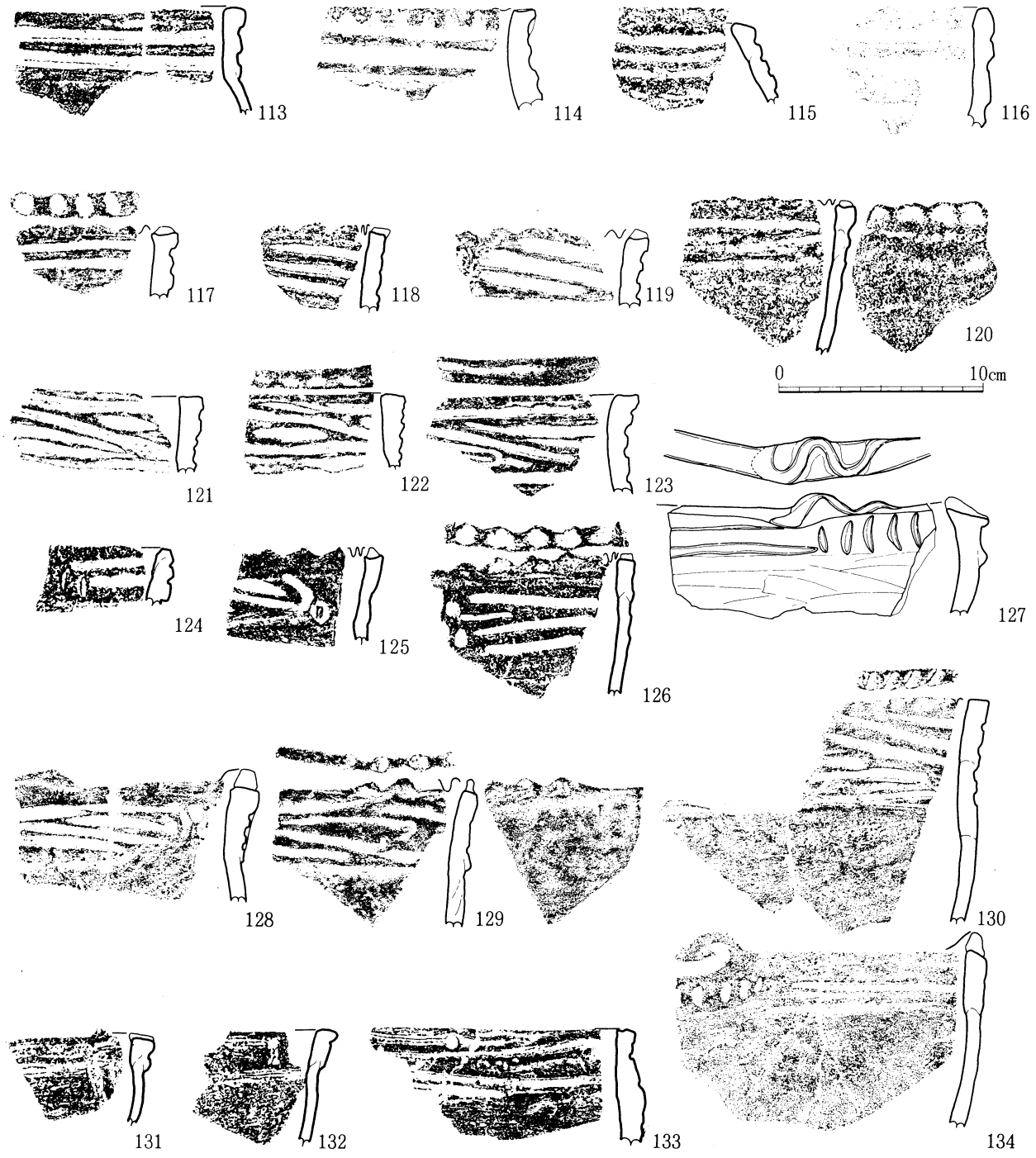
85口唇部押圧により細かな波状を呈する深鉢形土器で，胴部がやや膨らむ形状を成す。文様帯は肥厚した口縁部直下に限定され，区画文で重鎮する。焼成は極めて堅緻な仕上がりである。75は胴部に最大径の来る器形で，肥厚した文様帯にヘラ状工具を斜めに用いて流麗な文様で描いている。焼成も良く極めて堅緻な仕上がりで，色調は鮮やかな赤褐色を呈している。101・103の２点は補修孔と見られる円形の穿孔を持つ。穿孔は円形で，回転ドリルにより101では両面から，103では主に外面から行っている。108復元口径は27.5cmで，やや太めの凹線文と凹点が描かれる。胴部の方が口縁部より膨らみ，内面の屈曲部は明瞭に残される。112は４カ所に角状の突起を持ち，緩やかな波状口縁を成す。肥厚した文様帯は指頭でナデるが，文様帯以下は板状工具で削られる。復元口径31.4cm。94･95・105・131・132・136等は小型の鉢形土器とみられるが，施文帯は口縁部上位の狭い



第10図　阿高Ⅲ式土器Ｂ類・南福寺式土器Ａ類



第11図　阿高Ⅲ式土器Ｂ類・南福寺式土器Ａ類



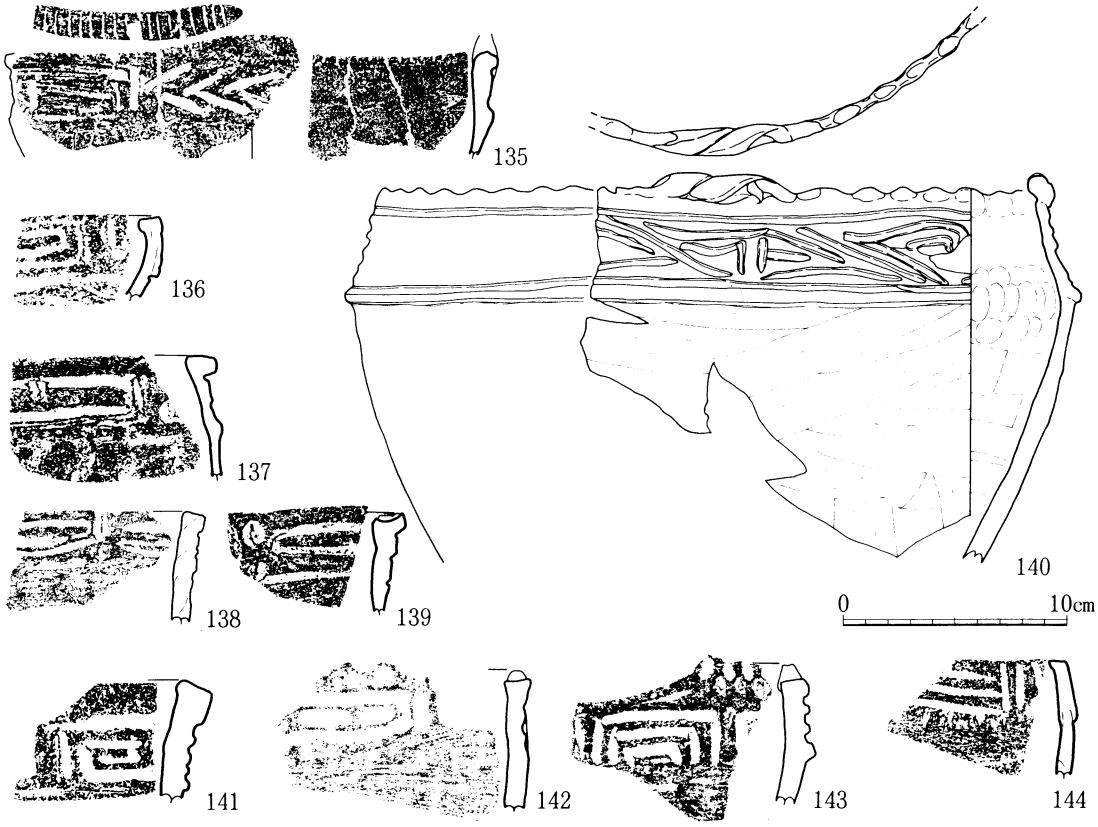
第12図　阿高Ⅲ式土器Ｂ類・南福寺式土器Ａ類

6類土器　阿高Ⅲ式土器Ｂ類

挿図	番号	器　種	部　位	胎　　土	調　整	備　　考
第10図	70	深鉢形土器	口縁部直行	細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	L字状・平坦な口唇部に縦方向の規則的なヘラ刻み。菱形文？
	71	深鉢形土器	口縁部直行	細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	L字状・平坦な口唇部に縦方向の規則的なヘラ刻み。菱形文・渦巻文？
	73	深鉢形土器	口縁部やや外反	細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：ナデ 内：板ナデ	波状口縁、端部は押圧。沈線は深く明瞭。菱形文と三角形の組合せ。
	74	深鉢形土器	口縁部やや内弯	細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：ナデ 内：板ナデ	狭い口唇部は内面から斜位のヘラ刻み、端部は刺突。菱形文。
	75	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	平坦な口唇部、菱形文は2本の平行線で描く。焼成は極めて堅緻。
	76	鉢形土器	口縁部内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	平坦な口唇部、内面端部は飛び出す。口縁部直下に回線で区画し下から刺突。焼成極めて堅緻。
	77	深鉢形土器	口縁部傾き疑問	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	平坦な口唇部、口縁部直下に回線で区画し下から刺突。焼成極めて堅緻。菱形文。内面に煤付着。
	78	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	平坦な口唇部凹点状刺突。入り組み文。焼成は堅緻。外面に煤付着。
	82	深鉢形土器	口縁部やや外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ 内：板ナデ	波状口縁、文様帯直下に補修孔。補修孔は両面から回転して穿つ。器壁は薄い。
	83	深鉢形土器	口縁部やや外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ・板ナデ 内：ナデ	波状口縁、口縁端部は外に反る。内面に粘土帯の繋ぎが残る。焼成堅緻。
	87	深鉢形土器	口縁部外反	砂粒を多く含む、長石・石英・	外：ナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、内面は波状の反動を指頭で押さえる。焼成極めて堅緻。
	88	深鉢形土器	口縁部不明	砂粒を多く含む、長石・石英・滑石	外：ナデ 内：丁寧なナデ	平坦な口唇部の端部に交互に押圧・刺突。滑石を多く含み堅緻な仕上がりである。
	89	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	狭い平坦な口唇部、規則性のあるヘラ刻み。やや広めの施文具は棒状。
	90	深鉢形土器	口縁部不明	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：丁寧なナデ 内：ナデ	波状口縁、施文はヘラ状工具を斜めに使用。焼成は極めて堅緻。外面位炭化物付着。
	91	深鉢形土器	口縁部不明	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、施文は指頭か。焼成は極めて堅緻な仕上がりで、赤褐色を呈す。
	92	鉢形土器	口縁部内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	平坦な口唇部。文様帯やや肥厚気味。焼成堅緻。胴部は緩やかに膨らむ。
第11図	93	鉢形土器	口縁部内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	狭い平坦な口唇部を横位に削り出す。赤色に塗彩した可能性あり。小型鉢形土器。
	97	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：？ 内：ナデ	狭い平坦な口唇部に、縦方向の規則制のあるヘラ刻み。口縁部直下に横位2列の貝殻刺突線。縦位
	98	深鉢形土器？	口縁部直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	突起状、平坦な口唇部。横走する沈線間に連続する刺突。焼成極めて堅緻。
	99	鉢形土器	口縁部直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ 内：丁寧なナデ	狭い平坦な口唇部に。棒状工具による深い施文。内面のナデは特に丁寧。焼成堅緻な仕上がりである。
	102	深鉢形土器	口縁部不明	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、波状部外面を凹点で刻む。焼成極めて堅緻。
	107	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：ナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、文様帯やや肥厚。焼成極めて堅緻。
	109	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：ナデ 内：板ナデ	波状口縁、文様帯はやや広め。ヘラ状工具を斜めに施文。焼成堅緻。
	110	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ 内：板ナデ	波状口縁、焼成極めて堅緻。
	111	鉢形土器	口縁部内弯	砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ・板ナデ 内：板なナデ後ナデ	平坦な口唇部。ヘラ状工具を斜めに施文。焼成極めて堅緻。
第12図	114	深鉢形土器	口縁部内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ 内：板ナデ	波状口縁。口縁部端部に浅い凹点。やや太めの凹線文。外面煤付着。焼成極めて堅緻。
	113	鉢形土器？	口縁部内弯	砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ 内：板ナデ	平坦な口唇部。最大径胴部上位。文様帯やや肥厚。焼成極めて堅緻。
	116	深鉢形土器？	口縁部不明	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ 内：板ナデ	口唇部は丸く仕上げる。器種・器形共に不明。焼成極めて堅緻。

7類土器　南福寺式土器Ａ類

挿図	番号	器　種	部　位	胎　　土	調　整	備　　考
第10図	72	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ 内：板ナデ	波状口縁、端部は押圧。沈線は深く明瞭。菱形文。器面ザラザラ。
	79	深鉢形土器	口縁部 直行	細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	平坦な口唇部。
	80	深鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：ナデ 内：板ナデ	平坦な口唇部、器面ザラザラ。焼成堅緻。沈線は深く明瞭。菱形文。
	81	深鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	平坦な口唇部、枝状突起。刺突は深く抉る。外面に炭化物付着。焼成極めて堅緻。
	84	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ 内：ナデ	波状口縁、浅くやや太めの凹線文。施文帯以下は器壁が極めて薄い。焼成は極めて堅緻。
	85	鉢形土器	口縁部 やや内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：板ナデ後ナデ	波状口縁、施文帯は狭く限定される。焼成極めて堅緻。外面に炭化物付着。
	86	深鉢形土器	口縁部 傾き疑問	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：丁寧なナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	平坦な口唇部、施文はヘラを斜めに使用。胴部の器面薄い。焼成極めて堅緻。赤褐色。
第11図	94	鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	口唇部に突起。渦巻文。焼成は堅緻。
	95	鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ 内：板ナデ	平坦口縁、胴部の器壁は薄い。
	96	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	平坦口縁、端部は外傾く。口唇部に半載竹管を斜めに刺突。焼成極めて堅緻。
	100	鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ・板ナデ 内：ナデ	平坦口縁、内面に粘土の繋ぎ残す。焼成極めて堅緻。赤褐色。
	101	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ・ヘラ研磨 内：板ナデ	平坦口唇、穿孔は主に内面から。棒状工具でやや太めの凹線。焼成極めて堅緻。黒褐色。
	103	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	平坦な口唇部、規則性のあるヘラ刻み。穿孔は主に外面から回転。胴部器壁薄い。堅緻。赤褐色。
	104	深鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：丁寧なナデ 内：ナデ	波状口縁、施文は棒状工具を使用。焼成は極めて堅緻。
	105	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、施文は棒状工具を使用。焼成は極めて堅緻。赤褐色を呈す。
	106	鉢形土器？	口縁部 内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、文様帯肥厚。焼成堅緻。胴部器壁薄い。
	108	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	平坦な口唇部。やや太めの凹線文。内面屈曲線明瞭。復元口径27.5cm。外面炭化物付着。
	112	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ・板削り 内：板ナデ後ナデ	波状口縁、指頭による浅い凹線文。胴部の板削り明瞭。焼成極めて堅緻。復元口径31.4cm。
第12図	115	深鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：丁寧なナデ 内：ナデ	平坦な口唇部。棒状工具による深い施文。内面の屈曲明瞭。最大径は胴部。焼成極めて堅緻。
	117	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、棒状工具による深い施文。内面に炭化物付着。焼成極めて堅緻。灰褐色。
	127	深鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	平坦な口唇部、口唇部に紐状突起。焼成極めて堅緻。器壁総じて厚い。赤褐色。
	128	深鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ 内：丁寧なナデ	平坦な口唇部、口唇部に突起。焼成極めて堅緻。内面屈曲明瞭。赤褐色。
	129	深鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：ナデ・板削り 内：板ナデ	突起部のみ波状口縁、ヘラ工具使用。焼成極めて堅緻。赤褐色。
	131	鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：ナデ 内：ナデ	平坦な口唇部に紐状突起。狭い肥厚帯を削り出す。内面に粘土の繋ぎ残る。極めて堅緻。灰褐色。
	132	鉢形土器	口縁部 やや疑問内弯	砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	平坦な口唇部。指頭を浅く巡らす。焼成堅緻。赤褐色。
	134	深鉢形土器	口縁部 直行内弯	砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ 内：板ナデ	外傾する平坦口縁。口縁突起下位に浅い凹線文と斜位の刺突。細い沈線文。焼成堅緻。赤褐色。
第13図	135	鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ 内：板ナデ	平坦な口唇部に連続刻み。突起口縁。細いヘラによる明瞭な文様。焼成極めて堅緻。外面煤付着。
	136	鉢形土器？	口縁部 やや内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ 内：ナデ	口唇部は平坦で内面尖る。文様帯の肥厚明瞭。器種不明。焼成堅緻。赤褐色。



第13図　阿高Ⅲ式土器Ｂ類・南福寺式土器Ａ類

6類土器　阿高Ⅲ式土器Ｂ類

挿図	番号	器　種	部　位	胎　　土	調　整	備　　考
第12図	118	深鉢形土器	口縁部 直行	細砂粒を多く含む、長石・石英	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、棒状工具による浅い平行線文。焼成極めて堅緻。器壁は薄い。
	119	深鉢形土器	口縁部 直行	細砂粒を多く含む、長石・石英	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	波状口縁、棒状工具による深い平行線文。焼成極めて堅緻。器壁は薄い。外面に炭化物付着。
	120	深鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ後ナデ	波状口縁、棒状工具による浅い平行線文。焼成極めて堅緻。器壁は薄い。内面に粘土の繋ぎ残す。
	121	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：ナデ	平坦な口唇部、棒状工具による浅い平行線文。焼成極めて堅緻。内外共に赤褐色。炭化物付着。
	122	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：ナデ	121と極めて類似、同一固体の可能性がある。 焼成極めて堅緻。内外共に赤褐色。
	123	深鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・雲母	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	平坦な口唇部、棒状工具による浅い平行線文。焼成極めて堅緻。内外共に褐色。
	124	深鉢形土器	口縁部 傾き疑問	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ 内：ナデ	やや丸い口唇部、焼成堅緻。
	125	深鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ 内：板ナデ	波状口縁。文様帯はやや肥厚傾向。ヘラ状工具による浅い凹線文。
	126	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ 内：板ナデ	波状口縁。文様帯はやや肥厚傾向。ヘラ状工具による浅い凹線文。
	127	深鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：ナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、棒状工具による浅い平行線文。焼成極めて堅緻。
	133	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ後ナデ	平坦な口唇部。棒状工具による浅い平行線文。焼成極めて堅緻。やや厚手の器壁。
第13図	140	深鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：ナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、沈線文。文様帯は丁寧ナデる。 焼成極めて堅緻。

範囲に限られ，施文帯の肥厚も強調されている。141～143の入り組み文はヘラ状工具でシャープに示される。

145平坦な口唇部に放射線状に規則的に刻まれた浅い刻みを持つ深鉢形土器で，４カ所と想定される台形状突起部を持つ。なお，突起の上位は外面に１カ所，内面に２カ所の深い削り出しが見られる。口縁端部が最も肥厚し，施文帯は施文帯以下の胴部上位を板状工具で削るためやや肥厚して残されることとなる。文様はヘラ状工具で掻き出すように行い「削り出し文様」となる。文様帯はナデられ内面は板ナデが見られ，赤褐色の硬質の仕上がりである。復元口径32.4cm。146口唇部は平坦，内面の屈曲線も明瞭で外に開く，施文帯は肥厚し口縁部直下に限られる。施文はヘラ状工具で削り取り深く鋭い仕上がりを成している。施文帯直下に円形の穿孔があり，主に外面からの回転運動が認められる。施文帯は指頭でナデられるが，胴部以下は粗い板ナデで仕上げ，内面は板ナデの後指頭でナデる。復元口径35.8cm。147胴部上位が最大部で施文から口縁部にかけて内傾する鉢形土器。平坦な口唇部が部分的に指頭（爪の圧痕残る）で口唇上位からと端部から押圧され波状を呈する。外面の凹線文も指頭で浅く行い，施文の起点に爪痕がそのまま残される。両面とも丁寧なナデ仕上げを行い，硬質な仕上がりで，器壁は薄く光沢のある赤褐色を呈している。復元口径33.1cm。148平坦で広い口唇部に指頭圧痕の突起を持つ。施文帯は特に強調され，ヘラ状工具で浅く広めの凹線文が付けられる。焼成は極めて硬質で堅緻な仕上がりである。両面共にナデ仕上げているが，内面の粘土の繋ぎは残される。復元口径23.7cm。149口唇部は指頭で連続して刻み，施文帯はより狭く限定される。外面の凹点も指頭で行い，横走する凹線はヘラ状工具で浅く描かれる。胴部はヘラ状工具で研磨状に，内面は板ナデの後軽くナデて仕上げる。器壁の割には重量の大きい土器で，復元口径32.5cm。

８類　南福寺式土器Ｂ類（第15・16図）150～

従来より南福寺式土器の特徴とされる，Ｓ字状文・逆Ｓ字状文で文様構成されたものを一括して取り扱っている。先の７類土器と同様施文帯は肥厚した口縁部直下の狭い範囲に限定され，施文帯は丁寧に光沢を持つように主にナデの調整が見られる。いずれも焼成は良好で，硬質な仕上がりが認められる。

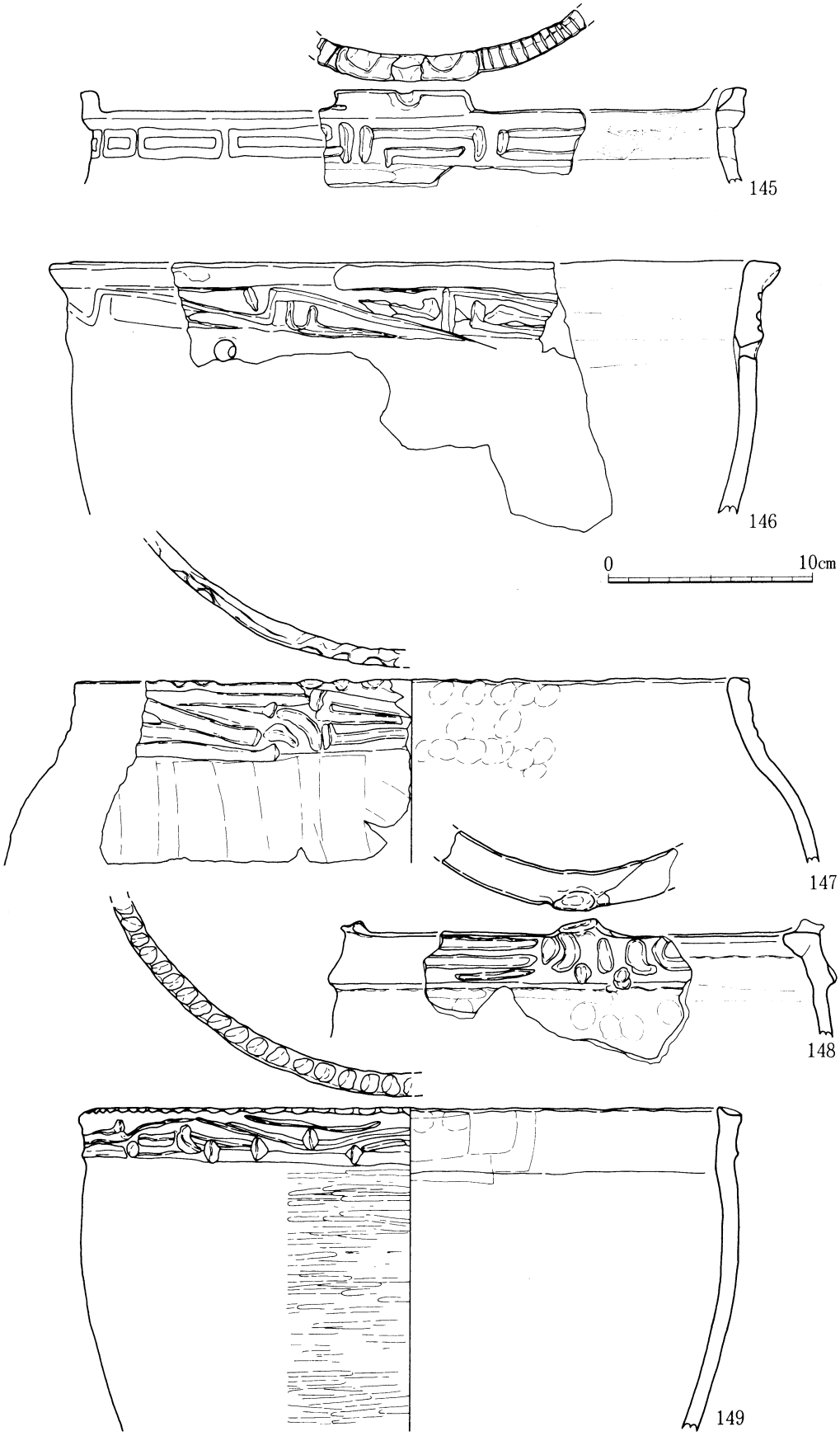
施文は主に指頭で行い，ヘラ状工具を用いたものもある。

152の口唇部の内外面はヘラ状工具で面取りされ，尖り気味に仕上げれる。文様はＳ字状文のみで，指頭で描かれる。復元口径26.1cm。156鮮やかな肌色を呈し，焼成は良く極めて硬質な仕上がりとなる。器形は施文帯から外反し，口縁端部が最大幅となる。Ｓ字状文と直線文の組合せで，器面には炭化物が付着している。159口唇部は分厚くやや丸みを帯び，口縁部が内傾し最大部が胴部にある器形で，施文帯は肥厚し逆Ｓ字状文と凹線文で文様を構成する。復元口径24.1cm，胴部の器壁は５mm程と極端に薄く仕上がる。161も器形の最大が胴部上位にある鉢形土器で，平坦な口唇部に台形状の突起をさらに，突起の下位に橋状把手を備えている。台形状突起の内外面には指頭による凹点文，橋状把手は施文帯を跨ぐように貼り付ける。胎土に多量の白色粒を含む。164の口唇部・口縁部は丁寧なナデ仕上げが見られ，逆Ｓ字状文も深くシャープに残る。165口唇部に山形の突起を張り付けたもので，内面の屈曲線は明瞭で，また，ナデ仕上げも丁寧に成されるが，粘土の接合

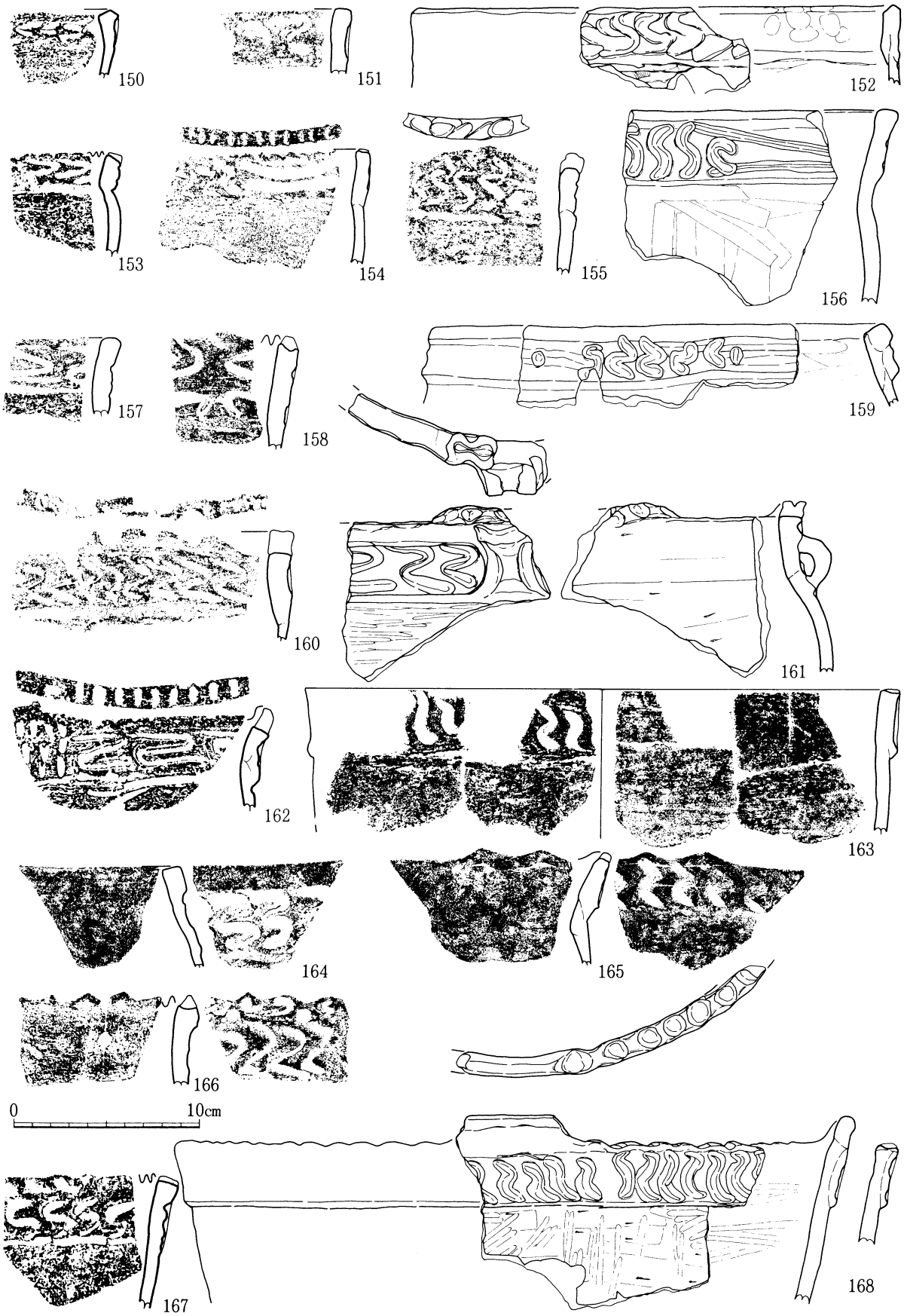
面が外面で観察される。168復元口径36.3cmの大型の深鉢形土器で，平坦な口唇部は連続する指頭押圧で波状を成し，さらに台形状の突起を備える。肥厚した施文帯には逆Ｓ字状文のみを描く。胴部と内面は板ナデで仕上げ，外面には煤状の炭化物が付着している。173・174の２点は復元口径が30.0cmと同じで，同一固体と判断される。平坦な口唇部と台形状突起は指頭押圧で刻み，肥厚した施文帯は突起の下位では逆Ｓ字状文，他はＣ字状文を描く。外面の上位は横方向のヘラ磨き，下位では縦方向のヘラ磨きを行い，内面は板状工具で丁寧にナデ仕上げている。なお，濃い肌色を呈す良質の資料であり，内面には多量の炭化物が付着している。175復元口径39.9cmと今回最大級の鉢形土器である。文様はＣ字状文と逆Ｃ字状文で構成され，内面には粘土の繋ぎが明瞭に残される。

７類土器　南福寺式土器Ａ類

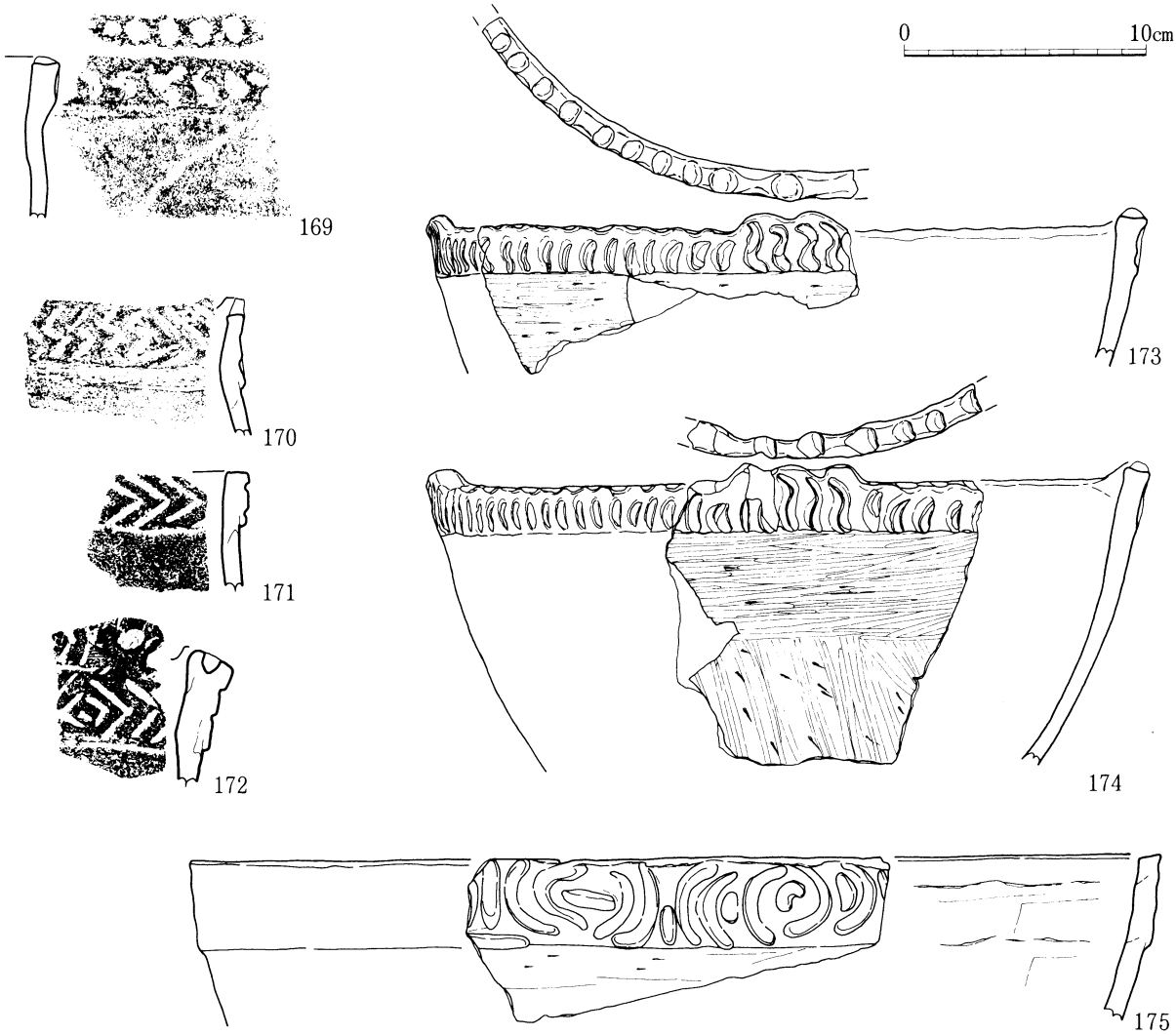
挿図	番号	器種	部位	胎土	調整	備考
第13図	137	深鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ 内：ナデ	平坦な口唇部。ヘラによるやや広めの沈線。器面ザラザラ
	138	深鉢形土器	口縁部 直行	細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ･板ナデ 内：丁寧なナデ	平坦な口唇部。ヘラ状工具使用。焼成極めて堅緻。褐色。
	139	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ 内：ナデ	平坦な口唇部。浅い凹線を巡らす。焼成堅緻。
	141	深鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ 内：丁寧なナデ	広めの平坦な口唇部。施文は深く明瞭。器面ザラザラ。焼成堅緻。黒褐色。
	142	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ･板ナデ 内：丁寧なナデ	波状・突起口縁。浅くやや太めの凹線文。施文帯以下は器壁か極めて薄い。焼成堅緻。赤褐色。
	143	鉢形土器	口縁部 やや内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ･板ナデ 内：板ナデ後ナデ	突起部のみ波状，他は平坦口縁。突起部の内外面に刺突。焼成堅緻。両面に赤色塗彩か。
	144	鉢形土器	口縁部 やや内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	平坦な口唇部，施文はヘラ使用。胴部の器壁薄い。焼成極めて堅緻。赤褐色。
第14図	145	深鉢形土器	口縁部 やや内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	刻み平坦口縁。突起部の内外面に押点。削り出し文。焼成堅緻。復元口径32.4cm
	146	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒が目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	平坦口縁。削り出し文。補修穿孔。焼成極めて堅緻。復元口径35.8cm
	147	鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒が目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	波状口縁。指頭凹点・凹線文。器壁薄い。焼成極めて堅緻。赤褐色。復元口径33.1cm
	148	鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒が目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：ナデ	平坦，突起口縁。指頭凹点・凹線文。器壁薄い。焼成極めて堅緻。肌色。復元口径23.7cm
	149	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	波状口縁。指頭凹点，凹線文。器壁薄い。焼成極めて堅緻。灰褐色。復元口径32.5cm



第14図　阿高Ⅲ式土器Ｂ類・南福寺式土器Ａ類



第15図　南福寺式土器Ｂ類



第16図　南福寺式土器Ｂ類

8類土器　南福寺式土器Ｂ類

挿図	番号	器種	部位	胎土	調整	備考
第15図	150	鉢形土器	口縁部	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	平坦口縁。沈線は細く深く明瞭。黒褐色。赤色塗彩の可能性あり。焼成極めて堅緻。
	151	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	丸みを成す口唇。逆Ｓ字状文、褐色。 焼成極めて堅緻。
	152	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：ナデ・板ナデ 内：ナデ	尖る口唇。指頭によるＳ字状文。焼成極めて堅緻。復元口径26.1cm
	153	深鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、ヘラ状工具使用、施文は深い。焼成極めて堅緻。内面の屈曲明快。
	154	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ナデ・板削り 内：ナデ	波状口縁、逆Ｓ字状文と弧状凹線文。総じて器壁が極めて薄い。焼成は極めて堅緻。内面煤付着。
	155	鉢形土器？	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ後ナデ	波状口縁、組み紐状突起。ヘラ状工具によるＳ字状文。焼成極めて堅緻。
	156	深鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	平坦な口唇、Ｓ字状文と直線文。内面屈曲。胴部の器壁薄い。焼成極めて堅緻。鮮やかな肌色。
	157	深鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：ナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	丸みを成す口唇。ヘラ状工具使用。焼成は極めて堅緻。
	158	深鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、指頭。総じて器壁は薄い。焼成極めて堅緻。赤褐色。内面に炭化物付着。
	159	深鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ・板ナデ 内：板ナデ	やや丸みを成す口縁、指頭逆Ｓ字状文。焼成極めて堅緻。胴部器壁薄い。赤褐色。内面炭化物付着。
	160	鉢形土器？	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	波状台形状突起口縁、逆Ｓ字状文。胴部器壁薄い。 焼成極めて堅緻。
	161	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	平坦台形状突起口縁、橋状把手。逆Ｓ字状文。胴部器壁薄い、焼成極めて堅緻。赤褐色。
	162	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：ナデ 内：ナデ	波状台形状突起口縁、刺突、ヘラ状工具による逆Ｓ字状文。胴部器壁薄い。堅緻。赤褐色。
	163	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：丁寧なナデ・板ナデ 内：板ナデ	平坦口縁、指頭による逆Ｓ字状文。焼成は極めて堅緻。
	164	深鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	平坦口縁、指頭による明瞭な逆Ｓ字状文。焼成は極めて堅緻。赤褐色を呈す。
	165	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	指頭押圧による波状口縁、口縁部端部にも施文。 焼成極めて堅緻。
	166	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	山形突起・平坦口縁。逆Ｓ字状文。内面屈曲線明瞭。鮮やかな肌色。焼成極めて堅緻。
	167	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ナデ・板削り 内：板ナデ後ナデ	波状口縁、ヘラ状工具Ｓ字状文。胴部の板削り明瞭。 焼成極めて堅緻。
	168	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ・板削り 内：板ナデ	波状・台形状突起口縁。焼成極めて堅緻。 復元口径36.3cm。
第16図	169	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、施文帯狭い。内面に炭化物付着。焼成極めて堅緻。赤褐色。
	170	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	平坦・突起口縁、ヘラ状工具による施文。焼成極めて堅緻。器壁総じて厚い。黒褐色。
	171	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英	外：丁寧なナデ 内：ナデ	平坦な口唇に浅い刺突、施文帯狭い。焼成極めて堅緻。褐色。
	172	深鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	筒状突起部、口唇部にヘラ刻み。ヘラ状工具で深く施文。焼成極めて堅緻。赤褐色。
	173	鉢形土器	口縁部	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・ヘラ磨き 内：ナデ	波状・台形状突起口縁、狭い施文帯逆Ｓ字状文・Ｃ字状文。極めて堅緻。復元口径30.0cm。
	174	鉢形土器	口縁部	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・ヘラ磨き 内：ナデ	波状・台形状突起口縁、狭い施文帯逆Ｓ字状文・Ｃ字状文。極めて堅緻。復元口径30.0cm。
	175	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	平坦口縁。Ｃ字状文と逆Ｃ字状文。最大級の口径。 焼成堅緻。褐色。復元口径39.9cm。

9類　南福寺式土器C類（第17・18図）176～208

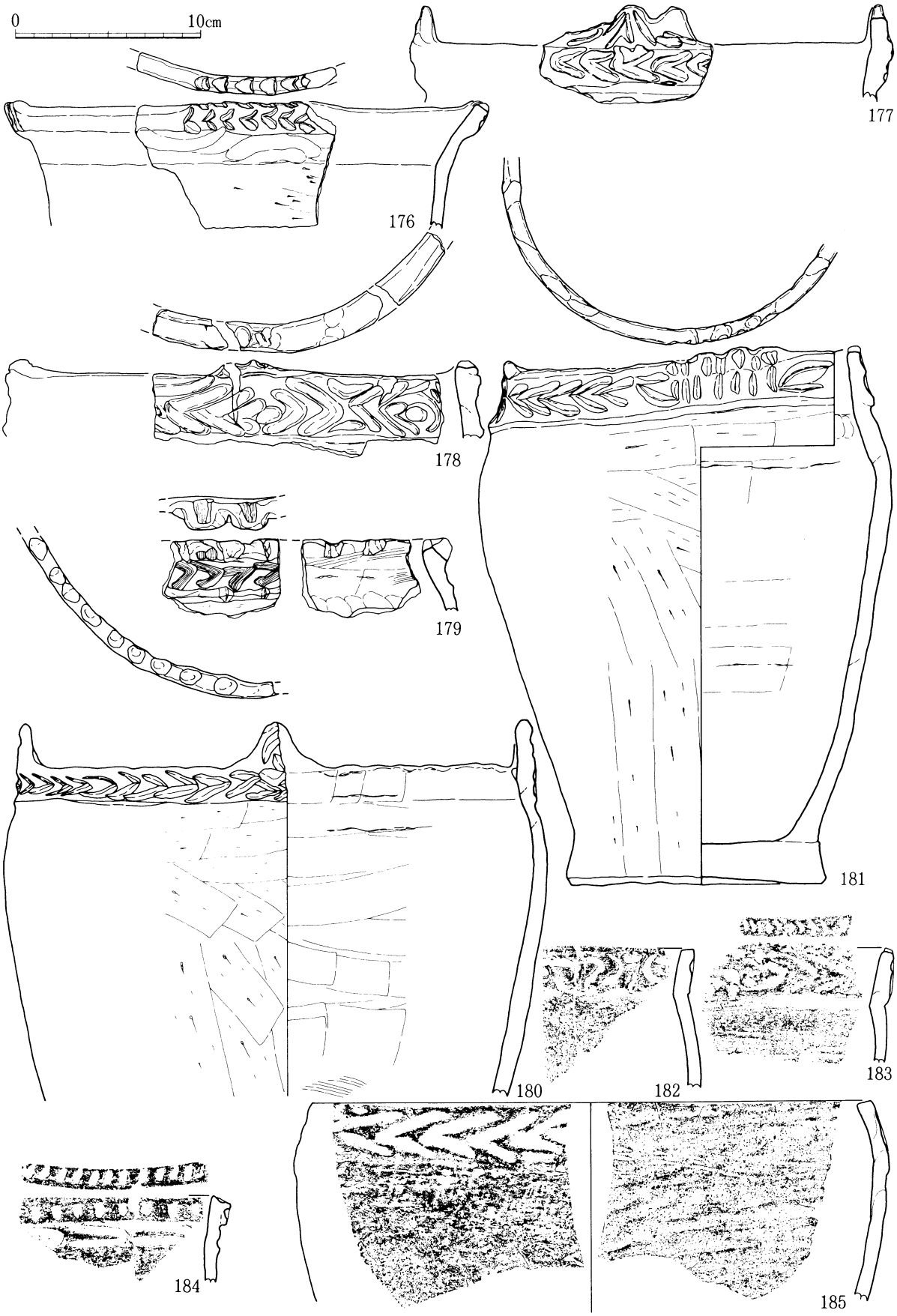
ここでは「く字状文」・「逆く字状文」・「C字状文」で文様構成されたものを一括して取り扱っている。これらの土器群では指頭やヘラ状工具を施文具とし，先の8類土器と同様施文帯は肥厚した口縁部直下の狭い範囲に限定され，施文帯は丁寧に光沢を持つように主にナデやヘラ磨きの調整が見られる。いずれも焼成等は良好で，硬質な仕上がりが認められる。

176の施文帯は口縁端部の肥厚帯とその下位，即ち胴部上位の2カ所にある。口縁部文様帯は丁寧にナデた後ヘラ状工具でく字状文に，その下位は指頭により浅い凹線文が描かれる。なお，口縁端部の施文帯上位のみ波状にし，その部分の口唇部だけに刺突を施し，他は平坦に仕上げる。胴部上位で急激に外反し，ラッパ状の形状を成す。復元口径は26.4cmでややくすんだ褐色を呈している。177肥厚した施文帯は狭い範囲に限られ，口唇部には4カ所に角状突起を持ち，口縁部上位で屈曲し内弯する。復元口径24.6cm。178鈍い褐色を呈し，焼成は良く極めて硬質な仕上がりとなる。器形は施文帯から内傾し，胴部上位が最大幅となる。おそらく181に類する形状を成すと思われる。口唇部はやや広めで平坦に，また4カ所に低い突起を乗せ指頭とヘラ状工具で押圧し仕上げる。施文帯は厚手で基本的にC字状文と逆C字状文の組合せで，内面には炭化物が付着している。179厚手に貼り付けた口唇部に，内外面方向からヘラ状工具で交互に押圧し，瘤状の外観を成す。施文は口縁部直下に限られ，施文帯の下端に刻みを伴う隆起線が1条巡らされる。口縁部は内傾し最大部が胴部にある器形で，逆く字状文で文様を構成する。なお，胴部の器壁は5㎜程と極端に薄く仕上がる。

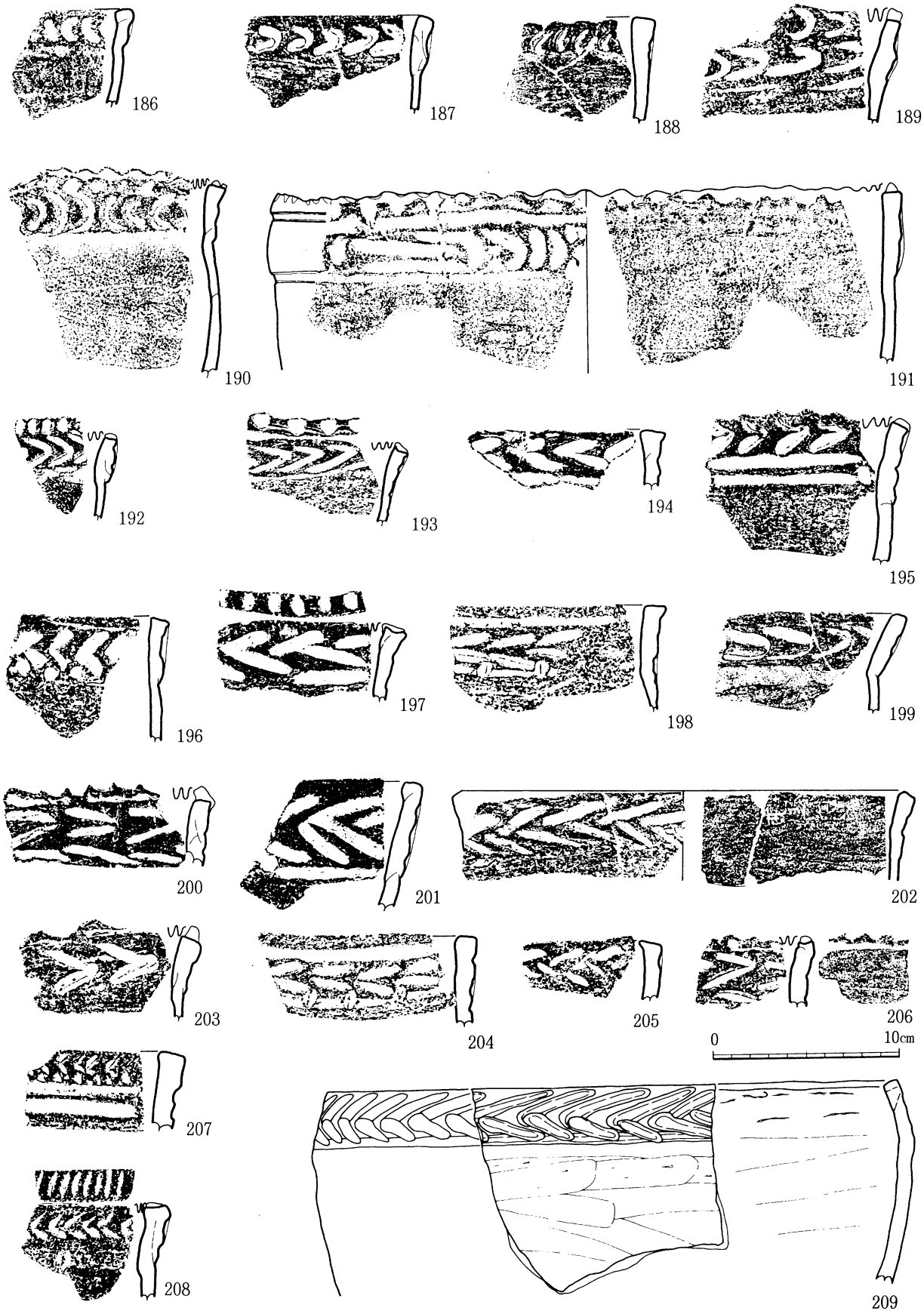
180も器形の最大が胴部上位にある深鉢形土器で，指頭押圧による緩やかな波状の口唇部に角状の突起（4カ所）を持つ。角状突起の外面にはヘラ状工具による凹点文，限定した狭い施文帯に逆く字状文を描く。内面は板ナデを行い，外面は板削りでそのため器面はザラザラした仕上がりとなる。復元口径27.2cm。194の口唇部は平坦に，195はヘラ状工具の連続刻みにより小さな波状を成す。2点共内面は丁寧なナデ仕上が見られ，施文帯は明瞭に肥厚し，逆く字状文もシャープに残る。194は鮮やかな肌色，198は褐色を呈しているが，胎土に多量の白色粒を含み，また内面の屈曲線も明瞭である。

181復元最大口径24.7cm，最小口径20.1cm，最大高29.4cm，底部最大径13.7cmの深鉢形土器で，平坦な口唇部は連続する指頭押圧で緩やかな波状を成し，さらに4カ所に指頭押圧を伴う台形状の突起を備える。肥厚した施文帯は，突起直下で縦方向の凹点文，突起間はく字状文で繋ぐ。器面調整は内面は板ナデで仕上げ，外面は横・斜め・縦位の板削りを行う。そのため，ザラザラの器面を呈している。なお，底部は若干張り出しぎみとなり，接地面中央部もやや上がりぎみの仕上がりとなる。外面の一部に煤状の炭化物の付着が観察される。

185では口縁端部1.5cm程の肥高帯を設け，口唇部と端部外面を半載竹管状工具で連続して刻む。さらにその下位に逆く字状文の施文帯を設けているが，胴部整形の板削りで生じた僅かな段差を生かし，施文帯としている。209は口縁部が内弯する形状の深鉢形土器で，やや肥高した施文帯にく字状文を指頭で描く。施文帯はナデて光沢を持つが，胴部は板削りで器面は粗い。実測図では詳細に記載していないが，1cm前後の輪積痕が観察される。なお，濃い赤褐色を呈す良質の資料であり，外面には多量の炭化物が付着し，復元口径は30.6cmである。197・203小型の鉢形土器で，口縁部直



第17図　南福寺式土器C類



第18図　南福寺式土器C類

下の文様帯は明瞭に肥高し，197は平坦に192ではヘラ状工具の刻みによる波状の口唇部を形成する。190の口唇部の突起部は，内外の両端に粘土紐をそれぞれ重ねその後，お互いを指頭で摘み合わせることにより，その間に空洞を形成する。内外面共に，ナデやヘラ磨きにより光沢のある明橙色を保っている。191は円筒形に近い形状を示すもので，口唇部の波状は指頭で明瞭に切り込まれる。また，肥厚帯の施文も指頭を深く刻む。196は指頭でく字状文を深く押圧した後，く字の下部をやはり指頭で凹点している。この鉢形土器は総じて器壁が薄く，内面には整形時の指押さえの痕跡がよく残される。

10類　南福寺式土器D類（第19・20図）210～232出水式平行

施文は口縁端部に集中し，主にヘラ状工具を用いて短沈線により直線化した文様で描かれる一群で，所謂出水式土器の範疇と捉えたものである。なお，施文帯は肥厚するものとしないものとが見られる。胎土は，長石や石英粒を多く含む砂粒及び細砂粒を主体とし，特に滑石等の混入は認められていない。他方，白色粒子を多量に混入するものが特徴的である。

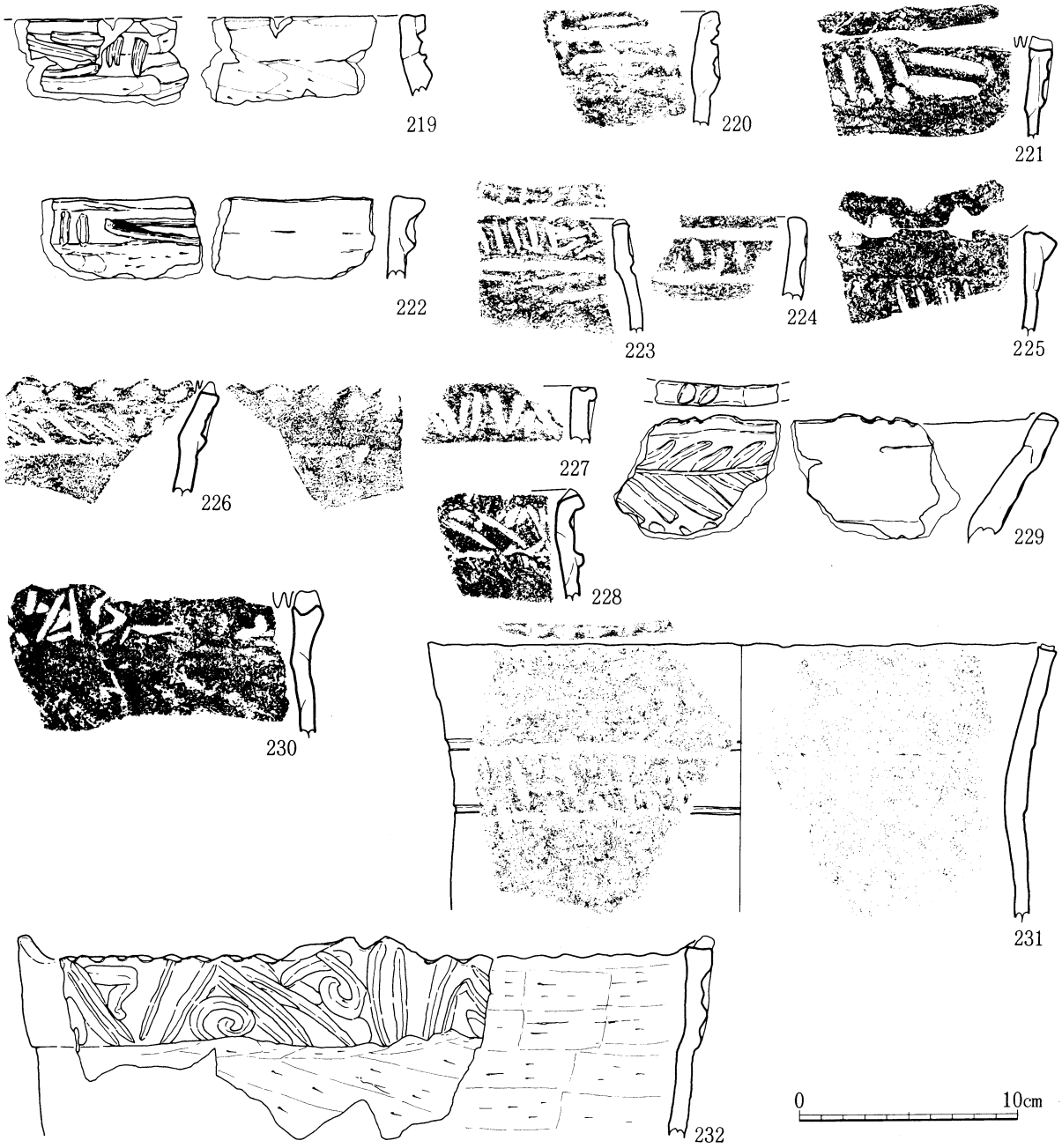
210肥厚した狭い施文帯に，ヘラ状工具を斜めに用いやや幅広の短沈線で綾杉様の文様構成が見られる。直線的に外に開く口縁形状で平坦な口唇部を成し，口縁端部は再度ナデられ僅かに丸みを成す。施文帯は明瞭に肥厚し，胴部は板削りの仕上げで，5㎜程の薄い器壁となる。外面には多量の煤状の炭化物が付着し，復元口径は27.2㎝を示す。211については特に施文帯の肥厚傾向は認められないが，規則的な縦位の施文から同類と判断したが，先の5類土器とした阿高式土器の可能性が高い。212及び217は近似した要素が見られるもので，斜め方向の単純化した沈線（ヘラ状工具を斜めに使用するためやや幅広の）で構成される。狭い口唇部は指頭押圧で波状に刻まれ，施文帯も若干肥厚する程度である。内外面共に風化がかなり進行し，器面の剥落が見られる。復元口径は35.6㎝と大型の深鉢形土器に属する。

214は胴部上位で急激に内傾すると判断される資料で，器種は明らかでない。施文帯から口縁部にかけてはかなり分厚く造り出され，重量感を伴う。施文帯の下端に断面三角の隆帯を1条巡らし，平坦な口唇部も広めに仕上げる。施文具はヘラ状工具で明瞭に描き，復元口径は19.0㎝である。216の復元口径は34.0㎝で，口唇部は指頭凹圧により波状を成し，総じて器壁は薄く5㎜程である。施文帯は肥厚することはなく，界線で区画された範囲に指頭で凹線文と凹点で描く。217の施文帯も肥厚は認められない。218は施文帯から口縁部にかけて直線的に立ち上がる深鉢形土器で，口唇部はヘラ状工具で斜めに細かく刻まれる。器面調整は，内面は板状工具で横位にナデられ，外面の施文帯は丁寧にナデ，胴部上位はヘラ磨き，下位は縦方向の板削りが認められる。器面は鮮やかな黄橙色を呈し，胎土に多量の白色粒子を含み特徴的な仕上がりを見せる。なお，復元口径は28.1㎝である。226は施文帯で外反し，内面の屈曲も明瞭に残され，波状口縁は指頭による押圧で丁寧に仕上げる。施文帯は僅かに肥厚し，斜位の平行短沈線文を巡らす。230の口唇部の波状は，口唇部に並行する指頭凹圧で構成される。文様はヘラ状工具による浅い短沈線を用い，白色粒子混入の胎土が特徴的である。232口唇部は波状で台形状の突起を4カ所に備え，中央部を指頭で押さえる。施文帯は明瞭に肥厚する。

第19図　南福寺式土器Ｄ類

9類土器　南福寺式土器C類

挿図	番号	器　種	部　位	胎　　土	調　整	備　　考
第17図	176	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：ナデ・板ナデ	波状平坦口縁、施文帯は2列。褐色。焼成極めて堅緻。 復元口径26.4cm。く字状文。
	177	深鉢形土器	口縁部 やや内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ナデ 内：板ナデ後ナデ	角状突起。施文はヘラ状工具。く字状文、肌色。 焼成極めて堅緻。復元口径24.6cm。
	178	深鉢形土器	口縁部 やや内弯	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石・雲母	外：ナデ 内：ナデ	角状・平坦口縁。指頭によるく・逆く字状文。褐色。 焼成極めて堅緻。復元口径25.2cm。
	179	深鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	突出口縁、ヘラ状工具使用、施文は深い。焼成極めて堅緻。
	180	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ・板削り 内：板ナデ	波状・角状突起口縁、逆く字状文。器面ザラザラ。 焼成堅緻。復元口径27.2cm。内面炭化物付着。
	181	深鉢形土器	口縁部 やや内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	台形状突起、ヘラ状工具によるく字状文。焼成極めて堅緻。口径19.1・高さ29.4・底径13.7cm。
	182	深鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	平坦口縁、く字状文と逆く字状文。内面屈曲。焼成極めて堅緻。鮮やかな肌色。外面炭化物付着。
	183	深鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ・ヘラ磨き 内：丁寧なナデ	波状口縁、逆く字状文。焼成は極めて堅緻。
	184	深鉢形土器	口縁部 やや外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ナデ・板削り 内：丁寧なナデ	刺突口縁。総じて器壁は薄い。焼成極めて堅緻。 鮮やかな肌色。
	185	深鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ・板削り 内：板ナデ	平坦口縁、指頭く字状文。焼成極めて堅緻。赤褐色。 外面炭化物付着。復元口径30.6cm。
第18図	186	鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	平坦口縁、指頭く字状文。胴部器壁薄い。焼成極めて堅緻。内外面に炭化物付着。
	187	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ 内：板ナデ	平坦口縁、指頭逆く字状文。胴部器壁薄い。焼成極めて堅緻。鮮やかな肌色。
	188	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ 内：ナデ	緩やかな波状口縁、ヘラ状工具によるく字状文。 胴部器壁薄い。堅緻。鮮やかな肌色。
	189	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	平坦・突起口縁、指頭による逆く字状文。焼成は極めて堅緻。
	190	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ・板ナデ 内：板ナデ	突起口縁（指頭でつまむ）施文具はヘラ状工具。 焼成は極めて堅緻。鮮やかな肌色。
	191	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板削り 内：板ナデ	指頭押圧による波状口縁、口縁部端部にも施文。 焼成極めて堅緻。
	192	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁。逆く字状文。内面屈曲線明瞭。鮮やかな肌色。焼成極めて堅緻。外面炭化物付着。
	193	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ナデ・板削り 内：板ナデ	波状口縁、ヘラ状工具逆く字状文。胴部の板削り明瞭。 焼成極めて堅緻。
	194	深鉢形土器	口縁部 やや内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ・板削り 内：丁寧な板ナデ	平坦口縁。指頭く字状文。焼成極めて堅緻。
	195	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ナデ・板削り 内：ナデ	波状口縁。指頭く字状文、凹線文。器面ザラザラ。 焼成極めて堅緻。赤褐色。
	196	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	平坦口縁、指頭による施文。焼成極めて堅緻。器壁総じて薄い。鮮やかな肌色。
	197	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、指頭く字状文、胴部器壁薄い。焼成極めて堅緻。褐色。外面に炭化物付着。
	198	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	平坦口縁、ヘラ状工具で施文。焼成堅緻。鮮やかな肌色。
	199	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・ヘラ磨き 内：ナデ	平坦口縁、狭い施文帯逆く字状文。極めて堅緻。 内面炭化物付着。
	200	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、ヘラ状工具逆く字状文。極めて堅緻。 赤褐色。195と同一固体か。
	201	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ 内：丁寧なナデ	平坦口縁。く字状文と凹線文。やや広めの施文帯。 赤褐色
	202	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	平坦口縁。ヘラ状工具く字状文。内外面炭化物付着。 焼成極めて堅緻。褐色。
	203	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：ナデ・板ナデ	山形突起口縁。ヘラ状工具逆く字状文。内面炭化物付着。焼成極めて堅緻。褐色。

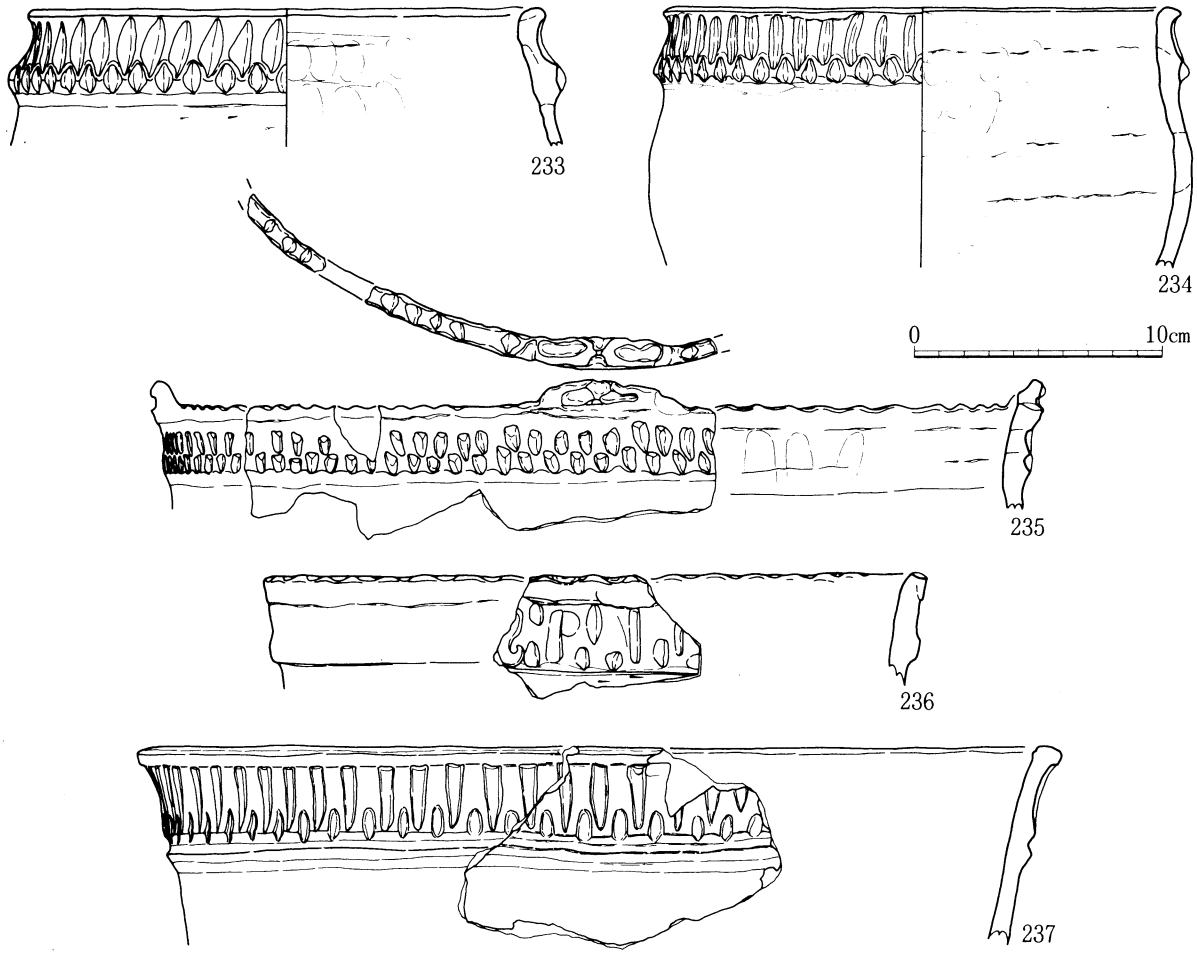


第20図　南福寺式土器Ｄ類

挿図	番号	器　種	部　位	胎　　土	調　整	備　　考
第18図	204	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	平坦口縁。指頭く字状文。凹点文。器面ザラザラ。 焼成極めて堅緻。赤褐色。
	205	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	平坦口縁。指頭く字状文。焼成極めて堅緻。赤褐色。
	206	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、ヘラ状工具逆く字状文。極めて堅緻。 赤褐色。189と同一個体か。
	207	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：板ナデ	平坦口縁、ヘラ状工具く字状文・刺突・凹線文。 極めて堅緻。鮮やかな肌色。
	208	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ･板ナデ	波状口縁、施文帯狭い。ヘラ状工具く字状文。 焼成極めて堅緻。外面黒褐色・内面赤褐色。

10類土器　南福寺式土器Ｄ類

挿図	番号	器　種	部　位	胎　　土	調　整	備　　考
第19図	210	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：ナデ・板ナデ	平坦口縁、ヘラ状工具直線文。復元口径27.2cm。 外面炭化物付着。焼成極めて堅緻
	211	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：板ナデ後ナデ	平坦口縁、施文はヘラ状工具。灰褐色。焼成極めて堅緻。外面炭化物付着。４類土器か？
	212	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	波状口縁。ヘラ状工具による直線文。器面ザラザラ。 褐色。焼成堅緻。復元口径35.6cm。
	213	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：丁寧な板ナデ	波状口縁、ヘラ状工具による直線文。焼成極めて堅緻。
	214	深鉢形土器	口縁部内弯	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：丁寧な板ナデ	平坦口縁。器壁厚い。焼成極めて堅緻。 復元口径19.0cm。
	215	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ナデ 内：板ナデ	波状口縁、ヘラ状工具直線文。焼成極めて堅緻。 器壁薄い。４類土器か？
	216	深鉢形土器	口縁部やや外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ･板ナデ 内：板ナデ	波状口縁、ヘラ状工具直線文。内面屈曲。焼成極めて堅緻。褐色。復元口径34.0cm。
	217	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒を多く含む、長石・石英	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、ヘラ状工具直線文。器壁薄い。外面炭化物付着。焼成は極めて堅緻。
	218	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板削り 内：板ナデ	刻み口縁。総じて器壁は薄い。ヘラ状工具。焼成極めて堅緻。鮮やかな肌色。復元口径28.1cm。
第20図	219	深鉢形土器	口縁部内弯	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ･板ナデ 内：板ナデ	平坦口縁、ヘラ状工具施文。焼成極めて堅緻。 赤褐色。222と同一個体か。
	220	鉢形土器	口縁部やや内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	平坦口縁、胴部器壁薄い、焼成極めて堅緻。内外面に炭化物付着。
	221	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ 内：板ナデ	台形状突起口縁、胴部器壁薄い、焼成極めて堅緻。 鮮やかな肌色。
	222	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ･板ナデ 内：板ナデ	平坦口縁、ヘラ状工具施文。焼成極めて堅緻。 赤褐色。219と同一個体か。
	223	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板削り 内：板ナデ	刻み口縁、ヘラ状工具施文。器面ザラザラ。焼成は極めて堅緻。
	224	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	平坦口縁。指頭。焼成は極めて堅緻。褐色。
	225	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板削り 内：板ナデ	端部を指頭押圧により押圧。焼成極めて堅緻。施文はヘラ状工具。
	226	深鉢形土器	口縁部外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁。ヘラ状工具。内面屈曲線明瞭。肌色。 焼成極めて堅緻。外面炭化物付着。
	227	深鉢形土器	口縁部外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	刺突口縁、ヘラ状工具。焼成堅緻。
	228	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：丁寧なナデ	く字状口縁、口縁端部を押圧。胴部に刻み目突帯。 器面ザラザラ。焼成極めて堅緻。
	229	深鉢形土器	口縁部外反	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	波状口縁。胴部に刻み目突帯。器面ザラザラ。 焼成極めて堅緻。灰褐色。
	230	深鉢形土器	口縁部直行	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	波状・台形状突起口縁（指頭押圧）。焼成極めて堅緻。 肌色。
	231	深鉢形土器	口縁部外反	砂粒を多く含む、長石・石英・雲母 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：ナデ	波状口縁。界線はヘラ状工具、縦位は指頭。胴部器壁薄い。焼成極めて堅緻。褐色。
	232	深鉢形土器	口縁部外反	砂粒を多く含む、長石・石英・雲母 白色粒目立つ	外：ナデ・板削り 内：板削り	波状・台形状突起口縁（指頭押圧）。焼成極めて堅緻。 肌色。



第21図　南福寺式土器E類

11類土器　南福寺式土器E類

挿図	番号	器　種	部　位	胎　　土	調　整	備　　考
第21図	233	深鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板削り 内：ナデ・板ナデ	丸味口縁、指頭凹点文。復元口径20.9cm。内面に輪積痕跡。焼成堅緻。234と同一個体か。
	234	深鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板削り 内：ナデ・板ナデ	丸味口縁、指頭凹点文。復元口径21.2cm。内面に輪積痕跡。焼成堅緻。233と同一個体か。
	235	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ・板削り 内：板ナデ	波状・台形状突起口縁。ヘラ状工具による刺突文。褐色。焼成極めて堅緻。復元口径35.6cm。
	236	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	波状口縁、指頭による凹点・凹点文。焼成極めて堅緻。黄橙色。
	237	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：丁寧な板ナデ	平坦口縁。器壁厚い。焼成極めて堅緻。 復元口径37.1cm。

11類　南福寺式土器Ｅ類（第21図）223・234・235・236・237

肥厚した施文帯を凹点文・縦位の凹点文・刺突文で構成した一群である。

223・234は胴部上位で口縁部にかけて内弯する器形で，口唇部はやや丸みを成し，肥厚した施文帯は指頭による縦位の凹点文を描いた後，下端部を凹点で押さえている。復元口径は20.9cm，21.2cmとなるが，全体的特徴から同一個体の可能性が高い。外面は板削り，内面の上位は板ナデの後，指頭で押さえられるが，輪積の痕跡が観察される。235の口唇部はヘラ状工具の刻みによる浅い波状と台形状の突起で構成される。なお，突起の上面は4方向に深く刻み，施文を重ねる。なお，復元口径は31.5cmである。237は復元口径が37.1cmの大型の深鉢形土器で，口縁部直下の施文は界線を巡らしその上位に，ヘラ状工具で規則性の見られる凹線文と凹点文で構成される。

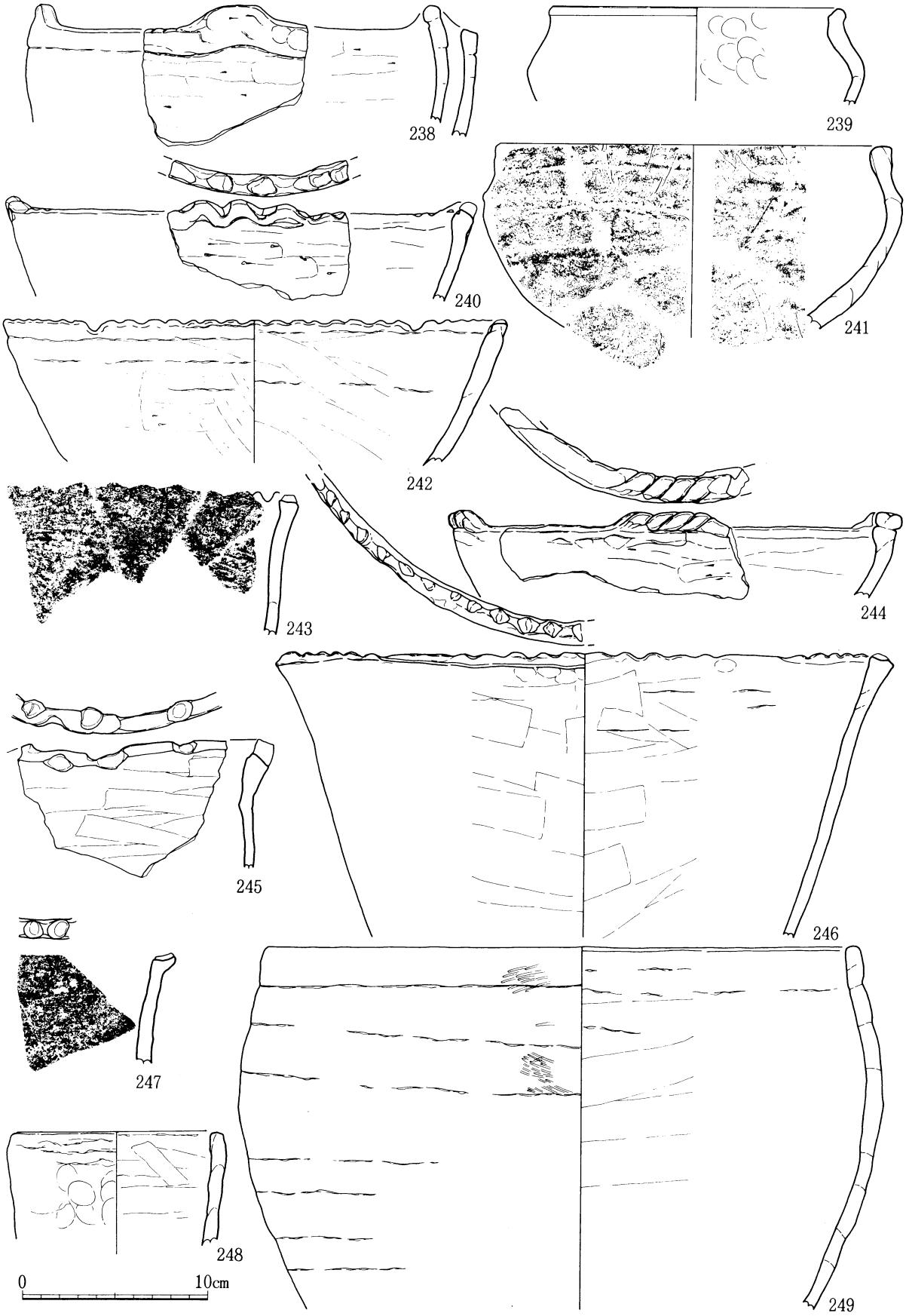
12類　南福寺式土器Ｆ類（第22・23図）238～264

文様を持たない，所謂無文の深鉢形土器及び鉢形土器である。247の胎土に滑石が混入するが他は，砂粒や細砂粒を主体とした胎土が用いられている。なお，有文土器に多用された丁寧なナデやヘラ磨き等の器面調整が減少する傾向が見られ，さらに製作時の輪積の痕跡を残す資料（238・240・242等）も多い。このことから，この無文土器群が粗製土器としての役を担った可能性が指摘される。即ち，有文土器を精製土器に，無文土器を粗製土器と捉える判断である。

239の口径は15.7cm，241の復元口径は21.3cmで，肩部から口縁部方向に内弯する鉢形土器で，総じて器壁は厚手と判断できる。鉢形土器の内240・242・244は浅鉢形土器に器種分類可能で，波状口縁や突起を備えている。これらは，順に25.5cm，26.8cm，24.5cmと近似した口径が見られる。240は口唇部に紐状の粘土紐を貼り付け，途中2カ所を指頭で深く押圧し，アクセントを付ける。242の口唇部は棒状工具で刻み，細かい波状を呈す。内外面に輪積の痕跡をよく残し，輪積の特徴や繋ぎの状況が観察できる。244でも輪積の痕跡が観察でき，平坦な口唇部に紐状に組まれた突起が付けられる。246の口唇部は平坦にナデた後，口唇部に並行する指頭凹点による浅い波状を成し，内外面共に板状工具により横方向に丁寧にナデて仕上げる。胴部上位の内面で，外反する形状を成し，口径の広い鉢形土器と判断される。なお，外面の上位に煤状の炭化物が集中して付着している。249は口縁部が若干肥厚する傾向が見られ，器面調整は粗のナデで行うため輪積の痕跡が特に外面で観察できる。復元口径はそれぞれ33.2cm，32.0cmの大型である。264の外面も縦方向の板ナデないしは板削りで仕上げられる。248は口径が11.9cmの小型の深鉢形土器で，外面はナデて仕上げるが内外面に輪積の痕跡が観察できる。

247の1点だけに胎土に滑石粒を含み，硬質で金属音を出す。

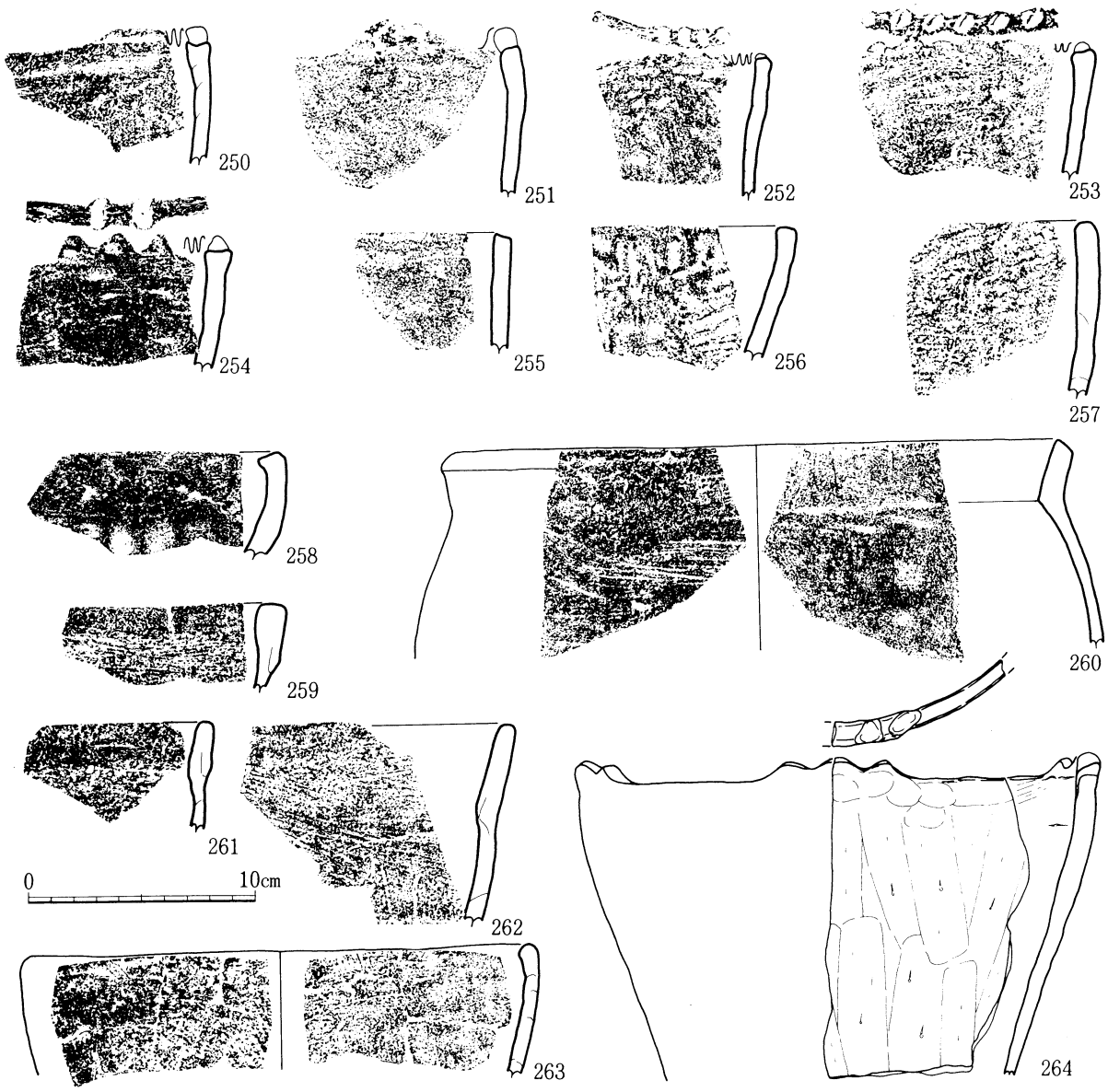
250は台形状，251は組み紐状の突起を貼り付け，輪積の痕跡を残す。252は小型の鉢形土器で，平坦な口唇の一部を棒状工具で刻む。器壁は6mm程と薄く，極めて硬質な器面を保っている。254の台形状突起も棒状工具で深く刻まれ，内面に輪積の痕跡を残す。260の内面の屈曲は明瞭に形成される。263は復元口径が19.8cm鉢形土器で，内外面に炭化物の付着が見られ，輪積の痕跡も観察される。264の外面は縦方向の板削りで仕上げ，平坦な口唇部4カ所に粘土紐貼り付けによる角状突起を持つ。復元口径は22.8cmで小型深鉢形土器に属す。



第22図　南福寺式土器Ｆ類

12類土器　南福寺式土器F類(無文)

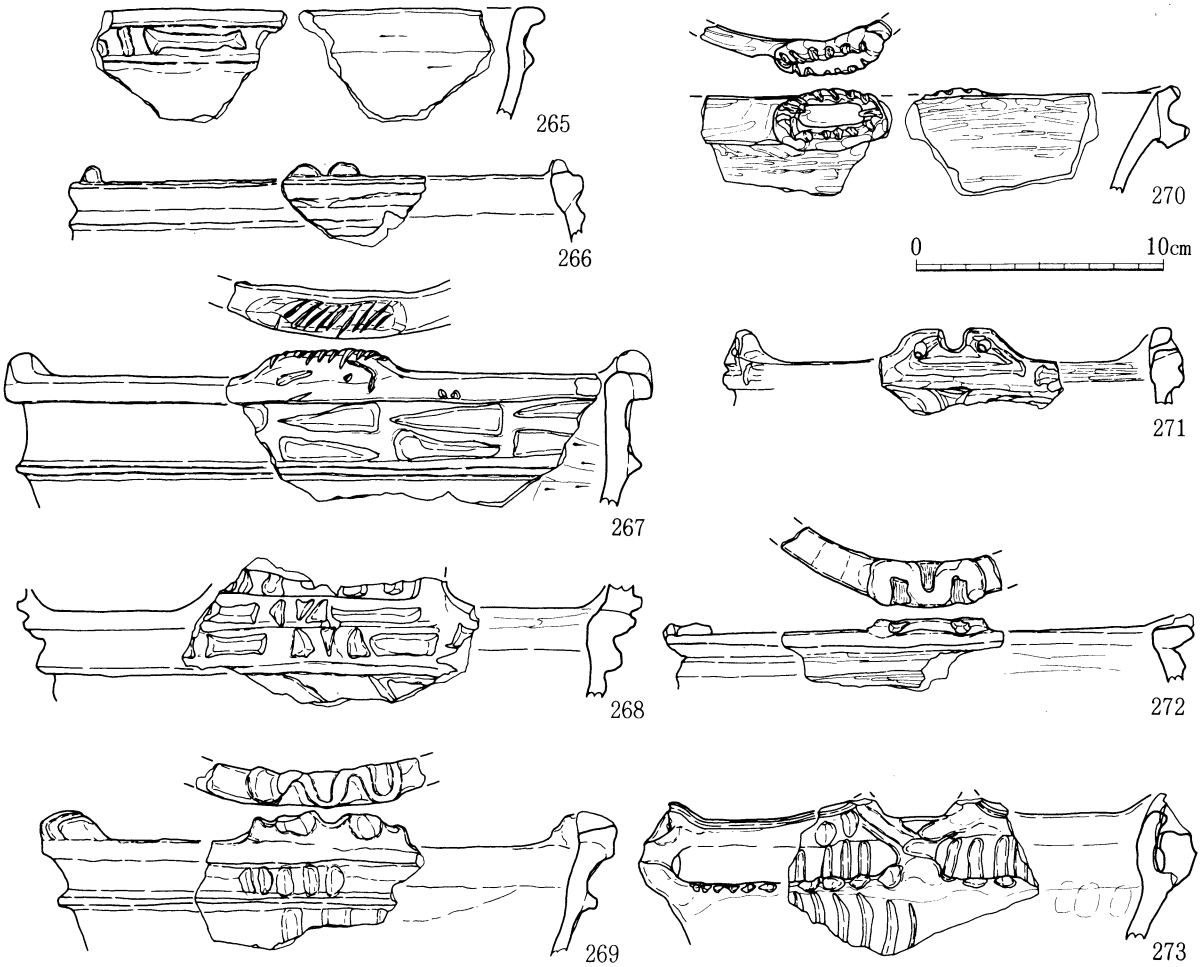
挿図	番号	器種	部位	胎土	調整	備考
第22図	238	深鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：ナデ・板ナデ	平坦・台形状突起口縁部。外面に輪積痕跡。 復元口径21.8cm。焼成極めて堅緻。
	239	鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ 内：ナデ・指押さえ	丸味口縁。復元口径15.9cm。内面に輪積痕跡。 焼成堅緻。小型鉢形土器。
	240	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	平坦・山形突起口縁。鈍い赤褐色。焼成極めて堅緻。 復元口径25.5cm。内面炭化物付着。
	241	鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	平坦口縁。焼成極めて堅緻。器壁厚手。黄橙色。 復元口径21.3cm
	242	鉢形土器	口縁部 外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：丁寧な板ナデ	波状口縁。器壁厚い。外面に輪積痕跡。焼成極めて堅緻。復元口径26.8cm。内面炭化物付着。
	243	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：板ナデ 内：板ナデ	波状口縁。焼成極めて堅緻。器壁薄い。
	244	鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：板ナデ 内：板ナデ	平坦・組み紐状突起口縁。焼成極めて堅緻。復元口径24.5cm。鈍い黄橙色。
	245	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ナデ・板削り 内：板ナデ	波状口縁、焼成極めて堅緻。器壁薄い。
	246	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：板ナデ 内：板ナデ	波状口縁。総じて器壁薄い。焼成極めて堅緻。 復元口径33.2cm。
	247	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・滑石 白色粒（滑石）目立つ	外：ナデ 内：ナデ	波状口縁。焼成極めて堅緻。器壁薄い。多量の滑石混入。
	248	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ 内：板ナデ	平坦口縁。内外面に輪積痕跡。焼成極めて堅緻。 復元口径11.9cm。
	249	深鉢形土器	口縁部 やや内弯	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ナデ 内：板ナデ	平坦口縁。内外面に輪積痕跡。外面に炭化物付着。 焼成極めて堅緻。復元口径32.0cm。
第23図	250	深鉢形土器	口縁部 やや内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：丁寧な板ナデ	波状・台形状突起口縁。内面に輪積痕跡。 焼成極めて堅緻。
	251	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	平坦・組み紐状突起口縁。焼成極めて堅緻。
	252	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：板ナデ 内：丁寧な板ナデ	平坦・波状口縁。器壁薄い。焼成極めて堅緻。
	253	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：板ナデ・板削り 内：板ナデ	波状口縁。焼成極めて堅緻。器壁薄い。
	254	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：板ナデ 内：丁寧な板ナデ	波状口縁。焼成極めて堅緻。
	255	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ 内：ナデ	平坦口縁。焼成極めて堅緻。器壁薄い。
	256	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：ナデ・ヘラナデ 内：ヘラナデ	平坦口縁。焼成極めて堅緻。
	257	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：板ナデ 内：板ナデ	平坦口縁。焼成極めて堅緻。外面炭化物付着。
	258	深鉢形土器	口縁部 やや内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・雲母	外：ナデ 内：ナデ	平坦口縁。器壁厚い。焼成極めて堅緻。
	259	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ナデ 内：板ナデ	平坦口縁、口縁部肥厚。焼成極めて堅緻。胴部器壁薄い。内面炭化物付着。
	260	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧な板ナデ 内：丁寧なナデ	平坦口縁。内面屈曲明瞭。焼成極めて堅緻。 復元口径27.0cm。黄橙色。
	261	深鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	平坦口縁、口縁部肥厚。焼成極めて堅緻。胴部器壁薄い。
	262	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	平坦口縁。焼成極めて堅緻。
	263	鉢形土器	口縁部 やや内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	平坦口縁。焼成極めて堅緻。
	264	深鉢形土器	口縁部 外反	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：板削り 内：丁寧な板ナデ	平坦・角状突起口縁。器壁薄い。焼成は極めて堅緻。 復元口径22.8cm。



第23図　南福寺式土器Ｆ類

南福寺式土器　精製鉢形土器

挿図	番号	器　種	部　位	胎　　土	調　整	備　　考
第24図	265	鉢形土器 小型鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	平坦口縁。隆帯貼り付け。削り出し文。小型鉢形土器。 焼成極めて堅緻。明赤褐色。
	266	鉢形土器 小型鉢形土器	口縁部 内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	平坦・突起口縁。復元口径21.1cm。内面に輪積痕跡。 焼成堅緻。明赤褐色。
	267	鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	平坦・台形状突起ヘラ刻み口縁。隆帯貼り付け。 削り出し文。胴部器壁薄い。鈍い赤褐色。 焼成極めて堅緻。復元口径25.8cm。
	268	鉢形土器	口縁部 外反	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：丁寧なナデ	平坦・突起口縁。削り出し文。胴部器壁薄い。 焼成極めて堅緻。鈍い黄橙色。復元口径24.9cm。
	269	鉢形土器 良質	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	平坦・紐状突起口縁。隆帯貼り付け。削り出し文。 胴部壁薄い。焼成極めて堅緻。復元口径26.8cm。
	270	鉢形土器 良質	口縁部 外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・滑石 白色粒（滑石粒）目立つ	外：ヘラ磨き 内：ヘラ磨き	三角肥厚・刻み突起口縁。滑石混入。焼成極めて堅緻。 器壁薄い。鈍い肌色。
	271	鉢形土器 良質	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ヘラ磨き 内：ヘラ磨き	平坦・台形状突起肥厚口縁。削り出し文。焼成極めて 堅緻。復元口径cm。光沢明赤褐色。
	272	鉢形土器 良質	口縁部 内弯	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：丁寧な板ナデ	平坦・紐状突起口縁、焼成極めて堅緻。器壁薄い。 光沢明赤褐色。復元口径cm。
	273	深鉢形土器 特殊土器	口縁部 内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	X字状橋状把手。凹点・短沈線。総じて器壁薄い。 焼成極めて堅緻。復元口径20.0cm。



第24図　南福寺式土器Ｇ類（精製鉢形土器）

南福寺式　浅鉢形土器（皿）

挿図	番号	器　種	部　位	胎　　土	調　整	備　　考
第25図	274	浅鉢形土器 良質	口縁部 直行	細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：ヘラ磨き	玉縁状口縁。削り出し文。橋状把手の可能性。特殊土器。明赤褐色。復元口径17.0cm
	275	浅鉢形土器 良質	口縁部 外反	細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ヘラ磨き 内：ヘラ磨き	平坦・角状突起口縁。削り出し文。特殊土器。赤色塗彩。内外面の器面調整は特に入念。復元口径23.4cm。焼成極めて堅緻。暗赤褐色。
	276	浅鉢形土器 良質	口縁部 直行	細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ヘラ磨き 内：ヘラ磨き	平坦口縁。橋状把手の可能性。削り出し文。特殊土器。赤色塗彩か明赤褐色。焼成極めて堅緻。 復元口径17.7cm。
	277	浅鉢形土器	口縁部 やや内弯	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：丁寧なナデ	平坦・沈線口縁。削り出し文。隆帯貼り付け。 焼成極めて堅緻。鈍い肌色。復元口径23.1cm。
	278	浅鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	刻み口縁。隆帯貼り付け。削り出し文。 胴部器壁薄い。焼成極めて堅緻。
	279	浅鉢形土器	口縁部 外反	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒（滑石粒）目立つ	外：ヘラ磨き 内：丁寧なナデ	刻み突起口縁。把手剥落か。隆帯貼り付け，焼成極めて堅緻。器壁薄い。暗褐色。

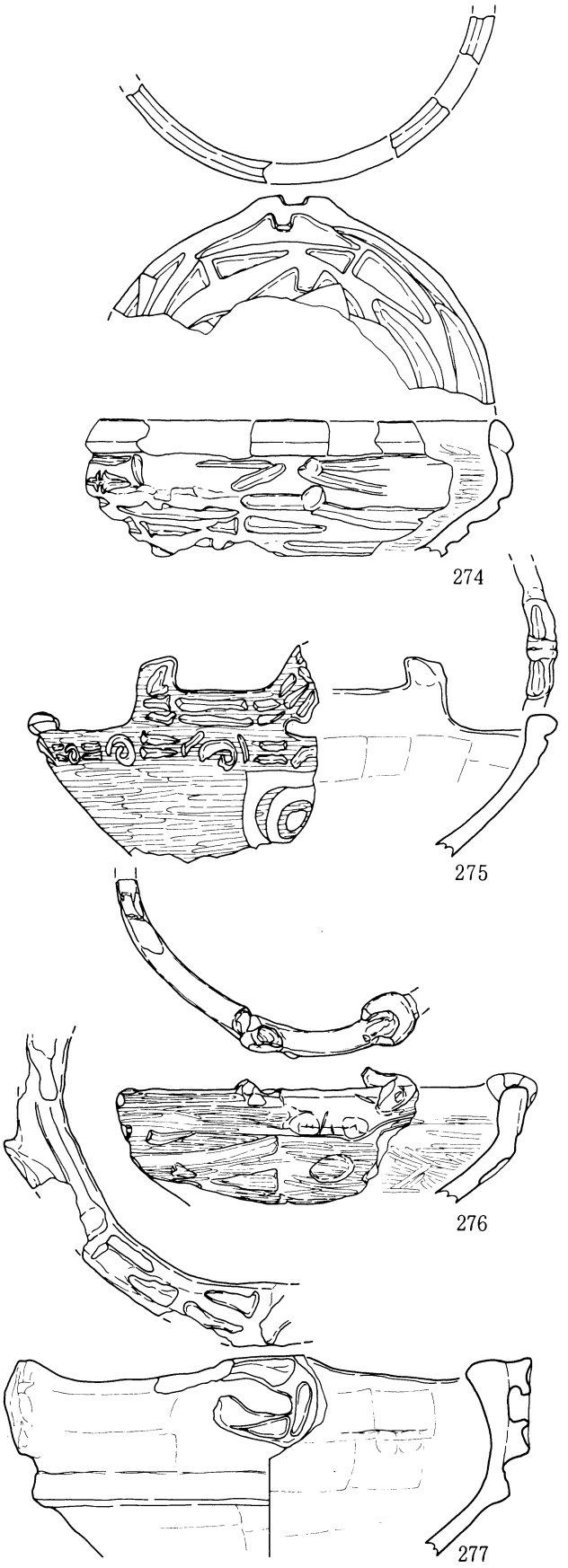
13類　南福寺式土器Ｇ類

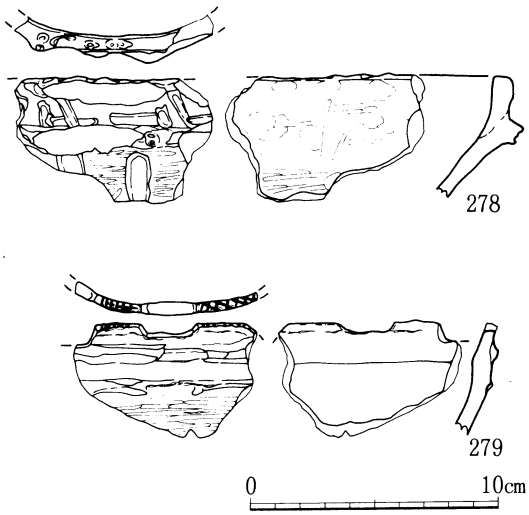
精製鉢形土器（第24・25・26・27図）265～273

鉢形土器の中で，特に意識的に造り出したと思われるものを列挙している。

265～273は肩部相当の屈曲を確認できるもので，特に精製土器を意識できるものである。

274～279は浅鉢形土器と器種区分可能な一群である。

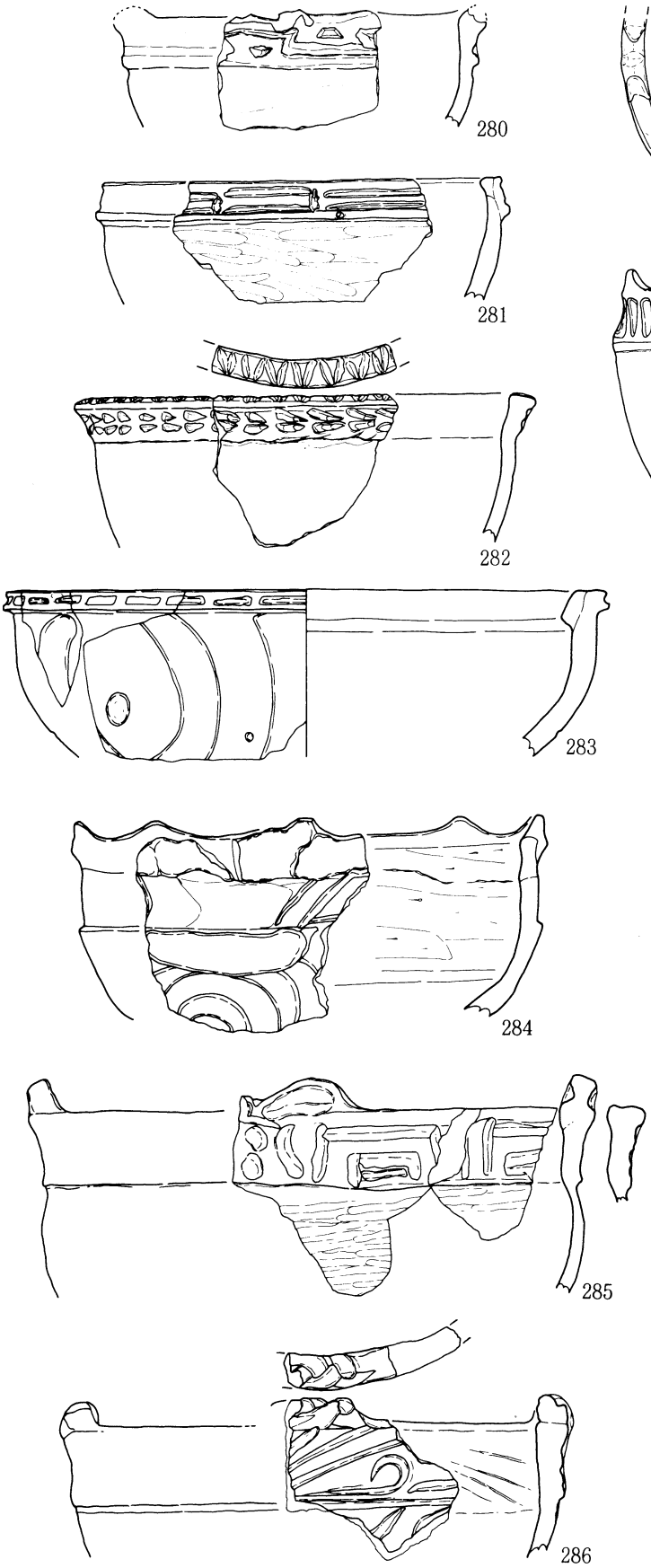


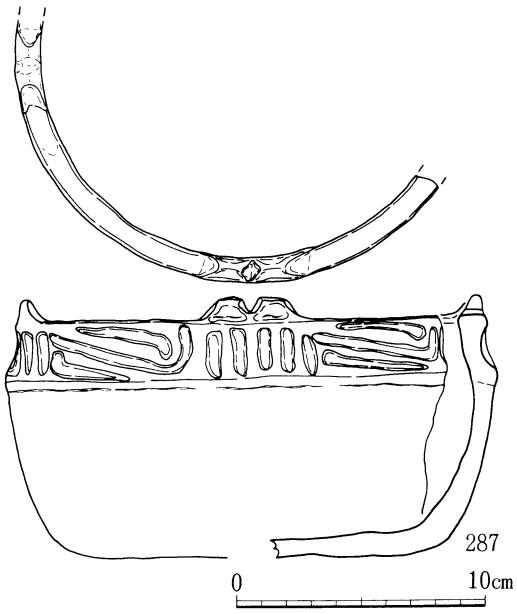


第25図　南福寺式土器Ｇ類（精製皿形土器）

265は内外面共に丁寧なナデによる器面調整がなされたもので，特に，外面は光沢を保っている。断面三角の隆起線で設定した施文帯が設けられる。施文には「ヘラ削り文」手法が用いられ，縦方向と横方向に器面を彫り込んでいる。266は平坦な口唇部に粘土紐を貼り付け，その中央部を棒状工具で深く刻み，小さく端正な台形状の突起を造り出している。口縁部直下に断面三角の隆起線を貼り付け，狭い無地の施文帯を設けている。輪積の痕跡を残すが，器面は明るい橙色を呈し，21.1cmの口径を計る。267は平坦で広めの口唇部の4カ所に，頂部にヘラ状工具による斜めの深い刻みを持つ台形状突起部を持ち，断面三角の隆起線との間の施文帯に対抗する三角形のヘラ削り文が認められる。胎土に多量の白色粒子を含み，特に内面はザラついた器面を呈している。なお，復元口径は25.8cmを計る。268のヘラ削り文は，三角形文・長方形文で構成され，口縁部突起，肥厚した施文帯及び胴部にも及んでいる。復元口径は24.9cmで，白色粒子を多量に胎土に混入してい。

269の口唇部には粘土紐が蛇行して貼り付けられ，断面三角の隆起線で区画した施文帯と胴部をヘラ削り文で埋める。復元口径は23.7cmで，胎土等種々の特色から265と同一個体の可能性が指摘できる。

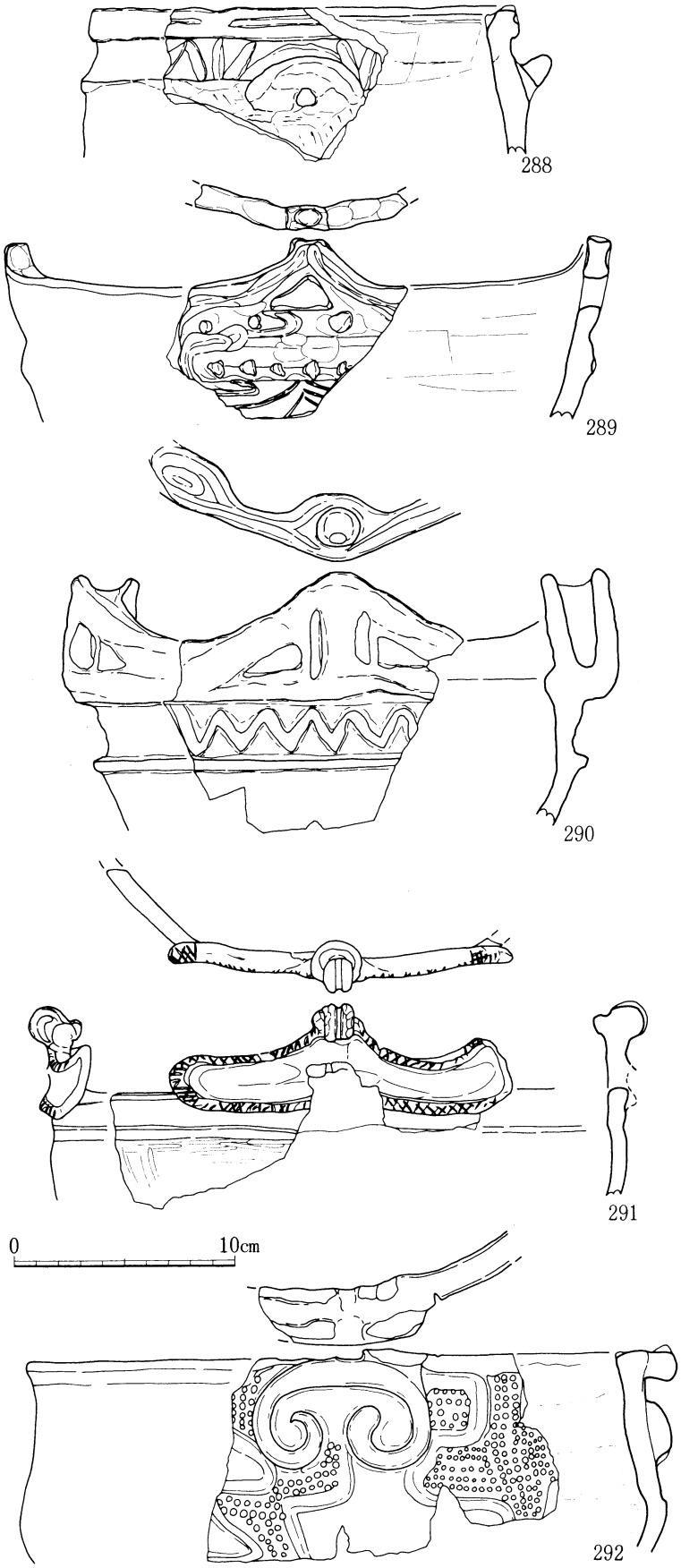




第26図　南福寺式土器G類（精製椀形土器）

270は三角形に大きく肥厚した口縁部に，楕円形状に粘土紐を貼り付け周辺をヘラ状工具で深く連続して刻む。胎土に多量の滑石を含む。271は内外面共に入念にヘラ磨きした器面を持ち，角状突起は各々穿孔される。肥厚は口縁端部に限られ，胴部にもヘラ削り文が見られる，272の平坦な口唇部にも低い台形状突起が見られ，ヘラ削り手法により蛇線状に仕上げられる。20.0cmの復元口径の273は施文帯を跨ぐX字状に橋状把手を持ち，胴部にも縦位の浅い沈線文を持つ。この種の施文手法は出水貝塚で認められる。

274は口縁部の貼り付けが肥厚し玉縁状を成すもので，器面全域に三角形のヘラ削り文が施される。なお，剥落部の観察から橋状把手が付けられていた可能性も否定できない。また，底部についても高台の可能性も含めて検討すべきと思われる。17.0cmの復元口径を成す。275の器面は入念なヘラ磨きの後に，赤色顔料が塗彩され光沢のある鮮やかな赤色を呈している。口縁部



第27図　南福寺式土器G類（把手部鉢形土器）

には，台形状突起にさらに角状突起が重ねられる。口唇部，突起部，口縁端部に短沈線による平行線文や渦巻文のヘラ削り文，さらに胴部にもヘラ削り文が施され，華麗さを増している。なお，復元口径は 23.4cmである。276 も赤色顔料が塗彩されたと見られるもので，外面はヘラ削り文で飾られる。復元口径は 17.7cmを計る。なお，剥落痕の観察から口縁部と屈曲部に橋状把手が付されていたと判断される。277 口縁端部を巡る貼り付けと，4 カ所に渦巻状の把手貼り付けが付される。また，口唇部の平坦面にはヘラ削り文が付され，復元口径は 23.1cmである。

280 の口唇部には突起が付された可能性があるが，剥落している。肥厚した施文帯をヘラ削り文で削り出し，一部は隆起線状を呈している。

281 施文は口縁端部の狭い肥厚帯に限られ，沈線による明瞭な平行線文が描かれる。内外面共に入念なヘラ磨きがなされ，特に，外面は化粧土が重ねられた痕跡が認められ鮮やかな赤色を呈している。復元口径 18.0 cm。282 の口唇部は鋸歯状に刻まれ，肥厚した施文帯には逆く字状の圧痕文が規則性を成して付される。283 の口縁端部の両面は肥厚し，外面の肥厚帯は短沈線で埋められる。赤色顔料で塗彩された胴部は渦巻文様にヘラ削りで施文される。なお，復元口径は27.0cmとややおおぶりの鉢形土器である。284 は波状口縁を成し，復元口径は 21.0cmで，一段低くなった施文帯を跨ぐ橋状把手が剥落した痕跡

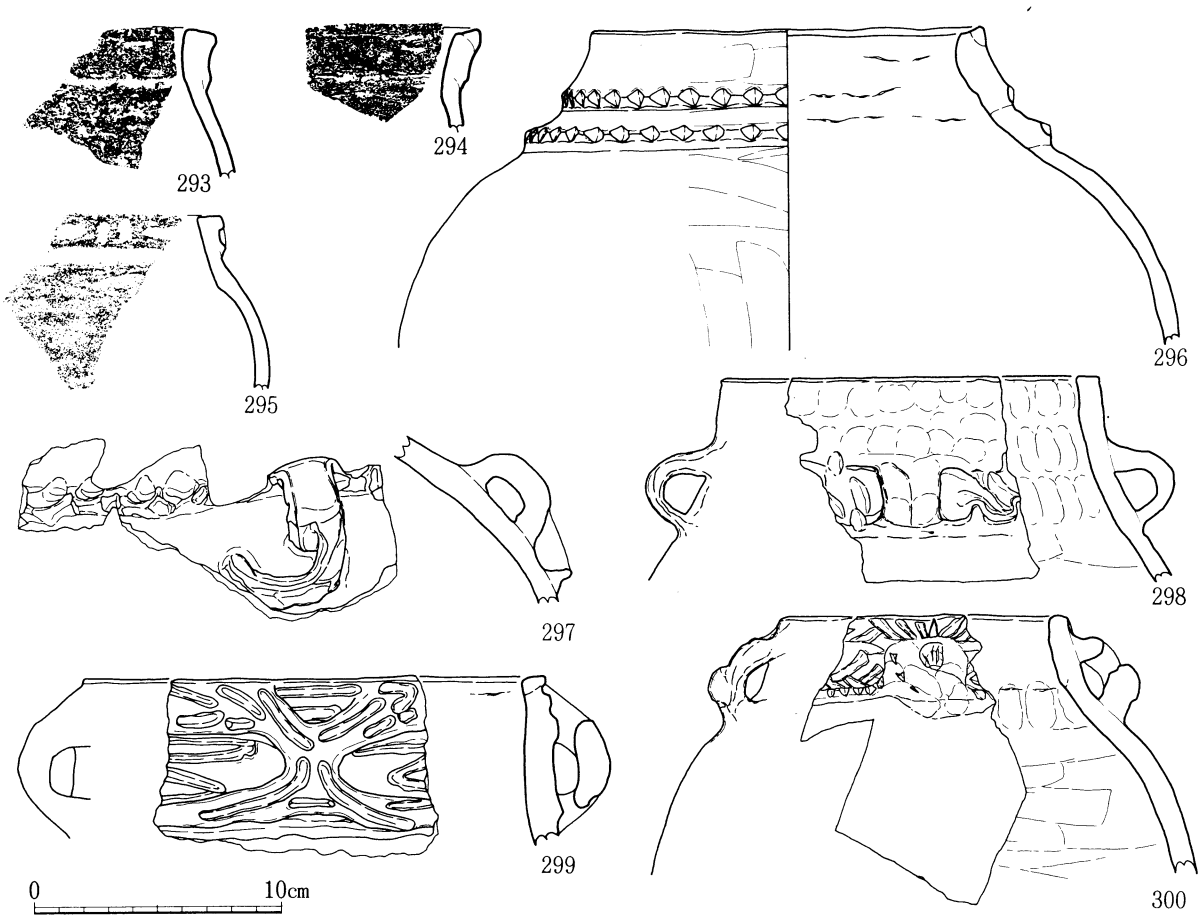
南福寺式土器　精製鉢形土器（椀）

挿図	番号	器　種	部　位	胎　　土	調　整	備　　考
第26図	280	鉢形土器 小型鉢形土器	口縁部 外反	細砂粒を多く含む、長石・石英	外：ナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	玉縁状平坦・突起。削り出し文。隆帯貼り付け。 暗赤褐色。復元口径16.9cm。
	281	鉢形土器 小型鉢形土器 良質	口縁部 内弯	細砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ヘラ磨き 内：ヘラ磨き	平坦口縁。施文帯肥厚。平行沈線文。赤色化粧土使用か？　内外面の器面調整は特に入念。復元口径18.0cm。 焼成極めて堅緻。赤褐色。
	282	鉢形土器	口縁部 やや外開き	細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：板ナデ･板削り 内：丁寧なナデ	平坦・ハ字状刻み口縁。狭い施文帯にハ字状押圧。 淡赤褐色。焼成堅緻。復元口径21.0cm。
	283	鉢形土器 良質	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石 白色粒目立つ	外：ヘラ磨き 内：丁寧なナデ	平坦・端部に連続した短沈線、口縁内部肥厚。削り出し文。赤色塗彩か？　暗赤褐色。焼成極めて堅緻。 復元口径27.0cm。
	284	鉢形土器	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：板ナデ	波状口縁。橋状把手剥落か？　削り出し文。胴部器壁薄い。焼成極めて堅緻。復元口径21.0cm。
	285	鉢形土器 良質	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ･板ナデ 内：丁寧な板ナデ	平坦・突起口縁。施文帯肥厚。指頭凹線、ヘラ沈線。 焼成極めて堅緻。胴部器壁薄い（４mm程）。 外面に炭化物付着、暗褐色。復元口径25.5cm
	286	鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：板ナデ	平坦・組み紐状突起口縁。焼成極めて堅緻。鈍い肌色。 復元口径23.0cm。
	287	鉢形土器 良好	口縁部 直行	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英	外：ヘラ磨き 内：丁寧なナデ	平坦・角状突起口縁。施文帯肥厚、ヘラ状工具による深く明瞭の沈線文。明赤褐色（化粧土？）。 焼成極めて堅緻。口径18.5cm・高さ10.5cm・底部15.0cm。
第27図	288	鉢形土器 良質	口縁部 内弯	砂粒を多く含む、長石・石英・角閃石	外：丁寧なナデ･板削り 内：板ナデ	平坦・端部に連続した短沈線、口縁部肥厚。浅い沈線文。施文帯下位に縦位有孔耳状把手。暗赤褐色。 焼成極めて堅緻。口径19.0cm。
	289	鉢形土器	口縁部 直行	細砂粒を多く含む、長石・石英	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	平坦・山形・有孔口縁。ヘラ状工具施文。焼成極めて堅緻。赤褐色。復元口径27.1cm。
	290	鉢形土器 良質	口縁部 やや内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	山形・有孔・透かし口縁。波状削り出し文。焼成極めて堅緻。外面に炭化物付着、暗赤褐色。復元口径23.9cm。
	291	鉢形土器	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：丁寧な板ナデ	平坦・突起口縁。焼成極めて堅緻。暗褐色。 復元口径27.3cm。
	292	鉢形土器 良質	口縁部 やや内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：板ナデ	平坦・口唇部の突起は剥落。肥高した施文帯にヘラ状工具による深く明瞭の刺突文。暗赤褐色。焼成極めて堅緻。復元口径27.8cm。

挿図	番号	器　種	部　位	胎　　土	調　整	備　　考
第31図	326	不明	肩部	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	粒帯の貼り付けは同心円状。粒帯上は連続刻み。 鈍い淡赤褐色。焼成極めて堅緻。
第32図	327	不明 土製品？		砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：丁寧な板ナデ	不明。三角文は削り出し文。赤色顔料塗彩。明赤褐色。 焼成極めて堅緻。土製品？
	328	不明	突起部？	細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：ナデ	突起部？。渦巻・三角文等は削り出し文。赤色顔料塗彩。明赤色。
	329	鉢形土器？	口縁部 突起部	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	台形状突起に指頭渦巻文。下端は指頭凹点。焼成極めて堅緻。器面ザラザラ。赤褐色。
	330	鉢形土器？	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	台形状突起に指頭渦巻文。下位施文は指頭凹点。 焼成極めて堅緻。器面ザラザラ。赤褐色。
	331	鉢形土器？ 良質	口縁部	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	台形（耳状）状突起。焼成極めて堅緻。器面ザラザラ。 鈍い赤褐色。
	332	不明	口縁部	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	台形状突起。浅い沈線文と指頭凹点焼成極めて堅緻。 鈍い灰褐色。
	333	不明	口縁部	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：板ナデ	台形（耳状）状突起。指頭凹・線凹点。焼成極めて堅緻。器面ザラザラ。灰褐色。
	334	鉢形土器？ 特殊土器？	口縁部	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・雲母 白色粒目立つ	外：ナデ 内：丁寧なナデ	特殊二重口縁部？。並行沈線文。粘土瘤貼り付け。 焼成極めて堅緻。鈍い赤褐色。
	335	鉢形土器？	口縁部	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：板ナデ	把手状貼り付け。指頭凹線文。鈍い赤褐色。焼成極めて堅緻。器面ザラザラ。

南福寺式土器　把手類その他

挿図	番号	器　種	部　位	胎　　土	調　　整	備　　考
第29図	301	不明	突起部	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	鶏頭状突起。中央部の粘土板の貼り付けは橋状把手。内面は彫り込み文。淡赤褐色。
	302	不明	突起部	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・雲母 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：丁寧な板ナデ	天地不明。穿孔。三角文は削り出し文。明赤褐色。焼成極めて堅緻。
	303	不明	突起部？	細砂粒を多く含む、長石・石英・滑石 白色粒目立つ・多量の滑石含む	外：丁寧なナデ 内：丁寧なナデ	彫り込み文は人面風。裏面上位にも削り出し文を持つことから突起部と判断。明赤桃色。多量の滑石混入により器面ヌルヌル。焼成極めて堅緻。
	304	鉢形土器？ 良質	口縁部 直行 橋状把手	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：丁寧なナデ	人面風。台形状突起に窓付き三角形突起を重ねる。屈曲部の無文帯を橋状把手が跨ぐ。沈線は全て深く刻み。淡黄橙色。焼成極めて堅緻。
	305	鉢形土器？	口縁部 直行 橋状把手	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・滑石 白色粒目立つ・多量の滑石含む	外：ナデ 内：ナデ	人面風。角形突起部とX状橋状把手。把手は施文帯の削り出し文を跨ぐ。器壁4㎜。多量の滑石混入で器面ヌルヌル。淡桃色。焼成極めて堅緻。
	306	鉢形土器 良質 特殊土器	口縁部 橋状把手 内弯	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：丁寧な板ナデ	人面風。削り出し文口唇。施文帯の沈線文を跨ぐ。X状橋状把手。胴部は削り出し文。焼成極めて堅緻。胴部器壁4㎜。淡黄橙色。
	307	鉢形土器 特殊土器	口縁部 橋状把手 内弯	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：丁寧な板ナデ	人面風。施文帯と口縁部を跨ぐ把手に小把手を重ねる。口唇部内面は連続して刻む。把手状の削り出し文の側面も刻む。鮮やかな肌色。
第30図	308	不明	不明 橋状把手	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	橋状把手。紐状。焼成極めて堅緻。淡黄橙色。
	309	鉢形土器？	口縁部 橋状把手	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	橋状把手。平坦口唇、施文帯肥厚。把手は無文施文帯を跨ぐ。焼成極めて堅緻。赤褐色。
	310	鉢形土器？	口縁部 橋状把手	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	橋状把手。口唇部に削り出し文。淡黄色。焼成極めて堅緻。
	311	不明	不明 橋状把手	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	橋状把手。上位は削り出し文。焼成極めて堅緻。淡灰色。
	312	不明	不明 橋状把手	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ヘラ磨き	橋状把手。把手の上下2カ所を穿つ。焼成極めて堅緻。赤色顔料塗彩。
	313	不明	口縁部 橋状把手	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：板ナデ	橋状把手。把手は施文帯（凹線文）を跨ぐ。焼成極めて堅緻。淡赤肌色。
	314	鉢形土器	口縁部 橋状把手	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	橋状把手。把手は施文帯（沈線文）を跨ぐ。把手状に渦巻文等。焼成極めて堅緻。淡赤肌色。
	315	鉢形土器	口縁部 橋状把手	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	橋状把手。把手は施文帯（沈線文）を跨ぐ。把手状に沈線文。焼成極めて堅緻。淡赤肌色。
	316	鉢形土器	口縁部 橋状把手	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：板ナデ	X状橋状把手。把手は施文帯（凹線文）を跨ぐ。把手状に彫り込み文。焼成極めて堅緻。赤褐色。
	317	鉢形土器	口縁部 橋状把手	砂粒を多く含む、長石・石英・雲母 白色粒目立つ	外：ナデ・板ナデ 内：板ナデ	ハ状橋状把手。把手は施文帯（凹線文）を跨ぐ。把手状に沈線文。焼成極めて堅緻。褐色。
第31図	318	不明	不明 突起部	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	突起部？。組み紐状。焼成極めて堅緻。淡赤褐色。
	319	不明	口縁部 橋状把手？	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：	橋状把手？。接合部で剥落。焼成極めて堅緻。鈍い赤黒褐色。
	320	不明	不明 突起部？	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	突起部？。渦巻状。焼成極めて堅緻。淡赤褐色。
	321	鉢形土器？	不明 突起部？	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	突起部？。紐状。焼成極めて堅緻。淡赤褐色。
	322	鉢形土器	口縁部 橋状把手	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・滑石 白色粒目立つ・多量の滑石混入	外：ナデ 内：板ナデ	橋状把手剥落？。把手は施文帯（凹線文）を跨ぐ。胴部にも沈線文。焼成極めて堅緻。赤褐色。
	323	不明	不明 突起部？	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：板ナデ	耳状突起突起上に連続刺突文。焼成極めて堅緻。黄橙色。
	324	不明	不明	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	部位不明。肥厚した施文帯に連続爪形文。焼成極めて堅緻。淡赤褐色。
	325	鉢形土器	口縁部 突起部	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	窓付き台形状突起部。突起上端に渦巻上凹点文。焼成極めて堅緻。淡赤肌色。

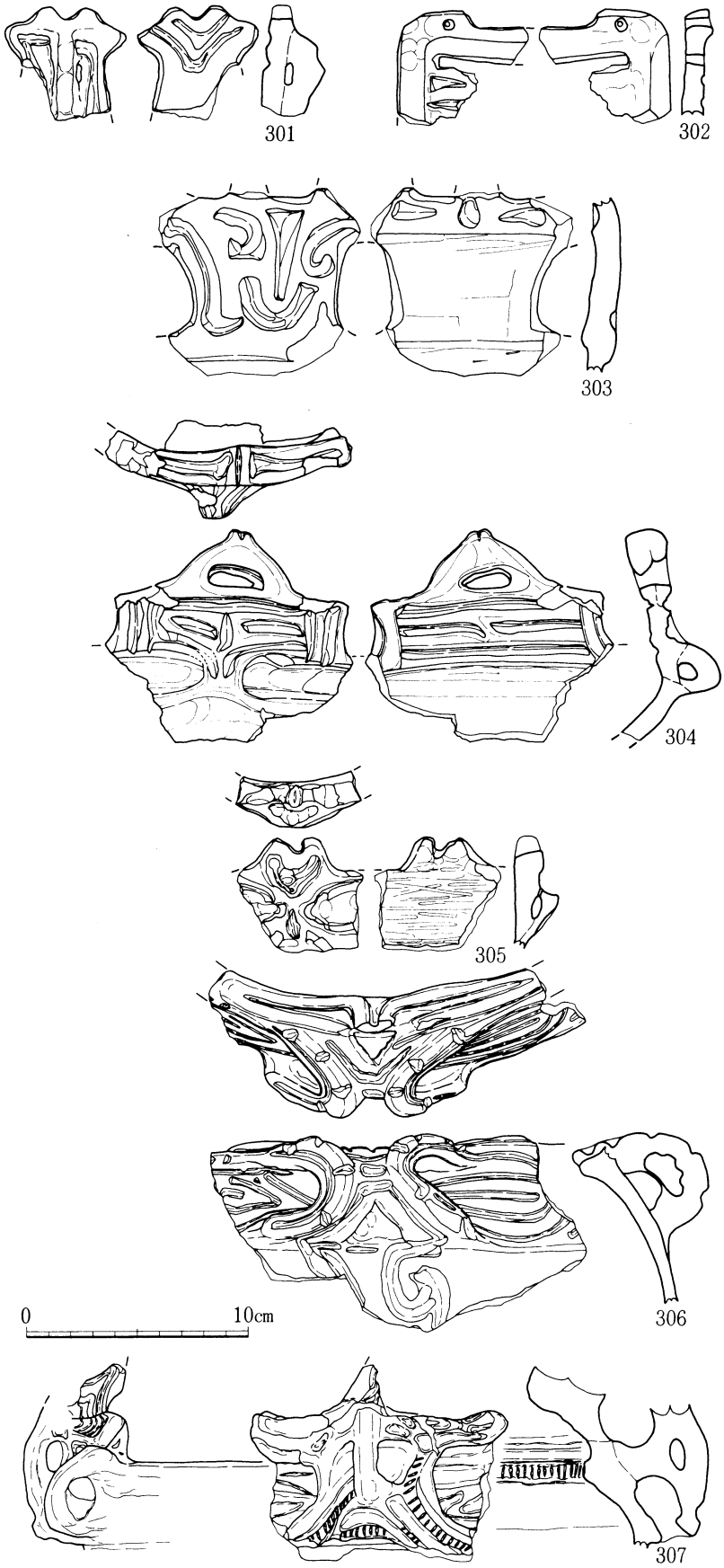


第28図　南福寺式土器G類（壺形土器）

が認められる。なお，胴部には渦巻文様のヘラ削り文が見られる。復元口径21.0cm。285は4カ所に台形状の貼り付け突起が想定できるもので，突起の両面は指頭により浅い凹線文が付される。口縁部の施文帯は肥厚し，ヘラ状工具で沈線文が，指頭で凹点文が描かれる。また，この資料で注目できることは胴部の器壁が4㎜程と極めて薄く整形されることであろう。復元口径25.5cm。

287は肩部の屈曲部に最大幅がある鉢形土器で，底部は平底を成す。平坦な口唇部の4カ所に台形状突起を貼り付け，その中央部をヘラ状工具で深く押圧で刻む。口縁部の肥厚した施文帯に，ヘラ状工具で縦方向と斜め方向の並行した沈線文を充填する。器面全域を入念にヘラ状工具で磨き，光沢のある赤褐色の色調を保っている。口径は18.6cm，高さは10.5cm，底部径は15.0cmである。

288の胴部以下の形状は定かでないが，縦方向の穿孔を持つ把手状貼り付けを持つ特徴から注目したい。口縁端部を肥厚し短沈線を横位に充填し，その下位に施文帯を設けヘラ状工具によるやや広めで浅い沈線文を描き，その施文帯の端に半月状（耳様）の把手を貼付し，その中央部に縦方向に孔を穿っている。ただし，器面の観察からは，この孔に紐を通すような痕跡や磨耗痕は認められない。復元口径19.0cm。289は所謂窓付きの突起を備えた鉢形土器で，290も同様に窓付きの透かしを山形突起に持つ。さらに290の突起の頂部は煙突状に空洞に穿たれ，これらと内外面の4方向の縦位の穿孔とも空洞で連結する。なお，突起の平坦面には沈線を刻む。肩部には蒲鉾状の隆起線を1条巡らし，口縁部との間に施文帯を設け，ヘラ削り手法により鋸歯状文を明瞭に削り出す。復元口径23.9cm。291は極めて硬質に焼成仕上げられ，4㎜程の薄い器壁を成す鉢形土器である。口縁部には鰭状突起が付けられ，突起の中央部の平坦面は入念にナデられ，端部の肥厚部はヘラ状工

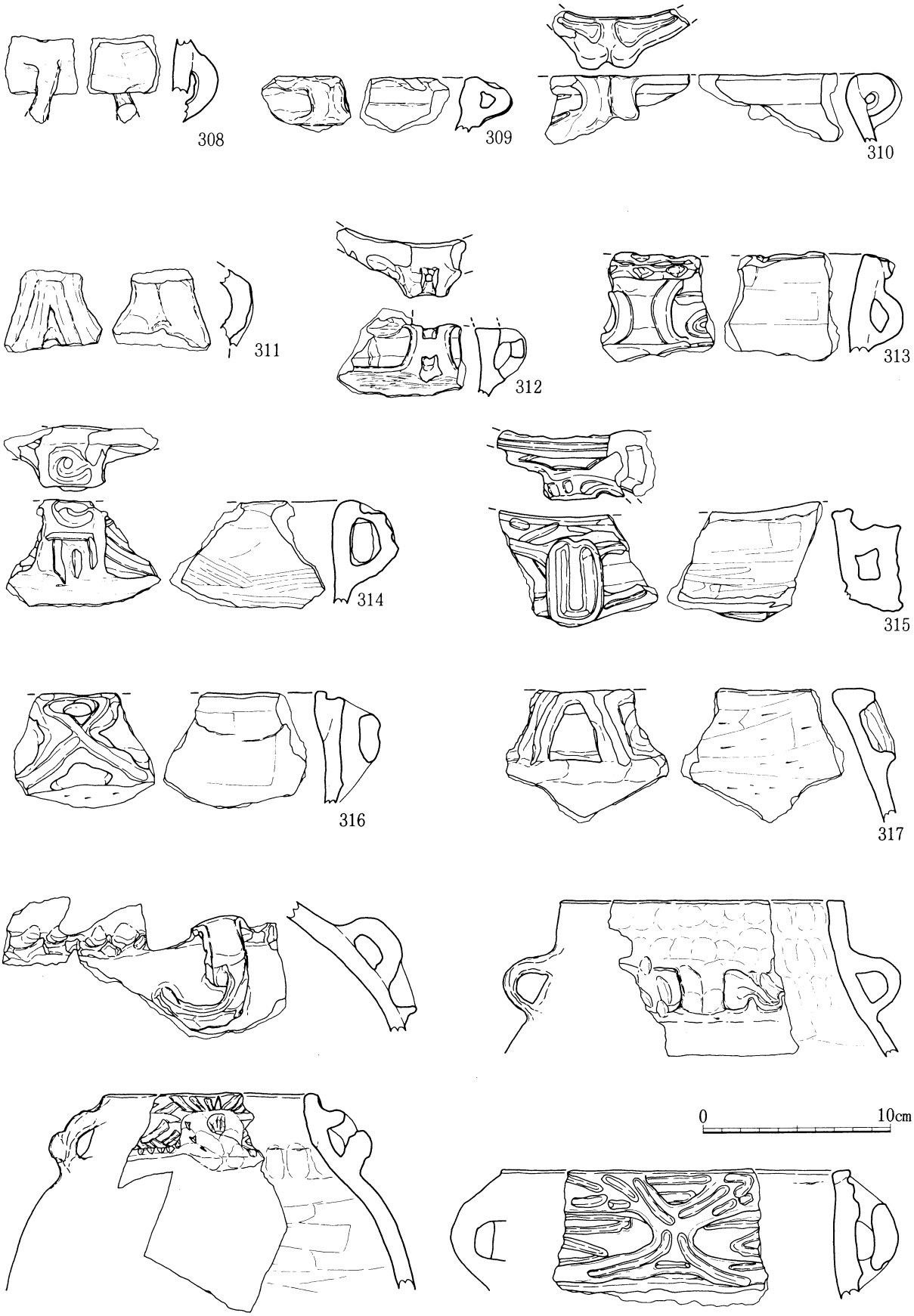


第29図　南福寺式土器G類

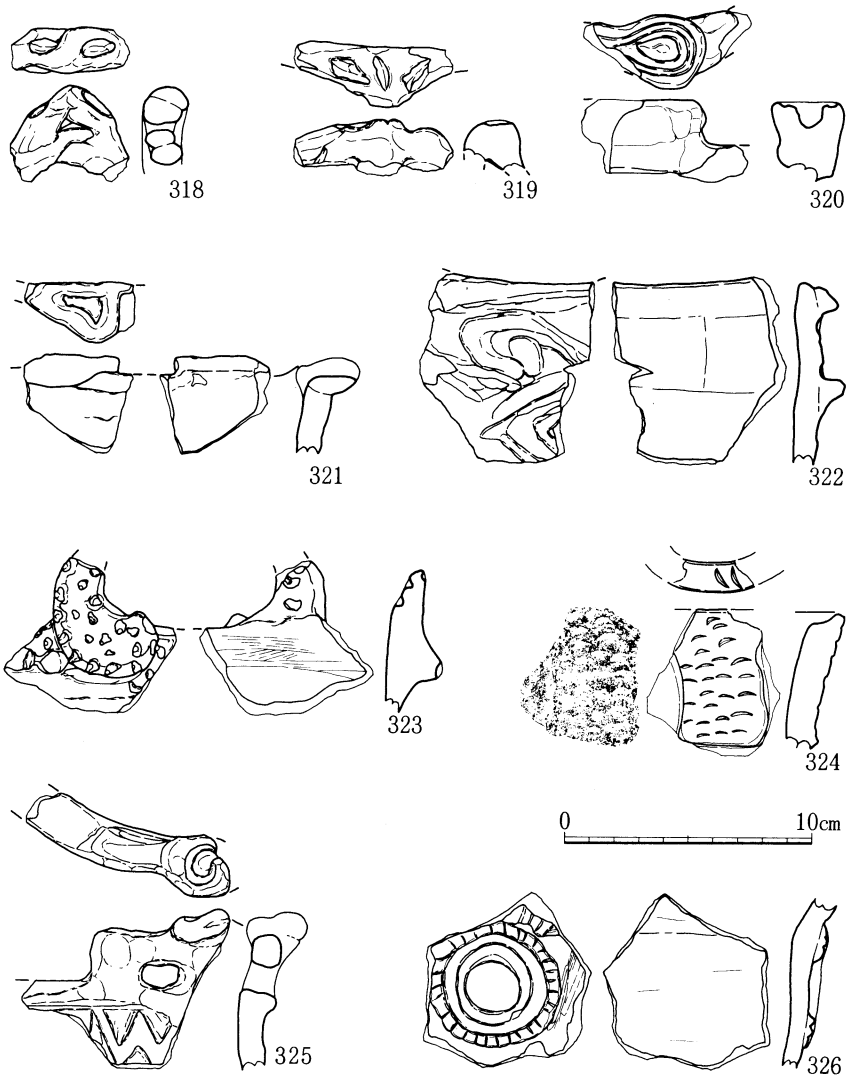
具でX字状に連続して細かく刻まれる。なお，口縁端部は無文の肥厚帯が形成される。胎土への白色粒子混入が特徴的で，また雲母も含まれ濃い褐色の色調を強調している。復元口径は27.3cm。292は残念ながら剥落しているが，口縁部の渦巻状（蛸足様）貼り付けと直結した窓付きの口縁部突起を備えていた可能性の高い鉢形土器である。口唇部は広めの平坦面を成し，端部は丸みを成してはみ出す。施文は，ヘラ状工具の凹線文により区画された肥厚部分に刺突文で行い，丸く先端部の鋭い刺突具で規則性のある連続施文が認められる。器面調整は，外面は丁寧なナデ仕上げが見られるが，内面は板ナデを行っているが輪積の痕跡が観察できる状態である。復元口径27.8cm。

239・294・295の3点については口縁部の傾きを元に作図しさらに，口径と胴部幅の関係から壺形土器と判断したが，大いに疑問も残される。293はヘラ削り文，294は無文，295は沈線文と刺突文で施文する。

296の口径は15.9cm，現資料での胴部最大幅は30.3cm程である。頸部には断面三角形の指頭刻み目隆帯文が2条巡り，頸部付近の器壁が厚めに造り出される。297は作図復元で肩部付近と想定したもので，橋状把手を備えている。把手上端は指頭の摘み出

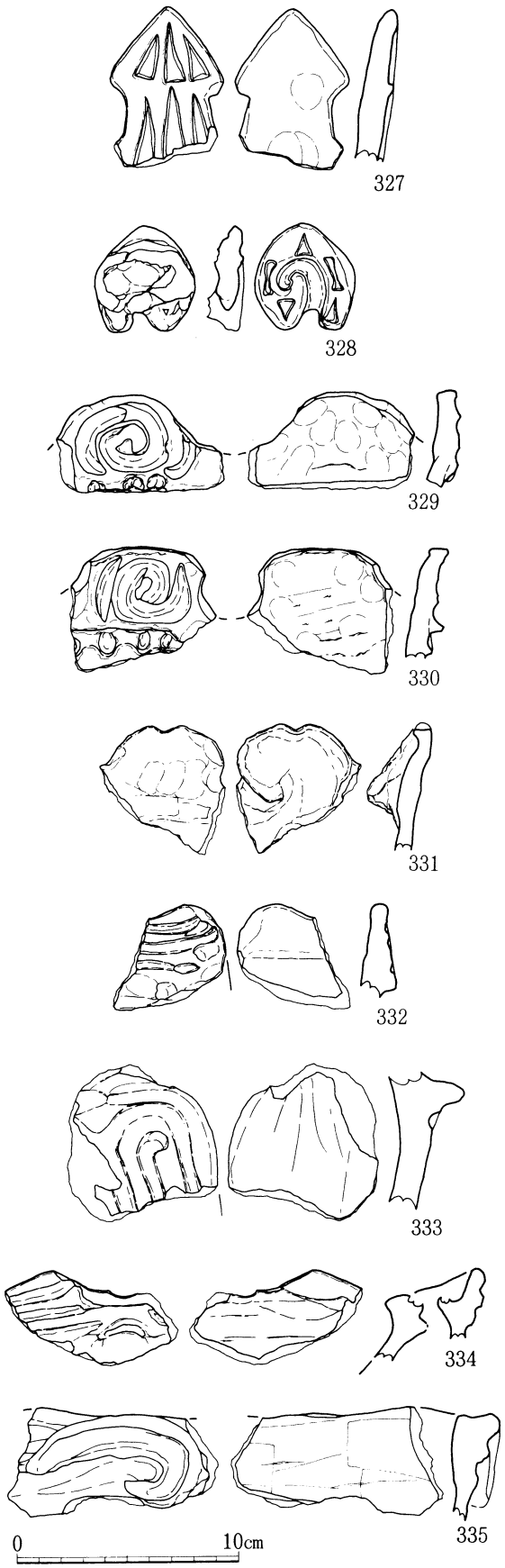


第30図　南福寺式土器Ｇ類（把手）



第31図　南福寺式土器Ｇ類（特殊飾り）

挿図	番号	器　種	部　位	胎　　土	調　整	備　　考
	326	不明	肩部	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	粒帯の貼り付けは同心円状。粒帯上は連続刻み。 鈍い淡赤褐色。焼成極めて堅緻。
	327	不明 土製品？		砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：丁寧な板ナデ	不明。三角文は削り出し文。赤色顔料塗彩。明赤褐色。 焼成極めて堅緻。土製品？
	328	不明	突起部？	細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：丁寧なナデ 内：ナデ	突起部？。渦巻・三角文等は削り出し文。赤色顔料塗彩。明赤色。
	329	鉢形土器？	口縁部 突起部	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	台形状突起に指頭渦巻文。下端は指頭凹点。焼成極めて堅緻。器面ザラザラ。赤褐色。
	330	鉢形土器？	口縁部 直行	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	台形状突起に指頭渦巻文。下位施文は指頭凹点。 焼成極めて堅緻。器面ザラザラ。赤褐色。
	331	鉢形土器？ 良質	口縁部	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	台形（耳状）状突起。焼成極めて堅緻。器面ザラザラ。 鈍い赤褐色。
	332	不明	口縁部	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：ナデ	台形状突起。浅い沈線文と指頭凹点焼成極めて堅緻。 鈍い灰褐色。
	333	不明	口縁部	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：板ナデ	台形（耳状）状突起。指頭凹・線凹点。焼成極めて堅緻。器面ザラザラ。灰褐色。
	334	鉢形土器？ 特殊土器？	口縁部	砂粒・細砂粒を多く含む、長石・石英・雲母 白色粒目立つ	外：ナデ 内：丁寧なナデ	特殊二重口縁部？。並行沈線文。粘土瘤貼り付け。 焼成極めて堅緻。鈍い赤褐色。
	335	鉢形土器？	口縁部	砂粒を多く含む、長石・石英 白色粒目立つ	外：ナデ 内：板ナデ	把手状貼り付け。指頭凹線文。鈍い赤褐色。焼成極めて堅緻。器面ザラザラ。



第32図　南福寺式土器Ｇ類（特殊突起部）

しと指押さえによる半月状（耳様）隆帯突起と繋ぐ。元来赤褐色の器面を呈しているが，把手から下位は黒色の被膜で覆われる。298 橋状把手を持つ壺形土器で，口唇部は端正な平坦面を成す。他と比較してより微細な砂粒を含んだ胎土が使用され，器面調整も指頭で丁寧に押さえたりナデて仕上げている。橋状把手は若干肥厚し，指頭の摘み出しや押圧により波状の文様帯を跨ぐ。復元口径は15.3cmで，最高４カ所の把手装着が想定できる。299 粒子の粗い砂粒を大量に含む胎土を用いたもので，器面はざらつき，重量もある。復元口径18.8cmの口縁端部の肥厚帯から，施文帯を跨ぐ様に貼り付けたＸ字状橋把手で，把手面を含め全てヘラ状工具を用いた短沈線で施文される。300 の胎土は先の 298 とよく類似し，きめが細かい。肥厚した口縁端部と施文帯とを区画する，断面蒲鉾状の隆帯とを跨ぐ橋状把手を持つ壺形土器で，復元口径は 11.5cmである。把手は螺旋状に構成され，中央部は窓抜きに開放される。頸部の文様はく字状文で，隆帯はヘラ状工具で浅く刻まれる。胴部上位がベルト状に，黒色に残される。

その他の把手及び突起物（第29・30・31・32図）

特に29図の 301～307 は，人面（顔面）様を呈しているものを記載している。

301 下半部が欠損していると判断した資料で，鶏頭状の頭部とその頭部に直行する縦位の粘土板の貼り付けを持つ。また，この粘土板には横方向の穿孔が加えられる。表面は側縁部に添い，裏面はＶ字状のヘラ削りがなされ，人面風な仕上がりを見せる。302 は天地左右不明で，穿孔・切り抜きによる透かし・三角形ヘラ削り文を持つ資料である。以上の２点については，鉢形土器等の付属部か単独土製品の一部分か明らかにできない。

303 把手ないしは突起部と判断されるもので，上面には波状あるいは窓付き状の痕跡を残す。裏面上位の肥厚帯にヘラ削り文，正面は深く鋭くヘラ削りされた人面風の文様構成が見られる。多量の滑石を含んだ胎土は，光沢を発しながら鮮やかで濃い桃色を呈している。

304　は鉢形土器の口縁部で台形状突起に窓付きの三角形突起を重ね、鉢形土器の屈曲部に小さな橋状把手を無文帯を跨ぐように貼り付けている。施文はヘラ状工具による深い短沈線で明瞭な仕上がりが認められ，突起部や把手と旨く調和し人面風な構成を演出している。内外面共に丁寧なナデの調整がなされ，焼成も良く光沢のある器面を呈している。

305　2本の角状突起とX線橋状把手で人面風な構成が見られる資料で，多量の滑石粒を混入し硬質で光沢のある器面を保っている。

306　口縁部が内弯する鉢形土器で，口縁部上位の施文帯を跨ぐようにX状橋状把手を貼り付けている。口唇部上位と胴部の一部には削り出しによる施文が見られる。またX状橋状把手の頂部はヘラ状工具で部分的に浅く刻まれる。口縁部上位の施文は把手を挟んで右側に楕円形，左側に逆く字状の沈線文が描かれ，この資料も一見人面風な構成を見ることができる。丁寧なナデを主体とした器面調整がなされ，器壁自体は薄いが焼成も良く入念に仕上げた様子が見て取れる。

307　内弯する鉢形土器の口縁部と判断した資料で，施文帯と口縁部を跨ぐX状橋状把手に更に小把手を重ね，失われているが角状突起物を備えていたと思われる。橋状把手は沈線文やヘラ状工具で連続して刻み，重ねられた立体的構成に装飾性を高める演出を行なっている。この資料に関しては，やや粒子の粗い胎土を用いており重量のある装飾部に比べ，機能的補充がやや不足している感がある。そのため早計であるが，実用性よりむしろ非実用性が感じられる。

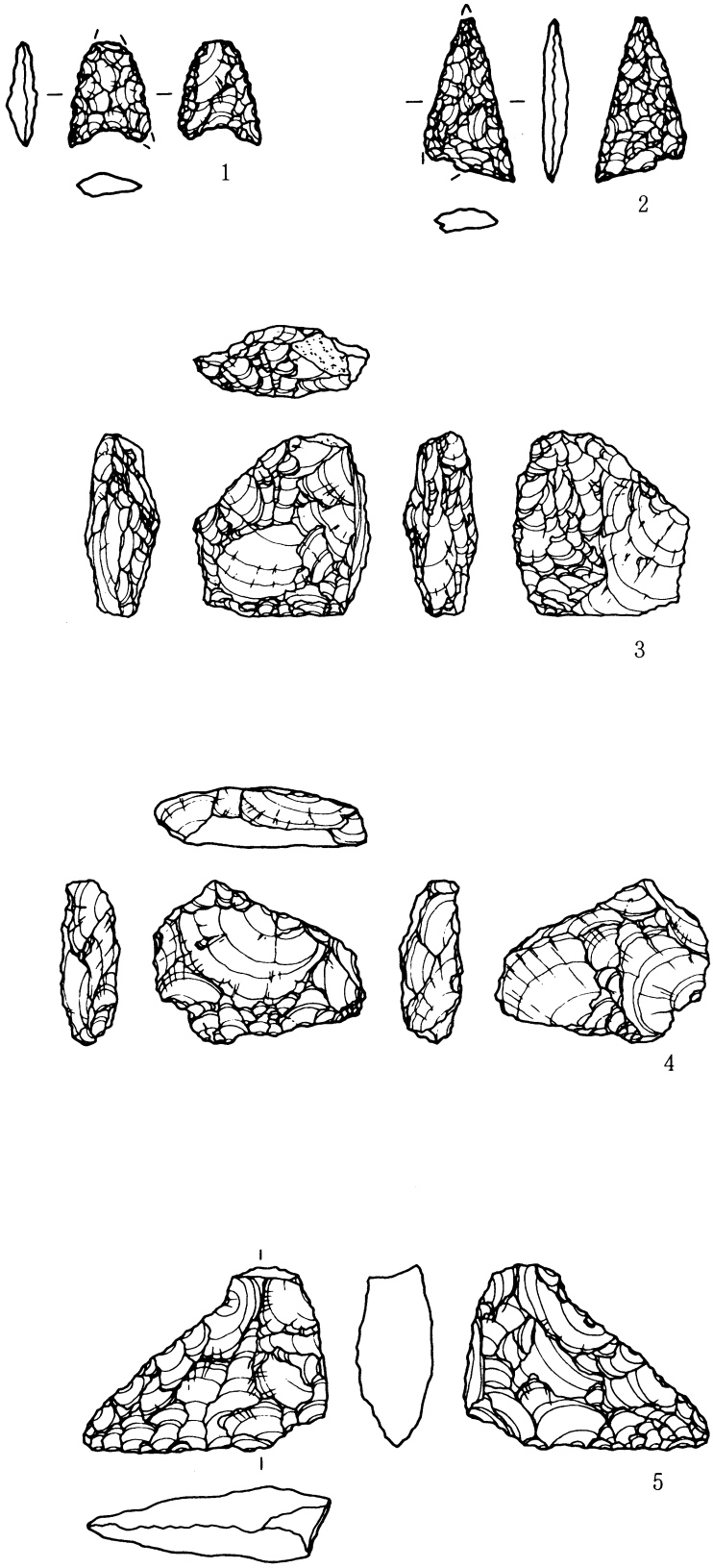
第30図は把手部の資料を図示したもので，資料も限定されることから傾き等については大いに疑問が残る。308の棒状の小型の把手や316のX状把手のものまで種々の創意を見ることができる。312の橋状把手は上下2ヵ所を穿ち赤色顔料を塗彩したもので，鮮やかな赤色の色調を呈している。

第31図は，把手部以外と判断した口縁部付近の突起や隆帯等の貼り付けに施文を重ねた資料を示している。323はの字状の突起の両面とその周辺部に連続して刺突文を施し，324は帯状にやや肥厚した面に爪形状の刺突が残される。326は円形に貼り付けた隆帯上を鋭いヘラ状工具で連続して刻んでいる。

327　は赤色顔料が塗彩された赤色の鮮やかな色調を呈す資料で，三角形の削り出し文で構成されている。突起状の一部なのかその部位は明らかにできないが，単独品の可能性も含めて興味深い資料である。328も327同様に赤色塗彩されたもので，その残存状況から突起部の一部と見られる。また渦巻状の表面は三角形の削り出し文を重鎮している。これらは丁寧に造り出されたと見られ，丁寧な仕上げに加え，328の胎土は他と異なり特にきめ細かい物を用いている。

329・330　の台形状突起は指頭で渦巻文を描き，下位は指頭による押点を加える。335つ字状の粘土紐を荒っぽく貼り付けている。第32図で示した資料は，いずれもその部位および傾き等については大いに疑問が残される。

第2節　石　器



第33図　石器（石鏃・石匙）

石鏃（第33図）

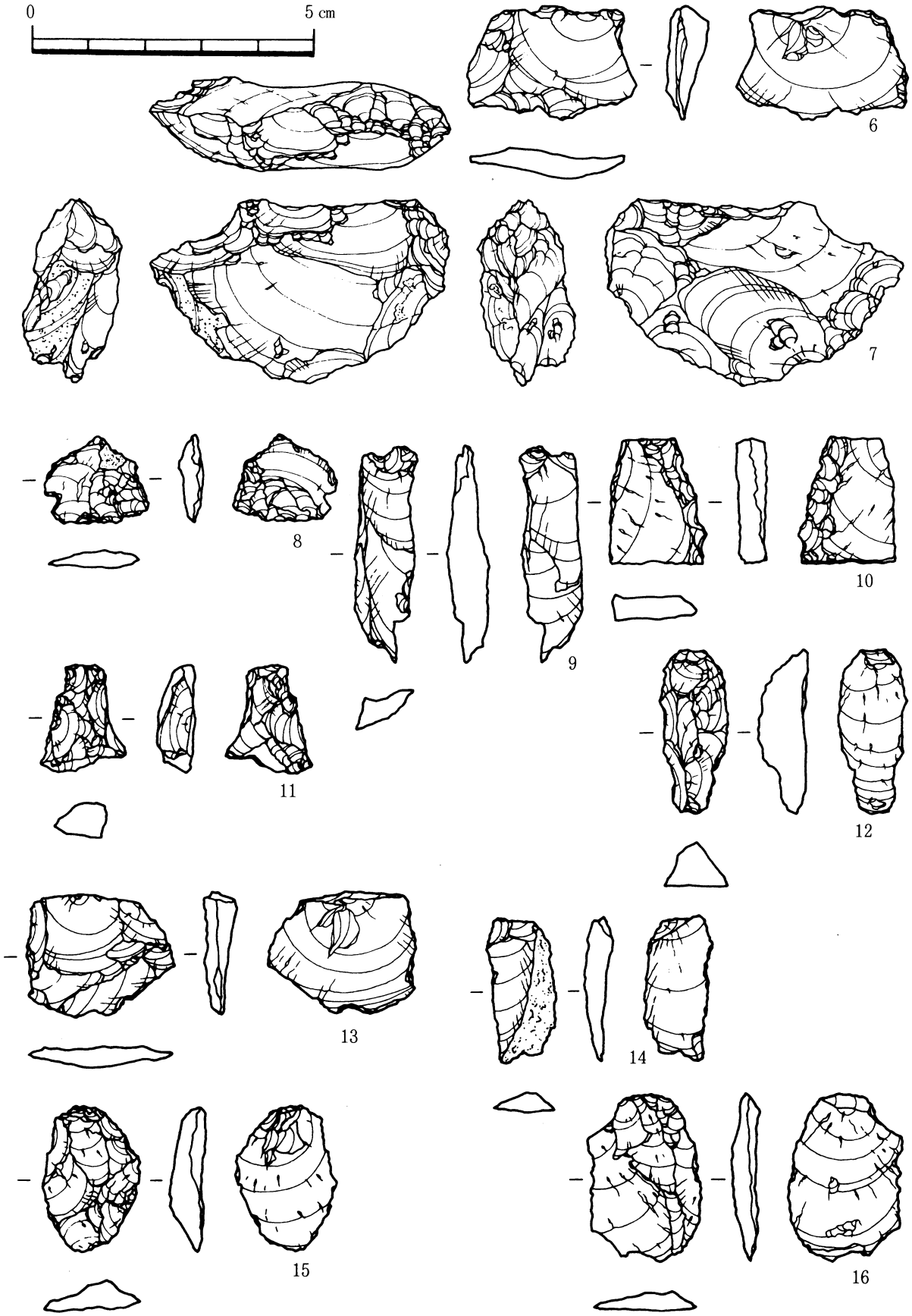
1，乳褐色に発色した石英質変性岩で硬度は高い。先端部と脚の一部を欠損，背面に素材剥片の剥離面が残る。2，先端部と脚の一部が欠損。黒灰色の良質な県外産の黒曜石を用いる。二等辺三角形状の長身で，基部の抉りは浅い。整形剥離は丁寧に行われ，体部全体に及んでいる。

石匙（第33図）

5，黒色の硬質頁岩（流紋岩？）を用い，頭部と右側縁部を欠く。直刃に近い刃部を成し断面は分厚いレンズ形を成し，正面の整形剥離は前面に及び，裏面には素材剥片の剥離面が一部残る。

スクレーパー（削器）（第33図）

4，不定形の剥片を素材にしたもので，裏面方向からの刃部形成が認められる。気泡が多く含まれる大口市日東産の黒曜石を用いている。7，残核を再利用したもので，ほぼ全周を作業面としている。打面部では稜線に沿って正面からの刃部形成，下縁部では主に背面方向からの刃部形成を認められる。用いた黒曜石は樋脇町上牛鼻原産地から持ち込まれている。10，欠損品と思われるが，裏面から表面に急角度の刃部形成が認められる。裏面側の剥離は先行する剥離で，その角度は浅い。使用黒曜石は日東産である。11も同様の破片で，裏面方向からの急角度の刃部形成が認められる。黒曜石は漆黒で気



第34図　石器（使用痕のある剥片他）

泡等の不純物を含まない良質のもので県外産の可能性が高い。

加工痕のある剥片（第33図）

3は上面の一部に平坦な礫面，下面にも狭い平坦な剥離面を持つもので，器種の同程は明瞭ではないが右側面に裁断面を持つことから楔形石器の可能性もある。裁断面の観察から判断すると4も楔形石器に近いのかもしれない。この石器を楔形石器の範疇でとらえた場合先に記した4も同種の可能性がある。

使用痕のある剥片（第34図）

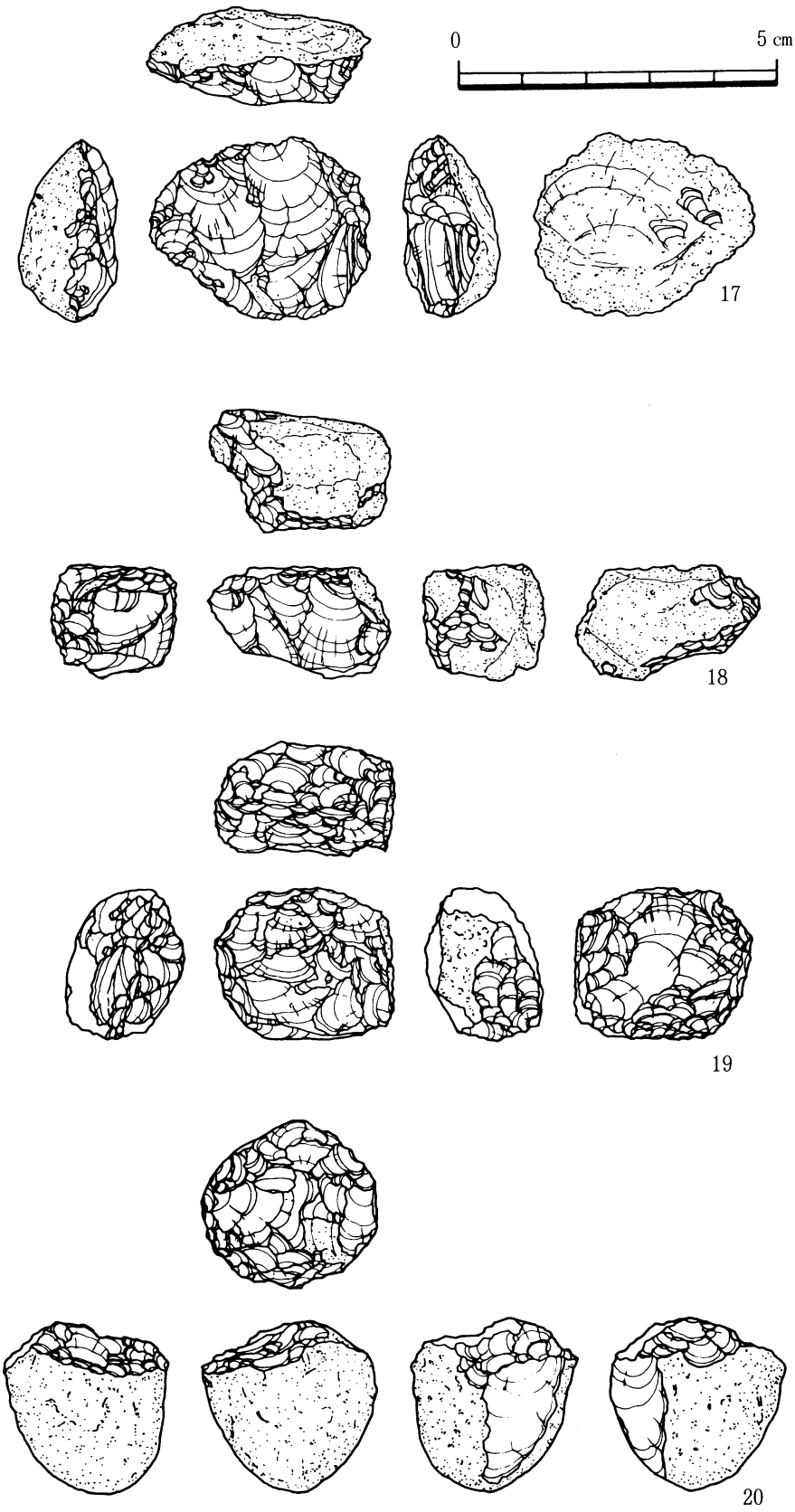
6，打面転移を伴った剥片剥離から取り出された剥片で，平坦な打面を持つ剥片の左側縁部の裏面側に微細な剥離痕が残される。県外産の黒灰色で良質な黒曜石を用いている。8，ほぼ全周に微細な剥離痕が見られる。なお，微細な剥離痕に先行して両面の一部に平坦な調整剥離が認められるが目的は明らかでない。良質な黒曜石で，県外産と思われる。13，剥片剥離工程と剥片の形状が6に類似したもので，左側縁部と下縁部に刃潰れ状の剥離痕が認められる。15，求心状に剥離された剥片で，打面調整を伴う可能性がある。右側縁部を中心に使用痕と見られ微細な剥離が認められる。気泡等の不純物を多く含む日東産の黒曜石。16の黒曜石は赤褐色を呈すもので，出水市や大口市等の遺跡で散見されるが産地の特定はできていない。使用の痕跡は，右側縁部と下縁部に刃潰れ状の欠損が残る。

剥片（第34･39･43･44図）

9・12・14いずれも黒曜石を使用し，その内14は漆黒で良質の県外である。

9・14は縦長を意識して取り出された剥片と見られ，それぞれ側縁部に刃潰れ状の微細な剥離痕が見られるが，調査時のダメージである。

35・48・50・52・53・54・55・56・57・58・59の石材は全て泥岩である。泥岩製の剥片は，下記に記載した岩泥製の石核から剥出されたものと判断される。48・56・57では打面転移，53・54では剥片の長さが底面で制限されていることから例えば37等の石核から取り出されると推定される。なお，右側縁部に正面からの加撃痕と下縁部に微細な剥離痕が見られることから使用された可能性がある。59は剥片の頂部に頭部調整が見られることから連続した横長剥片剥出が行われたことが確認できる。また，打面に礫皮面をそのまま残すもの（48・58・59）があり，石核の形態が推し量れる。35も打面転移剥片剥離が認められるもので，頭部と端部が分割されている。

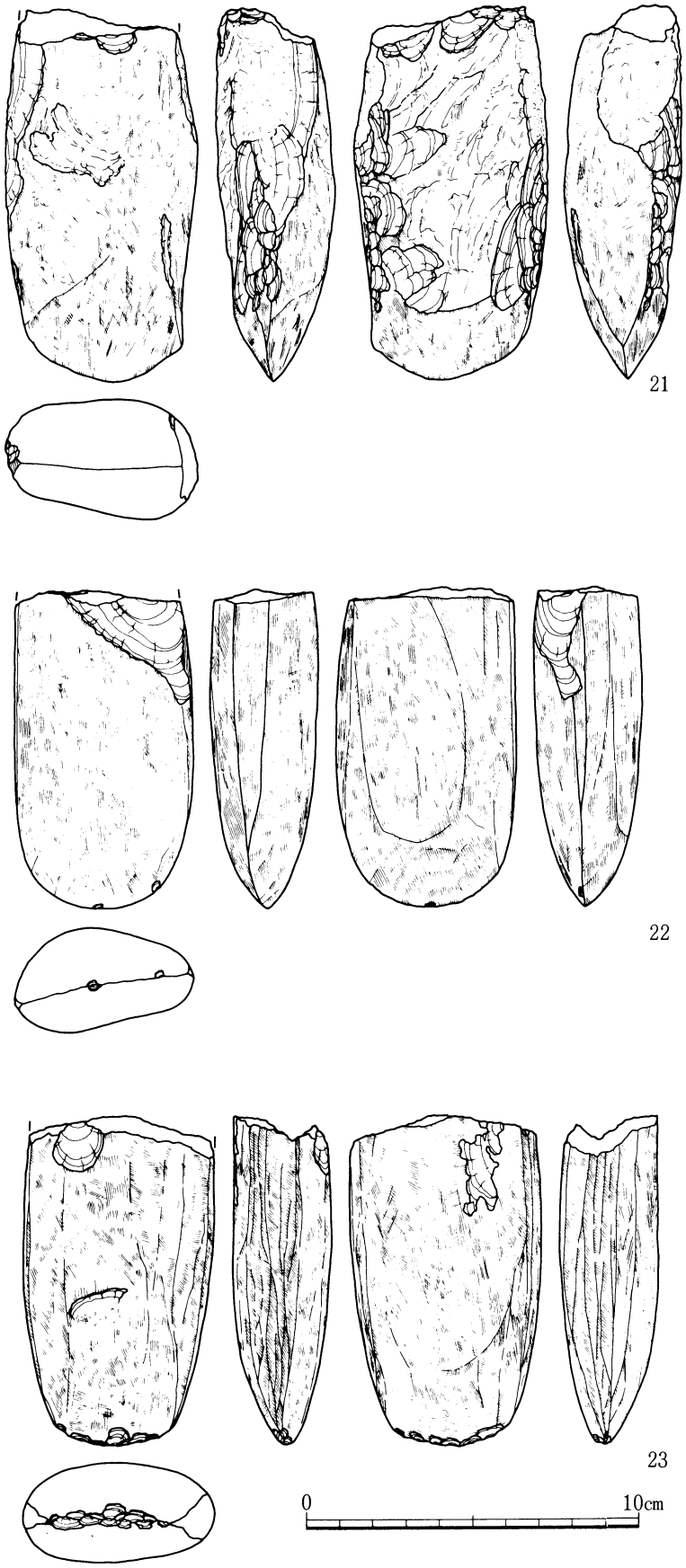


第35図　石器（石核）

石核

17・18・19・20の石核で，石鏃等の一次素材となる小剥片を目的としたものと思われる。しかし，20の剥離面を観察すると剥片小さく不整形であり，石鏃素材としては若干疑問である。使用石材はいずれも黒曜石である。

17，円礫素材の石核で素材面の礫面をそのまま打面にし，求心状に剥片剥出したと判断され，かなり作業の進行したものと判断される。日東産。18，サイコロ状の小角礫を用い，礫面を打面に，剥片剥離は打面転移をくり返している。使用黒曜石は県外産か。19，18と同様の素材選択で剥片剥離は打面転移をくり返す。打面は上面と下面を中心に行い正面と裏面に作業が及ぶ。なお，左側縁部稜線に二次加工様の調整剥離状の小剥離が残されるがその目的は明らかでない。日東産黒曜石。20，円礫素材の石核で，素材礫の側縁部をそのまま打面とし，側縁部に沿い打点移動を行いな

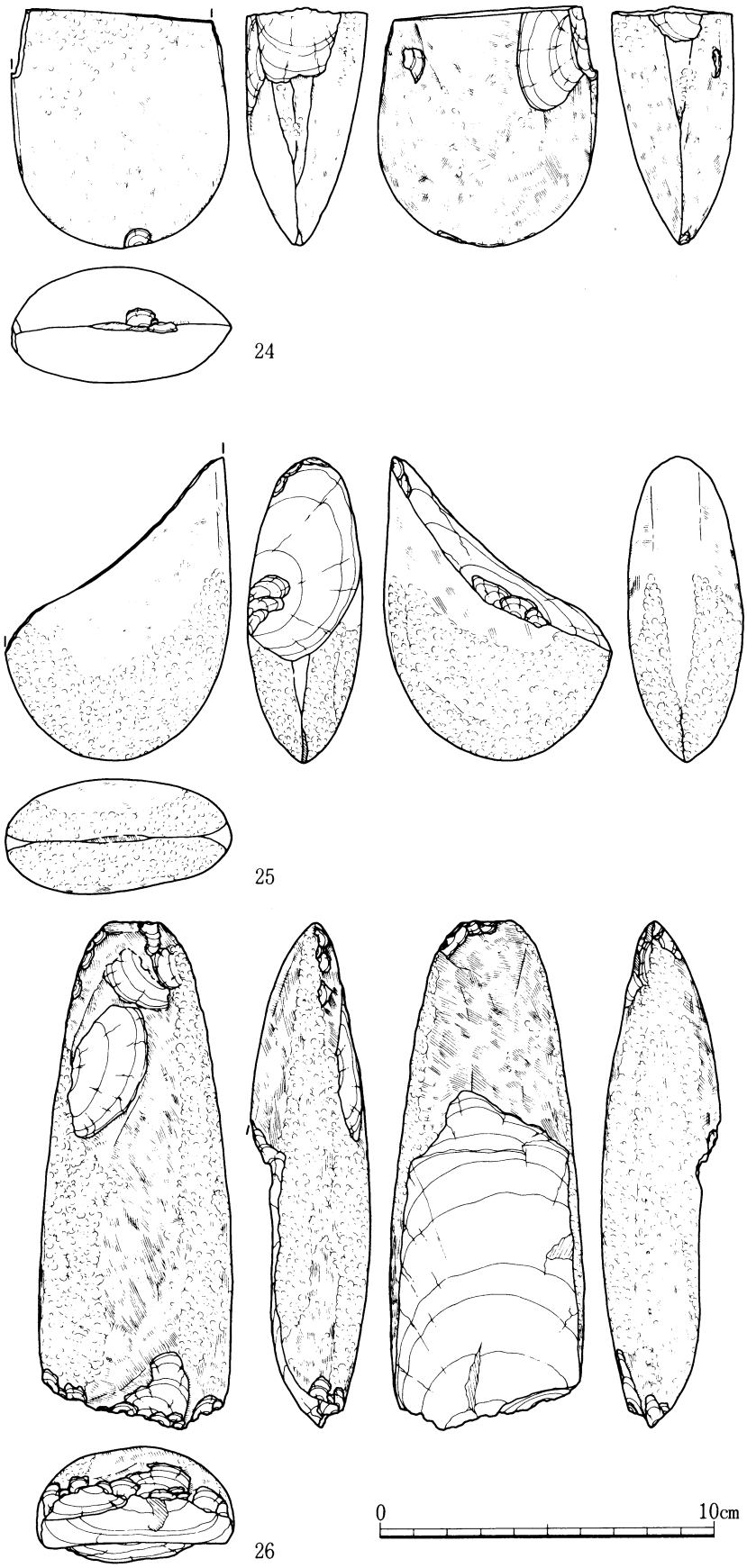


第36図　石器（磨製石斧）

がら求心状の剥離をくり返している。元来円礫を分割して剥離したと思われる。日東産黒曜石使用。使用目的明らかでないが，やや幅広の不定形の剥片を取り出している。37・43・51の3点の使用石材は岩泥で，風化はかなり進行している。37は偏平な角礫の側縁部を作業面にし，腹面から背面方向に剥出した後，背面に打点を移し連続した作業を行っている。43も同様な角礫のコーナー部を底面に，対峙する稜線部を打面に交互剥離で横長剥片を剥出している。51でも43と同様稜線部から交互に作業をくり返している。

磨製石斧（第36・37図）

21，蛇紋岩製で，緑色で鮮やかな光沢を保ち，重量がある。頭部は欠損するが，体部は敲打整形後入念に研磨で仕上げ，体部の正面は蒲鉾状を裏面は平坦面を呈している。刃部はさらに入念な研磨がなされ，鋭く尖り，切っ先の右側は外に跳ねる。両側面には結束部と思われる敲打面（磨耗に近い）が残される。22，硬質砂岩性で，背面方向からの加撃により頭部が欠損する。体部の研磨仕上げは入念に行い，刃部付近や側縁部の面取りも明瞭で，切っ先も鋭く残され，刃潰れ痕も認められる。23，砂岩（泥質）を用い，形状及び仕上げ方法は22とよく類似し，頭部欠損も同様のダメージが原因と判



第37図　石器（磨製石斧）

断できる。なお，刃部が体部より狭く仕上げられ，刃部には明瞭に刃潰れ痕が観察できる。

24，刃部付近に最大幅成す蛤刃状の形態で，入念な研磨仕上げの行われたことが観察できる。使用石材は硬質砂岩で，欠損面が平坦面を成すことから節理面での欠落と見られる。25，砂岩（砂泥質）製で，敲打整形の後研磨仕上げを行っているが，風化が進行している。欠落は欠損面に残る剥離観察で，裏面横方向からのダメージが原因である。

26，硬質砂岩製，敲打整形の後，刃部周辺と頂部を研磨で仕上げる。刃部方向からの加撃により破損していることから使用時点での欠損と推定できる。破損部稜線に残る剥離痕から，破損後も利用したと推測される。27，硬質砂岩製，主に敲打により仕上げられ，研磨は刃部の周辺に限られる。欠損面が平坦面を成すことから，24同様節理面での欠損とみられる。29，硬質砂岩製，敲打整形後，研磨で仕上げる。26同様使用時のダメージが原因で欠損したと見られる。

不明石器（第38図）

31，両面に礫皮面を持つ偏平礫の中央部の両側縁を剥離し，その剥離面の一部に磨耗（スレ）面を持つもので，下端部には刃潰れ状の剥離が認められる。使用石材は泥岩で，使用目的は明らかでない。

28・30，2点とも砂岩を使用したもので，両面は偏平に研磨で仕上げられている。さらに28の下端部は長辺と並行方向の研磨痕が残されている。これらのことから「刷きり石器」の可能性も考えられる。

打製石斧（第40・41・42・43図）

38，泥質砂岩を使用，厚手の剥片の両側縁部に整形剥離を繰り返し短冊状に仕上げたもので，両面の一部には剥片剥離時の剥離面が残される。欠損品。39，表面に礫皮面を残す厚手の剥片を用いたもので，胴部は両側縁部から大きく抉入し分銅状に仕上げている。図面作製上刃部で作図したが，天地逆の可能性も高い。欠損品。40，泥岩製で厚手の剥片を素材とし，裏面には剥片素材の剥離面を残す，整形剥離は粗く，41も泥岩製で素材剥離面に残る加撃は横方向である。欠損品。42，剥片素材は横長の可能性がある。短冊状の形状を成す欠損品。44，硬質砂岩製で，頭部と判断される。背面の平坦は礫皮面を活かし，周辺部は調整剥離をくり返すが体部は分厚く仕上げられる。45，裏面は剥離で整形し，表面と側縁部は敲打で仕上げている。硬質砂岩製。46・47の2点とも棒状の礫を素材としたもので，46は敲打整形の可能性があるが風化が激しく観察が困難である。2点とも泥岩を使用している。49は泥岩の剥片を素材に周辺部の剥離整形で仕上げる。

礫器（第41図）

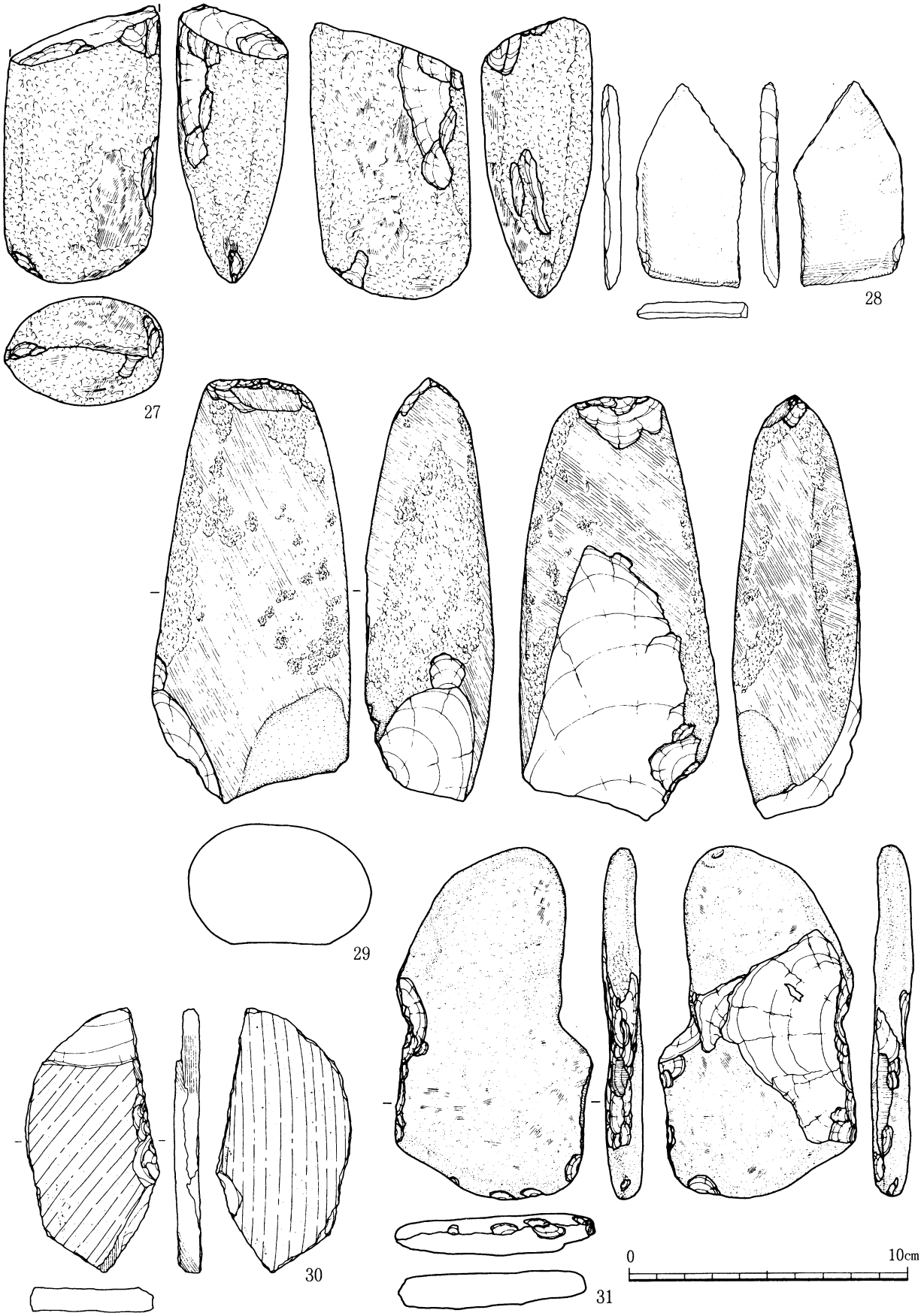
43，下縁部に礫皮面を残すもので，当初は周辺部から交互に剥離する石核として機能した可能性が高い。打面の頂部に微細な剥離が残ることから礫器と認定した。

磨石・敲石（第45・46図）

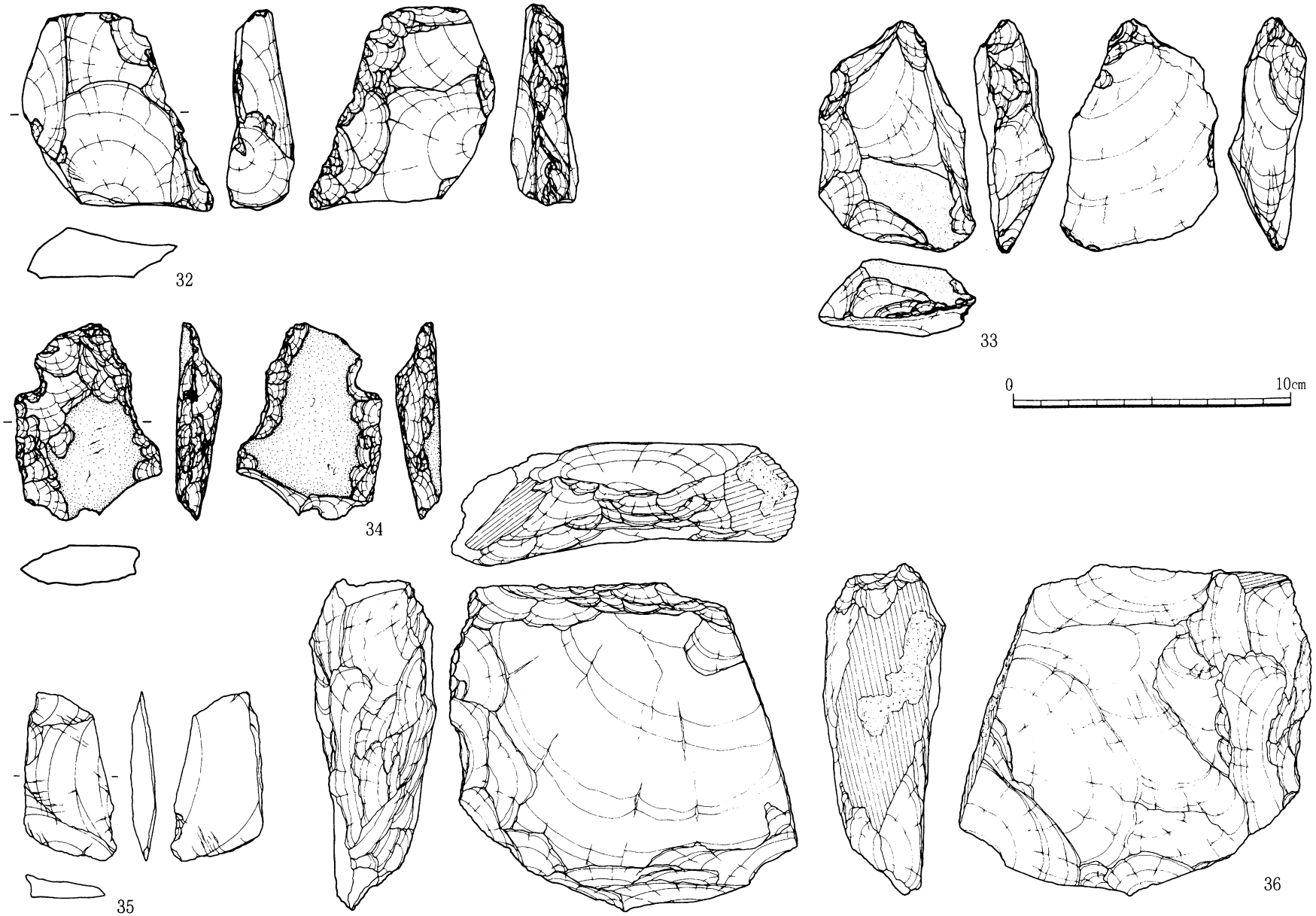
これらは石器の形状により，棒状（60・61）・円形（62・63・64・65・66）・楕円形（67・69・70・72）・臼形（71）に区分できる。なお，棒状と円形及び臼形の石器は基本的に敲打主体の機能が，楕円形の石器は磨石主体の機能が想定できる。棒状の60は硬質砂岩を用いたもので，両端部の一部に敲打痕が残る。敲打の痕跡より石器製作時のハンマー・ストーンと認定できる。61は敲打整形の磨製石斧の頭部片が転用されたものである。62・63・64は敲打痕が石器縁辺の全周に，65・66は全域に認められる。使用石材は62・64・65・66は砂岩，63は花崗岩である。71も花崗岩を用い，全域に敲打痕が残る。楕円形状の5点のほぼ全周に平滑な敲打面が，表裏の平坦面には磨耗面が残る。67・70は砂岩，68・69は安山岩，72では泥岩を使用している。

石皿（第47図）

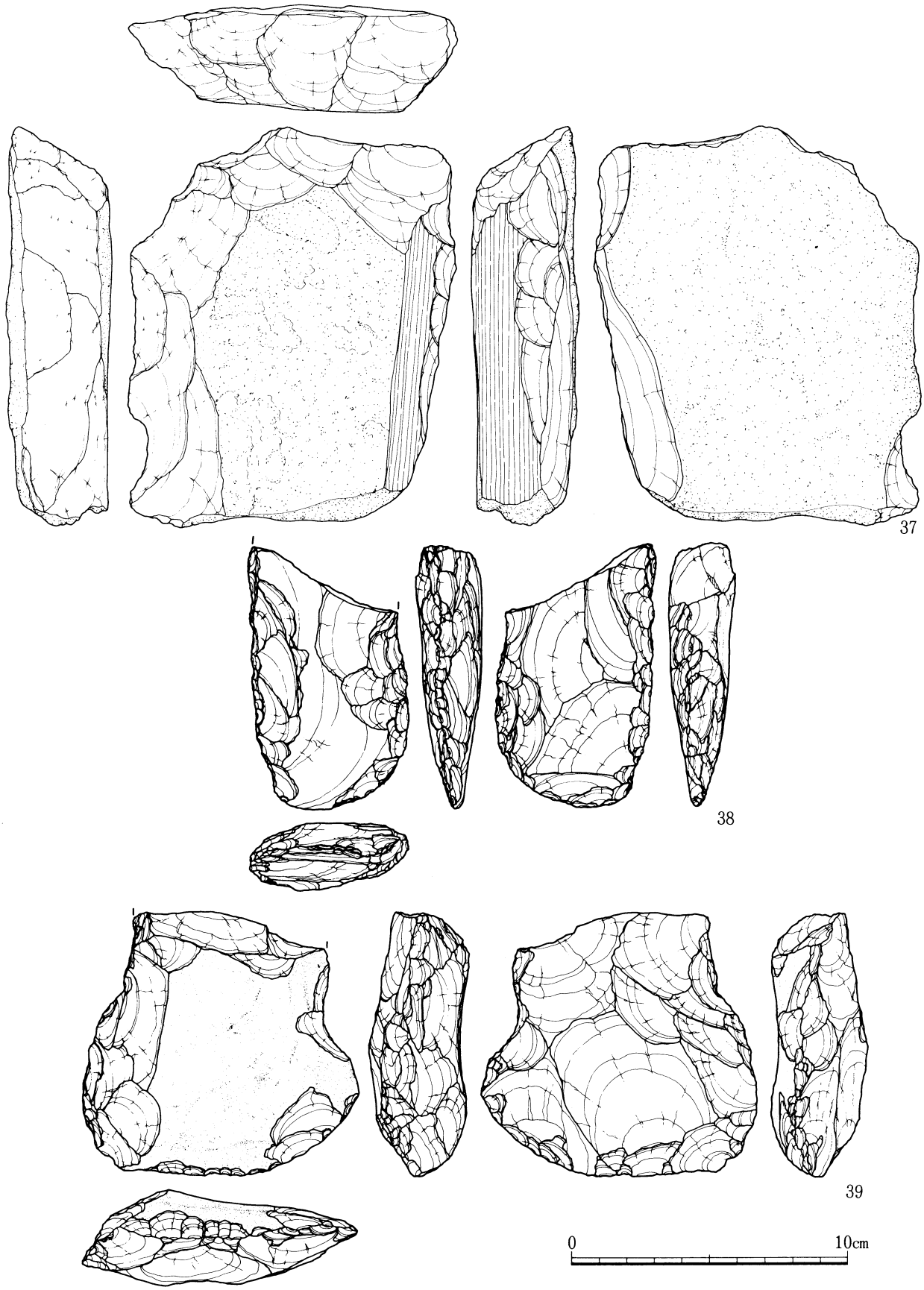
5点とも花崗岩を，その石材に用いている。いずれも敲打整形により仕上げられたもので，裏面は船形状に，使用面は緩やかに皿状に窪み，敲打痕も認められる。



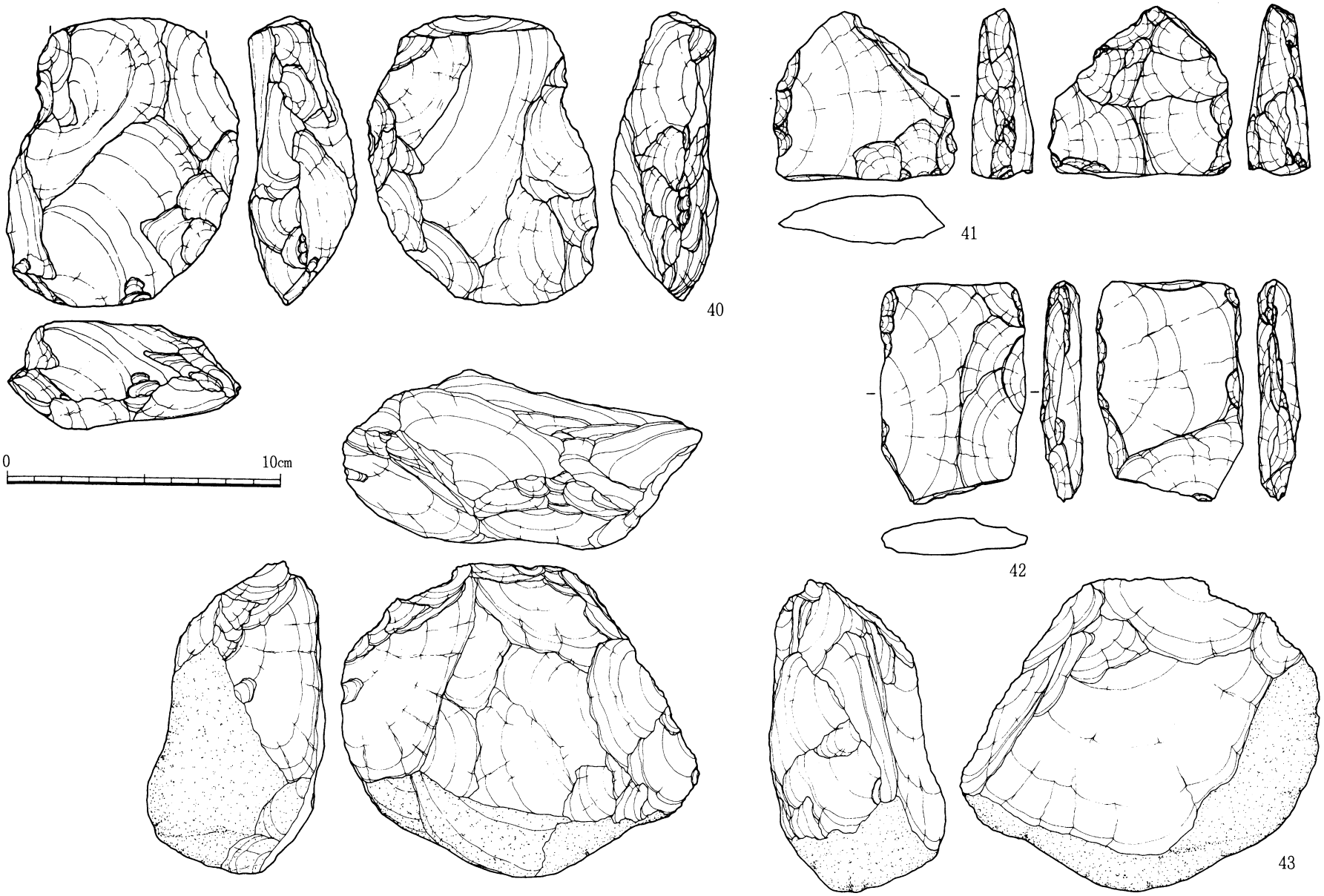
第38図　石器（磨製石斧他）



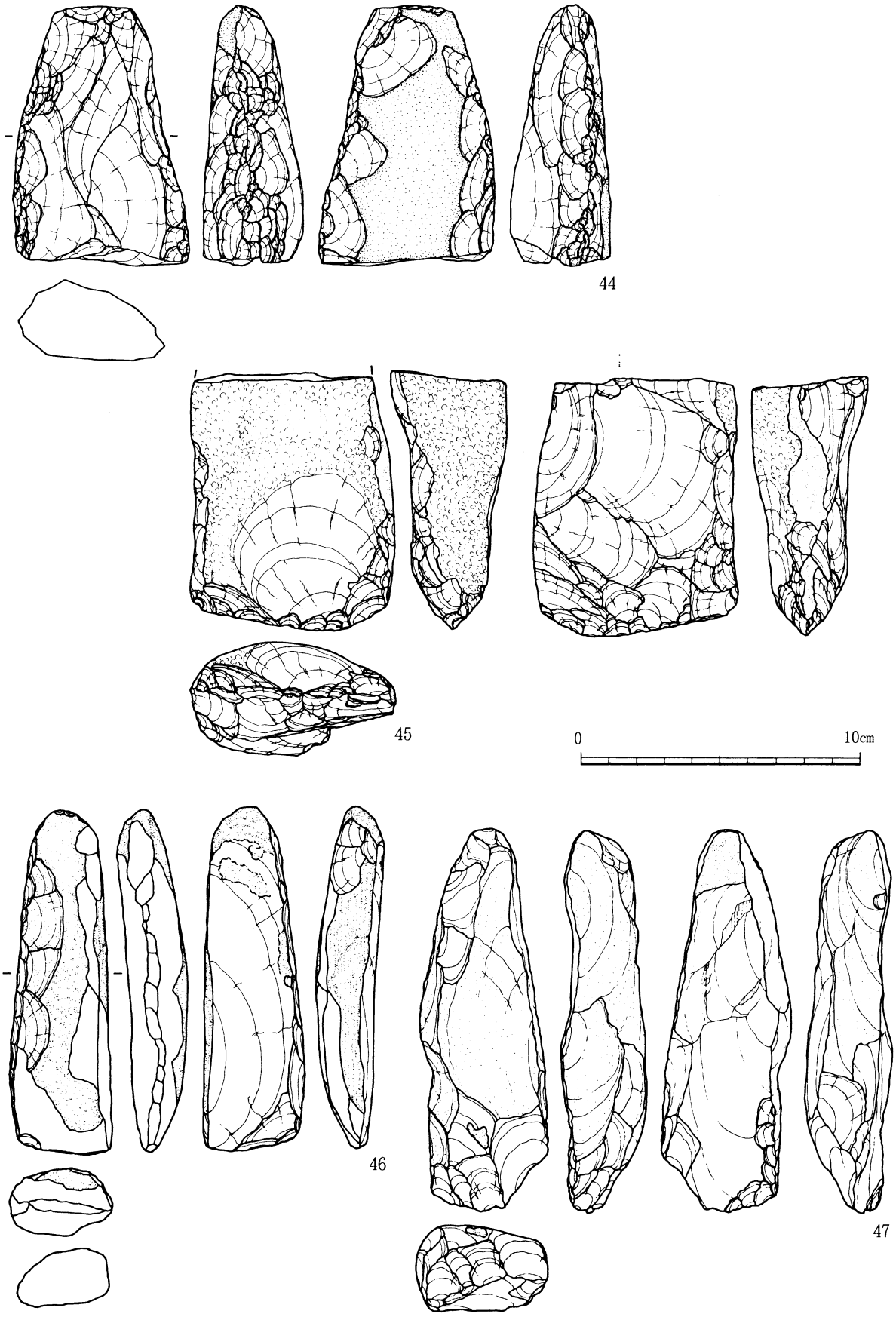
第39図　石器（打製石斧他）



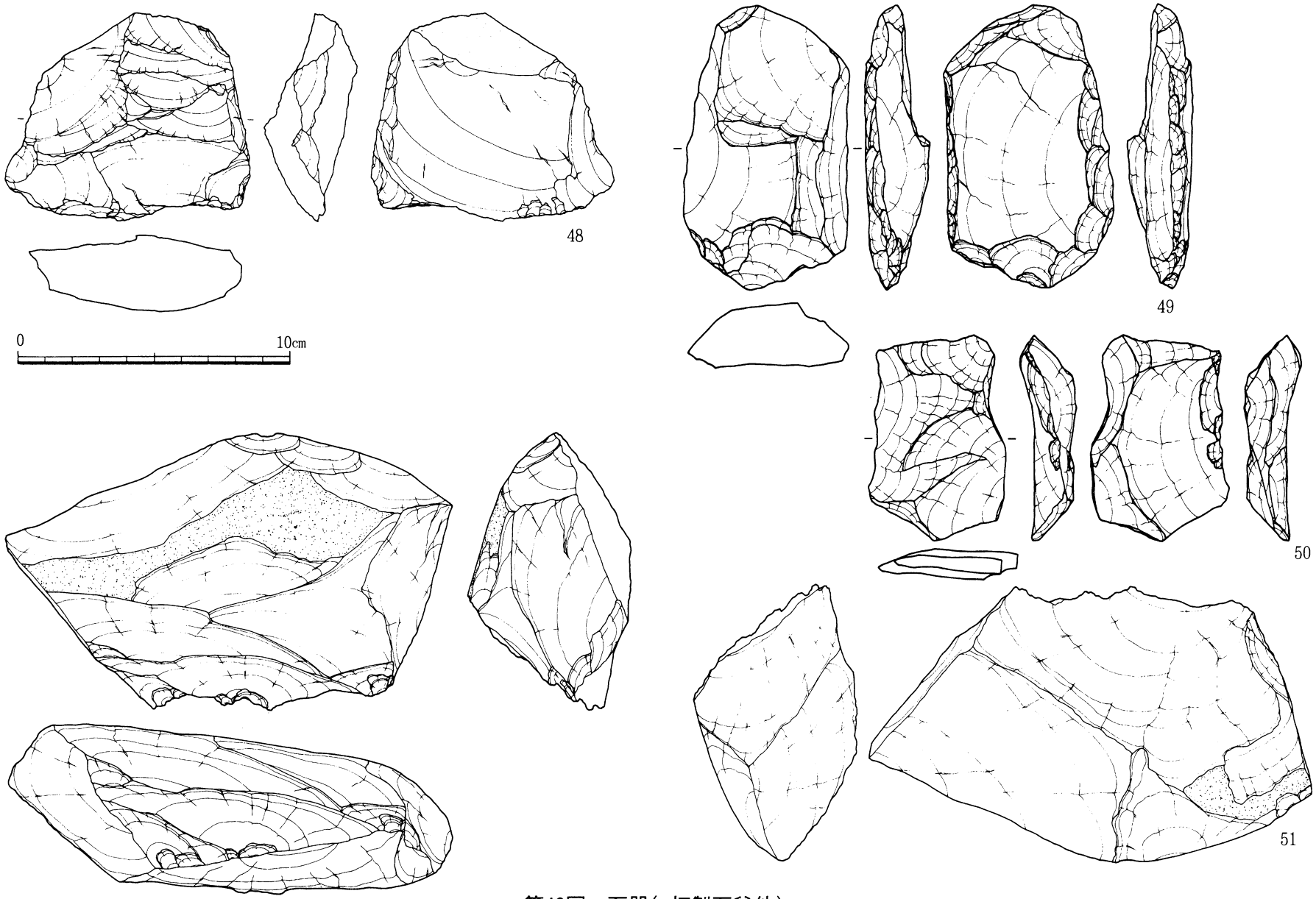
第40図　石器（打製石斧他）



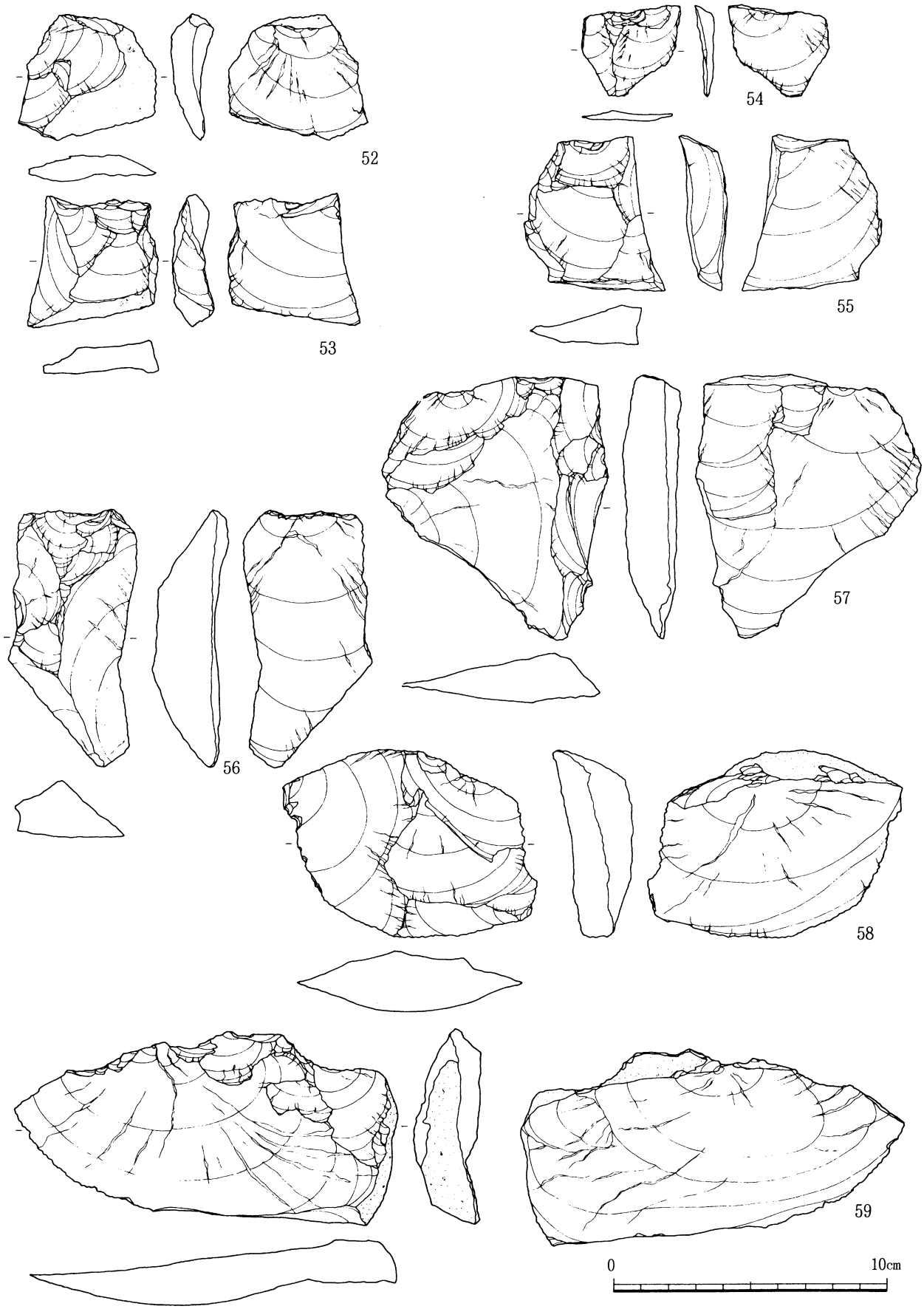
第41図　石器（打製石斧他）



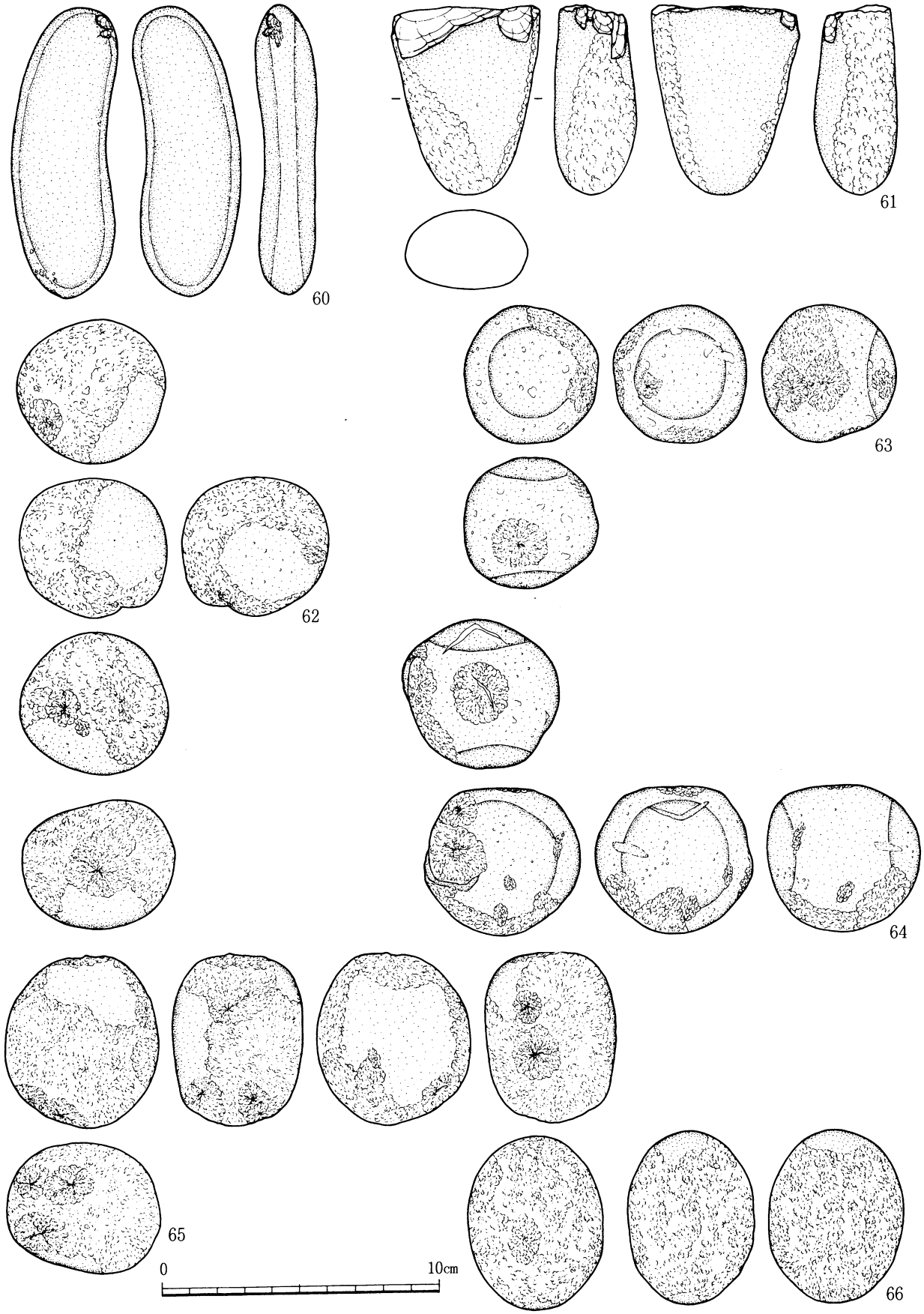
第42図　石器（打製石斧他）



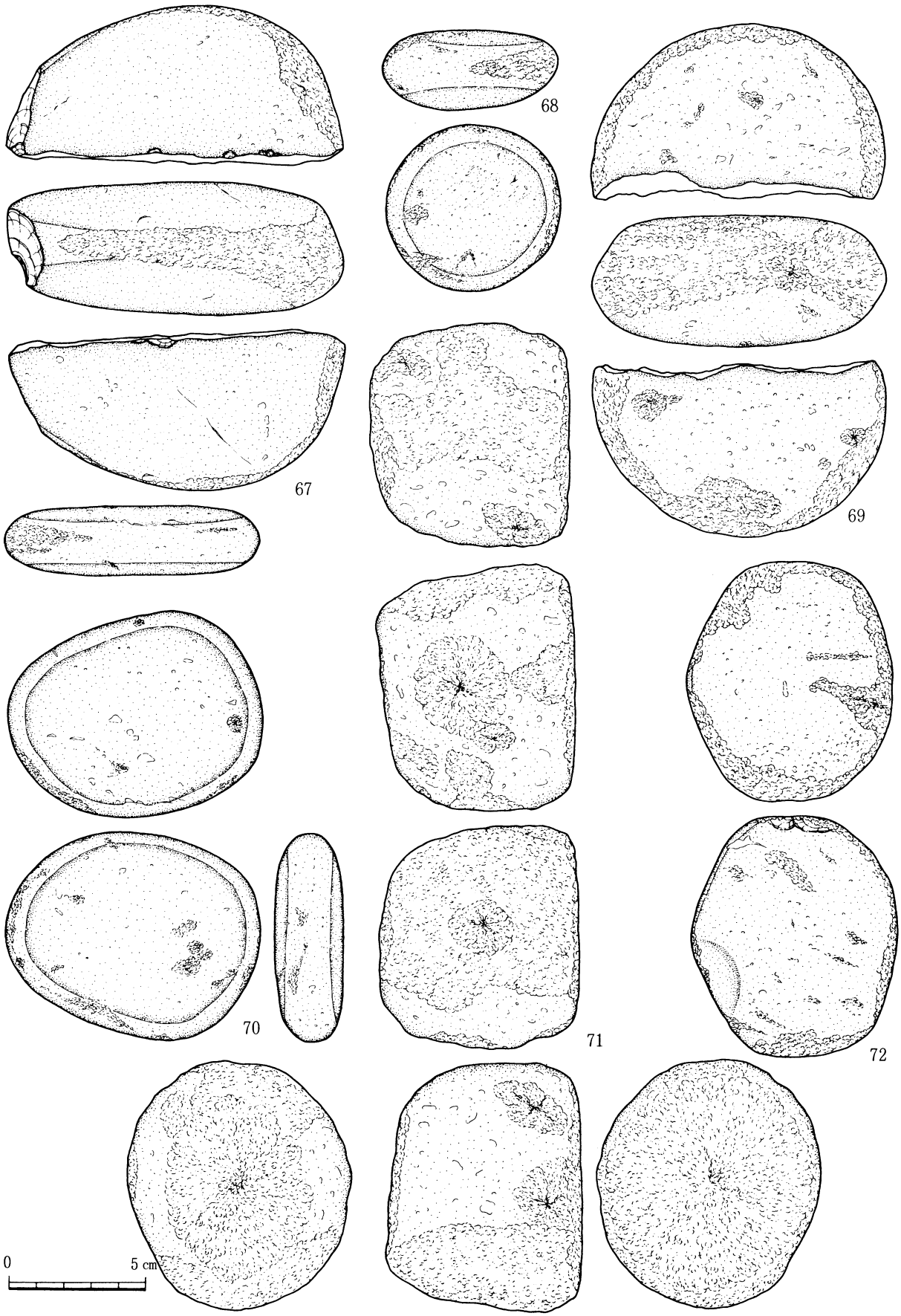
第43図　石器（打製石斧他）



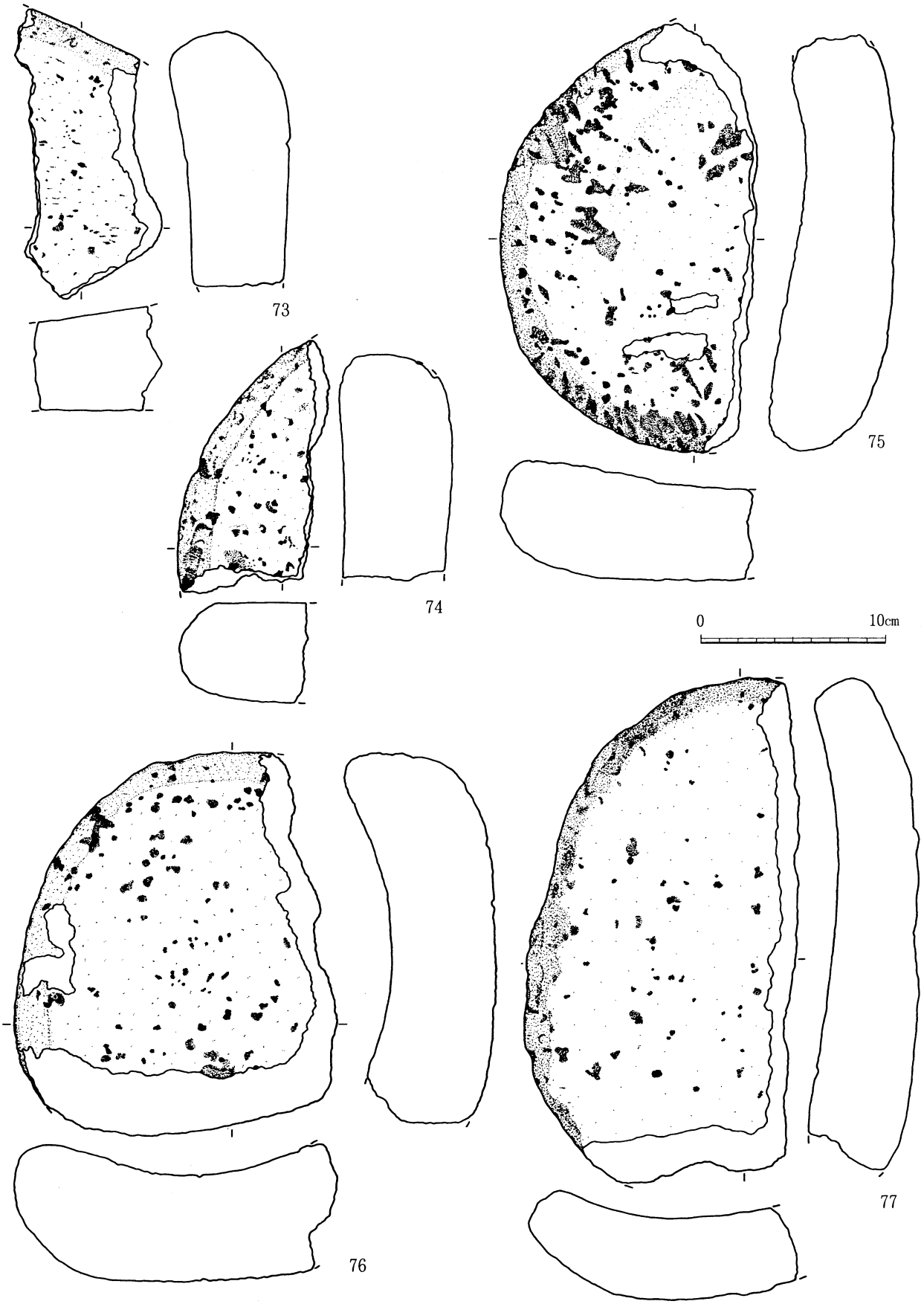
第44図　石器（剥片他）



第45図　石器（叩き石・磨石）



第46図　石器（叩き石・磨石）



第47図　石器（石皿）

第3章　ま　と　め

発掘調査から20年以上の長い時間が経過し，その間出土状況等の基礎資料が失われてしまい現地報告ができなくなった。したがって，採取され保管されていた遺物中心の報告である。

出土遺物は，南福寺式土器を主体にそれに関連する阿高式土器・出水式土器と，少量の春日式土器・並木式土器等で構成される。ここでは出土遺物を検討し，遺跡の位置づけを行なってみたい。

本遺跡の出土遺物は，層位的な出土を成さず同一面での検出と報告されている。そのため，出土遺物個々の比較に頼らざるを得ない。本遺跡の主体を成す阿高式土器や南福寺式土器の他に，出水貝塚や江内貝塚が知られる程度であり八代海に面する出水平野を中心にわずかに分布するのが現状である。このことは，本県でのこれらの土器群の存在自体がきわめて希薄な事を反映しているとも言える。視点を変えると阿高式土器と南福寺式土器群の分布は，出水平野地域が分布の限界線，即ち，出水平野がこの土器文化圏の最南端に相当する事を示している可能性もある。

本報告では深鉢形土器を主体に12類に区分し，13類土器に鉢形土器を置いた。深鉢形土器の区分は施文方法（文様による区分・施文具の相違）や施文位置の区分，施文帯の造り出しの違い（施文帯を肥厚するかしないか）等で区分（分類）の目安としている。

1類土器は南九州に広く分布する春日式土器で，近くの江内貝塚では南福寺式土器包含層の下位に出土し先行する土器群であることが確認されている。

2類土器は並木式土器で，本県の出水平野から大口地域を中心に広く分布する傾向にあるが，いずれの遺跡でも小破片が多く，純粋にこの土器で遺跡を構成することはない。

3類土器は磨消縄文土器で中津式或いは鐘崎式土器と関連すると思われる。

4類土器以下については，先に報告された熊本県城南町黒橋貝塚の調査結果を参考に検討を加えたい。黒橋貝塚では，2層から5層まで4枚の遺物包含層が確認され，それらを基に，土器変遷が提示されている。下記は今回報告で使用した本遺跡の分類土器と，黒橋貝塚で示された変遷データとを対比したものである。

柿内遺跡	黒橋貝塚
2類土器（並木式土器）	黒橋Ⅰ期（Ⅴ層　並木式土器）
4類土器（阿高式土器）	黒橋Ⅴ期（Ⅳ層下部・最盛期の阿高式土器）
5類土器（阿高Ⅲ式土器A類）	黒橋Ⅵ期（Ⅳ層　阿高式土器）
6類土器（阿高Ⅲ式土器B類）	
7類土器（南福寺式土器A類）	黒橋Ⅶ期（阿高式土器から南福寺式土器移行期）
8類土器（南福寺式土器B類）	黒橋Ⅷ期（Ⅲ層　南福寺式土器）
9類土器（南福寺式土器C類）	黒橋Ⅷ～Ⅸ期（南福寺式土器・新段階南福寺式土器・出水式土器）
10類土器（南福寺式土器D類）	黒橋Ⅸ期（新段階南福寺式土器・出水式土器）
11類土器（南福寺式土器E類）	黒橋Ⅷ～Ⅸ期（南福寺式土器・新段階南福寺式土器・出水式土器）
12類土器（南福寺式土器F類・無文土器）	黒橋Ⅴ～Ⅸ期
13類土器（南福寺式土器G類）	黒橋Ⅷ～Ⅸ期（南福寺・新南福寺・出水式土器）

本遺跡出土の資料と黒橋貝塚と対比することで，本遺跡の位置づけを行なってみたい。

12類土器については無文土器であり，とりあえず黒橋Ⅴ～Ⅸ期として示している。

4類から6類土器については，先行する阿高式土器と捉え，12類を除く8類から13類土器を南福寺式土器と捉え分類作業を行なっている。

4類土器は「太めの凹線文を施文し，それらを施文する文様が器体全域に及ぶもの」で，黒橋Ⅴ期と対比可能と思われる。黒橋Ⅴ期は“最盛期の阿高式土器に位置づけ”がなされ，要約すると『口縁部文様帯の追加にともない施文帯が広がる傾向や，縦方向の凹線文の使用，文様が底部まで及ぶ』事などがⅤ期の特徴とされている。このような特徴は35や39の口縁部資料，32・34等の資料に共通する。なお，胎土に多量の滑石を混入するものが多く，光沢を持つ鮮やかな赤褐色等の特徴的な器面を成している。

本遺跡での5類土器は，「文様帯が口縁部直下に集中し，指頭及び太めの凹線で施文」した一群で，黒橋Ⅵ期に相当すると思われる。黒橋貝塚では『・・阿高式土器で，Ⅴ期の口縁部文様帯に比べて狭くなるのが特徴・・この時期の殆どの土器の口唇部に刻み目のように凹点文を施しているため，口縁部の細かい波状の起伏が激しい・・』とされる。5類土器の文様は明瞭で，直線文・渦巻文・三角形，凹点文等が描かれる。53・54・64･67等は文様帯が狭くなり口縁部付近に集中する傾向を良く示し，55・56・66等では口唇部への凹点文施文による明瞭な波状起伏を見ることができる。一方，胎土への滑石混入は減少する傾向になる。

6類土器は5類土器より，更に施文帯の集約傾向が明瞭になり口縁部付近に集中し，施文する凹線文もヘラや棒状工具を多用するようになり，より細くなる傾向を示している。文様は，直線・三角形・菱形・入り組み文が多用されるが，施文帯は肥厚することはない，なお，黒橋貝塚ではこの6類土器が該当する段階は無いようである。したがって，この6類土器に関しても，阿高式土器群の中で解釈し，施文帯が限定されることや施文が細線化傾向を示し，文様構成も画一する様相が認められることなどから，阿高式土器の最終段階と理解したい。

7類土器と6類土器の文様構成は区分しがたいほど酷似しているが，肥厚した施文帯を持つものを7類土器とした。これまでも6類土器から7類土器への移行の可能性があることは指摘されており，今回の分類に当っても上記したように6類土器を阿高式土器の最終段階に，7類土器からは後期初頭の南福寺式土器との認識を持って行なっている。7類土器は肥厚した施文帯に，沈線文や凹点文・簡略化した渦巻文・入り組み文が一般的となり，85や108・149等がその特徴を表している。また胎土にも変化が認められ，6類土器まで見られた滑石の混入が皆無と成る。黒橋貝塚では，黒橋Ⅶ期に該当すると思われ，『Ⅳ層に包括される土器類群で，阿高式土器から南福寺式土器へ移行する時期・・口縁部文様帯と・・胴部文様帯とが，一体化し一つの文様帯となった・・彫り込むような凹線文・・』とされ，黒橋Ⅶ期が，阿高式土器から南福寺式土器への移行期と認識されている。黒橋貝塚の成果も含め，7類土器については上記したように南福寺式土器と認識したい。

8類土器から11類土器については，口縁部の文様の違いにより画一的に分類している。ちなみに8類土器はS字・逆S字，9類土器がく字・逆く字・C字，10類土器は直線化した文様，11類土器は凹点文・縦位凹点文・刺突文である。

8類土器は南福寺式土器の施文の特徴とされる，S字状文及び逆S字状文を文様構成の基盤とするもので，7類土器同様口縁部直下の狭い範囲に肥厚した施文帯を有している。また，特徴の一つとして施文部は光沢を持つように丁寧にナデ等の調整も認められる。この8類土器はおおむね黒橋

Ⅷ期に比定できると判断している。なお，黒橋Ⅷ期は『・・Ⅲ層に包含される土器群で，南福寺式土器である。この時期の土器の特徴は，胴部の彫り込みの文様がより幅広く大柄になり，突帯や把手が付くことで・・』とし，豊富で多様な把手や橋状把手・突起部を備えたものなどが含まれまた，“削り出し文”あるいは“彫り込み文”と称される手法も多用しているとされる。

9類土器は8類土器同様の限定され肥厚した施文帯を持つもので，く字状文・逆く字状文・C字状文を文様構成の基本としたものである。これらは黒橋Ⅷ～Ⅸ期に該当する傾向を読み取れ，黒橋Ⅸ期は『南福寺式土器の新しい時期あるいは出水式土器の位置づけ』がなされている。文様がS字の曲線からく字・C字へやや直線化の傾向を見ることができるが，前後関係等の有無については今後の検討に託す以外に無い。

10類土器は所謂出水式土器を想定して分類したもので，施文が口縁部付近に限られることやヘラ状工具を用いた直線的文様が主体的傾向として認められる。施文帯の肥厚の有無についてはバラツきが認められるが，肥厚したものが主体であることには変わりない。直線化した文様だけで評価すると黒橋Ⅸ期に該当する可能性がある。

11類土器は肥厚した施文帯に凹点文・縦位の凹点文・刺突文等で構成した一群である。これらの施文手法を10類土器のバリエーションと見ることが可能であれば，黒橋Ⅸ期に比定されるが，やはり資料の増加を待つこととなる。

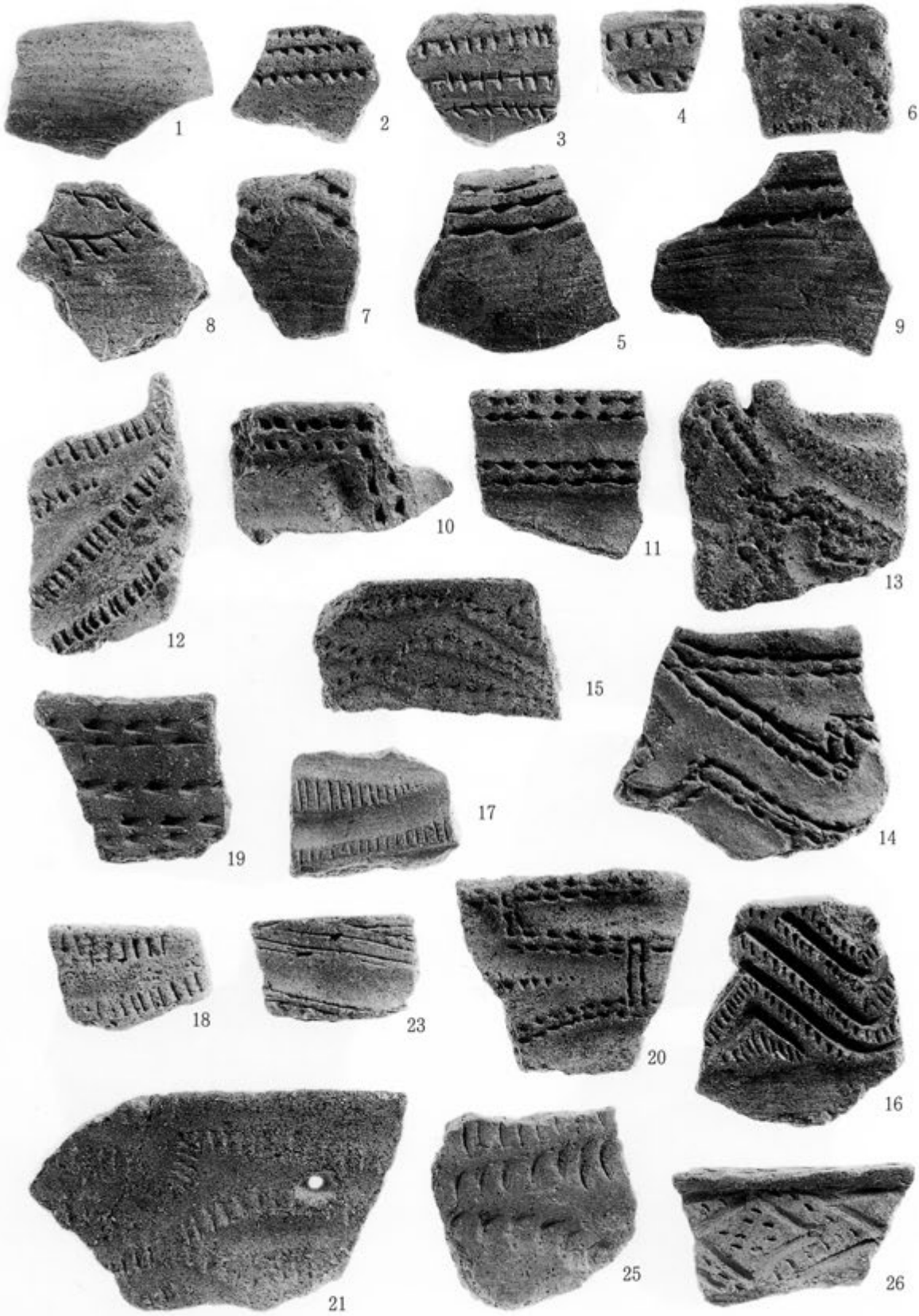
以上，黒橋貝塚の成果を基に出土品の検討を加えてみたが，6類土器以外は大方黒橋貝塚の成果と結びつくようである。

なお，13類土器は鉢形土器や壺形土器一括して区分したが，黒橋Ⅷ～Ⅸ期に包括されると言える。特に，削り出し文手法を用いた267・274・283等の明瞭で華麗な文様を持つ鉢形土器は，黒橋Ⅷ期に集中する傾向が読み取れ，本遺跡の8類・9類土器に該当し，最盛期の南福寺式土器の所産の可能性がある。

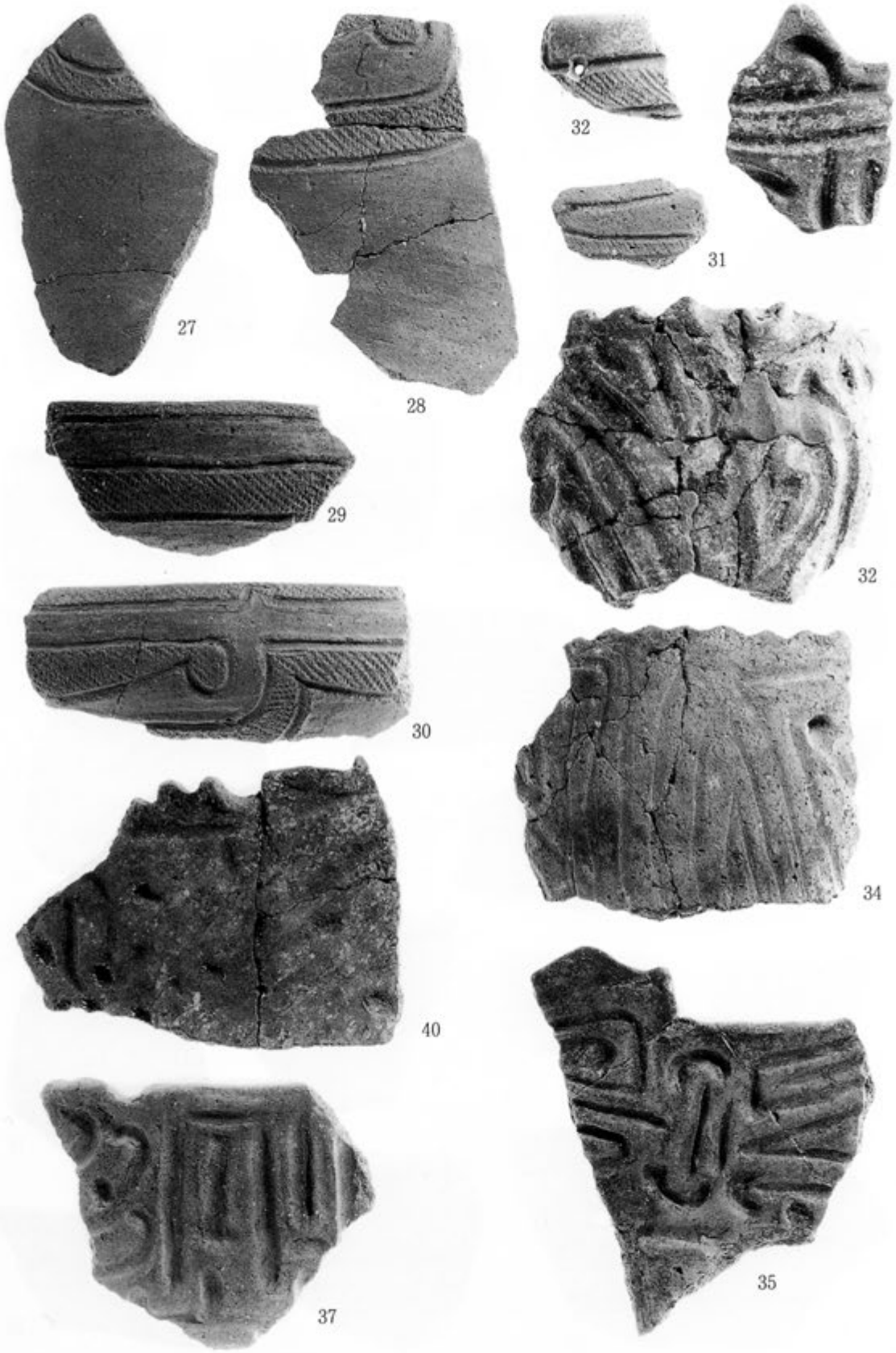
壺形土器の296は肩口に2本の凹点文を施す突帯を巡らしているが，黒橋Ⅷ期に類似した資料が存在することから同様な位置付けで解釈できそうである。黒橋Ⅷ期の壺形土器は，外側に肥厚した口縁部に凹点文を施し，頸部と胴部の境に2段の凹点文を施す突帯を巡らし，更に，突帯を跨ぐように橋状把手を設けるもので，突帯の意識等共通した様相が伺える。また，297～300の壺形土器に関しても，黒橋Ⅷ期に盛行する橋状把手を備えることや297・298の様に凹点文と突帯を組み合わせていることから同時性を指摘できる。口縁部付近の資料だけであり，用途等については言及できないが興味深い。301・302，304は口縁部の突起部を303・305～307は橋状把手，特にX状橋状把手を人面風に表現したもので，これらについては，306の胴部に見られる黒橋Ⅷ期で盛行する削り出し文を施文していることからも同時性を指摘できる。ただ，303は滑石を多量に含んだ胎土であることが課題として残る。307は繊細で豪華な造り出しに比べ，粒子の粗い胎土を用い，日常容器としての機能は薄く，非実用な感を呈している。

最後に解決し得ないが，削り出し文等を活かした多彩な鉢形土器，縄文早期以来の壺形土器の登場，人面風な表現意識等が如何なる経緯を経て展開したのか大きな課題である。

参考文献　「黒橋貝塚」『熊本県文化財調査報告書165集』熊本県教育委員会1998.3
「阿高貝塚」『城南町文化財調査報告書』城南町教育委員会1987

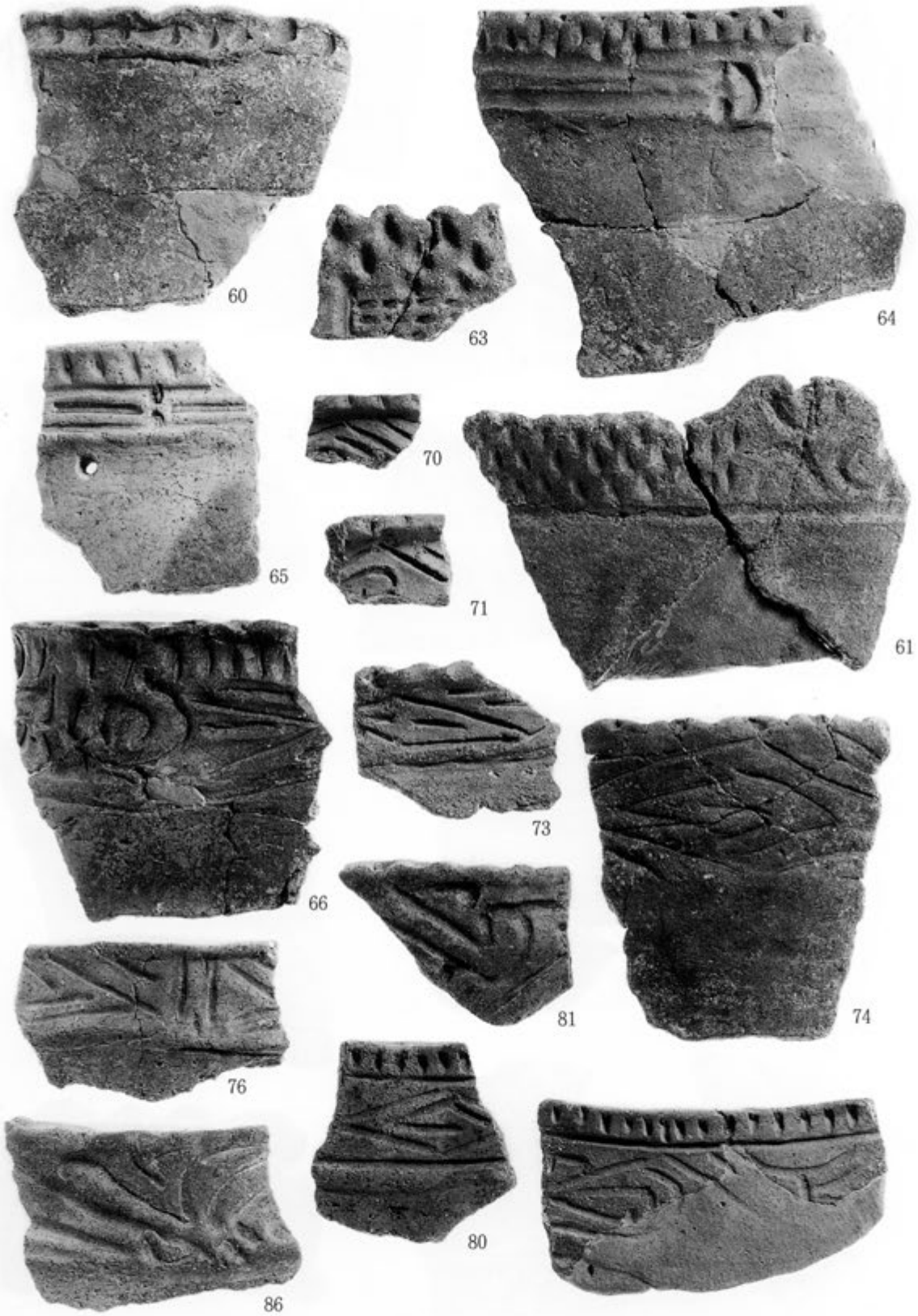


図版１　春日式土器・並木式土器

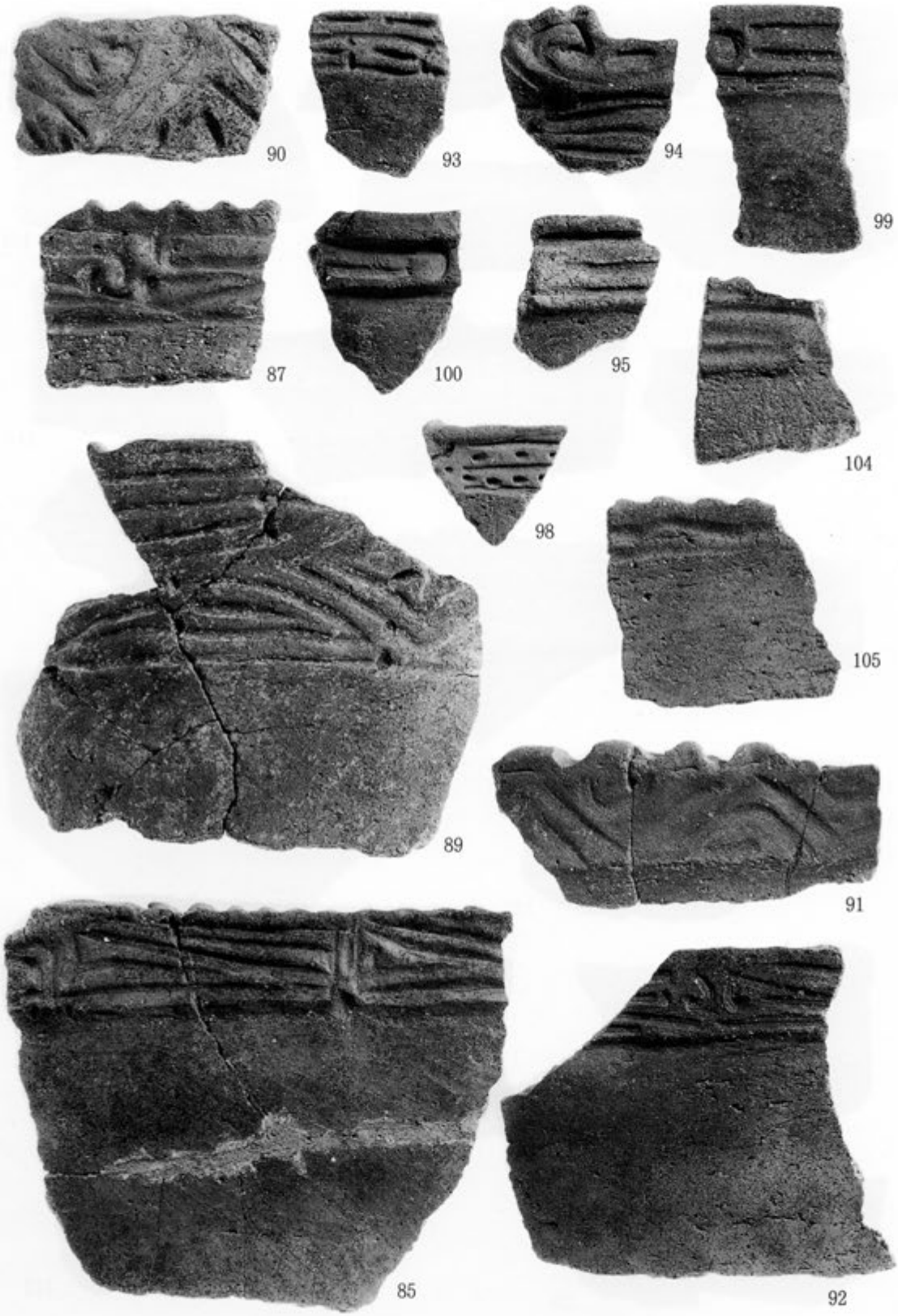


図版 2　中津式土器・阿高式土器

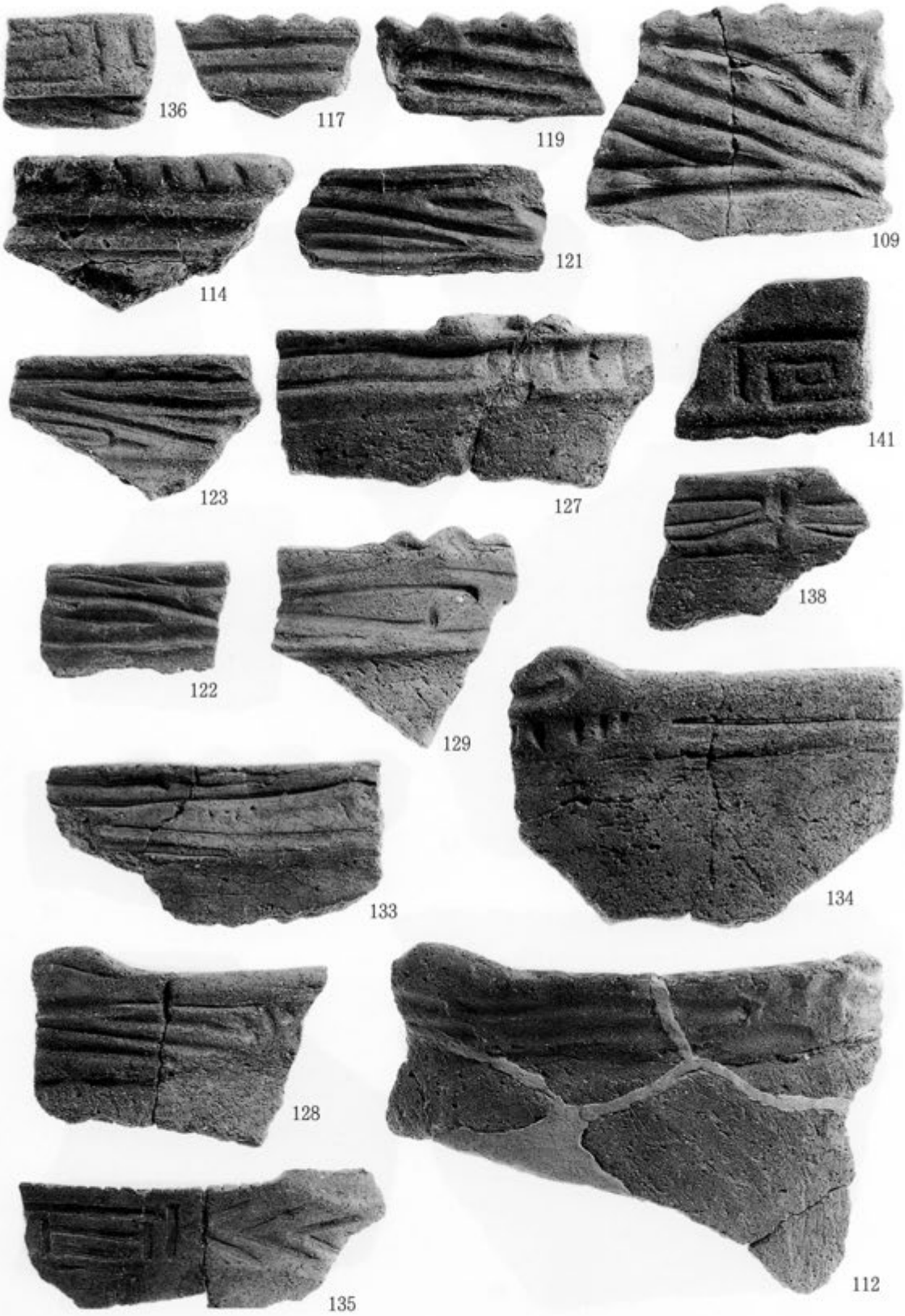
図版３　阿高式土器・阿高Ⅲ式土器Ａ類



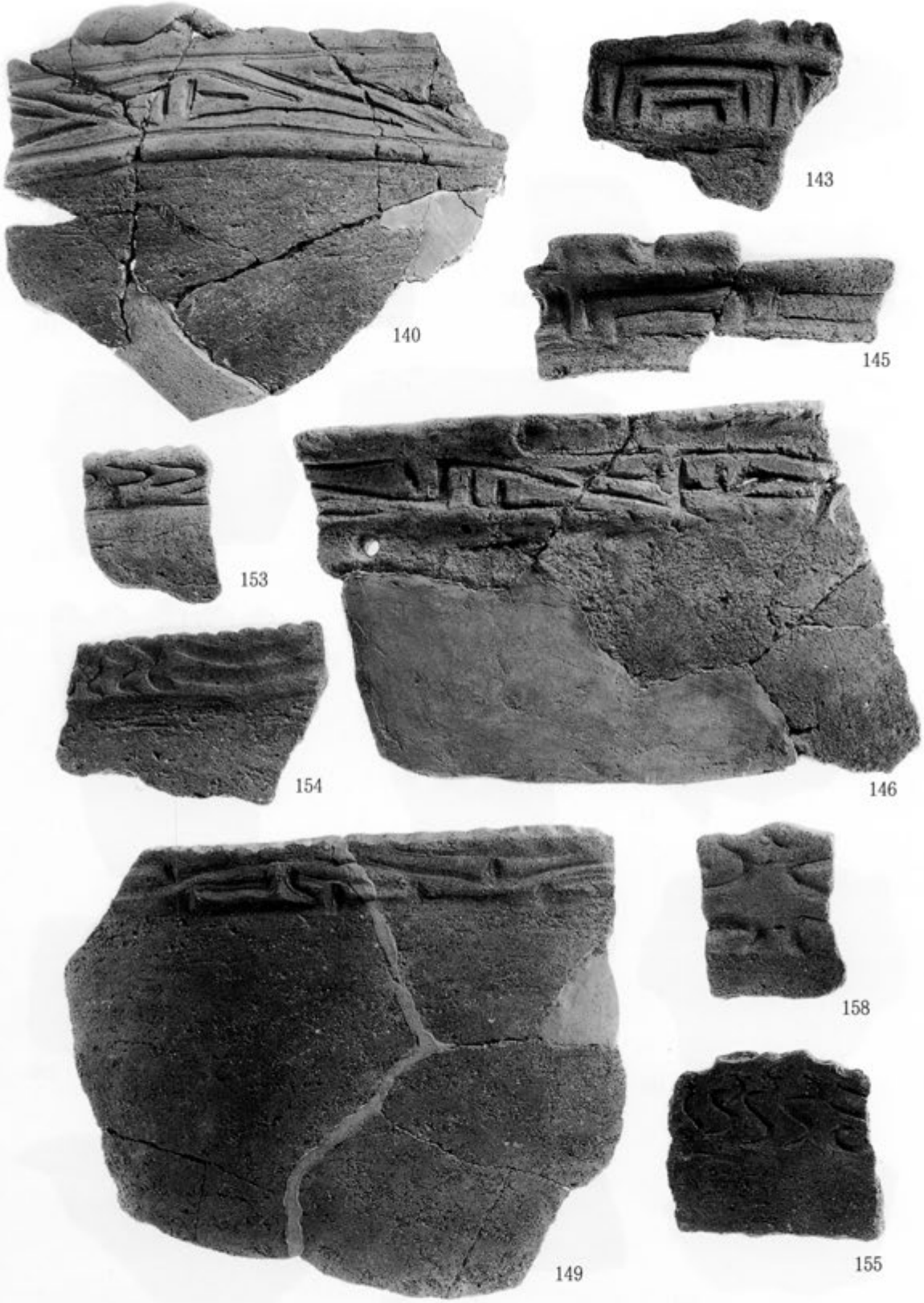
図版４　阿高Ⅲ式土器Ａ類・阿高Ⅲ式土器Ｂ類



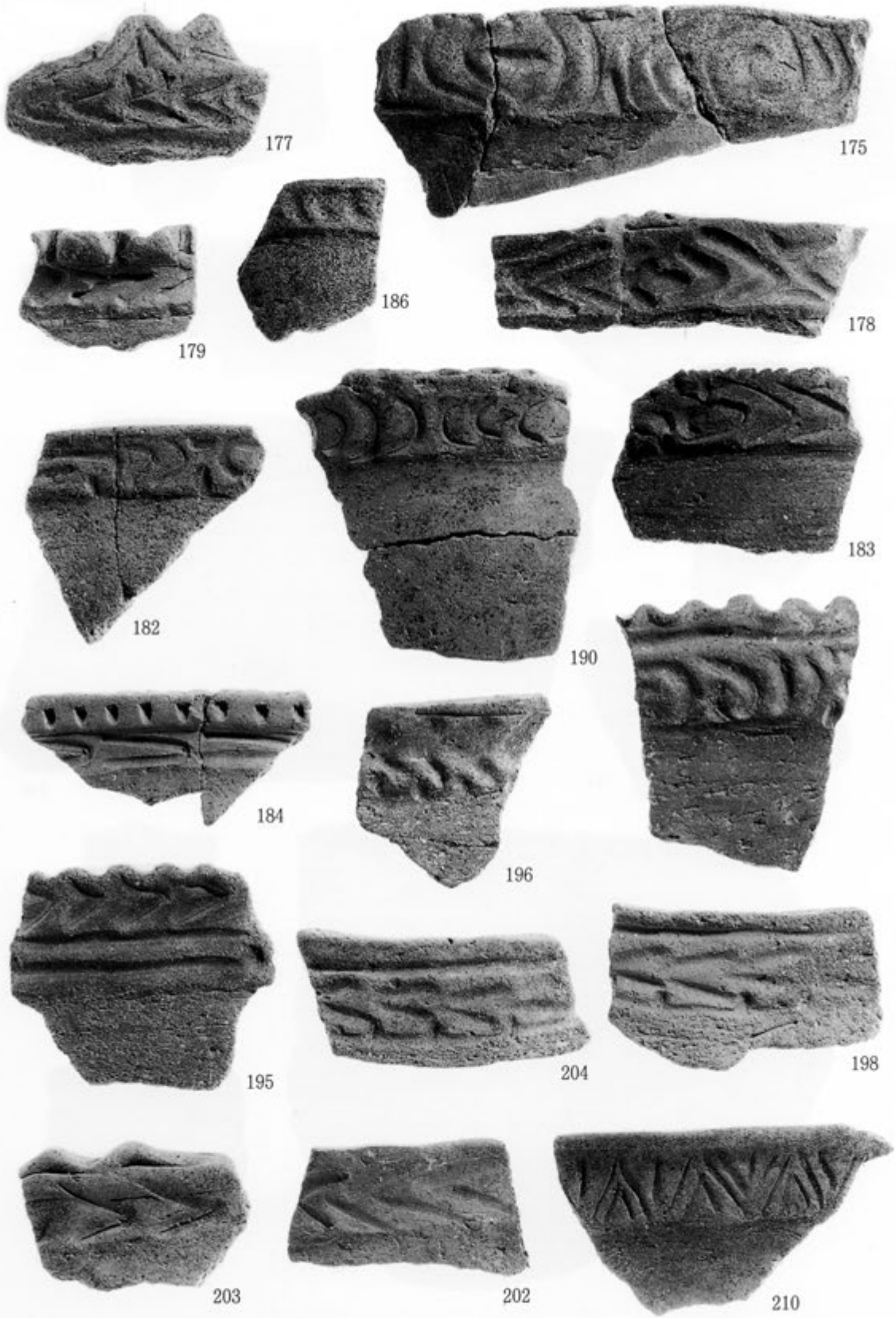
図版５　阿高Ⅲ式土器Ｂ類・南福寺式土器Ａ類



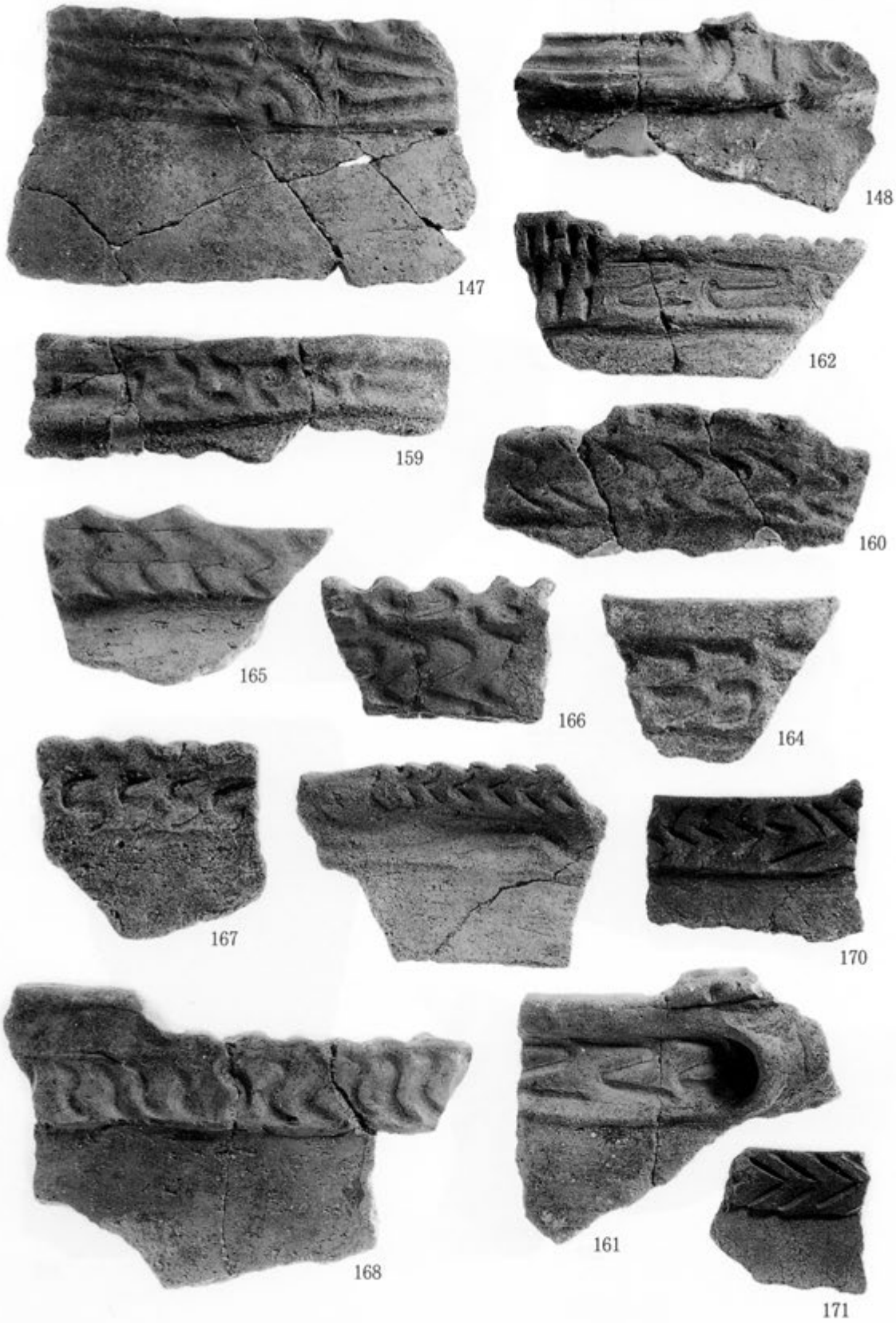
図版６　阿高Ⅲ式土器Ｂ類・南福寺式土器Ａ類



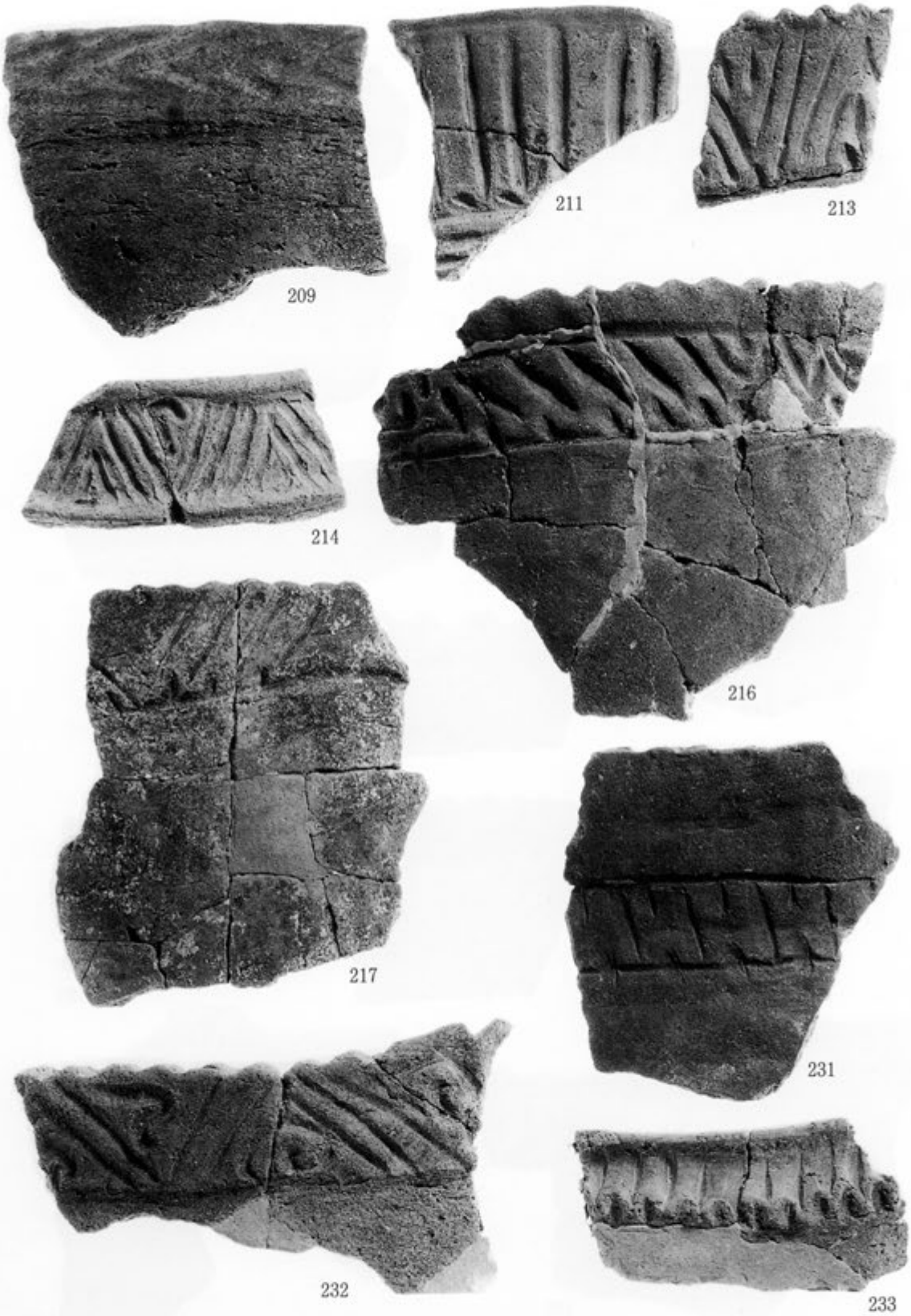
図版７　南福寺式土器Ａ類



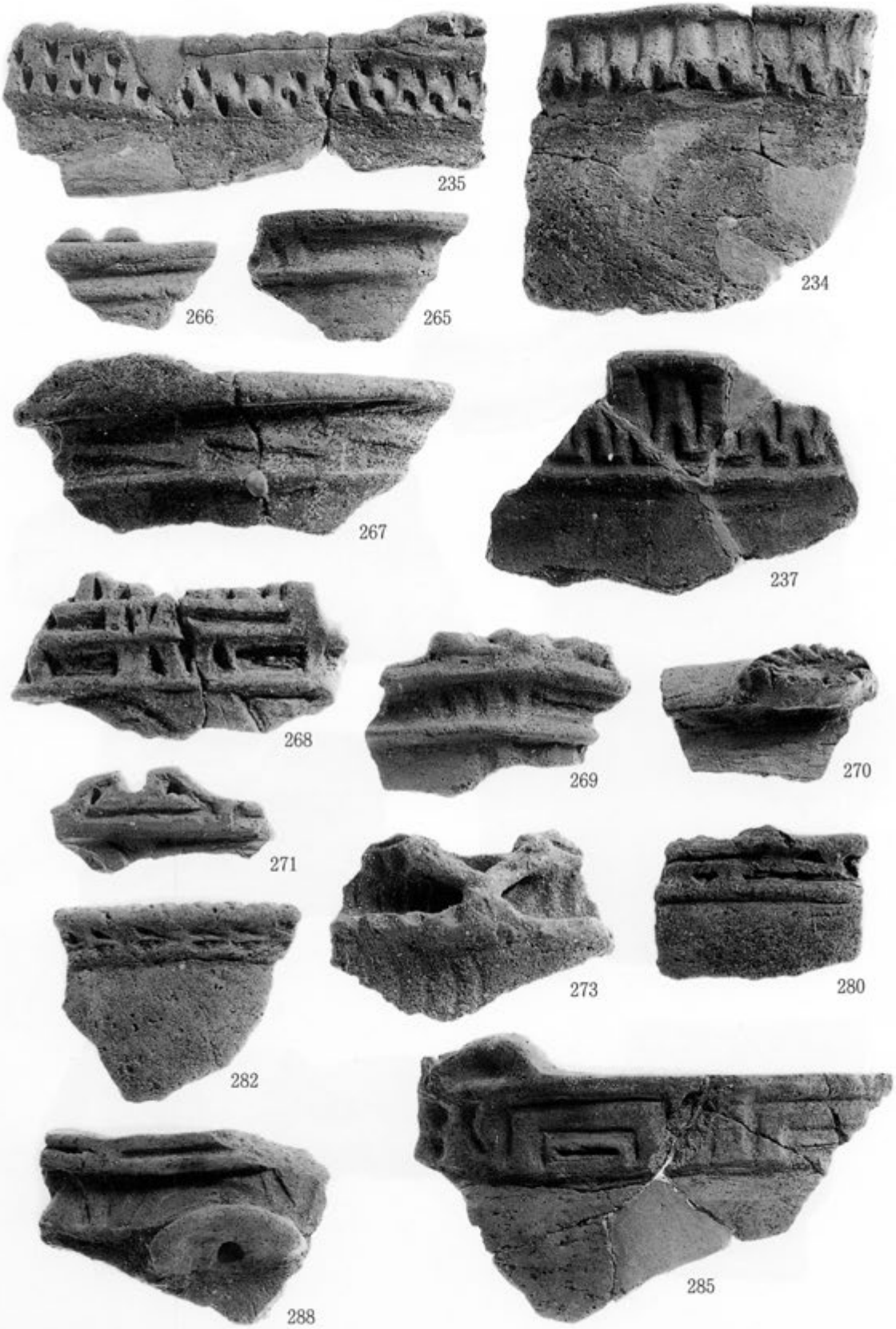
図版８　南福寺式土器Ｂ類・南福寺式土器Ｃ類



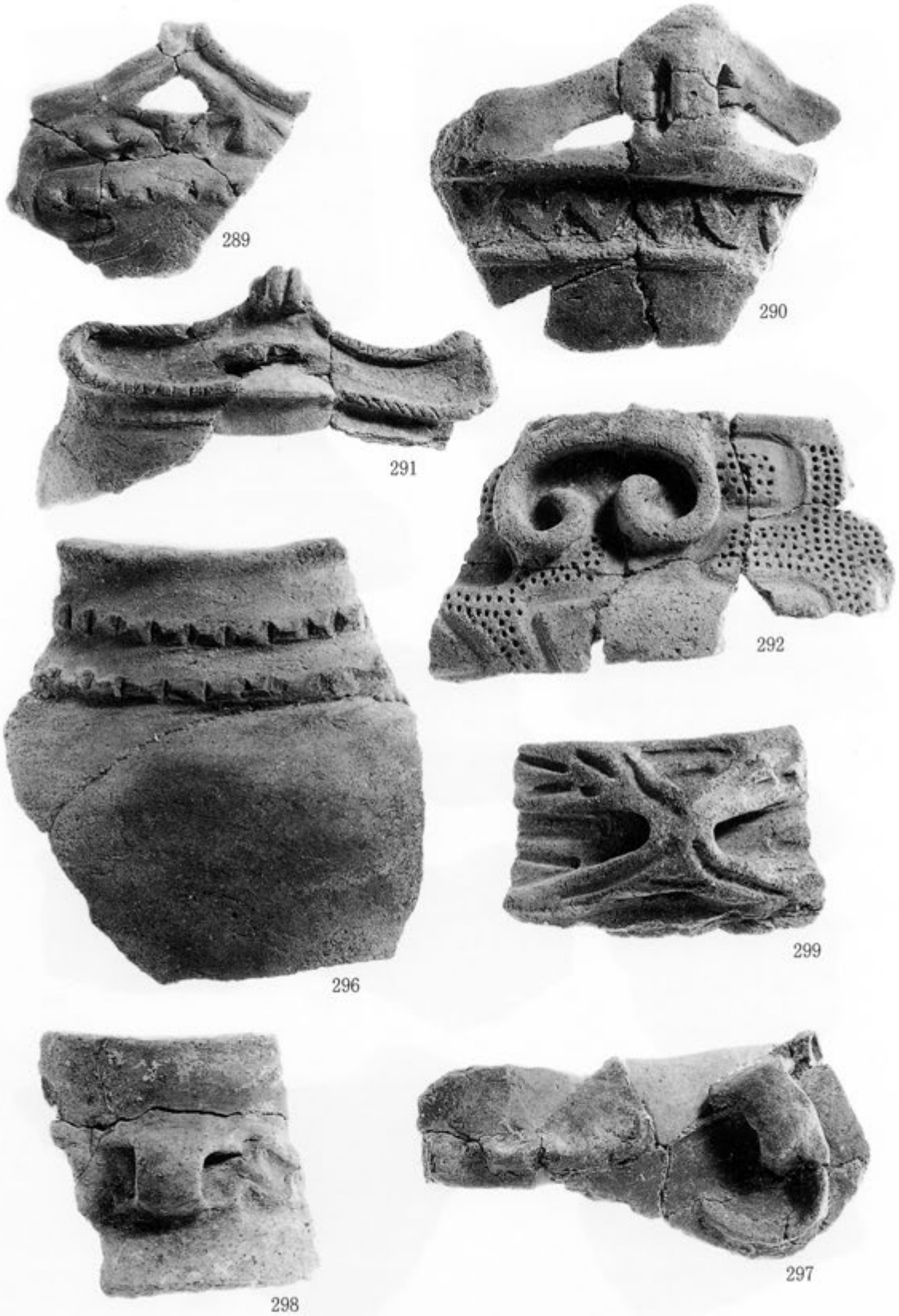
図版９　南福寺式土器Ｂ類



図版10　南福寺式土器Ｂ類・南福寺式土器Ｄ類

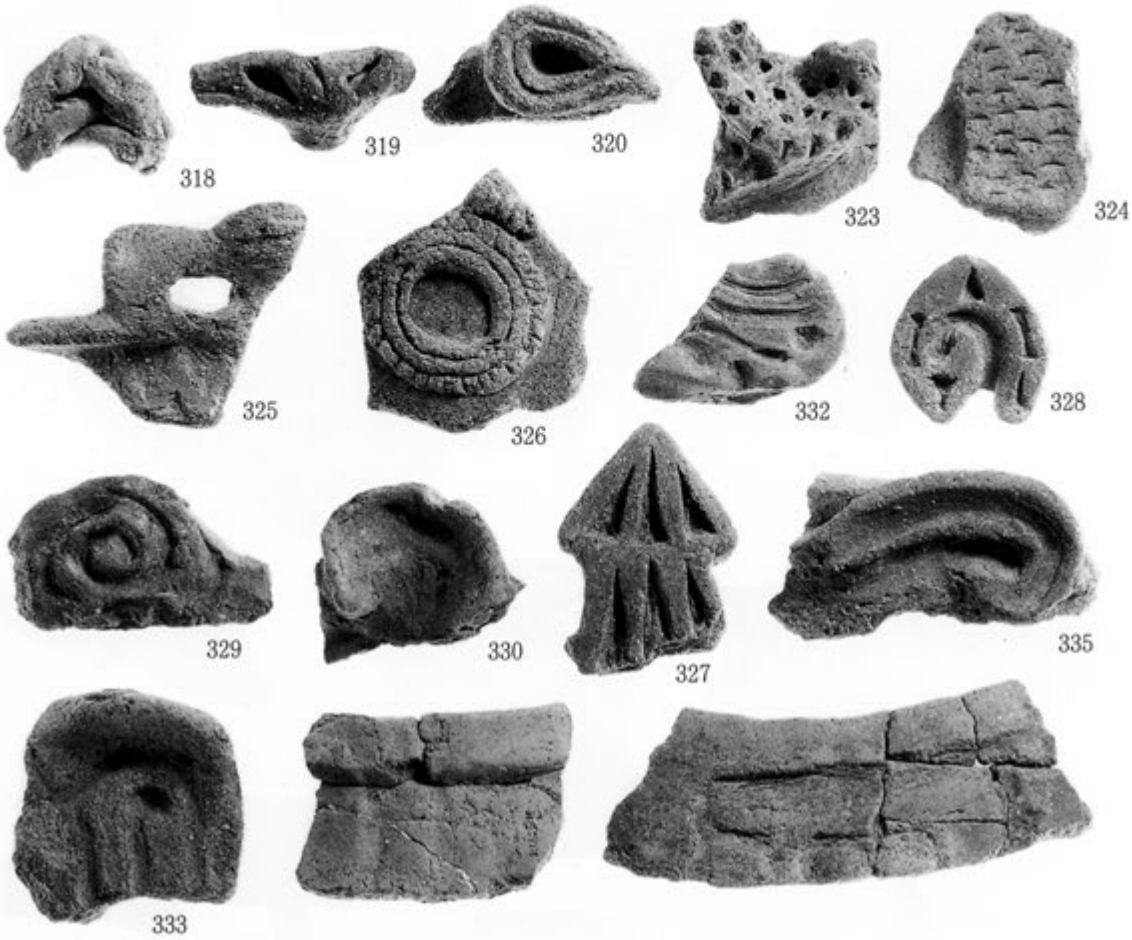


図版11　南福寺式土器Ｅ類・南福寺式土器Ｇ類



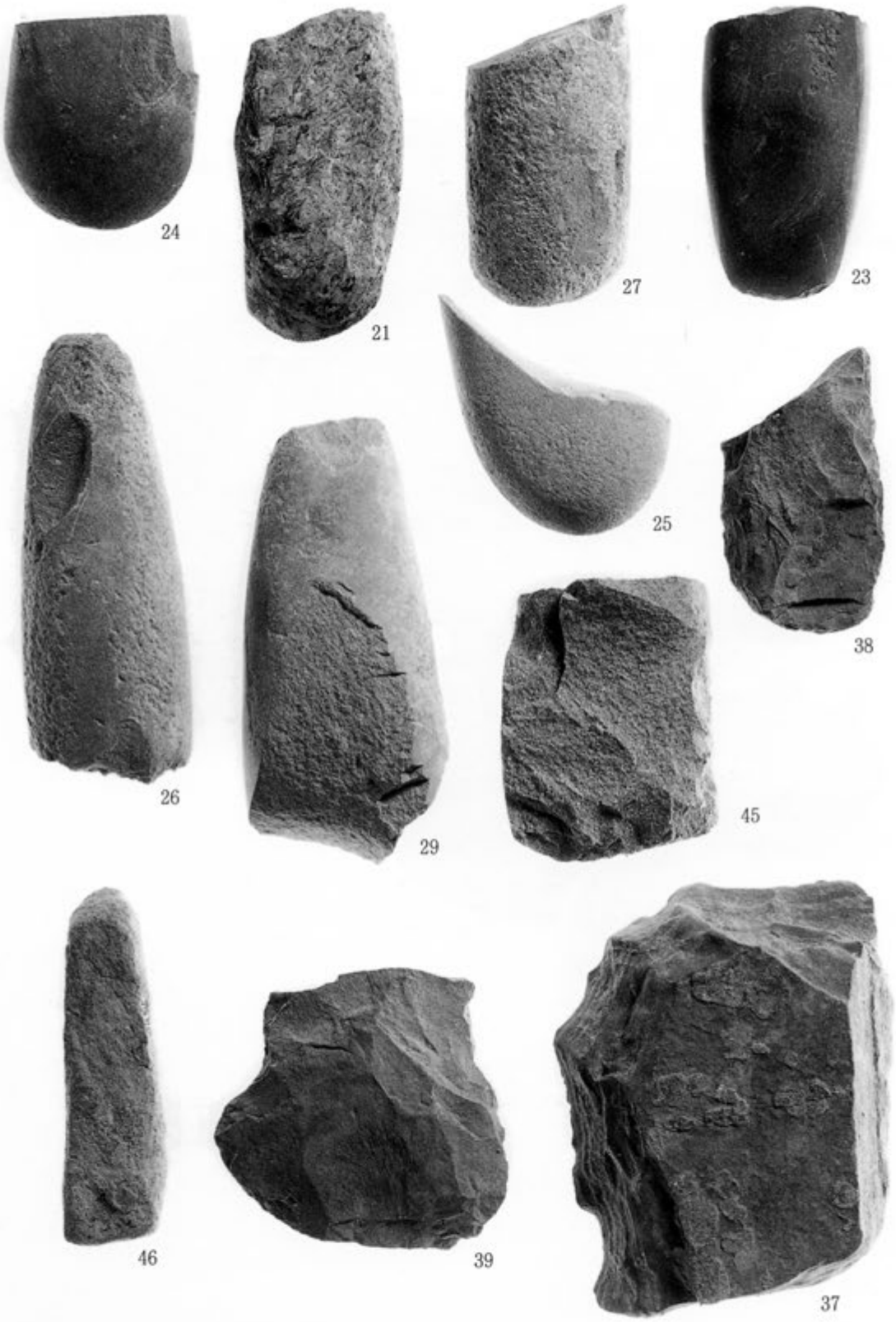
図版12　南福寺式土器G類

図版13　南福寺式土器G類



図版14　南福寺式土器Ｇ類

図版15　復元土器



図版16　出土石器

「大 園 遺 跡」

例　　言

1　本報告書は、昭和54年度に発掘調査した熊毛郡中種子町大園地区における農地整備事業に伴う「大園遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　遺跡番号は遺跡ごとに通し番号を付し，本文及び挿図・図版の番号は一致する。

3　「大園遺跡」の整理，遺物の実測図，製図，写真撮影，編集については青崎が行い整理については県立埋蔵文化財センター整理作業員の協力を得た。なお，執筆分担は下記の通りである。

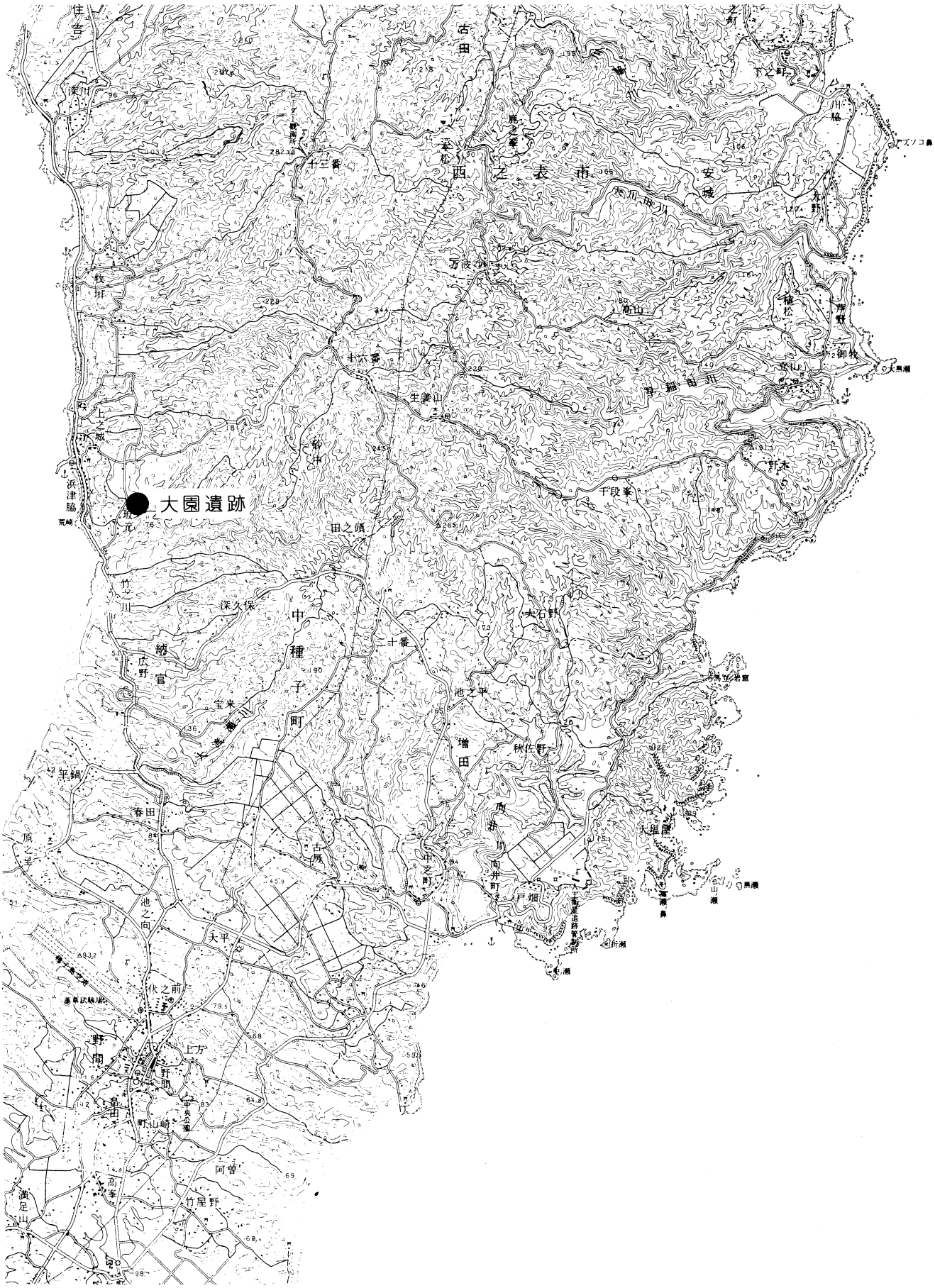
第Ⅰ章 ―――――――――――――― 青　崎
第Ⅱ章 ―――――――――――――― 青　崎
第Ⅲ章
　第1節 ―――――――――――――― 青　崎
　第2節 ―――――――――――――― 青　崎
　　1遺構 ―――――――――――――― 青　崎
　　2遺物(1) ―――――――――――― 青　崎
　　類土器 ―――――――――― 東　和幸
　　(2) ―――――――――――― 桑波田武志
　第3節 ―――――――――――――― 中村耕治
　第4節 ―――――――――――――― 中　村
まとめ ―――――――――――――― 青崎・東

報告書抄録

ふりがな	おおぞのいせき
書名	大園遺跡
副書名	県営畑地帯総合土地改良事業（星原）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(24)
シリーズ番号	(　)
編著者名	青崎和憲　中村耕治　東和幸　桑波田武志
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-5652 鹿児島県姶良郡姶良町平松6252　TEL 0995－65－8787
発行年月日	西暦１９９９年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
大園遺跡（おおぞのいせき）	鹿児島県熊毛郡（かごしまけんくまげぐん） 中種子町（なかたね）	中種子町		30° 35′ 30″	130° 57′ 30″		800㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大園遺跡		縄文時代 （後期晩期）	貯蔵穴 落ち込み遺構	土器，石器，	
		弥生時代 （前～中期）		土器	
		中世	掘立柱建物跡	青磁	


大園遺跡
西之表市
住吉
古田
安城
万波
高山
生姜山
上之城
浜津脇
田之頭
竹之川
深久保
中種子町
十番
大石野
池之平
増田
秋佐野
春田
古原
中之町
戸畑
大塩屋
大平
伏之前
野間
上方
阿曽
竹屋野
高峯
川脇
植松
御牧
黒瀬
野木
干段峯
下之町
十三番
十六番
十八番
鹿之峯
本松
牧坪
放元
荒崎
竹之川
広野
納官
宝来
平鍋
原之里
池之向
中之町
向井町
折瀬
瀬
黒瀬
金山瀬
アズソコ鼻
薬草試験場
中央公園
町山崎
滴足山

第１図　大園遺跡位置図

目　　次

例言

大園遺跡

第Ⅰ章　調査の経過 …… 8

第1節　調査に至るまでの経過 …… 8

第2節　調査組織 …… 8

第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境 …… 10

第Ⅲ章　遺跡及び調査の概要 …… 12

第1節　層位 …… 12

第2節　縄文時代 …… 16

1遺構 …… 16

(1)落ち込み遺構 …… 16

(2)貯蔵穴 …… 17

2遺物 …… 21

(1)土　器 …… 21

(2)石　器 …… 36

第3節　弥生時代 …… 57

第4節　中　　世 …… 61

1遺構 …… 61

(1)堀立柱建物跡 …… 61

2遺物 …… 66

まとめ …… 73

挿　図　目　次

第１図　大園遺跡位置図 ―― 4
第２図　周辺遺跡 ―― 11
第３図　大園遺跡周辺地形図 ―― 13
第４図　大園遺跡グリッド配置図 ―― 14
第５図　土層断面図 ―― 15
第６図　堅穴状遺構１，堅穴状遺構２実測図 ― 16
第７図　堅穴状遺構３実測図 ―― 17
第８図　Ａ地点遺物分布状況 ―― 18
第９図　Ｃ地点遺物分布状況 ―― 19
第10図　貯蔵穴及び貯蔵穴内出土遺物 ―― 20
第11図　土器実測図 ―― 21
第12図　土器実測図 ―― 24
第13図　土器実測図 ―― 25
第14図　土器実測図 ―― 26
第15図　土器実測図 ―― 27
第16図　土器実測図 ―― 28
第17図　土器実測図 ―― 29
第18図　土器実測図 ―― 30
第19図　土器実測図 ―― 31
第20図　土器実測図 ―― 32
第21図　土器実測図 ―― 33
第22図　土器実測図 ―― 34
第23図　土器実測図 ―― 35
第24図　石器実測図 ―― 38
第25図　石器実測図 ―― 39
第26図　石器実測図 ―― 40
第27図　石器実測図 ―― 41
第28図　石器実測図 ―― 42
第29図　石器実測図 ―― 43
第30図　石器実測図 ―― 44
第31図　石器実測図 ―― 45
第32図　石器実測図 ―― 46
第33図　石器実測図 ―― 47
第34図　石器実測図 ―― 48
第35図　石器実測図 ―― 49
第36図　石器実測図 ―― 50
第37図　石器実測図 ―― 51
第38図　石器実測図 ―― 52
第39図　石器実測図 ―― 53
第40図　石器実測図 ―― 54
第41図　石器実測図 ―― 55
第42図　軽石加工品実測図 ―― 56
第43図　土器実測図 ―― 58
第44図　土器実測図 ―― 59
第45図　堀立柱建物配置図 ―― 60
第46図　堀立柱建物１ ―― 61
第47図　堀立柱建物２ ―― 62
第48図　堀立柱建物３ ―― 63
第49図　堀立柱建物４ ―― 64
第50図　堀立柱建物５ ―― 65
第51図　青磁実測図１ ―― 67
第52図　青磁実測図２ ―― 68
第53図　白磁実測図 ―― 70
第54図　備前焼他実測図 ―― 72

表　目　次

表１　遺跡地名表 ―― 10
表２　土器観察表 ―― 57
表３　土器観察表 ―― 59
表４　１号堀立柱建物跡柱穴計測表 ―― 62
表５　２号堀立柱建物跡柱穴計測表 ―― 63
表６　３号堀立柱建物跡柱穴計測表 ―― 64
表７　４号堀立柱建物跡柱穴計測表 ―― 65
表８　５号堀立柱建物跡柱穴計測表 ―― 66
表９　青磁観察表 ―― 69
表10　白磁観察表 ―― 70
表11　染付け観察表 ―― 71
表12　陶器観察表 ―― 71

図　版　目　次

図版１　大園遺跡全景・調査風景 ―― 74
図版２　土層・遺物出土状況 ―― 75
図版３　遺物出土状況 ―― 76
図版４　遺物出土状況 ―― 77
図版５　土器出土状況 ―― 78
図版６　土器出土状況 ―― 79
図版７　土器出土状況 ―― 80
図版８　土器・貯蔵穴検出状況 ―― 81
図版９　貯蔵穴・堅穴状遺構検出状況 ―― 82
図版10　堅穴状遺構１，２検出状況 ―― 83
図版11　堀立柱建物検出状況 ―― 84
図版12　堀立柱建物検出状況 ―― 85
図版13　堀立柱建物検出状況他 ―― 86
図版14　堀立柱建物１，柱穴内ぐり石検出状況 ―― 87
図版15　堀立柱建物１，柱穴内ぐり石検出状況 ―― 88
図版16　堀立柱建物１，柱穴内ぐり石検出状況 ―― 89
図版17　出土土器１ ―― 90
図版18　出土土器２ ―― 91
図版19　出土土器３ ―― 92
図版20　出土土器４ ―― 93
図版21　出土土器５ ―― 94
図版22　出土土器６ ―― 95
図版23　出土土器７ ―― 96
図版24　出土土器８ ―― 97
図版25　出土土器９ ―― 98
図版26　出土土器10 ―― 99
図版27　出土土器11 ―― 100
図版28　出土土器12 ―― 101
図版29　出土土器13 ―― 102
図版30　出土土器14 ―― 103
図版31　出土土器15 ―― 104
図版32　出土石器１ ―― 105
図版33　出土石器２ ―― 106
図版34　出土石器３ ―― 107
図版35　出土石器４ ―― 108
図版36　出土石器５ ―― 109
図版37　出土石器６ ―― 110
図版38　出土石器７ ―― 111
図版39　出土石器８ ―― 112
図版40　出土石器９ ―― 113
図版41　出土石器10 ―― 114
図版42　出土石器11 ―― 115
図版43　出土石器12 ―― 116
図版44　出土石器13 ―― 117

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過

鹿児島県農政部（以下，農政整備課）は，中種子町星原地区において県営畑地総合土地改良工事を計画し，事業に先立って県教育庁文化課（以下，文化課）に当該地における埋蔵文化財の有無について照会した。これを受けて文化課は昭和53年5月に事業対象地区の埋蔵文化財分布調査を実施したところ，大園・油久後の2カ所において遺物が散布していることが判明した。文化課はその取り扱いについて農地整備課と協議し，昭和53年8月1日～7日にかけて大園遺跡と油久後遺跡について確認調査を実施することとなった。確認調査の結果，両遺跡とも縄文時代後期を主体とする遺物包含層が残存していることが確認されたため，再度協議を行った。その結果，遺跡の保存と開発との調整を図るため，大園遺跡についてはA地点とC地点（800m²）は記録保存，B地点（1500m²）と油久後遺跡については設計変更による現地保存で対応することとなった。大園遺跡は，昭和54年2月20日～3月5日にかけて文化課が発掘調査を実施した。なお，発掘調査については農地整備課をはじめ，中種子町教育委員会および町耕地課の協力を得た。

第2節　調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教育長	
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課　長	谷　崎　哲　夫
企画調整	〃	主　幹	本　蔵　休　三
調　査　者		主　事	青　崎　和　憲
		主　事	中　村　耕　治

発掘調査に当たっては，鹿児島県熊毛支庁土地改良課及び熊毛教育事務所，中種子町土木課，同町教育委員会，作業員として発掘調査に従事された地元の方々の協力を得た。

日誌抄

2／20　大園遺跡発掘調査開始にあたって，熊毛支庁土地改良課，中種子町土木課と打ち合わせ。現地にてほ場整備計画の道路東側を基準として，A地点およびC地点に10m×10mを基本にグリッド設定し，杭打ちを行う。

／21　本日より発掘調査作業開始。A地点においては地表下約20cmに堆積するⅡ層にあたる遺物包含層は部分的にその堆積をなし，大半は耕作等によってかなりの部分において削平されていた。調査前の畑の土手および畦には耕作時に取り上げられた土器片や石斧・磨石，叩き石などが一括して集められていた状況であった。

／22　遺物包含層の掘り下げ作業。縄文後期の一湊式土器や弥生中期，青磁等出土した。部分的に第Ⅲ層上面まで掘り下げる。C地点のグリッド設定し一部掘り下げ開始。C地点においても畑境の土手や畦に露呈して土器，石器が多数集められていた。

／23　雨天のため現場作業中止。土地改良課等と打ち合わせ。図面整理を行う。

／24　A地点，C地点Ⅱ層掘り下げ及びⅢ層上面での遺構検出作業。ピット多数検出した。

／25　A地点，C地点Ⅱ層掘り下げ及びⅢ層上面での遺構検出作業。ピット群多数検出し堀立柱建物跡を確認し柱穴検出作業。遺物出土状況写真撮影。

／26　A地点，C地点Ⅱ層掘り下げ及びⅢ層上面での遺構検出作業。平板実測。

／27　中世掘立柱建物ピット検出作業。C地点から縄文時代晩期遺物が集中して発見された。

／28　雨天のため現場作業中止。西之表市西俣地区において県営ほ場整備事業が計画されているとのことで熊毛支庁と協議し，現場を確認した。対象地は中世の猿投壺が以前発見された場所にあたる。文化課はその取り扱いについて熊毛支庁と協議した結果，大園遺跡発掘調査が終了後，発掘調査を実施する事となった。

／1　5軒の掘立柱建物跡が確認され，それに関連するピット掘り下げ作業。平板測量および実測作業。

／2　A地点のコンタ測量。Ⅲ層以下層の遺物包含層の確認作業。C地点Ⅲ層直上の遺物出土状況清掃および写真撮影。

／3　掘立柱建物跡実測及び下層確認調査。発掘調査調査対象地に平面径約1ｍの貯蔵穴と径約2ｍの黒褐色の落ち込み遺構を発見した。

／4　C地点掘り下げ作業。土層断面実測及び遺構等実測。

／5　貯蔵穴及び落ち込み遺構3基実測後整理し午前中で大園遺跡発掘調査終了。

午後より西之表市西俣遺跡調査のため熊毛支庁，西之表市教育委員会と調査について打ち合わせ後，西俣遺跡発掘調査開始。

第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境

大園遺跡は，種子島の東海岸に面する中種子町納官坂元大園の標高約30ｍの台地に所在する。

種子島は，大隅半島から南南東約38km洋上に位置し，南北約52km，東西約12kmで細長く，最高海抜でも282.3ｍと低く全体的に平らな島である。

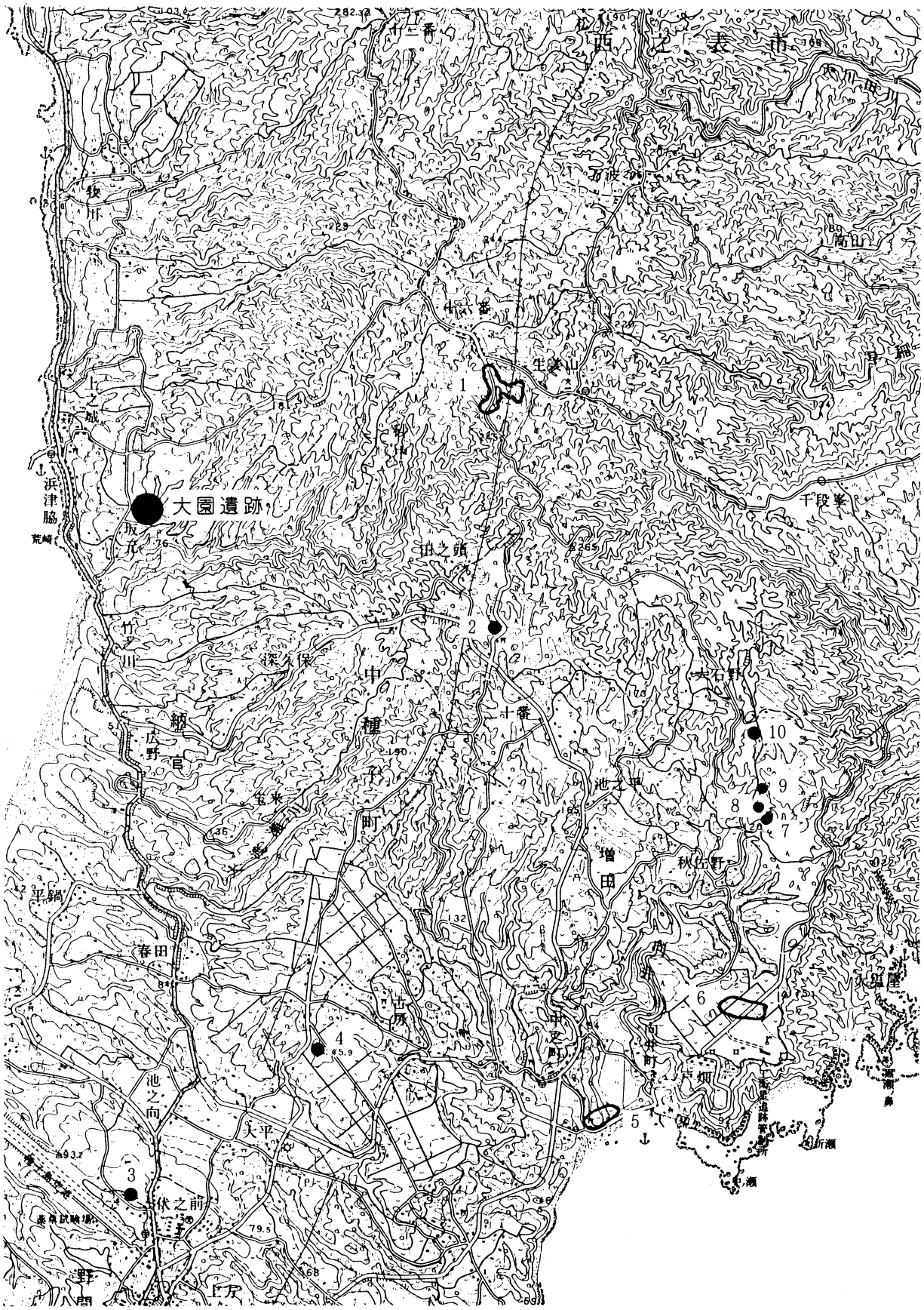
地形は北部，南部，東海岸側で海岸段丘がよく発達し，中部の中種子町付近は標高約120ｍの丘陵地とそれから延びる比較的安定した平坦地が形成され，西海岸は急崖をもたず緩傾斜で砂丘となる。また，地質構造は，熊毛層とよばれる砂岩，頁岩，泥岩を基盤とし，その上に茎永層群等が覆い，下層の種Ⅲ・Ⅳ層，最上部には喜界カルデラ起源の火山灰層が堆積している。

熊毛諸島の古代遺跡は早い時期から調査研究が手がけられ，明治時代若林勝郎「種子島及び大島の石斧」や佐藤伝蔵「屋久島の石斧」で紹介され，昭和20年から30年代にかけては三友国五郎・国分直一・河口貞徳・森園尚孝，三島格等によって「本城遺跡」（西之表市），「一湊遺跡」（上屋久町），「城ノ平遺跡」（口永良部），「苦浜遺跡」（中種子町），「輪之尾遺跡」（中種子町），「一陣遺跡」（南種子町），「広田遺跡」（南種子町），「鳥の峰遺跡」（中種子町）等，精力的に発掘調査が行われてきた。

その後，ほ場整備事業等の緒開発事業に伴う発掘調査が実施され，先史時代の様相が明らかになりつつある。その中で，奈佐田遺跡からは縄文早期吉田式，押型文土器が，広田遺跡・鳥ノ峰遺跡からは弥生時代後期人骨を伴う覆石墓が発見され，南島弥生時代葬制の解明，大陸，南西諸島との関わり，さらに最近発見された種子Ⅳ（３万900年）の下層から旧石器時代（上坑，礫群，焼土）の南種子町横峰Ｃ遺跡及び，中種子町立切遺跡をはじめ，縄文草創期（隆帯文土器）の西之表市奥ノ仁田尾遺跡，中種子町一角山遺跡，縄文後期（配石遺構）の南種町藤平小田遺跡等の調査成果は周目の一致するところであり，今後の考古学や環境考古学における文化のとらえ方，各時代における古環境，土器の出目，編年，交易，分布等，多くの課題や問題を提起している。

表１　主な周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	地形	編年	遺物	備考
1	三角山		台地	縄文草創期・前期	突帯文，磨製石鏃	新種子空港建設に伴う調査
2	二十番	増田二十番西川原	斜面地	縄文前・後期，弥生後期	曽畑式，一湊式，磨製石斧	道路拡張工事
3	奈佐田	油久奈佐田	平地	縄文早期	吉田式	
4	千草原	増田郡原千草原	台地	縄文早・前期，弥生後期	塞ノ神式，苦浜式，打製石斧	昭和48年調査
5	鳥ノ峰	増田出野町鳥ノ峰	砂丘	弥生出・後期	弥生式土器，貝符，磨製石鏃，人骨	覆石墓，昭和36年から三次調査
6	牛ノ原	増田牛ノ原	台地	縄文早・前期	塞ノ神式，苦浜式，打製石斧	ほ場整備
7	東松原山	秋佐野東松原山	台地	縄文時代	土器片	ゴルフ場建設
8	中野大石野	秋佐野中野大石野	台地	縄文時代	土器片	ゴルフ場建設
9	大石野	秋佐野大石野	台地	縄文時代	塞ノ神式，磨石	ゴルフ場建設
10	増田大石野	増田大石野	台地	縄文時代	塞ノ神式，磨石，石匙	


大園遺跡
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
生姜山
千段峯
中種子町
増田
秋色野
大平
池之向
春田
広野
浜津脇
荒崎
上之城
竹之川
深久保
笠来
平鍋
伏之前
野間
上尻
戸畑
古屋
瀬切鼻
所瀬
高山
早瀬
万波
十一番
十番
田之頭
宇石野
池之平
中之町
向井町
古原
坂元
紡川
西之表市

第2図　周辺遺跡

第Ⅲ章　遺跡及び調査の概要

大園遺跡は，試掘調査によって約1800m²が遺跡対象地であるが，当対象地をＡ・Ｂ・Ｃ地点の３区分して，遺跡の取り扱いについての対応を講じた。Ｂ地点は設計変更によって遺跡の保存を図ることし，Ａ地点，Ｃ地点は発掘調査を実施することとした。なお，工事中発見されたＤ地点（試掘時においては，耕作等によって遺物包含層は削除されていた部分で，遺構の痕跡が発見された場所である）もその対象とした。

調査は，土地改良事業の調査道路の東側を基準に10ｍ×10ｍを基本にグリッドを設定して実施した。

第１節　層　位

大園遺跡においては，第Ⅰ層から第Ⅶ層まで掘り下げ確認した。基本的には，縄文後期～晩期の土器を出土する第Ⅲ層上位と，弥生時代中期，中世の遺物が出土する第Ⅱ層を遺物包含層とする複合遺跡である。なお，調査区においては遺物包含層である第Ⅱ層の大半や一部第Ⅲ層上位は開墾や耕作によって削平を受け，その堆積を成していない箇所も見受けられる。

第Ⅰ層――耕作土層である。種子島の地場産業であるサトウキビ畑，落花生畑となっている。

第Ⅱ層――黒褐色火山灰土層である。調査対象地区においては耕作等によって大部分は削平されているが，部分的に層が形成されている箇所も確認できた。平均して10数cmが堆積していた。弥生中期および中世の清磁等の遺物が出土する遺物包含層である。

第Ⅲ層――黄褐色火山灰層で，通称赤ホヤ層である。上部は２次堆積層となり，縄文前期，後期，晩期の遺物が出土する遺物包含層である。
下部は粒子の細かい軽石の火砕流からなる。

第Ⅳ層――乳白色粘質土層で，無遺物層である。

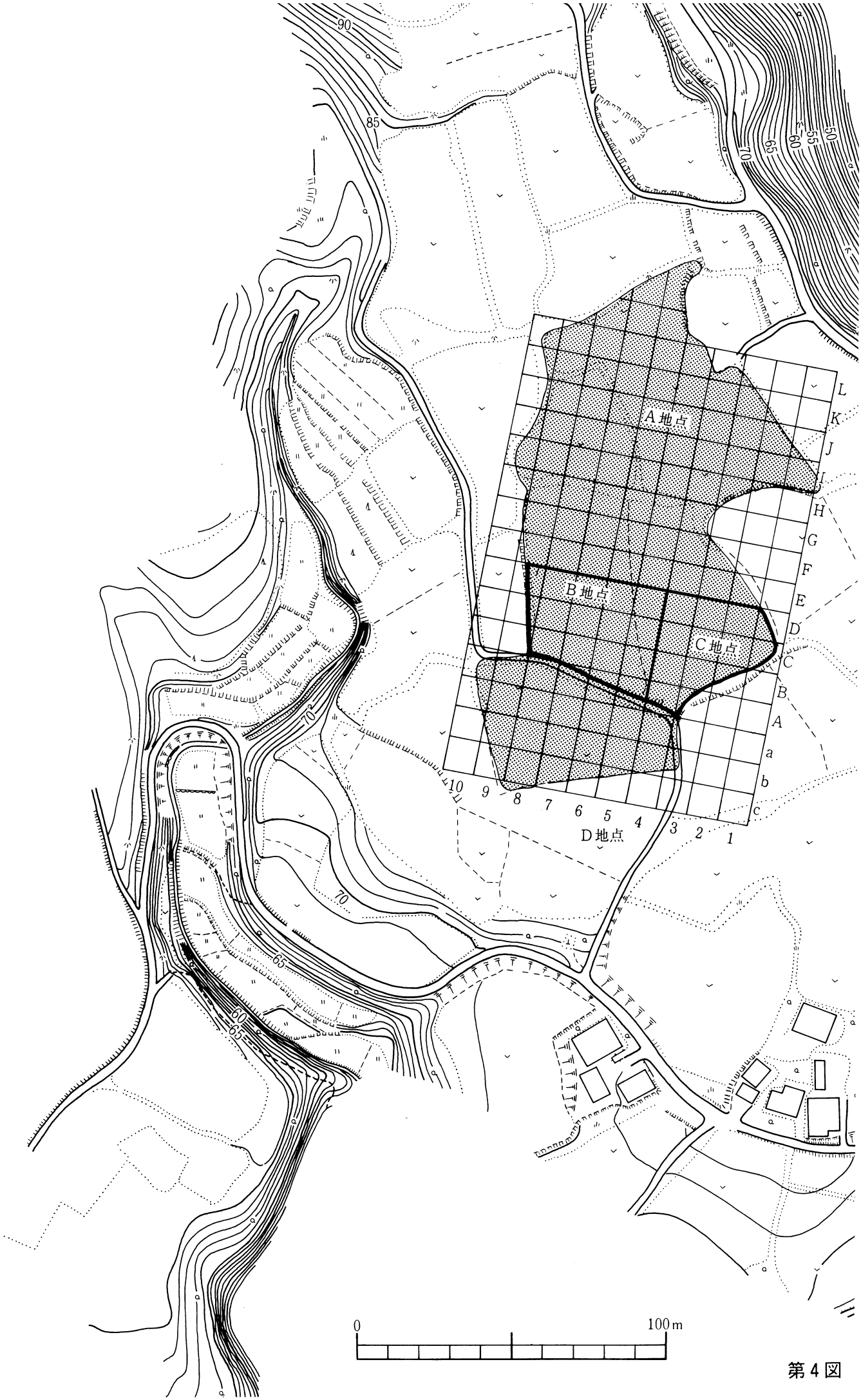
第Ⅴ層――褐色粘質土層で，無遺物層である。

第Ⅵ層――黄色パミス層で，桜島起源のサツマ層である。平均して10cm前後が堆積する。無遺物層である。

第Ⅶ層――褐色粘質土層で，粘性は強度である。

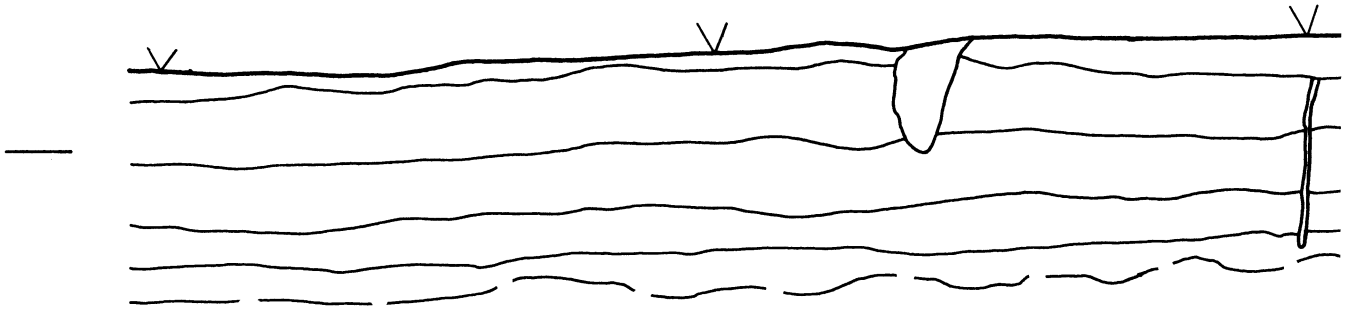
第Ⅷ層――黄褐色粘質土である。無遺物層である。

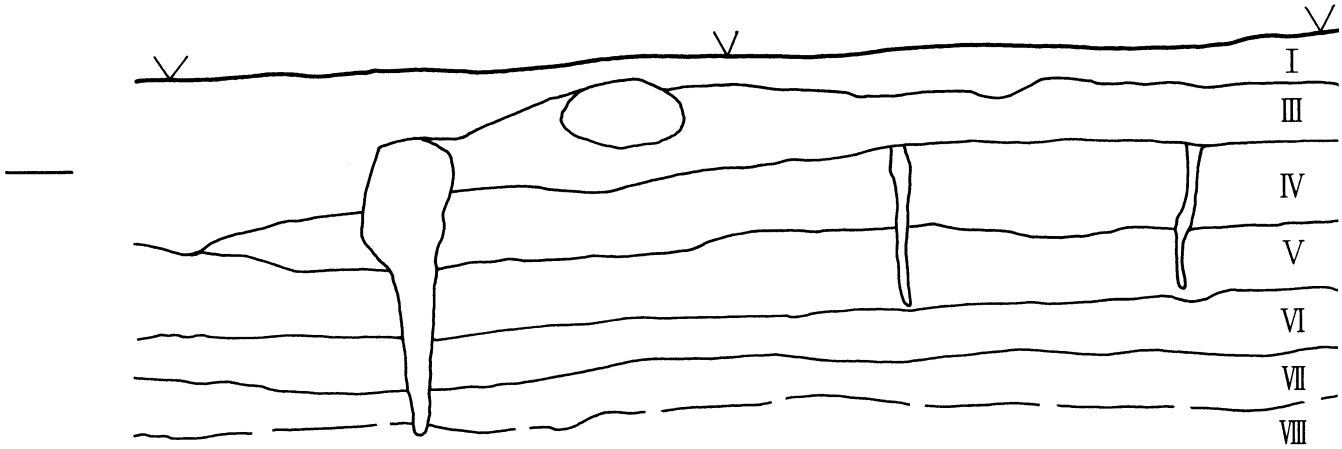
第３図　大園遺跡周辺地形図

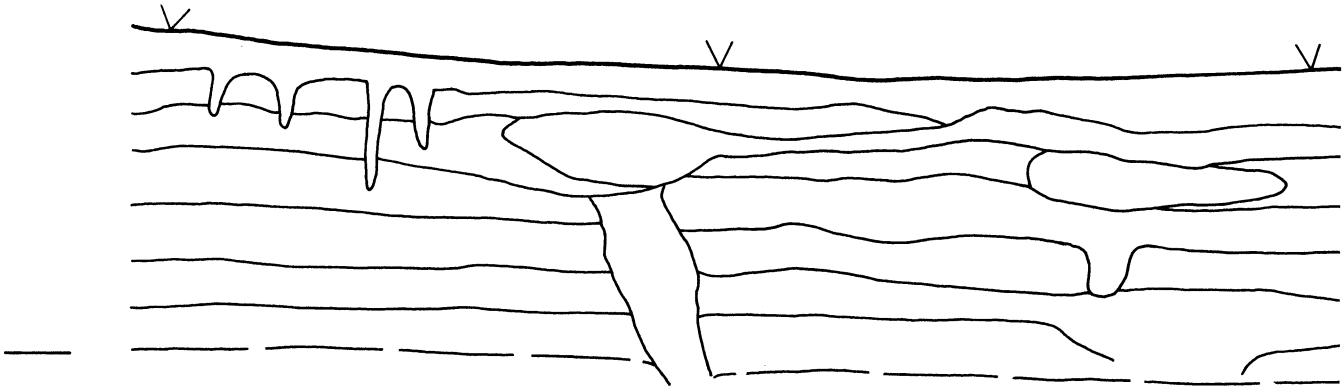

A地点
B地点
C地点
D地点
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
a
b
c
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
90
85
70
65
60
55
50
0
100m

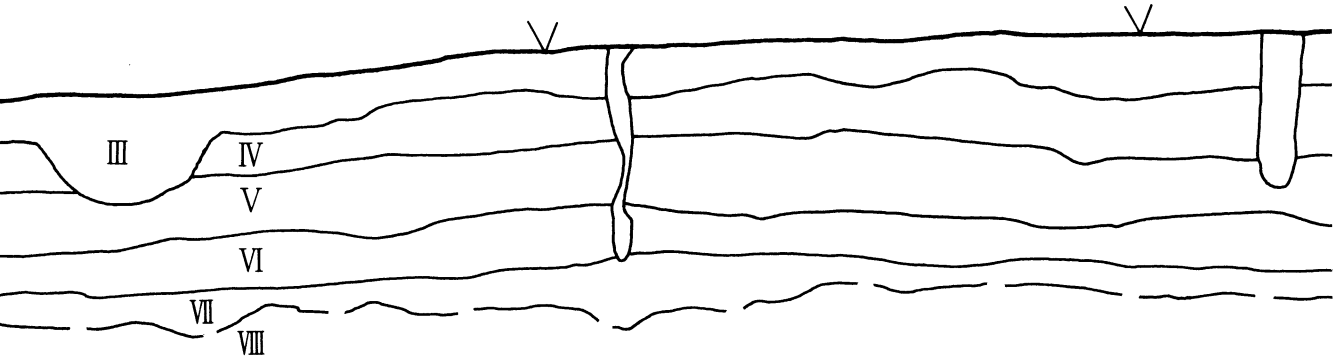
第4図

大園遺跡グリッド配置図

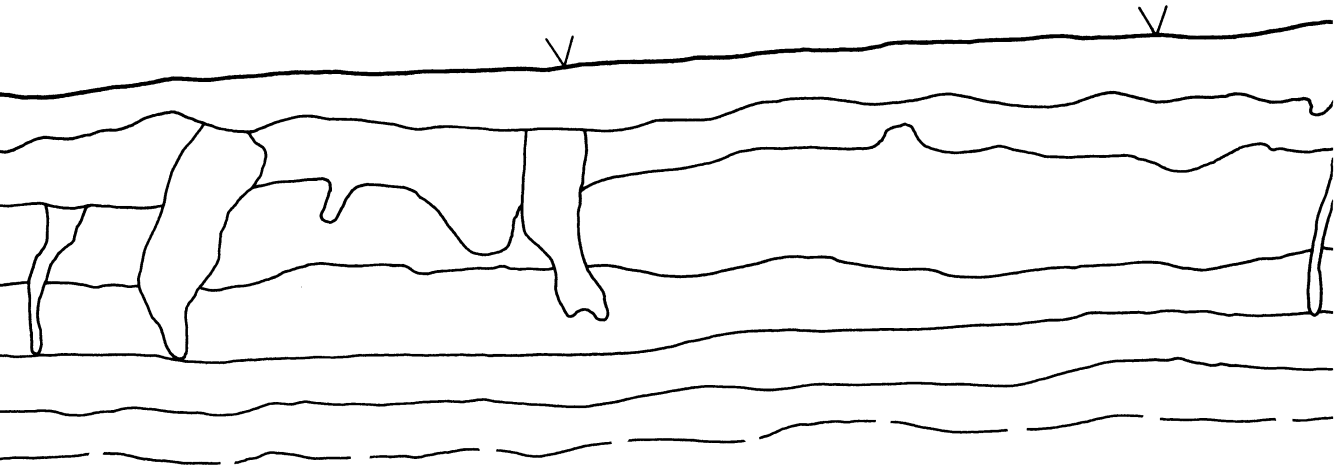


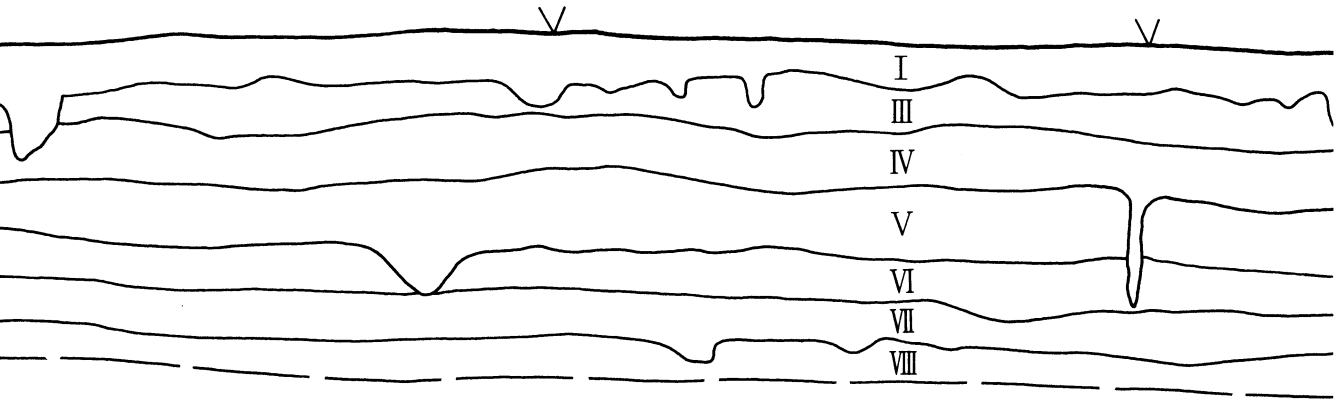

I
III
IV
V
VI
VII
VIII



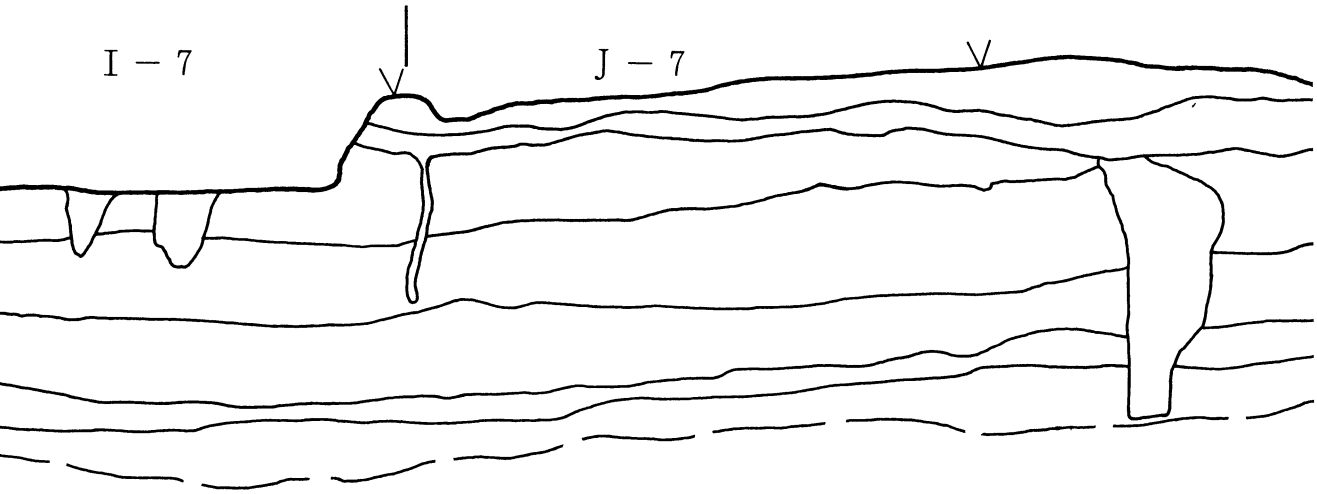


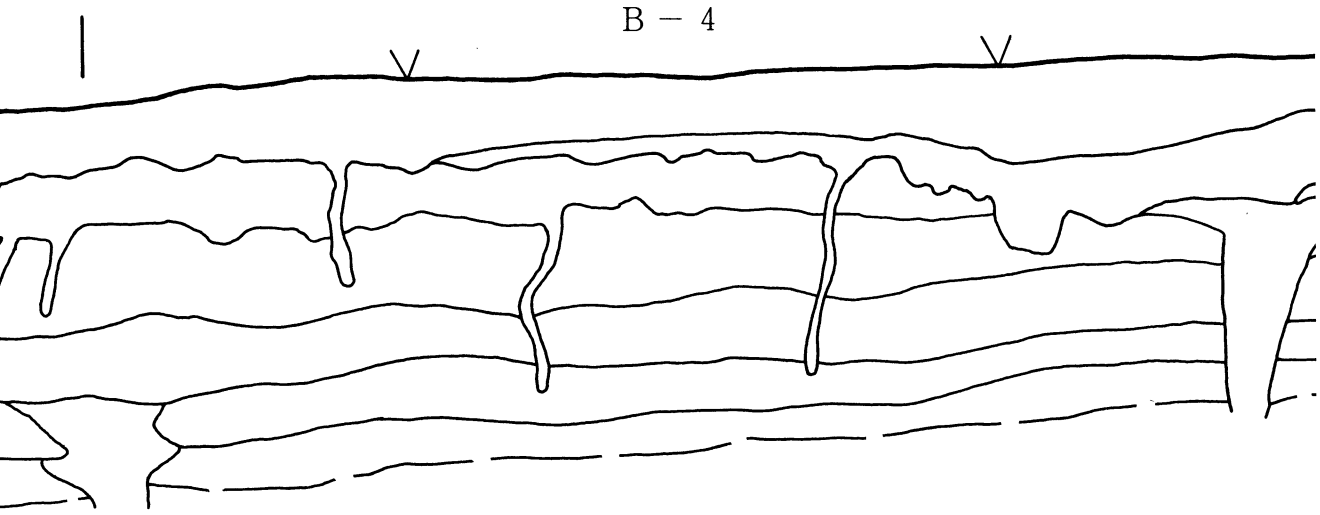
A－4

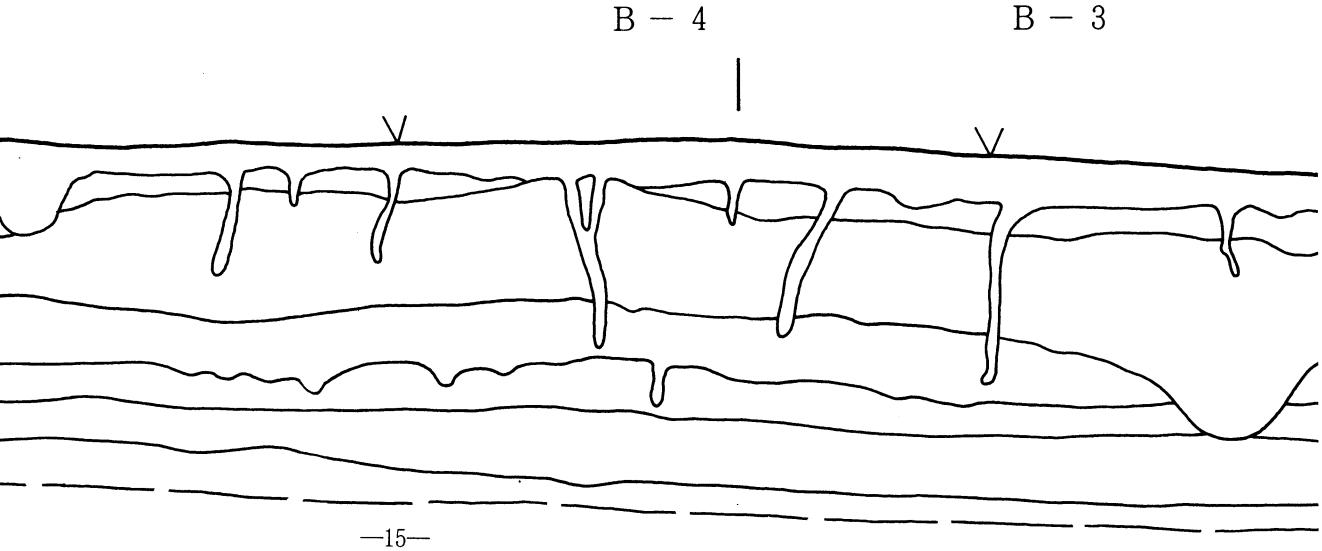


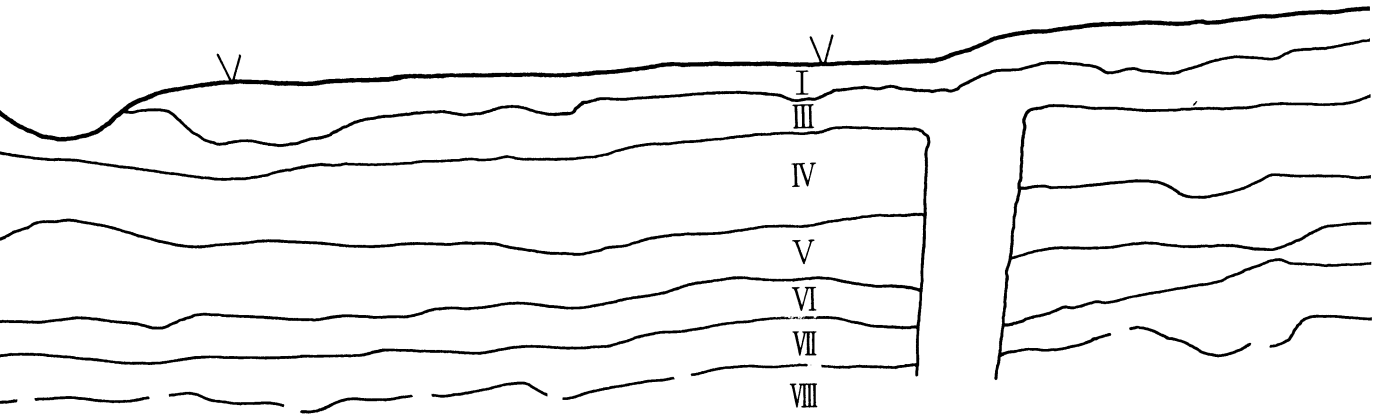


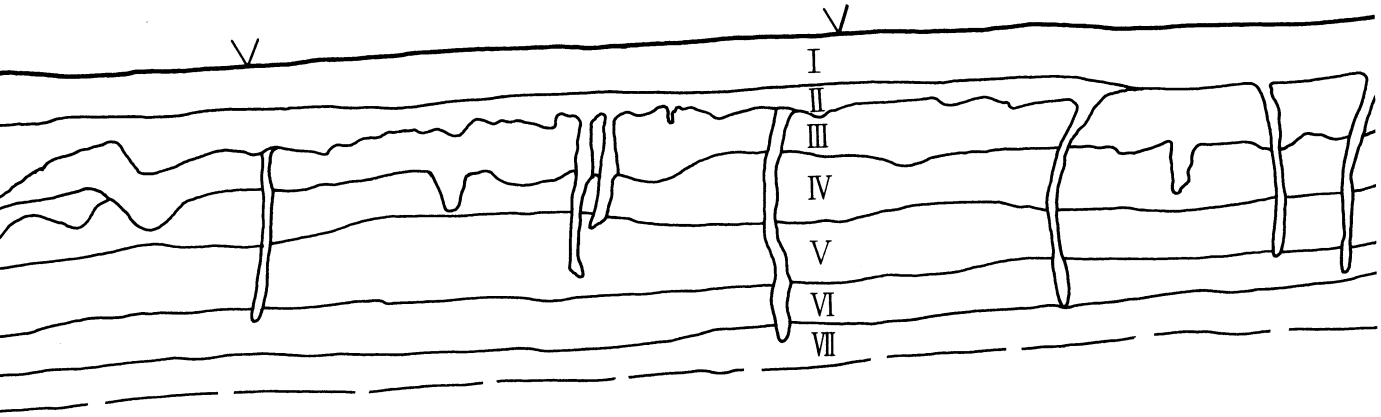
第5図　土層断面図

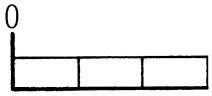

I－7
J－7

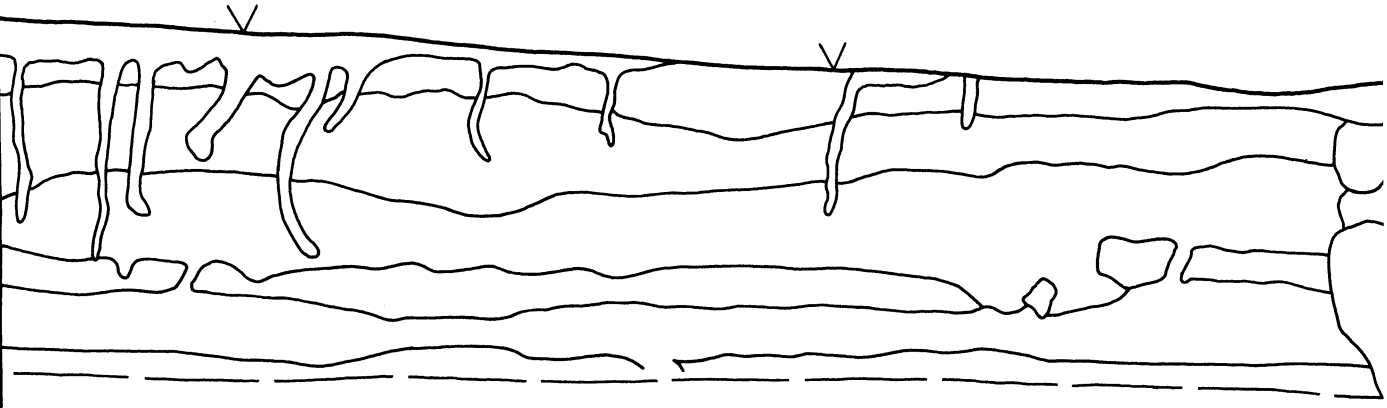

B－4

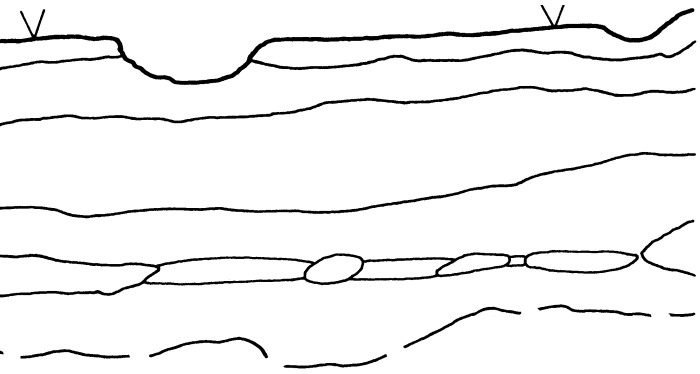

B－4
B－3

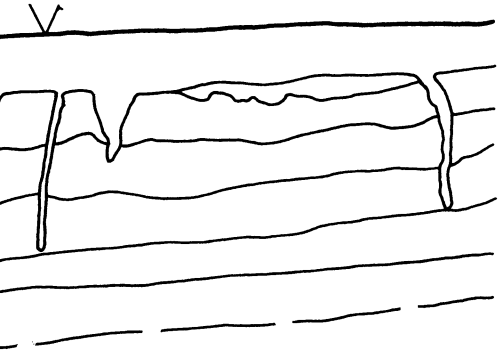

I
III
IV
V
VI
VII
VIII

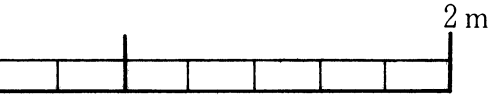

I
II
III
IV
V
VI
VII

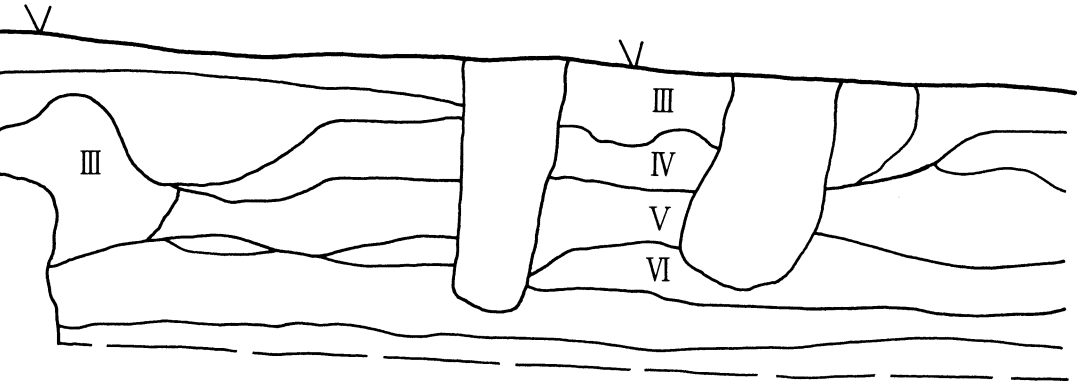

0








2 m


III
III
IV
V
VI

第2節　縄文時代

縄文時代については，主に縄文晩期を中心として，前期，後期の遺物が出土した。また，遺構としては竪穴式遺構や貯蔵穴が発見された。

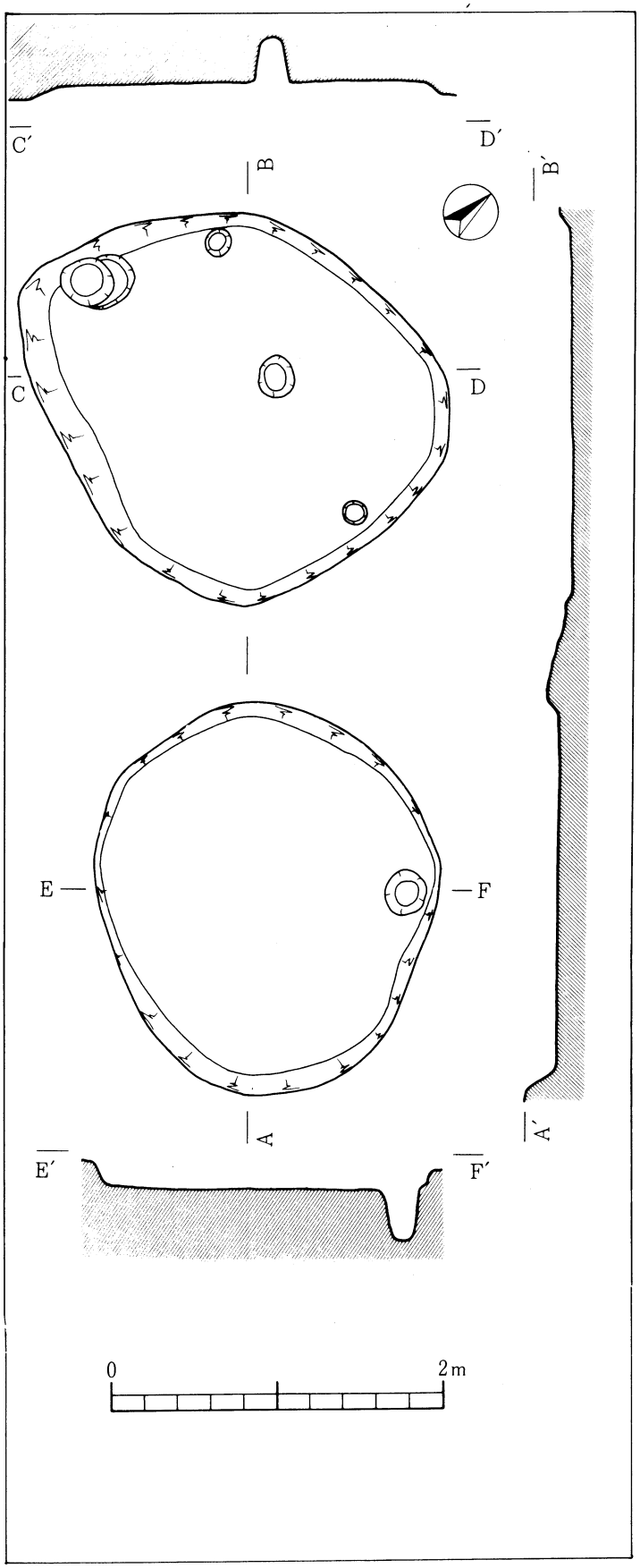
1　遺　構

(1)　竪穴状遺構（第6・7図）

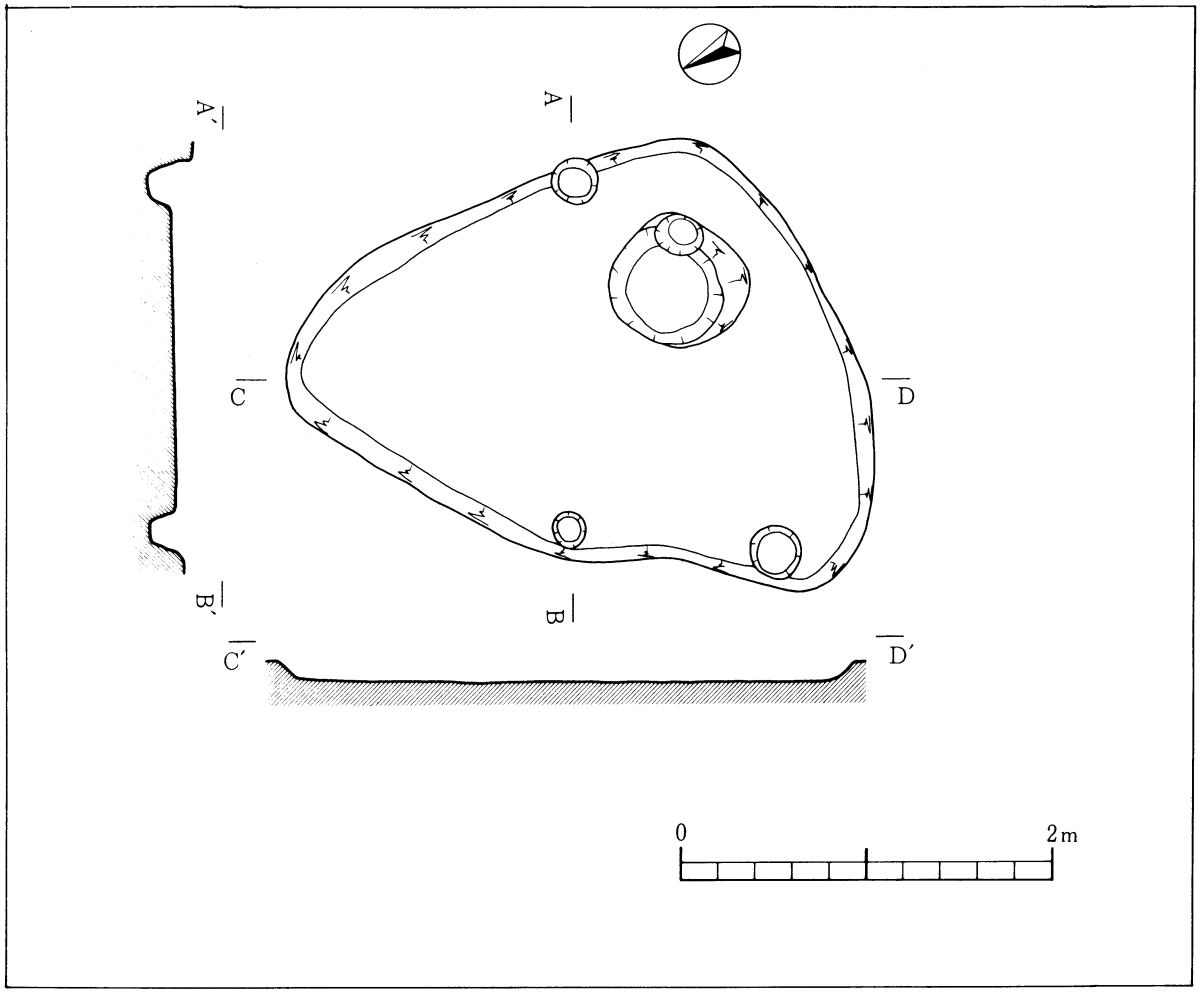
Ⅱ層を埋土とする竪穴状遺構が3基発見された。いずれも遺構上位の大半は耕作等によって削除されていた。わずかに遺構の規模・形状を把握できる程度であり，残存状況は良好といえない。

1号・2号は隣接する位置関係にあり，平面プランは略円形を呈す。1号の規模は長径約240cm，短径約200cmで，深さは約6cm前後で検出された。南の壁際には径20cm，深さ30cmのピットが位置する。2号は長径274cm，短径215cmで深さは約5cm前後である。壁際には径10数センチのピット3個と中央付近に20cm前後のピットが発見された。3号竪穴状遺構は，径約120cmで略円形を呈している。深さは約12cmである。壁際の床面には径18cm～22cmで，深さ13cm～20cmのピットが3個と，北よりに径約80cm，深さ34cmの土坑が検出された。

なお，竪穴状遺構からは遺物は出土しなかったが，埋土の状況から縄文後期～晩期相当期に想定されよう。また，遺構の形状やピットの存在から竪穴住居と思われる。



第6図　竪穴状遺構1（上），竪穴状遺構2（下）実測図



第7図　竪穴状遺構3実測図

(2)　貯蔵穴（第10図）

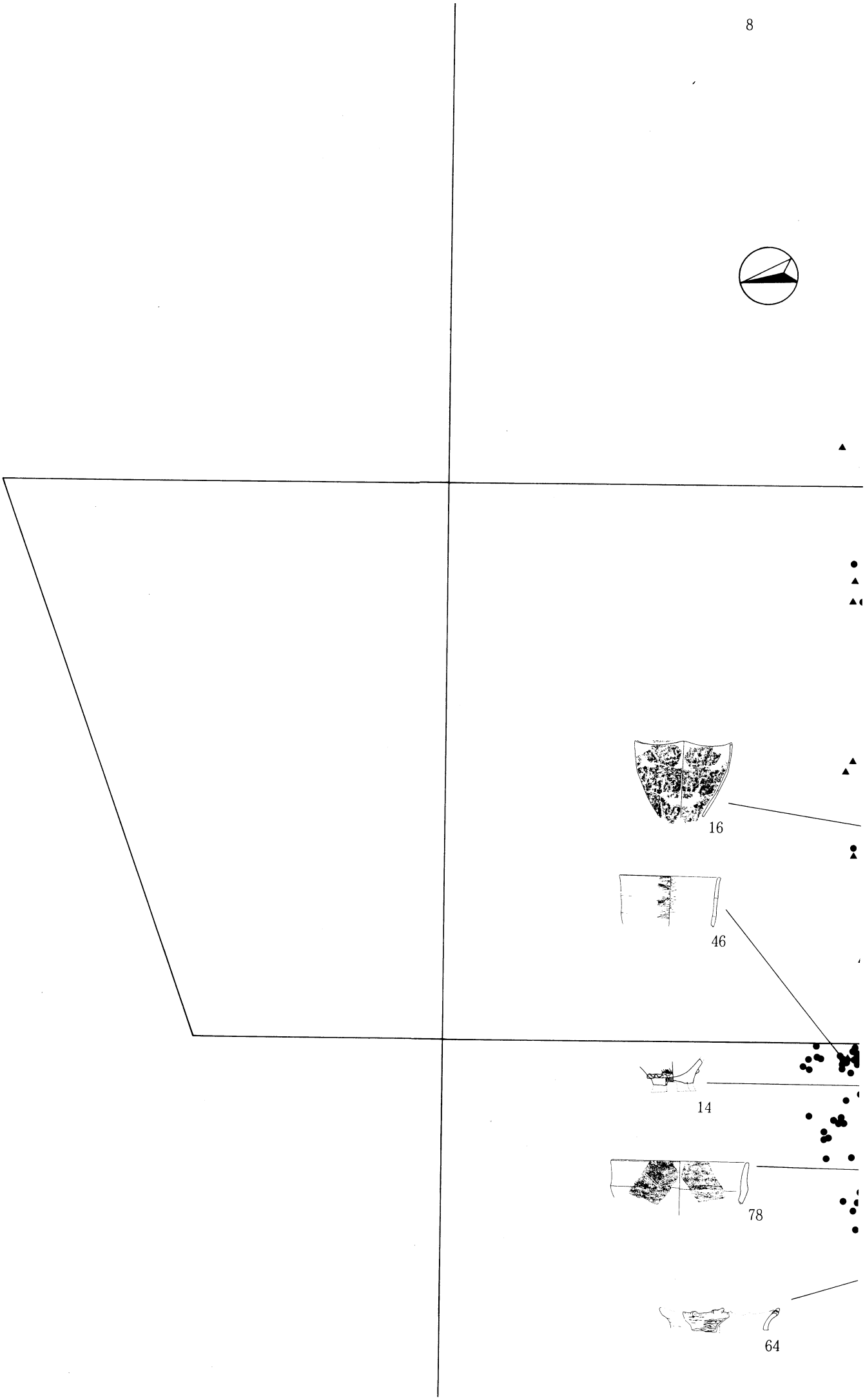
平面プランは略円形を呈し径約120cmである。掘り方はほぼ垂直で，底面は平坦となる深さ約50cmである。貯蔵穴内から縄文後期の土器片や礫，炭化した植物遺体が出土した。これらの遺物は埋土中の浮いた状態で検出された。

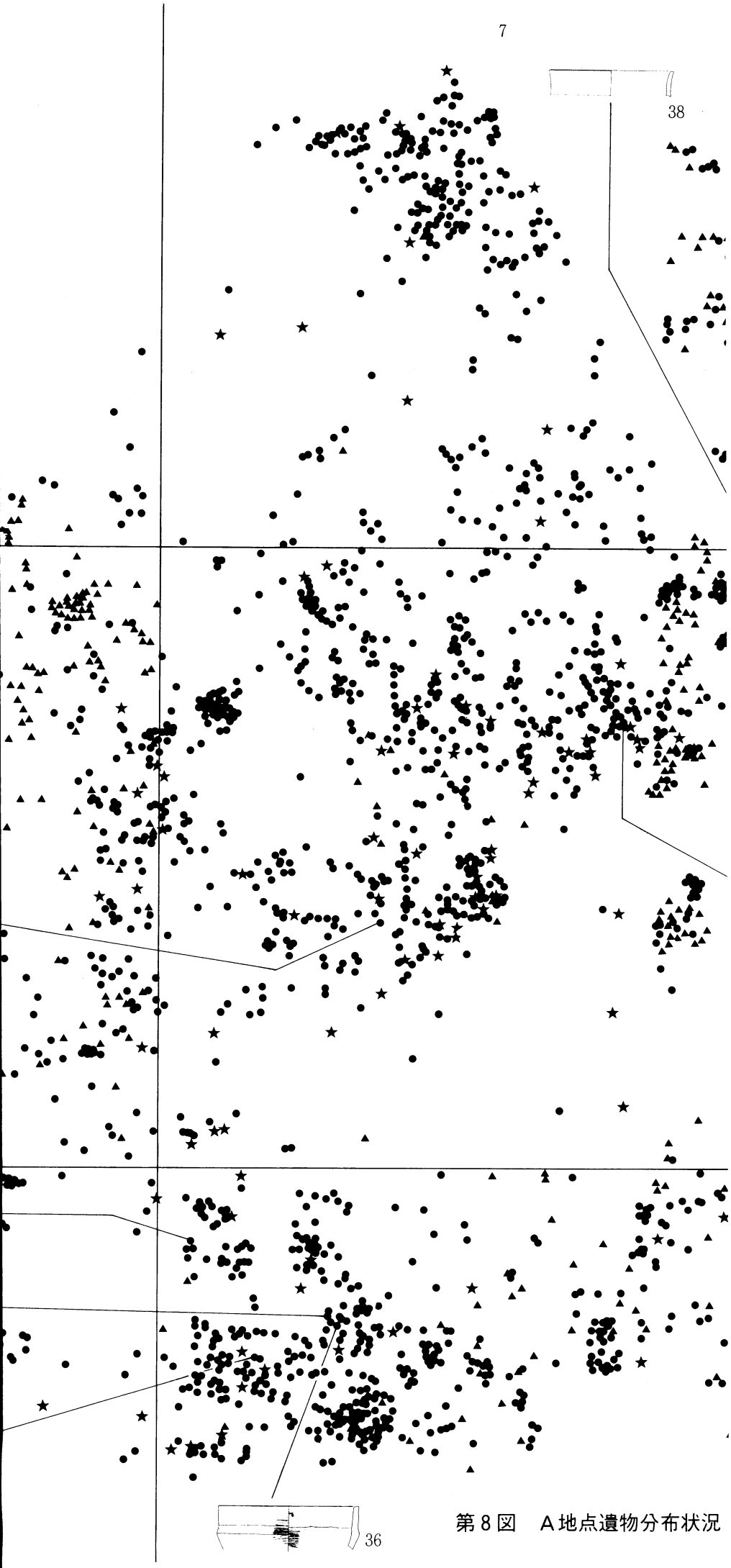
A．出土土器（第10図）

1は口縁部は直行し，径22cmの波状口縁となる鉢形土器である。器面には横位に弱い貝殻状痕が施されている。波状口縁部の直下を頂点として2本の篦描き平行沈線による幾何学文を施文する。色調は赤褐色を呈し，胎土には石英を含む。焼成はやや軟弱である。縄文後期の指宿式土器である。2は2本の篦描き沈線文間に篦による刻み目文を施す鉢形土器の胴部片である。外面は丁寧な刷毛調整が施されている。3は口径16cmで直行する口縁部で無文土器である4は口縁部は外反し，口唇部は平坦で指頭によるキザミを施す。5は底部から外反して胴部へ移行する，上底気味の径10.2cmの平底である。いずれも縄文後期の所産である。

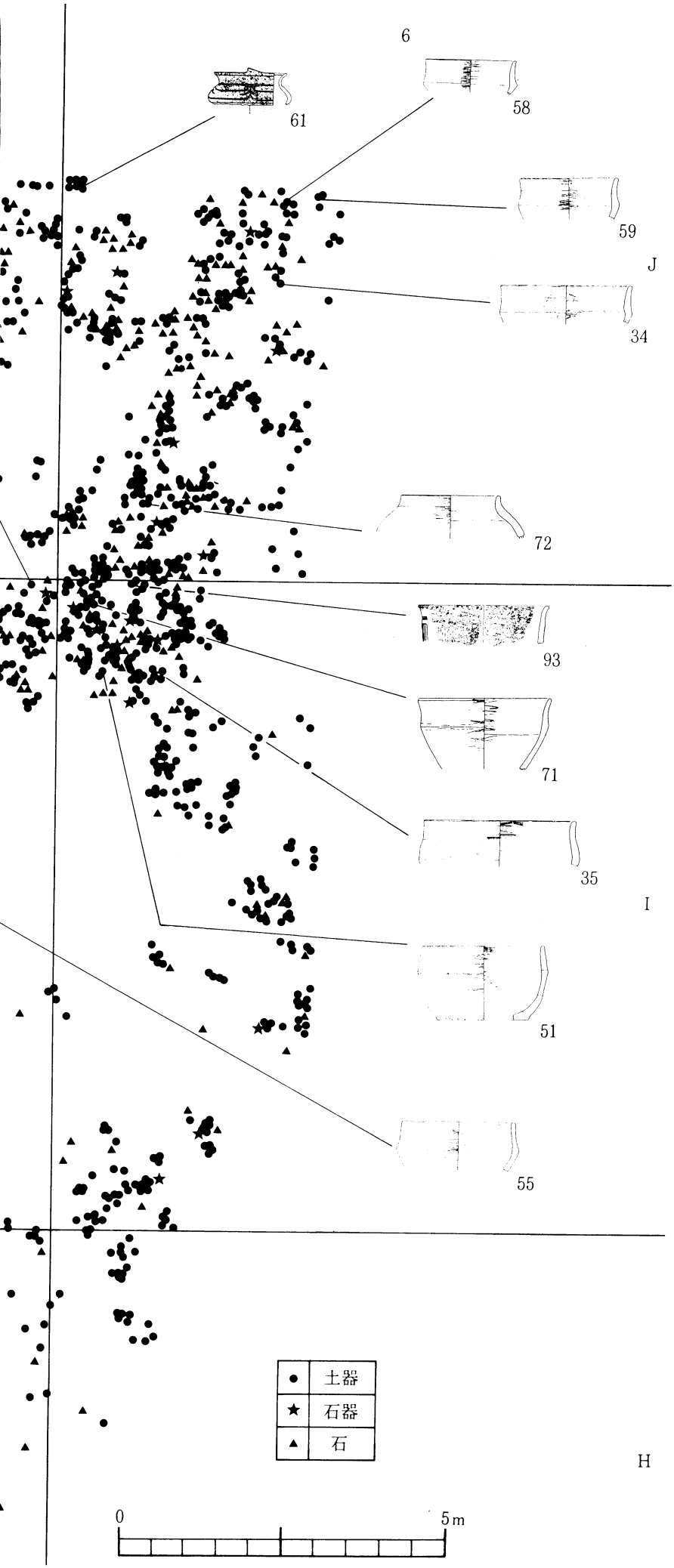
B．植物遺体

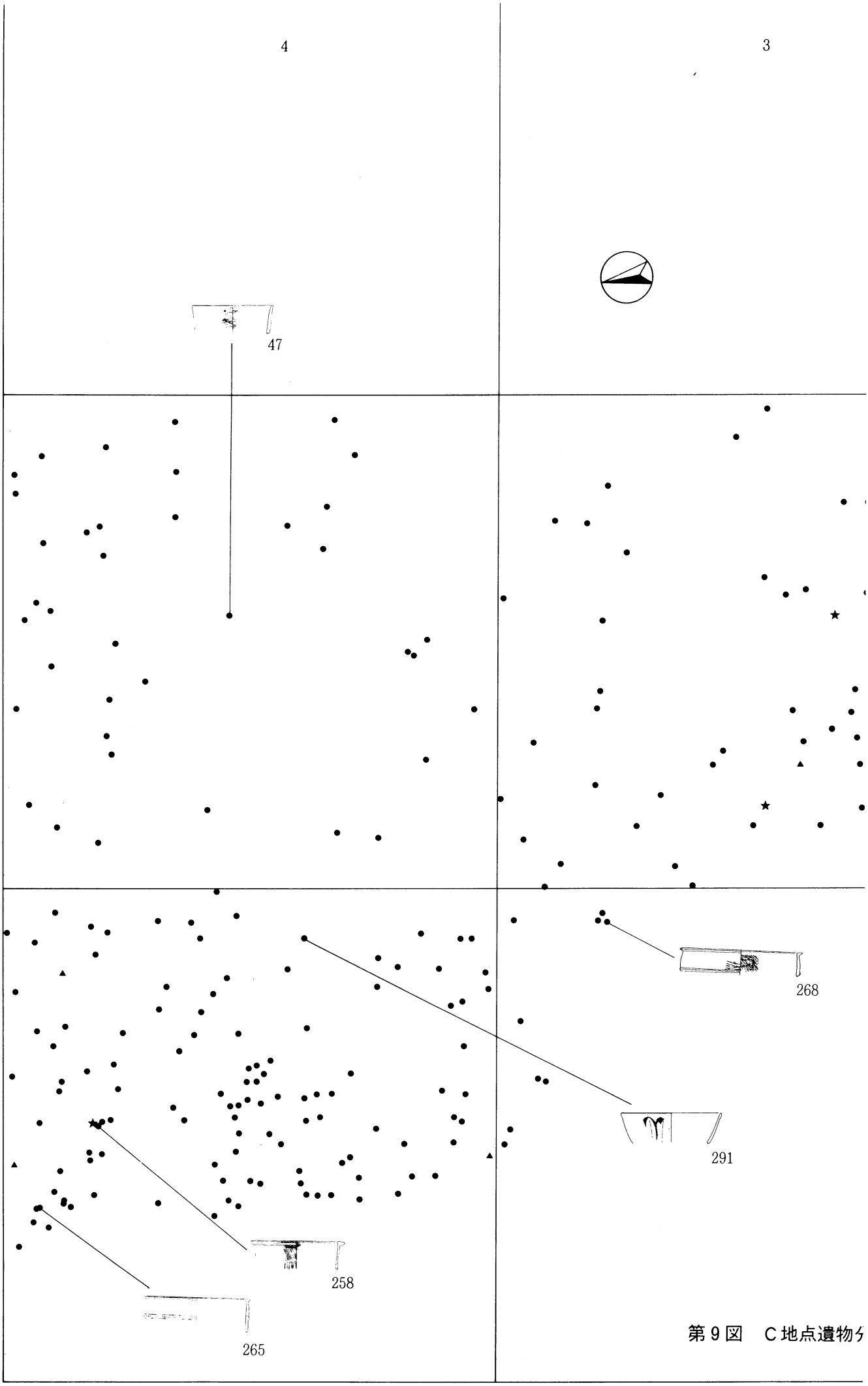
植物遺体は炭化種子32点が出土した。このなかで種子の全容を復元できたもの7個と半分復元できたもの2個である。種子についてはブナ科の種子よりもやや大型で長細いものや丸いものなどの


16
46
14
78
64

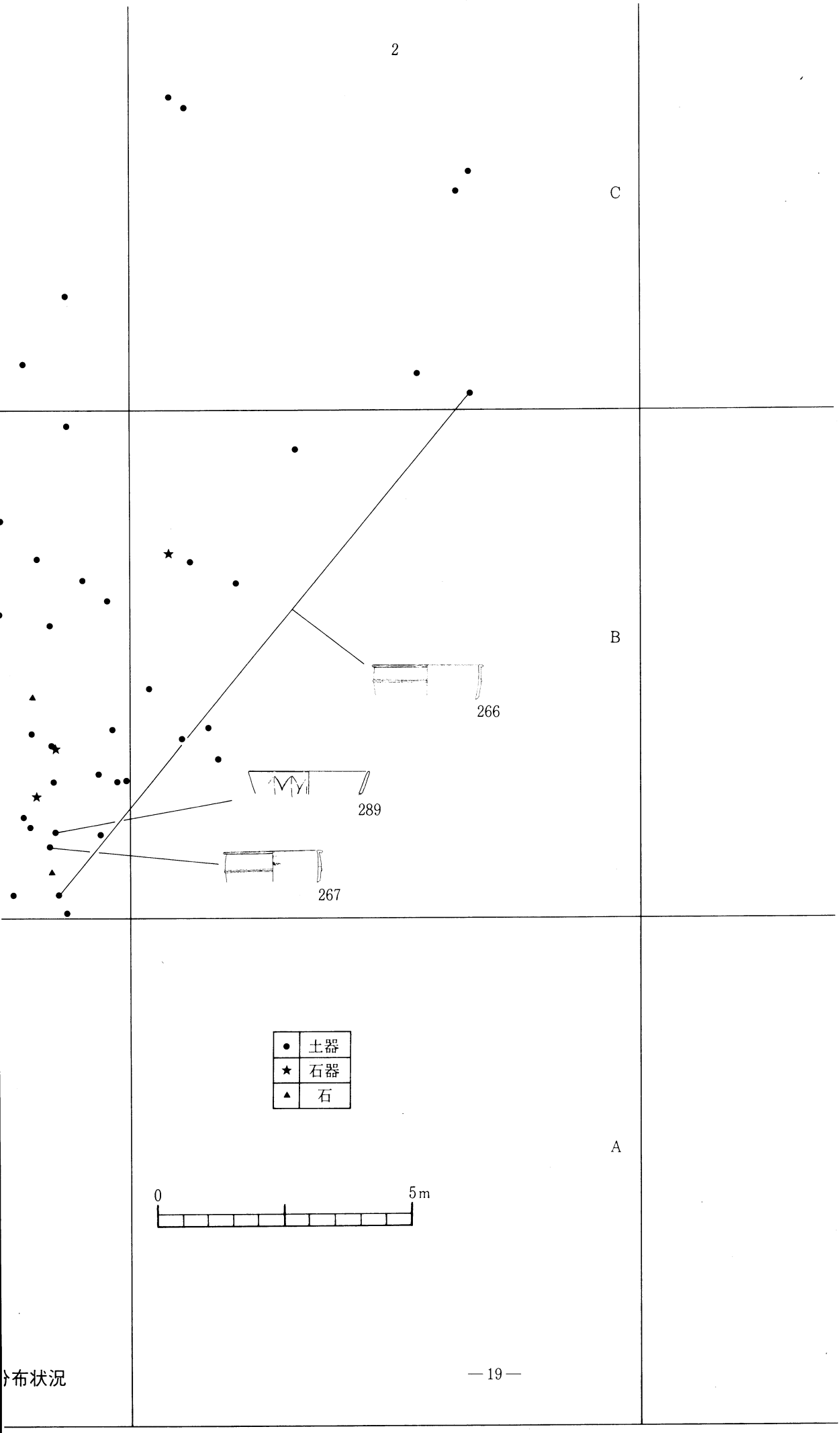


第８図　Ａ地点遺物分布状況

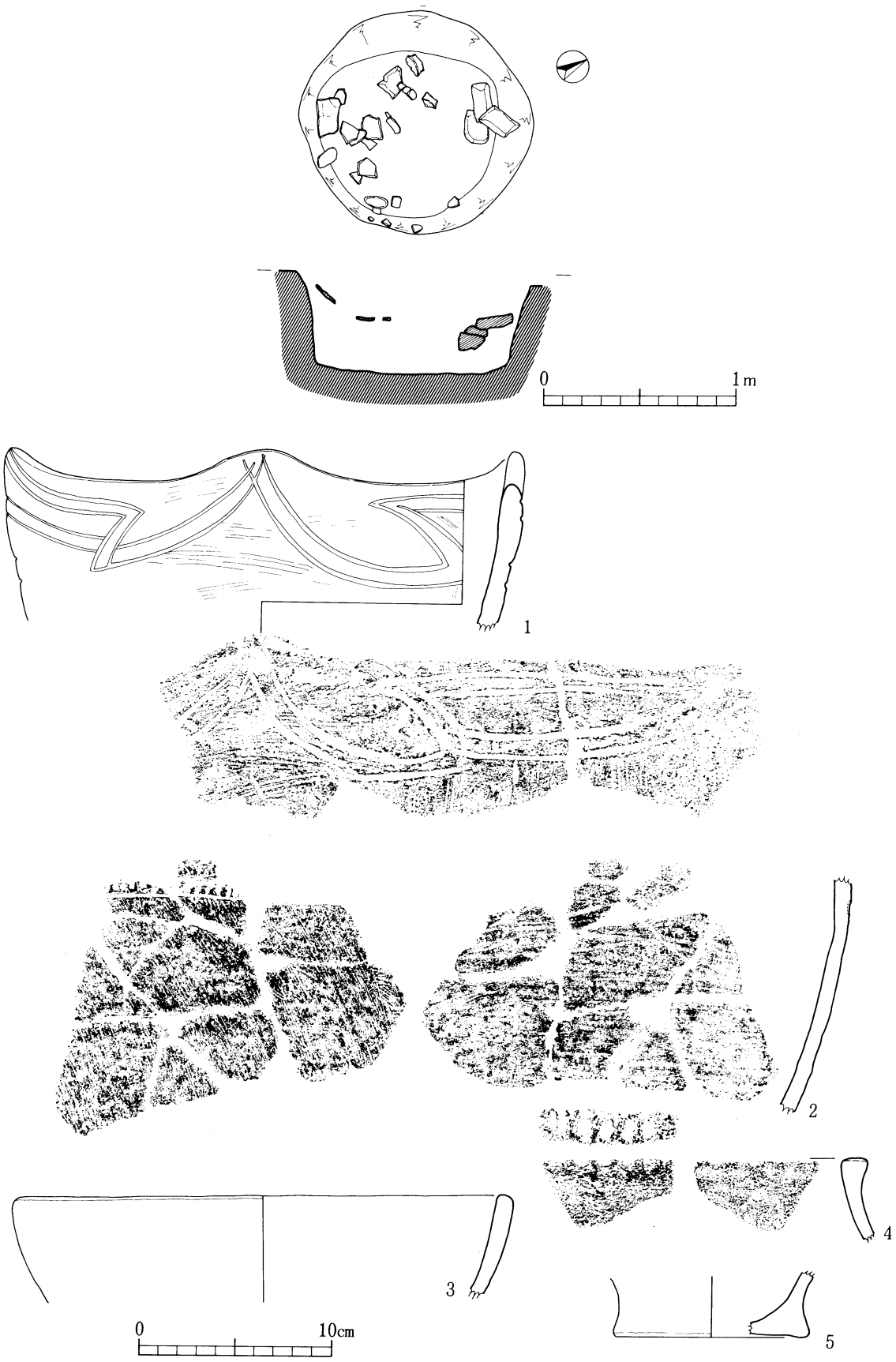

6
61
58
59
J
34
72
93
71
35
I
51
55
H
土器
石器
石
0
5m



第９図　Ｃ地点遺物分



分布状況



第10図　貯蔵穴及び貯蔵穴内出土遺物

形状がみられるが，クスノキ科の種子で，バリバリノキ Actinodaphne logifolia(Biume)，またはハマビワ Litsea japonica(Thunb) であろう。

2　遺　物（第11図）

出土遺物には，縄文晩期の土器を主体に前期，後期の土器をはじめ，磨製・打製石斧，磨石など多数の石器が出土した。

A　土　器

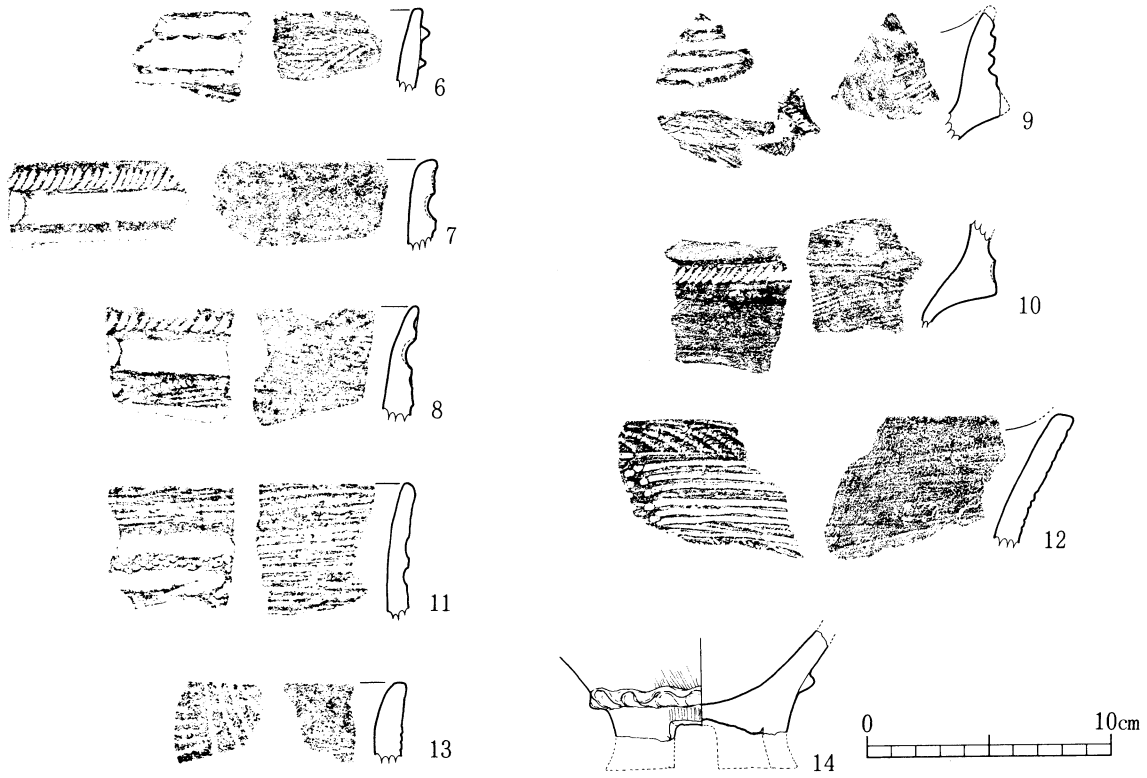
土器については，13類に細分して分類した。

Ⅰ類土器（第11図－６）

Ⅰ類土器は１点が出土した。６は丁寧に張付けた微隆凸帯を横位に施す口縁部片である。内外両面ともに貝殻状痕文が施される。縄文前期の轟式土器である。

Ⅱ類土器（第11図－７～11）

口縁部は平坦に仕上げ器壁は均一で薄い７，８，11と波状口縁を呈す口縁部は肥厚し，口縁部端部で「く」字状に屈折して頸部に以降する９，10がある。文様は太い凹線文と竹管による刺突がみられる７，８，10と細線の沈線文を複数施す９がある。いずれも内外面とも貝殻状痕による調整が施されている。縄文後期前葉の市来式土器である。



第11図　土器実測図

Ⅲ類土器（第11図－12）

12の口縁部は外反し，波状口縁となる。口唇部は平坦に仕上げる。口縁直下に貝殻腹縁による斜位刺突文と複数の細線文を直線的に横位に複数施す。丸尾タイプである。

その他（第11図－13～14）

13はやや外開きで直行する口縁部である。口縁直下に篦先による沈線文を縦横に複数施文する。14は３か所に方形の透かしを持つ脚状の底部である。また，脚部と体部の接合部に指でつまんだ波状の文様となる張り付け凸帯を巡らす。貝殻による器面調整を施している。いずれも縄文後期のものと思われる。

Ⅳ類土器（第12図）

Ⅳ類土器は，有文と無文の２種類がある。器形は比較的小型の平底で，立ち上がりはやや外反し，体部は大きく開き，直行またはわずかに内湾する口縁部となる鉢形土器である。口唇部はやや肥厚し，平坦にとなる。文様帯は口縁部，口唇部に集約される。器壁は非常に薄く繊細である。胎土に金雲母を含むものが多い。縄文後期の一湊式土器である。

Ⅳａ類土器（第12図－15～26）

15は復元径33.5cmを測る。口縁部はやや内湾し波状口縁を呈す。口唇部は平坦に仕上げ細かなキザミ目文を施し，口縁部内面には横１列，外面には横２列の斜め連続刺突文をそれぞれ施している。内外面は弱い篦による調整痕がみられる。器壁は比較的厚い。16は復元口径27.5cmを測る。胴部から口縁部にかけて大きく開き，口縁部はやや内湾し波状口縁となる。口縁部はやや肥厚し，口唇部は平坦となる。口唇部直下の口縁部内外面には篦を施文具として斜位にキザミ目文と間隔を空けて刺突文を２段に施文し，口唇部にもキザミ目文を付す。内外面に土器製作時の接合部分が顕著にみられ凹みを呈す。外面は縦位，斜位に篦調整を施し胴部下位は篦研磨となる。16と同様な文様構成となる17～24がある。25，26は口唇部と口唇部両端部に刺突文を施す。

Ⅳｂ類土器（第12図－27～28）

27，28は無土器である。口縁部は直行および内傾気味で口唇部は平坦となる。

底　部（第12図－29～31）

29，31，31は底部で，底部径は29は5.5cm，30は６cm，31は７cmの平底である。底部から胴部への立ち上がりは丸味をおび，大きく外反して胴部へ移行する。底部の厚さは器壁の厚さとほぼ同じである。内外面ともに篦調整を施す。また30の外底部は弱い研磨が施されている。

Ⅴ類土器（第13図－16図）

Ⅴ類土器は本遺跡の主体をなす土器群である。器形によって３類に分類した。器壁は厚く，粘土積み上げによる土器制作時の接着部分から剥離するなど，全体的に雑な仕上がりであるがダイナミックな印象を受ける。Ⅴ類土器は縄文時代晩期の黒川式土器である。

ＶＡ類土器（第13図・14図）

32～44のＶＡ類土器は深鉢形土器である。胴部は大きく開き，ゆるやかな「くの字」状に屈曲して内外面に稜を有し，外反する口縁部となる。口唇部は平坦または丸味を呈する。復元口径は約25cm～30cm前後の比較的大型の深鉢形土器である。口縁部内外面は横位の篦調整が施され弱い研磨状となる。また，器面は櫛目状の整形痕が顕著に残す。32～42は無文土器である。43は連点状に規則

正しく径７㎜の竹管文を３段に施文する。44は先細で細かい刺突文をランダムに付す。

ＶＢ類土器（第14・15図）

45～50は胴部から口縁部にかけて直行する円筒状を呈する深鉢形土器である。復元口径は45の34㎝～50の23㎝がある。無文土器で，器面調整は箆調整及び櫛目調整が施され，器壁は厚く整形は雑である45は約３㎝間隔で径７㎜の穴を穿った孔列土器である。直行する口縁部で，口縁端部でここころもち外反し，丸味をおびた口唇部となる。内外面には細かな櫛状の調整痕がみられる。

ＶＣ類土器（第15・16図）

51～60のＶＣ類土器は，口縁部については「くの字」状に屈折して内外面に稜を有し，外反する口縁部となるＶＡ類土器と極めて類似し，破片ではその区別は困難をきたすが，わずかに屈曲度が著しく胴部が丸味をおび，口径の大きさが屈曲部の大きさよりやや小さく，口縁部はやや内傾するなどの差異がみられる。底部は大型の平底となる鉢形土器である。

51は復元口径30㎝，高さ18㎝，底部径22.4㎝の鉢形土器である。外底部から胴部への立ち上がりはやや外反し，丸味を帯びた胴部で口縁部が屈曲し，やや内傾気味の口縁部となる。屈曲部は口縁部径よりやや大きく径31.8㎝を測る。口唇部は平坦となる。外底部に指の跡を顕著に残し，器面には箆による刷毛状の調整痕がみられる。全体的に分厚い器壁である。その他，同類の土器の復元口径は55の27.5㎝～58の18㎝にかけての中型の鉢形土器がある。60は口縁上部に径１㎝前後で円形の補修孔が穿かれている。

Ⅵ類土器（第17図）

61は胴部以下は欠落しているが，土器のスタイルは，胴部下位に段を有し胴部は丸く張り出し，頸部で窄まり，口縁部は外反する。口縁端部で段を有して丸みをおびた口唇部となり，口唇部に三角形の突起を付す鉢形土器である。口径は14.6㎝，胴部径16.7㎝，復元器高は約8.4㎝である。また底部は小型の平底と想定される。文様は，頸部に沈線を巡らし，胴部には「長楕円文」と上下の位置に「間延びしたＵ字状文」，「Ｕ字文」，「Ｖ字文」，「逆Ｖ字文」の形状をした沈線文を単位とする文様を４か所に施文している。全体的に弱い風化を受けているが，研磨土器と思われる。また，沈線内に「朱」が観察され，朱塗りの土器であったことがうかがわれる。器形や文様構成から縄文時代晩期の土器である。

Ⅶ類土器（第18図）

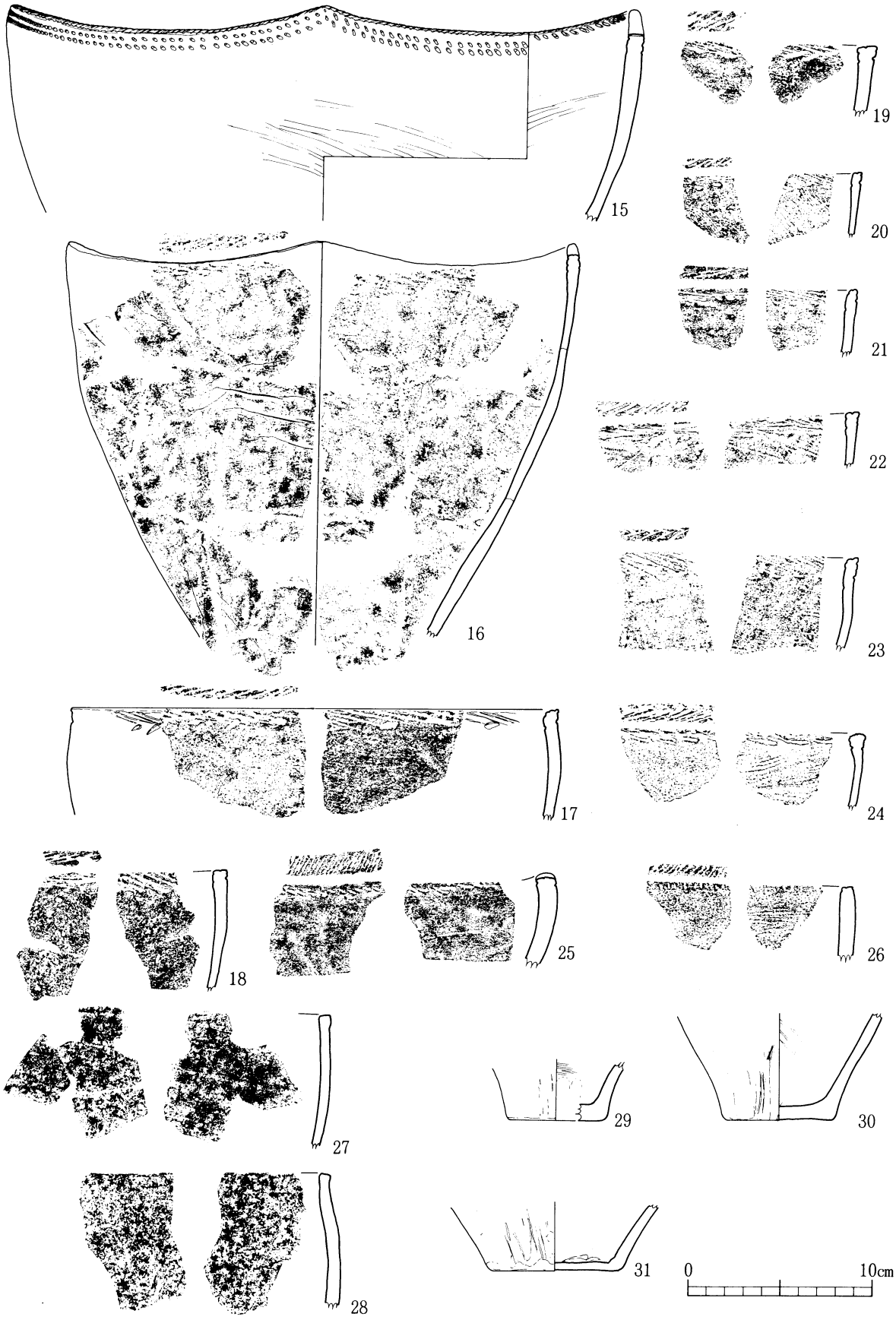
Ⅶ類土器は縄文晩期研磨土器である。浅鉢形土器，深鉢形土器と壺形土器に分類される。縄文晩期黒川式相当の土器の一群である。

ⅦＡ類土器（第18図）

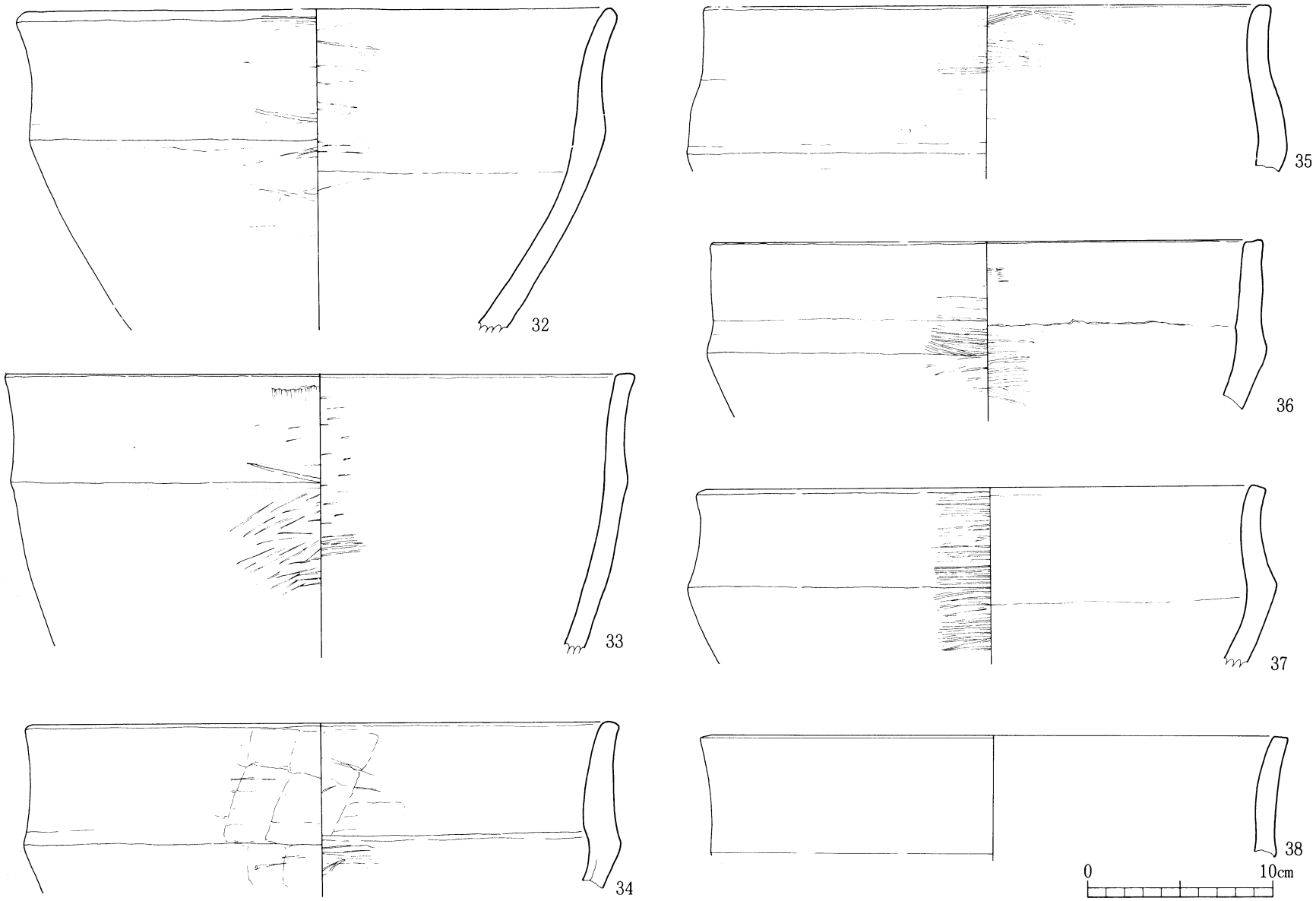
62，63は浅鉢形土器である。62は胴部と頸部で「く」字状に屈折し内外面に稜を有する胴部片である。胴部復元径23.7㎝を測る。器面には細かい箆研磨痕がみられる。63は頸部から外反する口縁部で口径21.2㎝ある。波状口縁を呈し，波状口縁の頂部と谷部に突起を施す。箆研磨を施す。

ⅦＢ類土器（第18図）

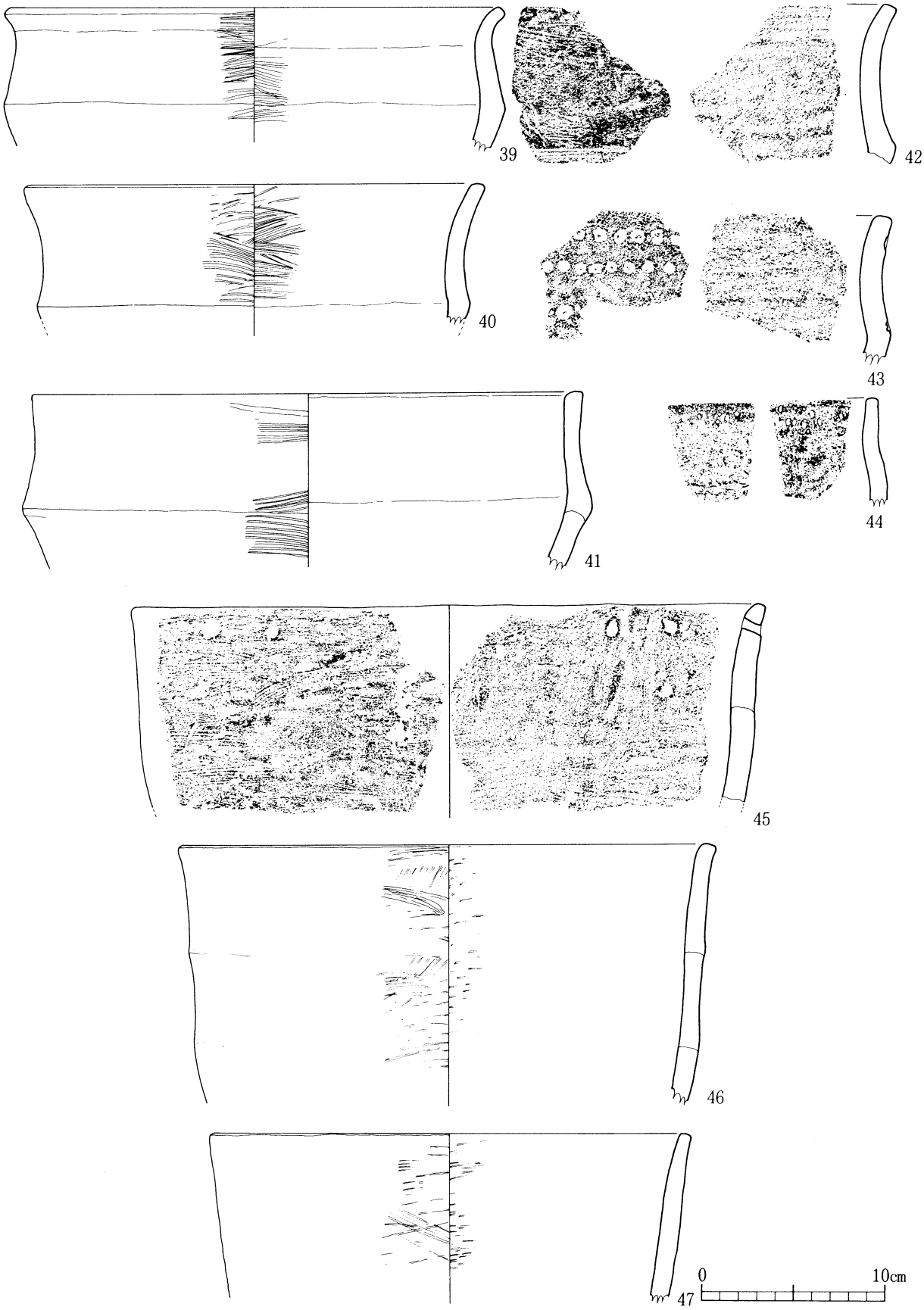
64から67は深鉢形土器である。65は外開きで直行する口縁部である。波状口縁部口縁部端部に凹線を付す。67は頸部にリボン状の張り付け突起を施す。



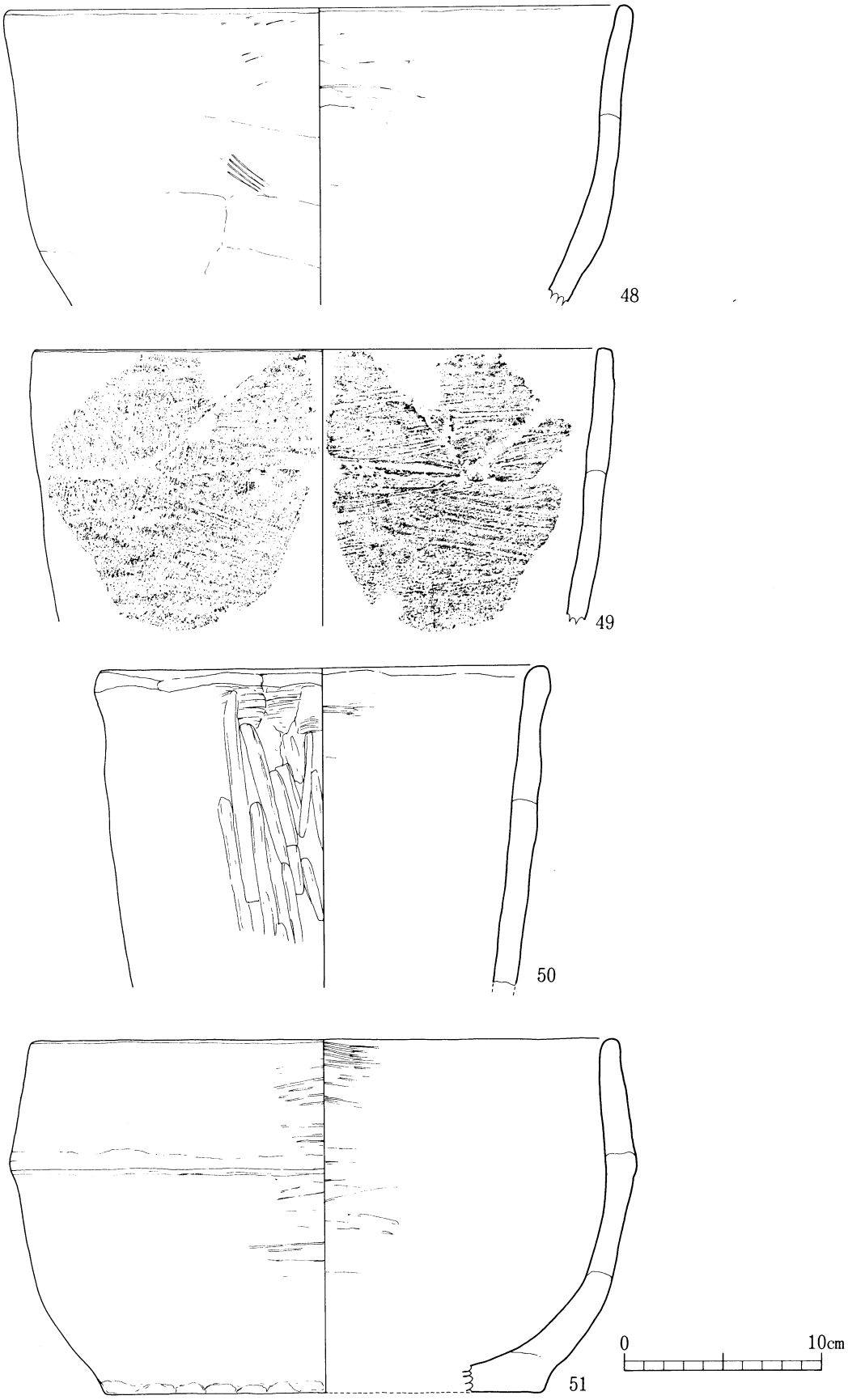
第12図　土器実測図



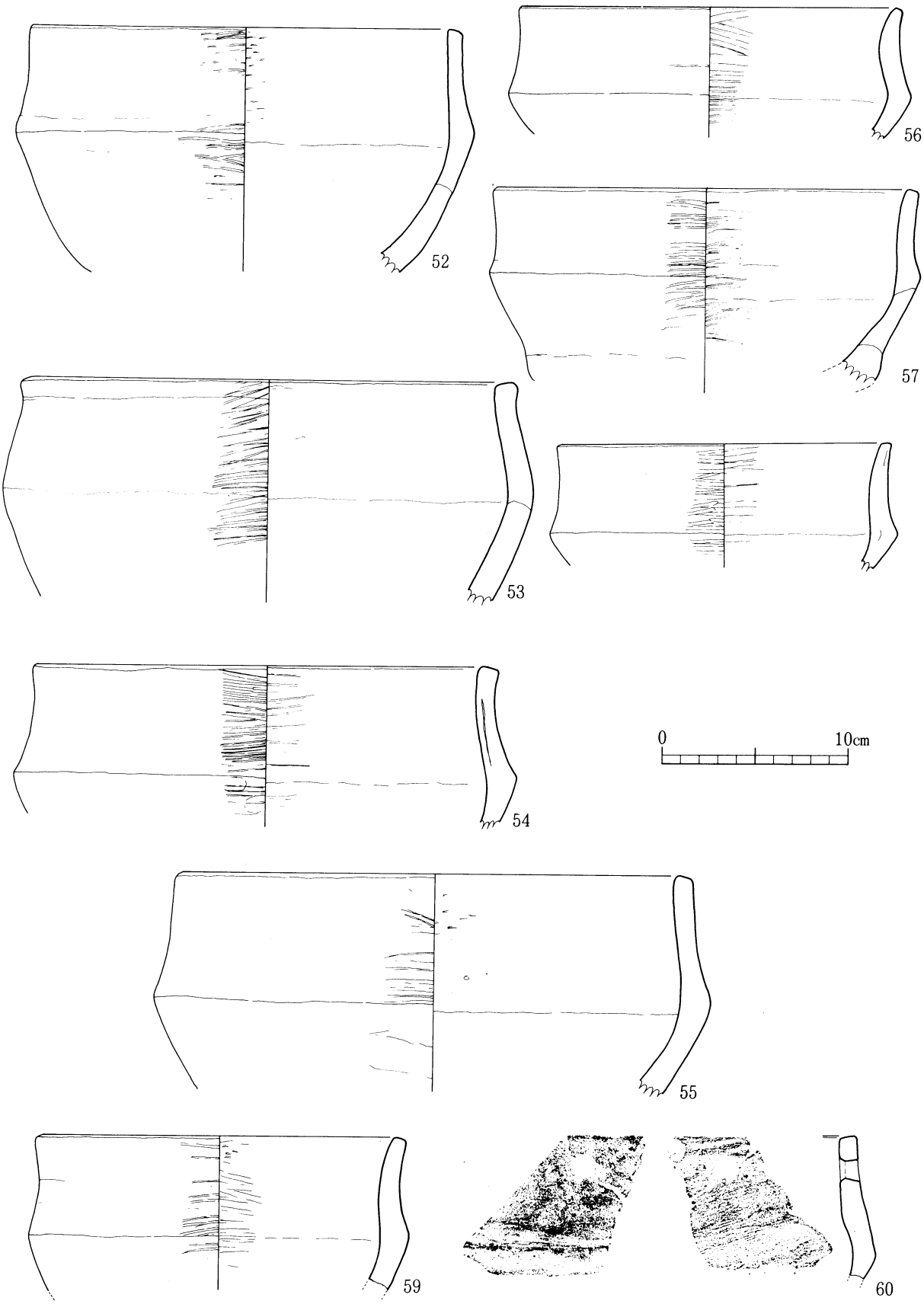
第13図　土器実測図



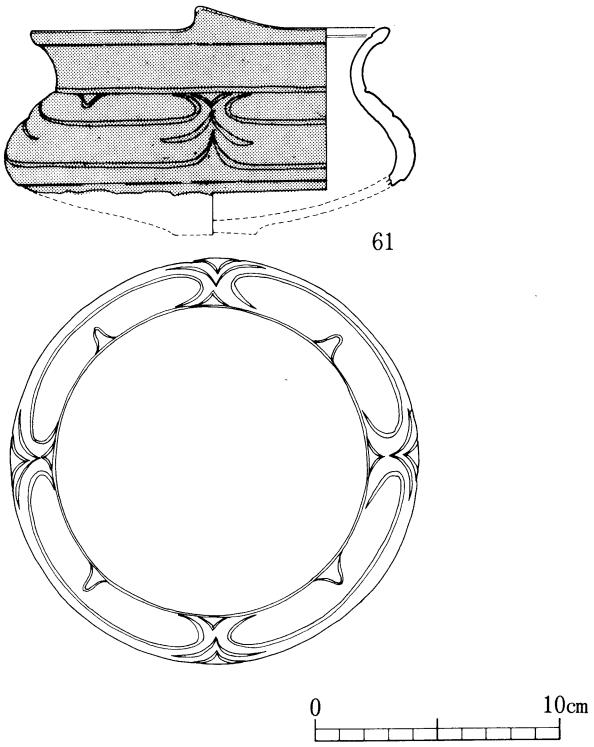
第14図　土器実測図



第15図　土器実測図



第16図　土器実測図



第17図　土器実測図

Ⅶ C 類土器（第19図）

68～72の土器群で壺型土器である。68は胴部が張り，頸部でしまりやや外反して直行する口縁部で，口唇部は平坦を呈す。口縁及部び胴部は両サイドに拡張し，復元口径13cmと15cm，胴部23cmと28.5cmとなる楕円形の横瓶状を呈した壺型土器である。器壁は比較的厚く，丁寧な篦研磨が施されている。底部付近はさらに肥厚し丸底を想定する。70は壺形土器の肩部である。二重の篦描き重弧文を施している。71は頸部に三角凸帯文を付す。篦研磨の朱塗りの壺形土器である。72は復元口径15cmの短頸壺形土器である。器壁は肥厚したものである。

Ⅷ類土器（第20図）

73～77のⅧ類土器は孔列文土器である。形態的にはⅤ類土器に類似し，同時期の様式と思われる。これらの土器はわずかに外反し外開きの口縁部となり，口唇部は丸及び平坦となる深鉢形土器である。孔列文は，73は1.5cm間隔で径３㎜の孔，74，75，76，77は３cm間隔で径約５㎜の孔を丁寧に穿っている。73は口縁部下に粘土張り付け凸帯文を巡らす。内面は篦状施文具による刷毛目と外面は横位の刷毛目と縦位の篦研磨が施されている。その他の土器も同様な器面調整が施されている。

Ⅸ類土器（第20図）

78～81の土器も形態的にはⅤ類土器に類似し，同時期の様式と思われるが，口縁部に文様を施す一群である。78は復元口径24.5cmで口縁部はわずか屈曲して稜を有し，わずかに外反する深鉢形土器である。78,79,80の口縁部には３本～４本を単位に篦描き鋸歯文を付す。81は口縁部下に粘土張

り付け凸帯文を巡らし，２本を単位として篦描き鋸歯文を付している。

Ⅹ類土器（第21図）

82～92は「くの字」状に屈曲し稜を有し，外反する口縁部で，口唇部は平坦となり口縁端部と屈曲部に押圧のキザミ目文を施す深鉢形土器である。全体的に器壁は厚い。内外面の調整には篦状施文具による刷毛目調整を施す。82は「くの字」状に屈曲し稜を有した外反する口縁部である。口唇部は平坦となる。口縁端部と屈曲部に大型の押圧によるキザミ目文を明瞭（強く）に施す。キザミ目文の大きさには２種類があり，大型の82,83,84,85,86,87，91と小型の88,89がある。87には屈曲部に篦による明瞭な「×」印の篦書き文様を施している。90は屈曲部の上位に貝殻押圧のキザミ目文，92は屈曲部にキザミ目文と口縁部に篦描き鋸歯文がみられる。

Ⅺ類土器（第21図）

93は直口する口縁部で，口縁端部がわずかに外反する深鉢形土器である。口縁端部にはキザミ目突帯文を施し，胴部には平行する横位，縦位の３条の沈線文の区画に縦位の数条の沈線文を単位とした文様を施している。器壁は厚く，篦調整痕がみられる。形式不明の土器である。

Ⅻ類土器（第21図）

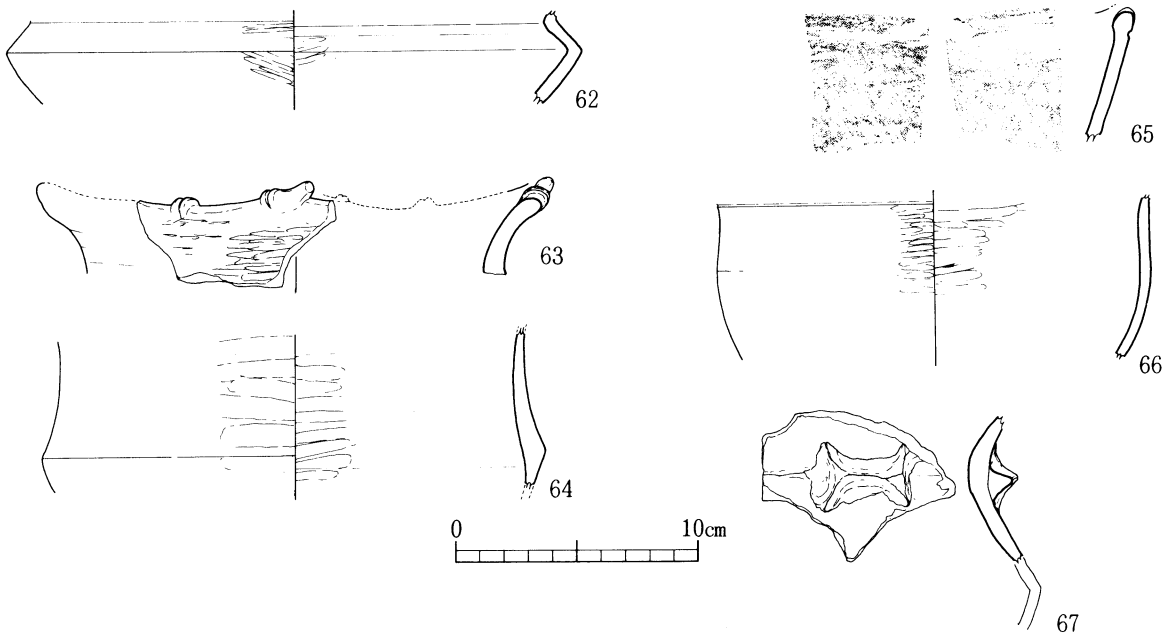
94は胴部は丸く，直口する口縁部で丸味を帯びた口唇部となる深鉢形土器である。口唇部から１cm下位に幅約１cmの貼り付け凸帯を巡らす。内外面ともに篦調整を施す。

ⅩⅢ類土器（第22図）

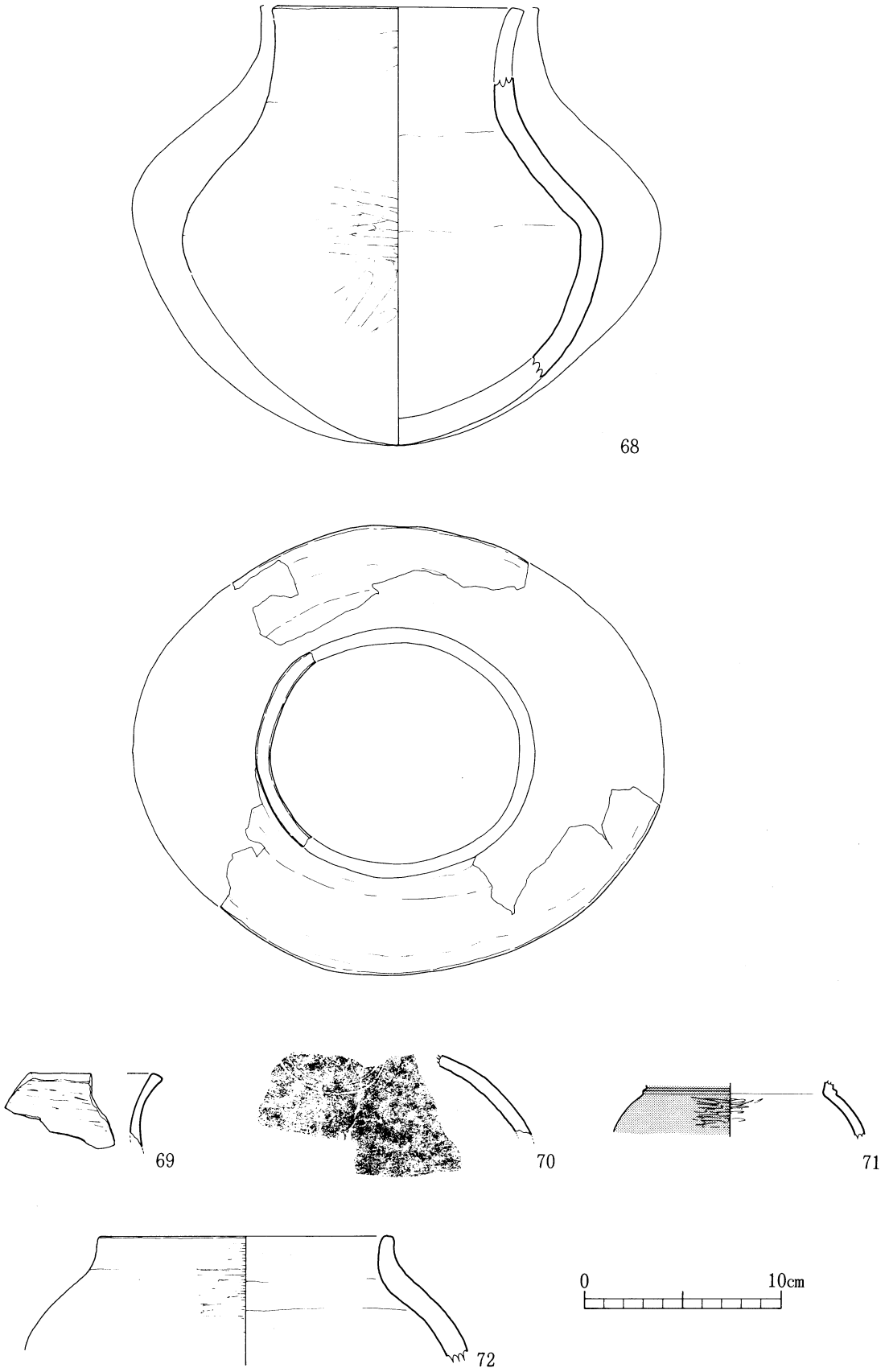
ⅩⅢ類土器は鉢形土器及び組織痕土器，深鉢形土器の底部である。

ⅩⅢＡ類土器（第22図）

95～105は組織痕土器である。平底で底部から丸く立ち上がることから鉢形土器の底部と思われる。底部は厚くて雑に仕上げている。



第18図　土器実測図



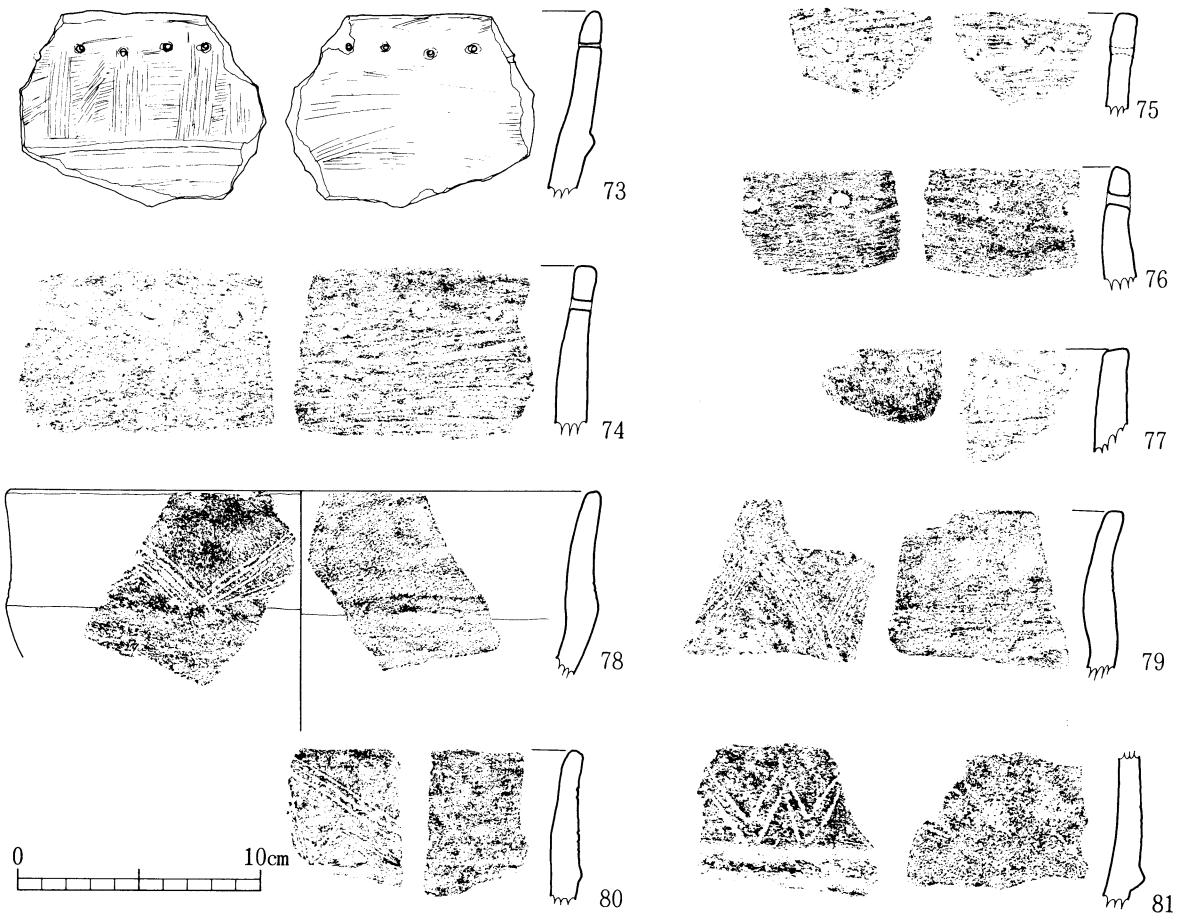
第19図　土器実測図

XⅢ B類土器（第22図）

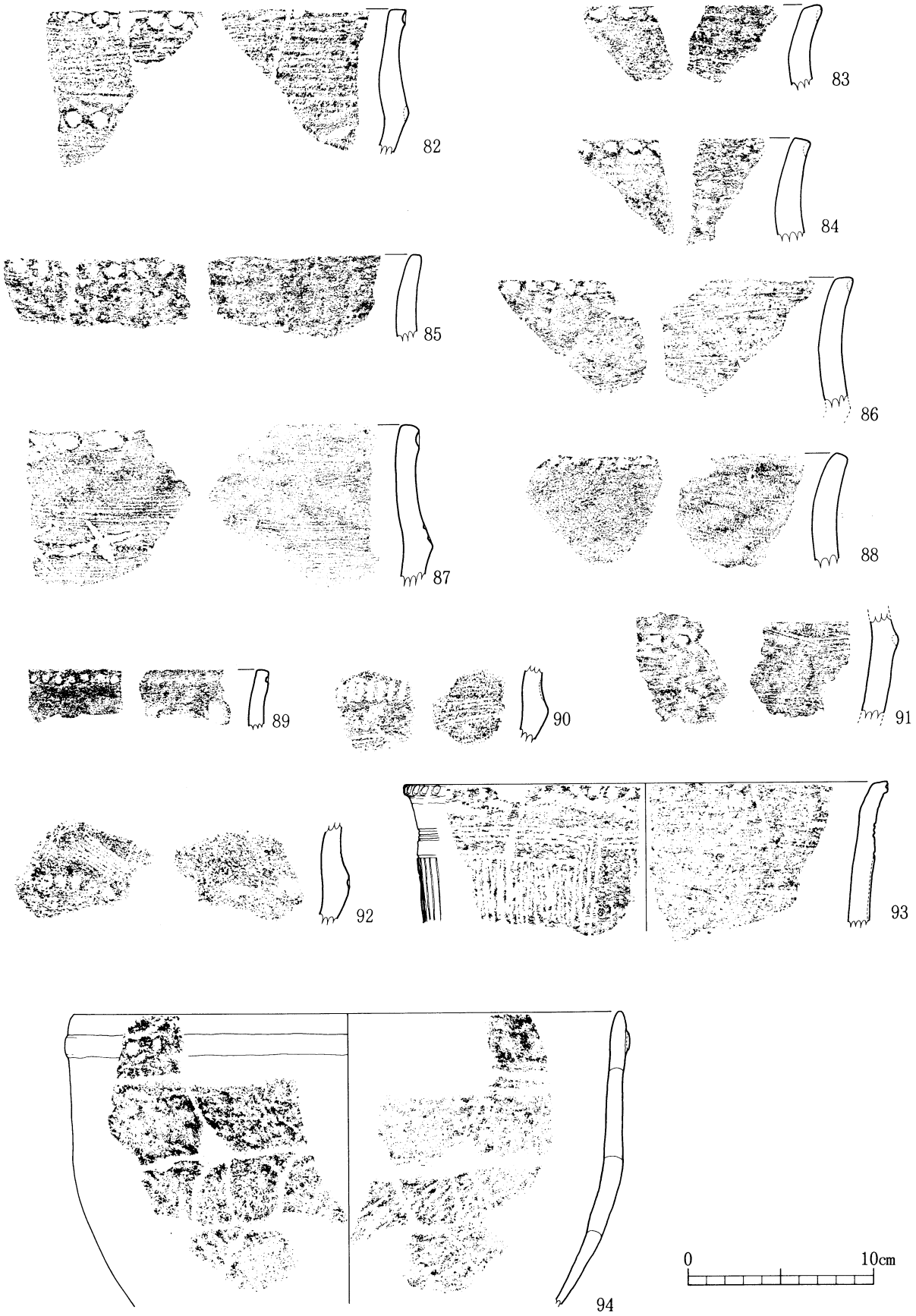
106～113は鉢形土器の底部である。底部は丸底に近い平底である。また底部から胴部への立ち上がりは丸味を呈し胴部へと移行する。110の径７cmの小型から106の径23cmの大型があり，器壁は約８mmから２cmと分厚くおおまかな作りである。

XⅢ C類土器（第23図）

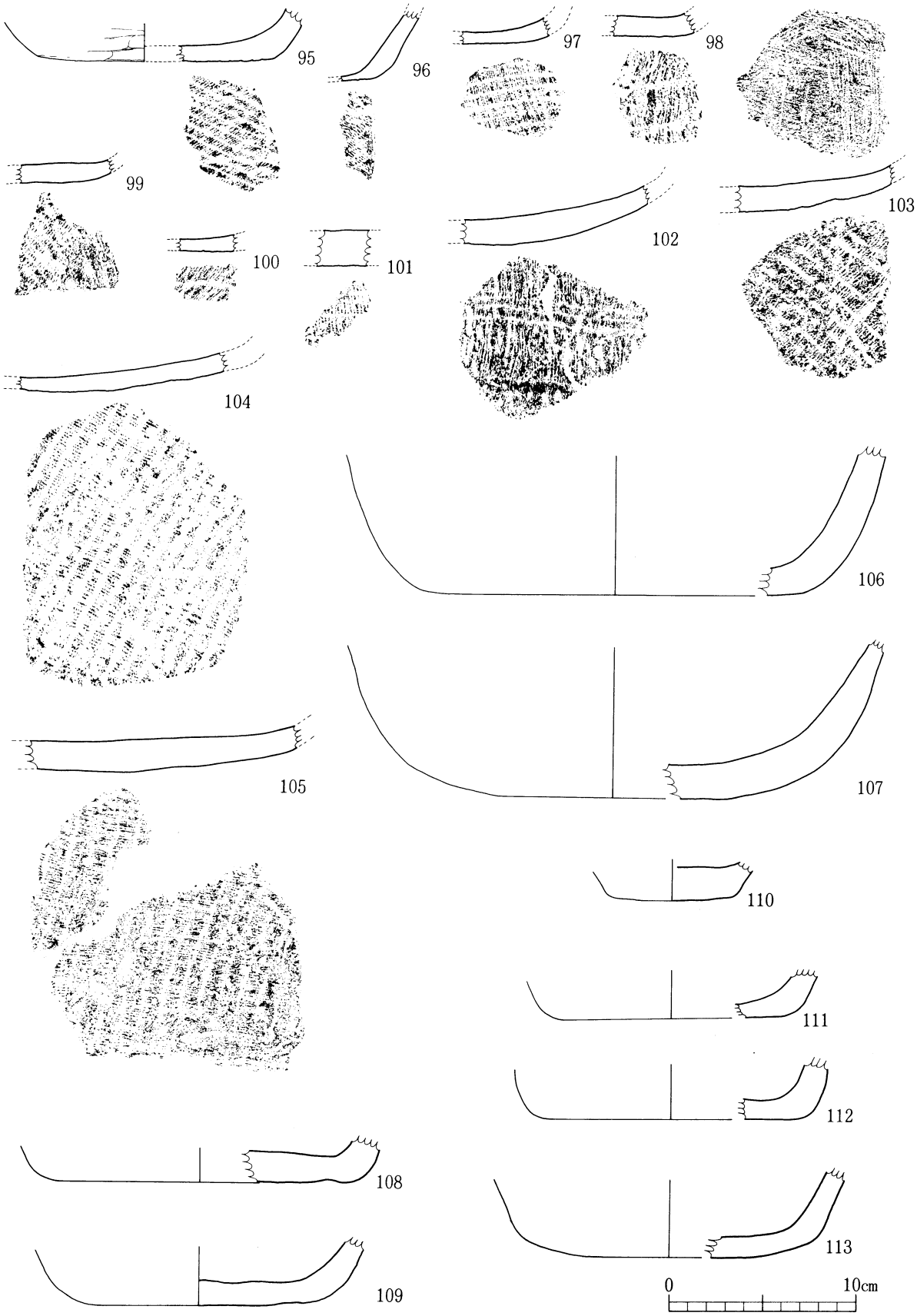
114～134は深鉢形土器の底部である。分厚い円盤貼り付けの115,117,118,119,123,125,126,129,130はやや上底気味となるが，その他は平底である。また132,133は「木葉痕」を残す。立ち上がりは内傾して外反する胴部へと移行する。土器調整には内外ともに篦調整が施されている。全体的に大ざっぱでダイナミックな仕上がりとなる。



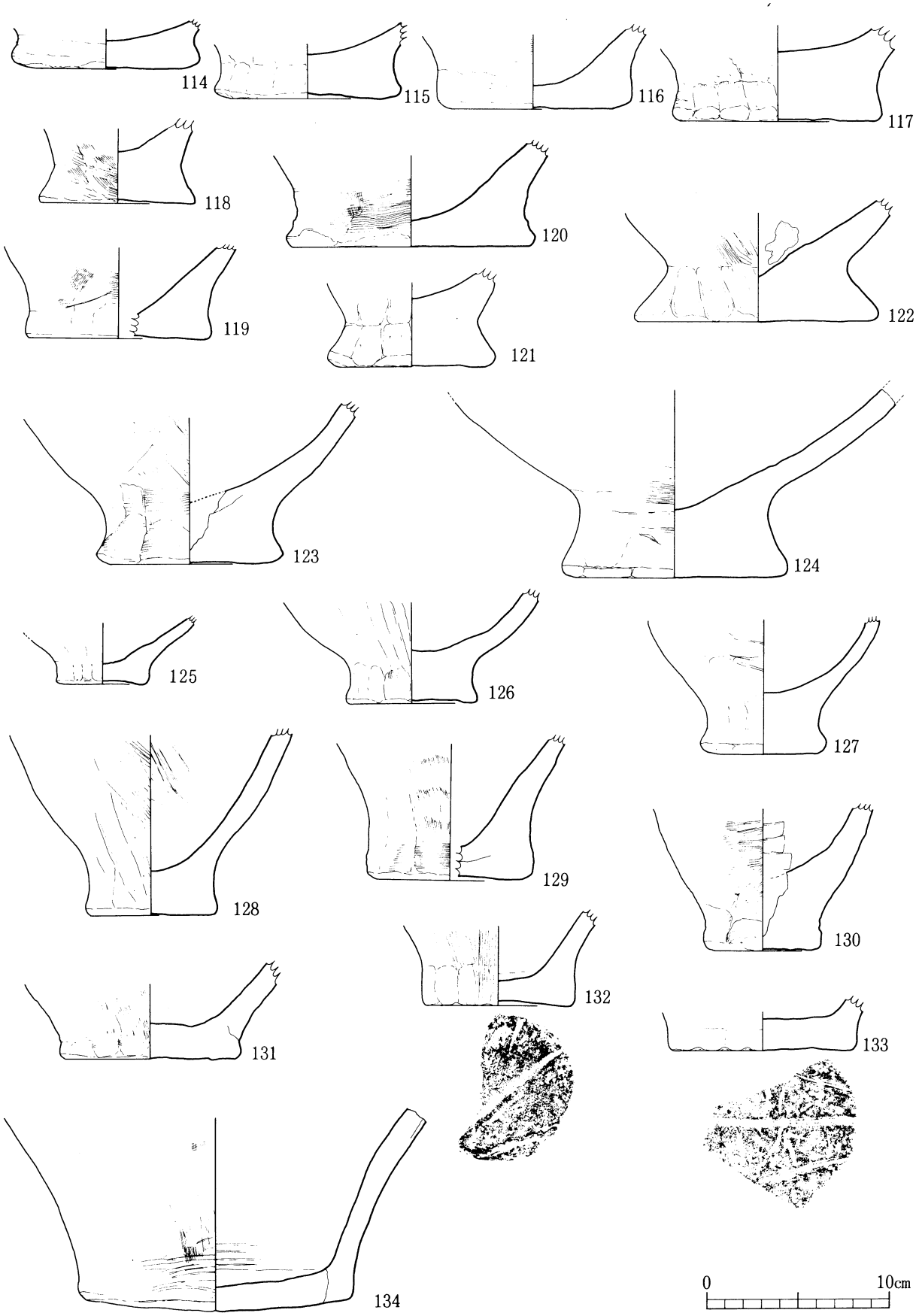
第20図　土器実測図



第21図　土器実測図


95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
0
10cm

第22図　土器実測図


114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
0
10cm

第23図　土器実測図

(2) 石　器

本遺跡の縄文時代晩期に該当する層から出土した石器は，総数60点であった。

石器組織

出土した石器は磨製石斧，打製石斧，磨石・叩石，礫器である。量的に最も卓越しているのが凹石・叩石・磨石で75点と過半数を数える。これは石器全体の62％を占めている。次に多いのが打製石斧で31点と石器全体の26％を占めている。磨製石斧は11点で９％を占めている。

A．磨製石斧（第２４図・第25図）

表採資料１点（２）を含む合計11点出土した。形態はおおむね大型で柱状を呈するもの135～137，大型で偏平なもの138～143，小型で偏平なもの144～145，小型・偏平で細身のもの146の４つに分類できる。ほぼ完形品が５点，折れ，欠けなどの欠損品が６点あり，完形品でも再加工を繰り返しているのか，短身のものが多い。

135は風化が著しく観察が難しい。両刃である。136は片側面にのみ面取りが見られる。片刃である。137は全面磨製で両側面，基部先端に面取りが見られる。片刃である。138は基部である。基部先端は敲打により丸く整形している。139は粗い剥離により大まかに整形した後，磨いて仕上げている。両側面，基部先端に面取りが見られる。140は蛤刃の刃部である。風化が著しい。141は風化が著しく，ローリングを受けている。基部は欠損している。142は風化が著しく，部分的に磨痕が残っている。両刃である。143は刃部である。風化，剥離が著しい。両刃である。144は粗い剥離により片面を整形した後，磨いて仕上げている。145は全面磨製の胴部である。折れ面からの細かい多くの剥離痕が観察される。

B．打製石斧（第25図～第27図）

全て偏平打製石斧と呼ばれるものであり，表採資料５点（　）を含む合計31点出土した。平面形態からの以下の基準により６つに分類できる。169～177については欠損品につき，分類対象から外した。

Ⅰ類－抉りを除いた平面形が基部から刃部までほぼ同じ幅で，長方形を呈するもの。さらに３つに細分が可能である。

ａ－抉りがないもの。いわゆる短冊形。147

ｂ－胴部に抉りがあり，刃部が真直ぐもしくはゆるやかな弧状を呈するもの。いわゆる分銅形に分類されるもの。148～152

ｃ－胴部に抉りがあり，刃部の尖るもの。153～158

Ⅱ類－抉りを除いた平面形が基部より刃部の方が幅広く，長台形を呈するもの。さらに３つに細分が可能である。

ａ－抉りがないもの。いわゆる撥形。159～160

ｂ－胴部に抉りがあり，刃部が真直ぐもしくはゆるやかな弧状を呈するもの。いわゆる分銅形に分類されるもの。161～166

ｃ－胴部に抉りがあり，刃部の尖るもの。167～168

石斧のほとんどが胴部に抉りを持つものである。出土部位の内訳は，ほぼ完形品が24点，刃部の欠けた基部が３点，基部，刃部の欠けた胴部が２点，基部の欠けた先端部が２点である。完形品の中には再加工を行っているものも認められる。

146は先端部である。使用によるものと見られる磨痕が顕著に認められる。147は片面に礫皮面を大きく利用している。148は基部である。片面に礫皮を大きく利用している。両側辺に着柄時についたと思われる磨痕が認められる。149は摂理により剥がれた薄手の素材を利用している。基部縁辺に磨痕が顕著に認められる。150は基部である。基部上端に礫皮面を一部残す。151は表採資料である。風化が著しい。152は基部である。153は基部である。154は150と同一石材である。基部が一部欠損している。155は非常に薄手である。156は風化が著しい。157は片側に摂理面を大きく利用している。159は風化が著しい。160は表採資料で，厚手である。161は風化が著しい。薄手である。162は表採資料で，風化が著しい。163は基部に着柄時の，刃部に使用時のものと思われる磨痕がそれぞれ認められる。164は胴部である。165は片面に礫皮面を大きく利用している。166は刃部である。片面に礫皮面を大きく利用している。刃部に使用時のものと思われる磨痕が認められる。167は表採資料である。風化が著しい。168は基部である。厚手の円礫を利用しており，礫皮面を残している。169はローリングを受けている。170は基部である。171は基部である。刃部の形状によっては或いは有肩形に分類されるかもしれない。薄手である。172は抉りの入った胴部である。残存状況が悪く，どちらが基部か刃部か判断が難しい。173は表採資料である。風化が著しい。174は刃部が一部欠損している。175は風化が著しい。176は基部である。厚手の剥片で片面に礫皮を大きく利用している。177は刃部が欠損している。薄手である。178は礫器である。円礫の礫皮面を大きく利用し，円状に刃部を整形している。刃部は使用によるものと思われる潰れが確認できる。

d．凹石・叩石・磨石

本遺跡で最も多く出土している石器である。これらは全て顕著な凹み，敲打痕を持つので基本的には凹石・叩石として複数の用途で使用されているものと思われる。また，磨面などの使用痕が確認されるものであり，ここでは全て一括して取り扱った。使用痕の在り方から大きく3つに分類が可能である。

Ⅰ類－表裏に凹みを持つもの。

a－円状，線状の凹みが1つで縁辺に敲打痕を持つもの。(181･180･182) 磨面を持つものもある。(194･190･195･196)

b－線状の凹みが連続して入っており結果的に細長い凹みを残す。縁辺に敲打痕を持つ。磨面を持つ。(205･206)

c－円状の凹みが長軸に沿って数カ所認められ，結果的に筋状の痕跡を残す。縁辺に敲打痕を持つ。(222･223･224･225･226)

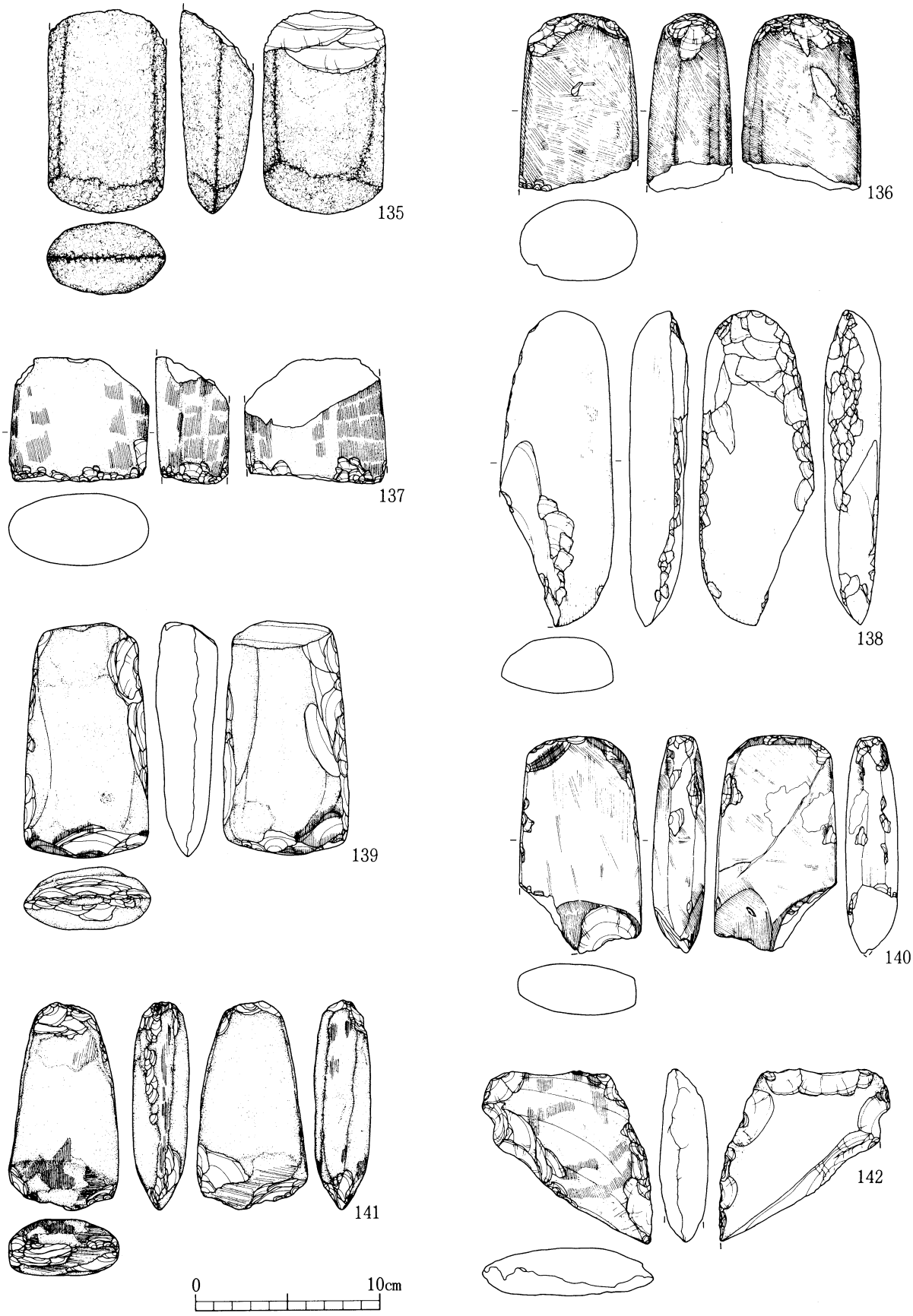
Ⅱ類－表裏と側面に凹みを持つもの。

a－表裏の凹みが1つある。(229･231･232･233) 磨面を持つものがある。(234･235)

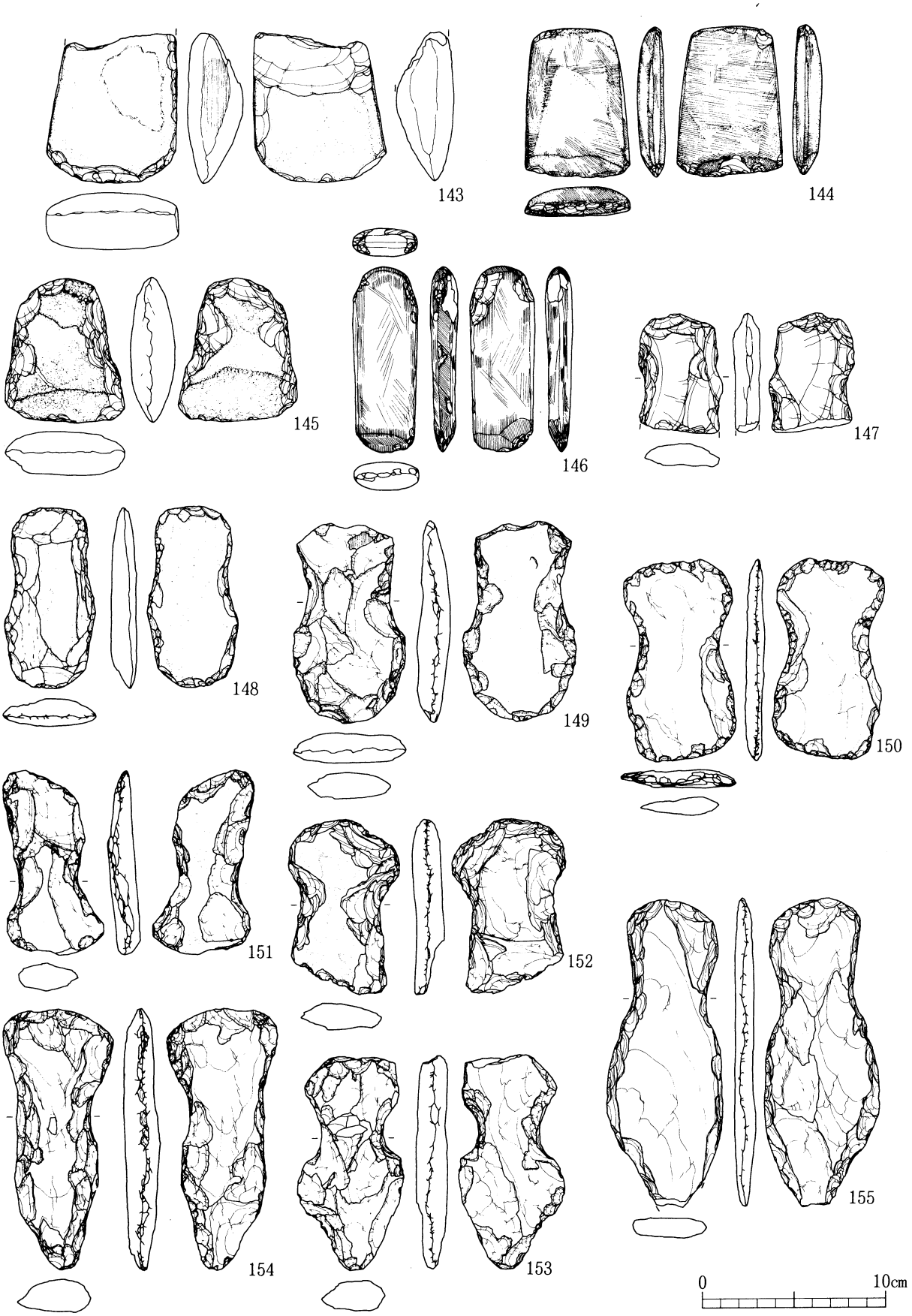
b－表裏の凹みが2つである。磨面を持つ。(237)

c－凹みが長軸に沿って数ヵ所認められ，結果的に筋状の痕跡を残す。(238･239)

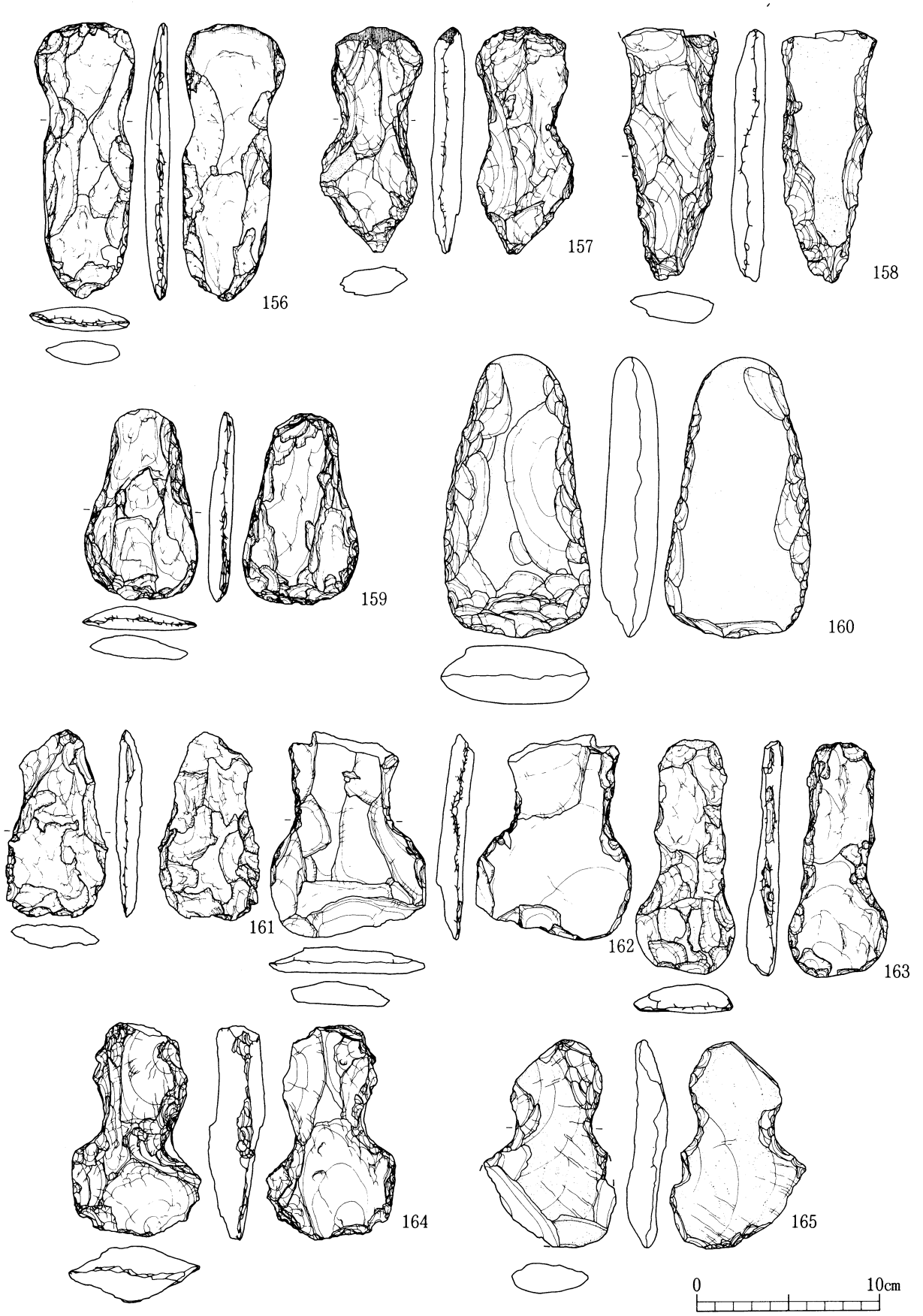
181は両面とも線状に凹み，敲打痕は顕著でない。180は両面とも円状に凹み，両側の敲打痕が顕著である。赤化している。182は両面とも円状に浅く凹み，敲打痕も顕著でない。194は片面は円状，片面は線状に凹み，敲打痕は顕著でない。190は片面に2つ，もう片面に1つの凹みを有する，本遺跡出土の石器の中では特異なものである。凹みは浅い。顕著な敲打痕により片側に面が形成され



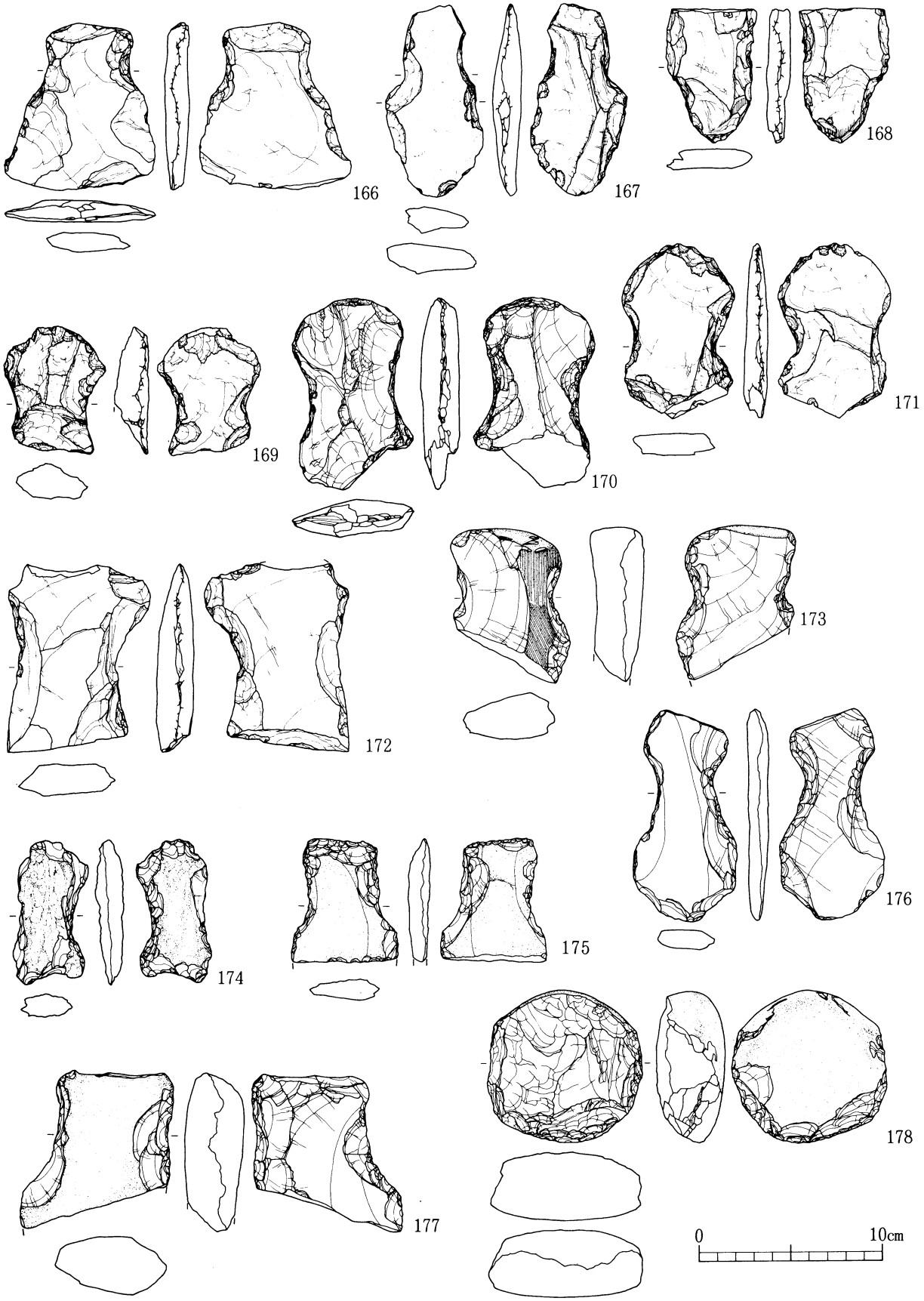
第24図　石器実測図



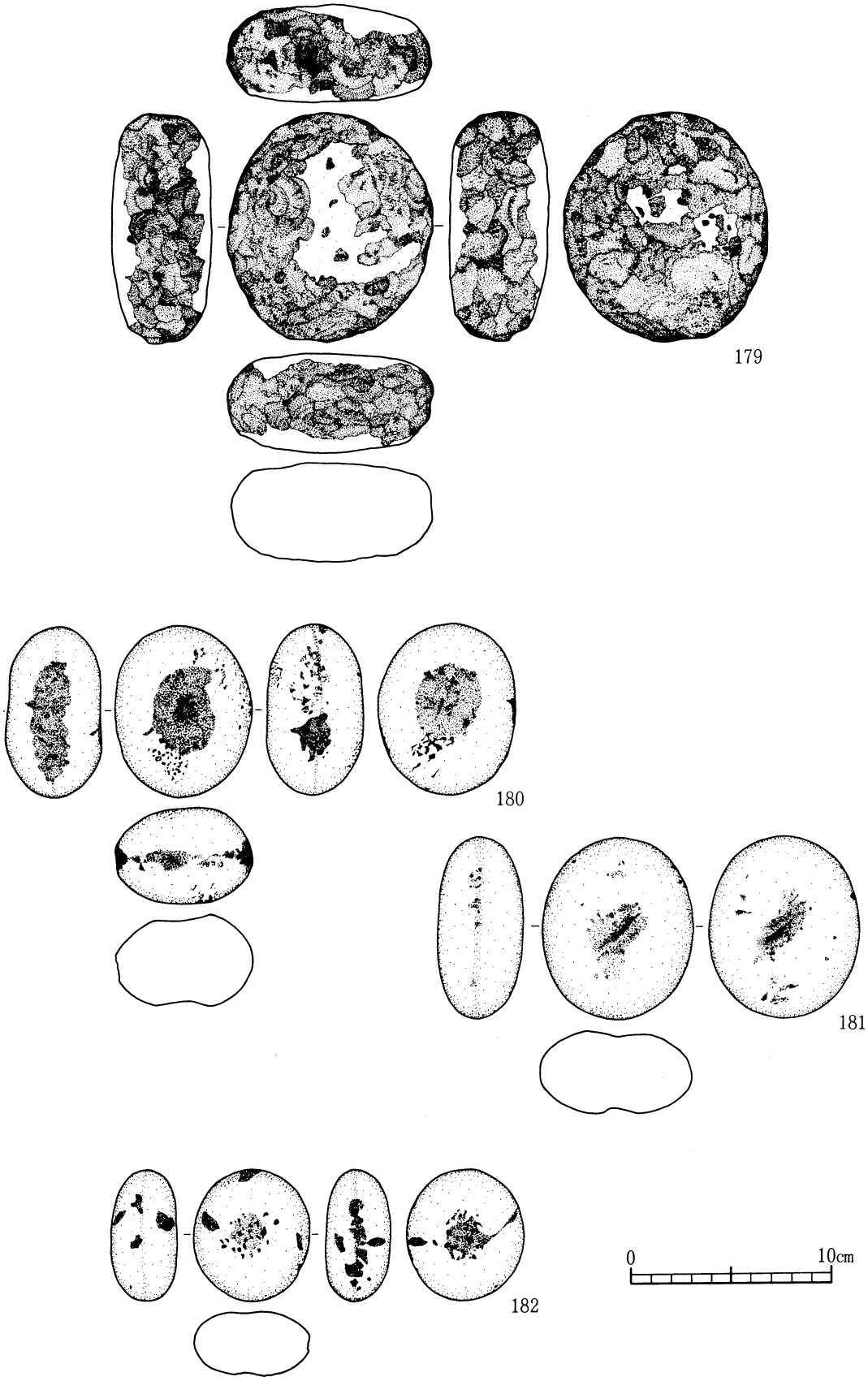
第25図　石器実測図



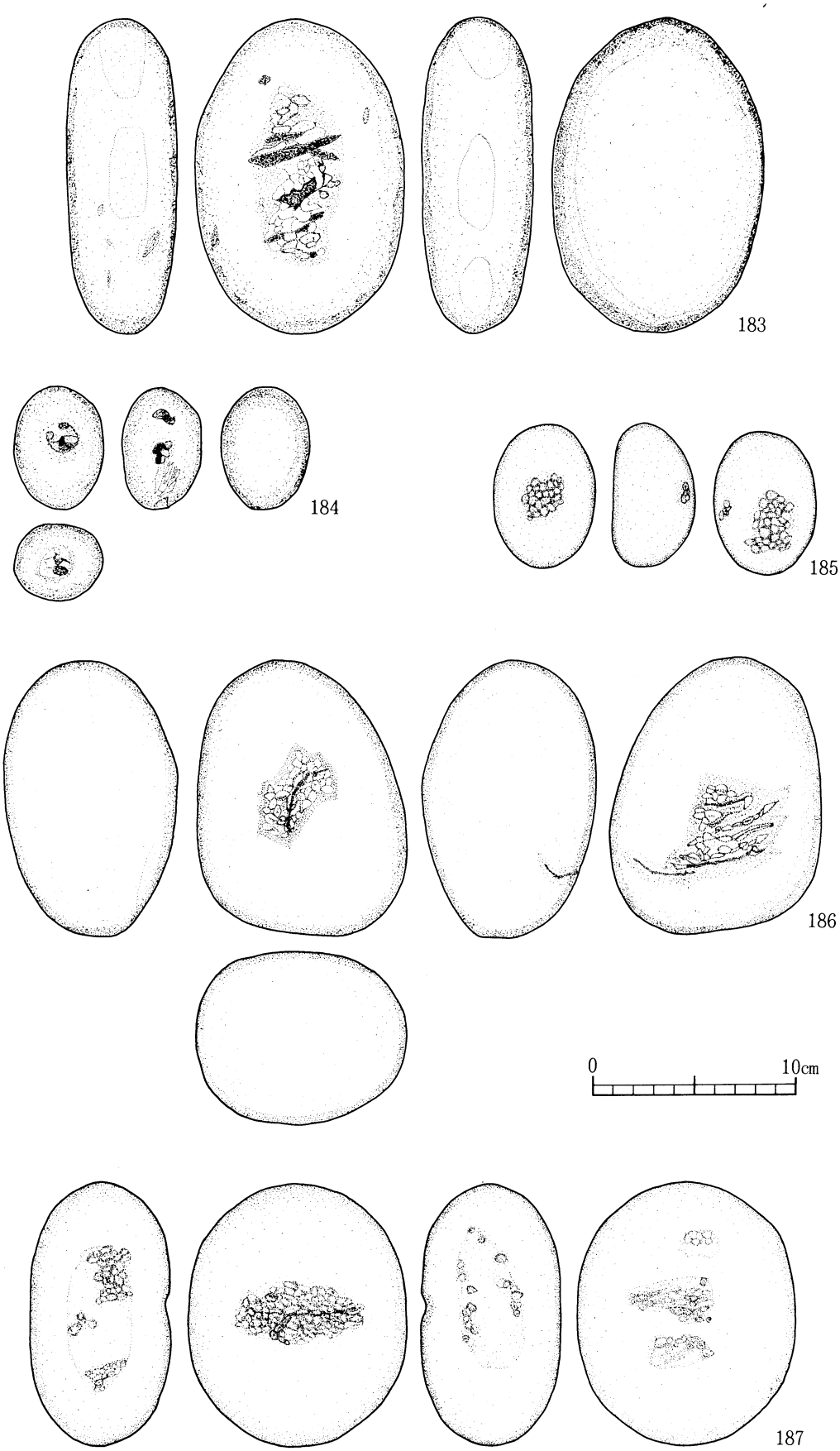
第26図　石器実測図



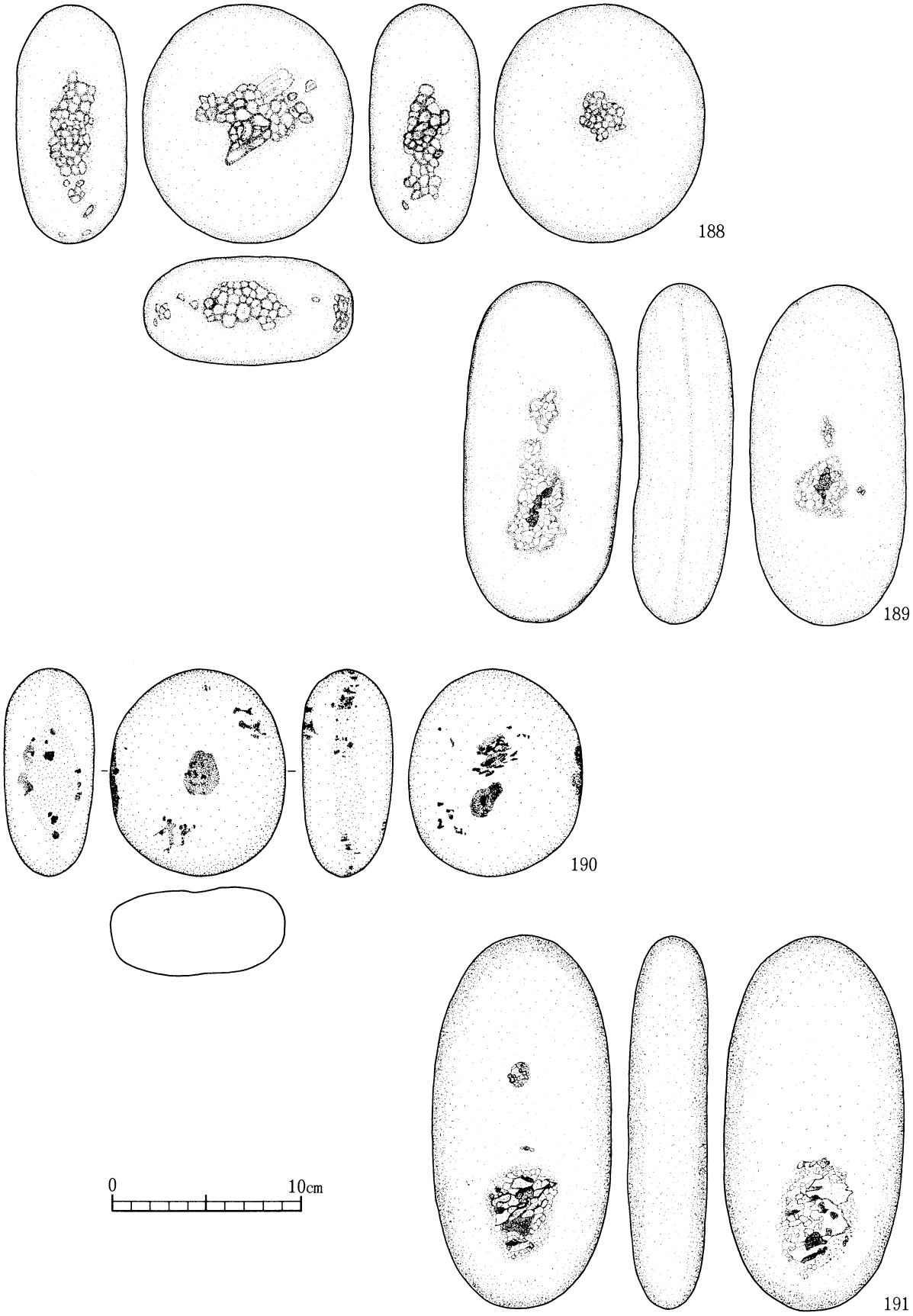
第27図　石器実測図



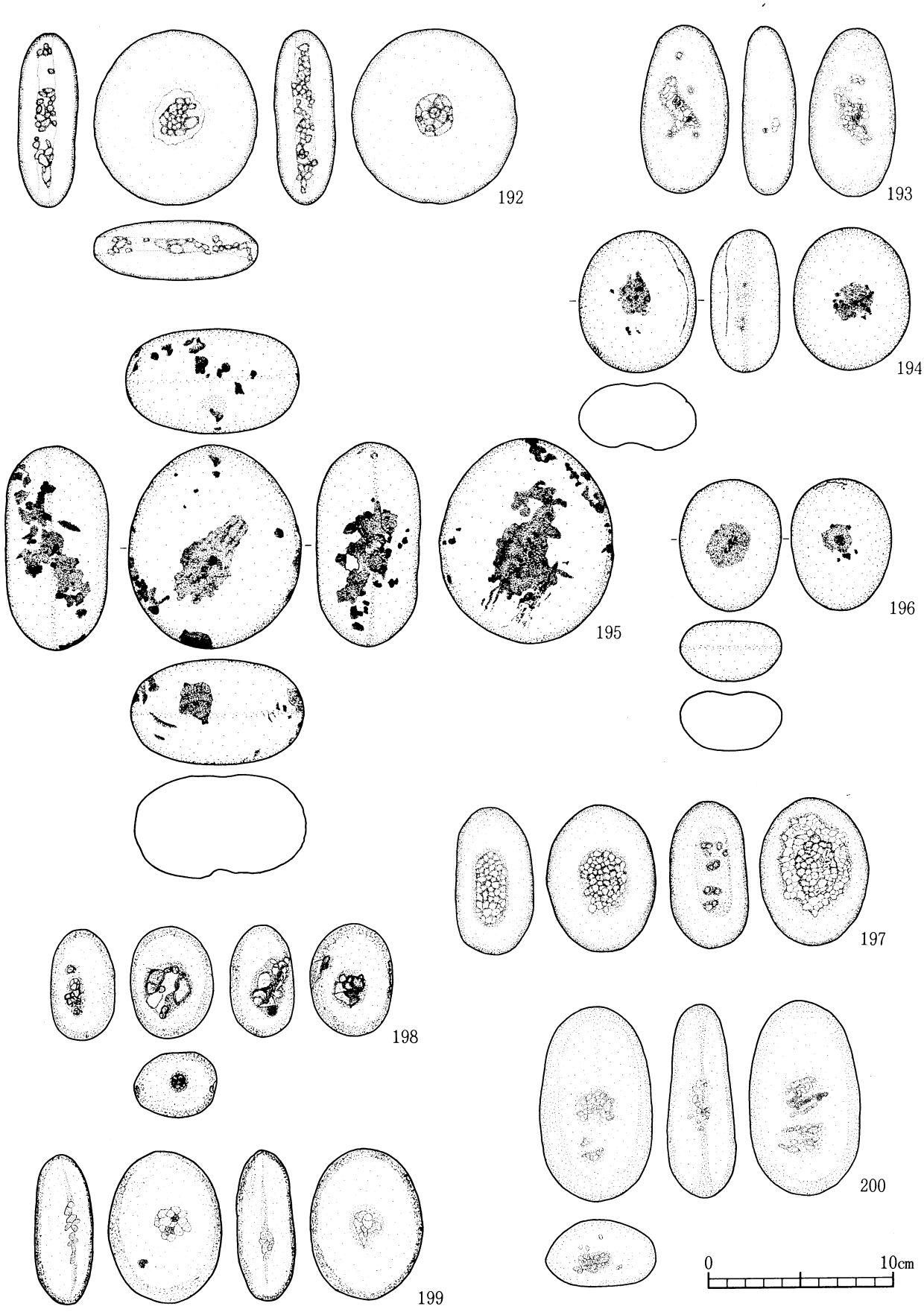
第28図　石器実測図



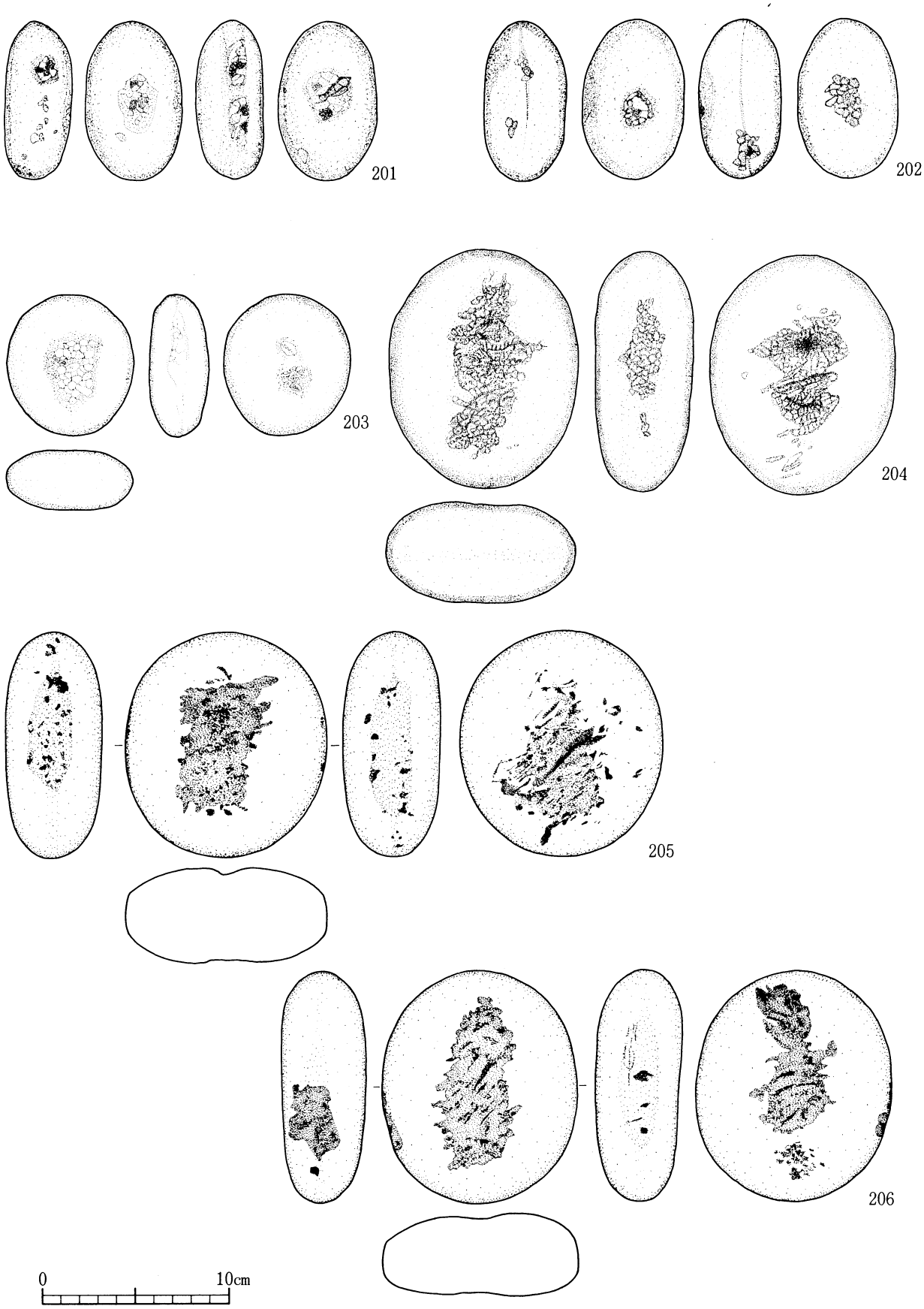
第29図　石器実測図



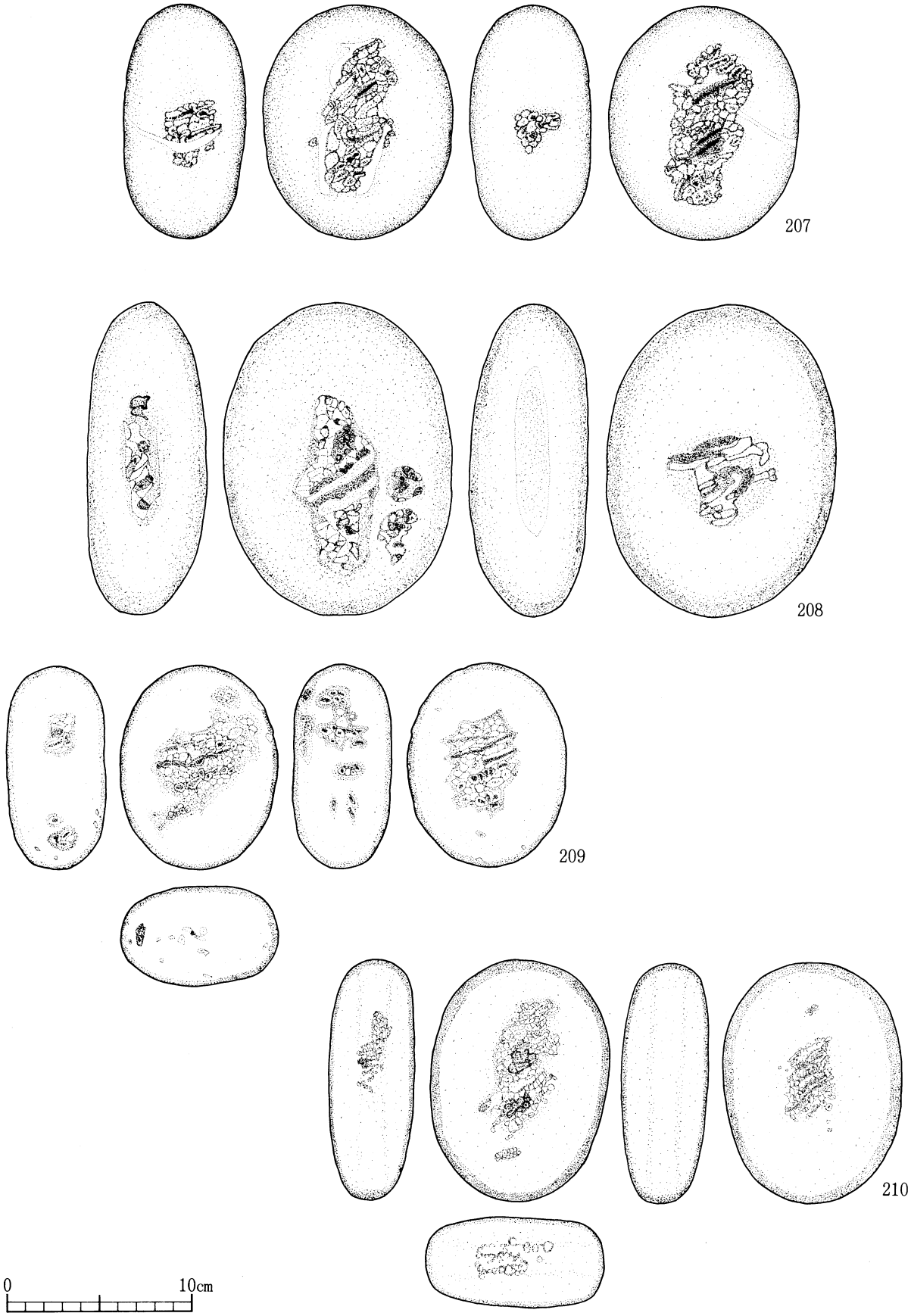
第30図　石器実測図



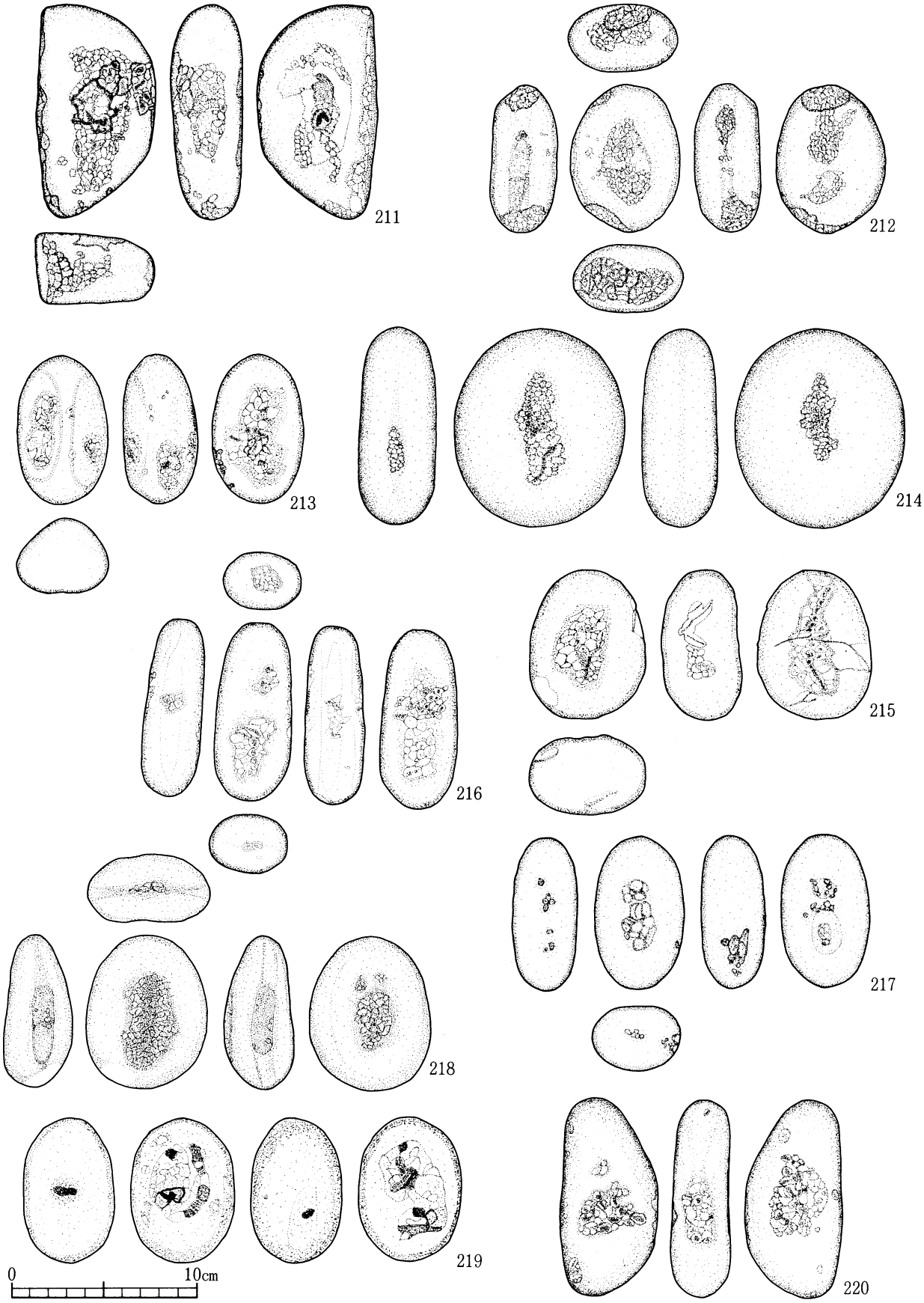
第31図　石器実測図



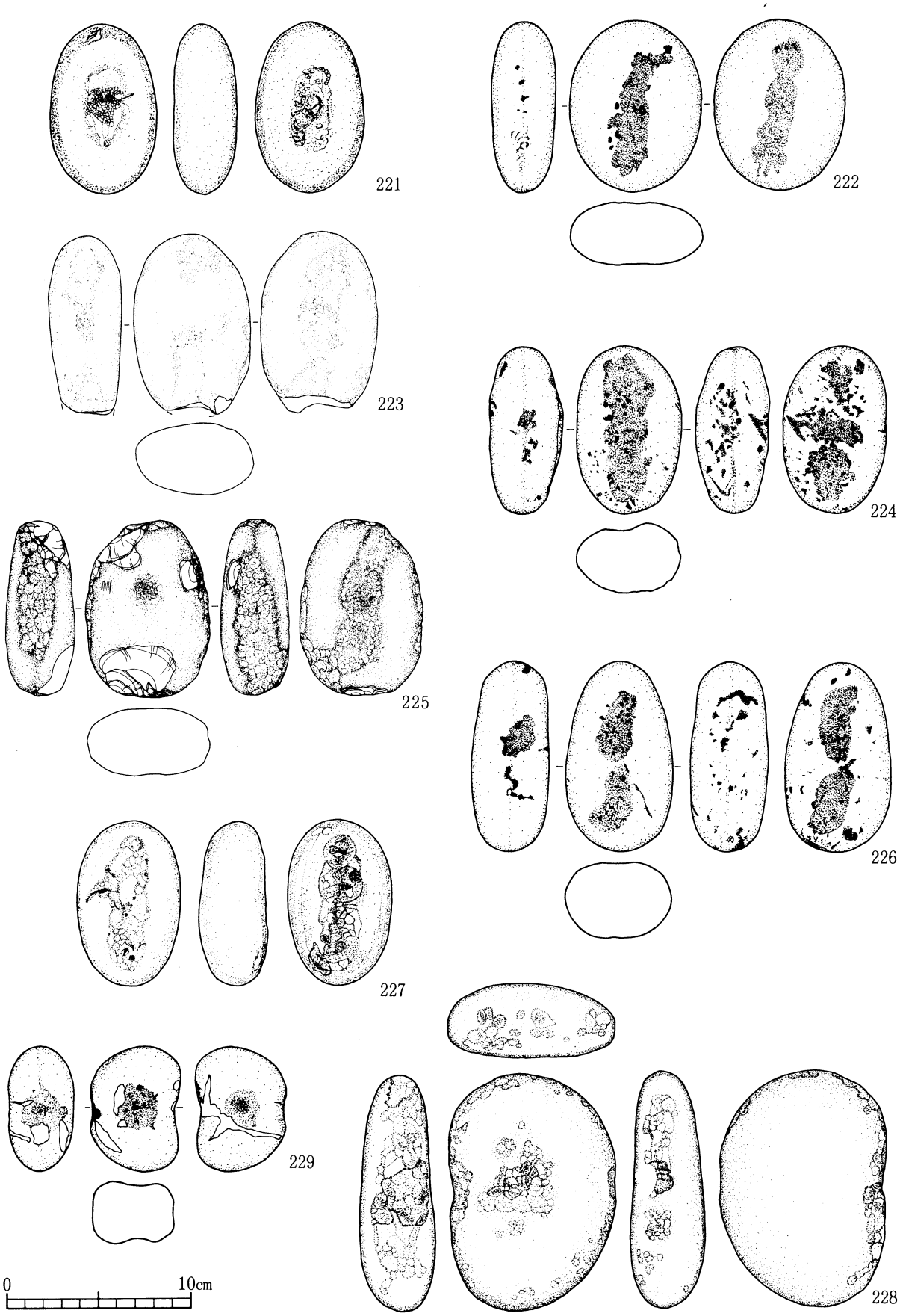
第32図　石器実測図



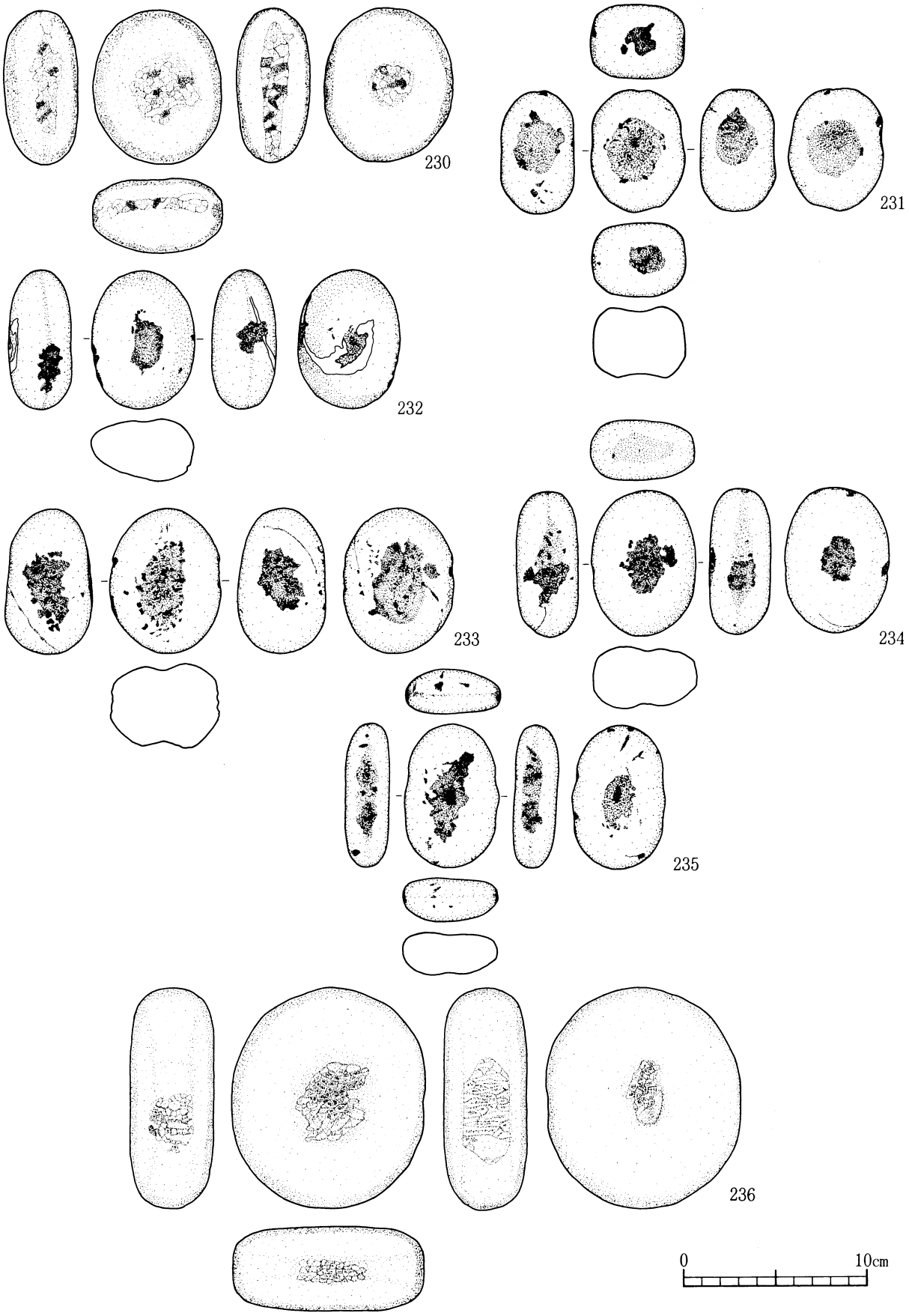
第33図　石器実測図



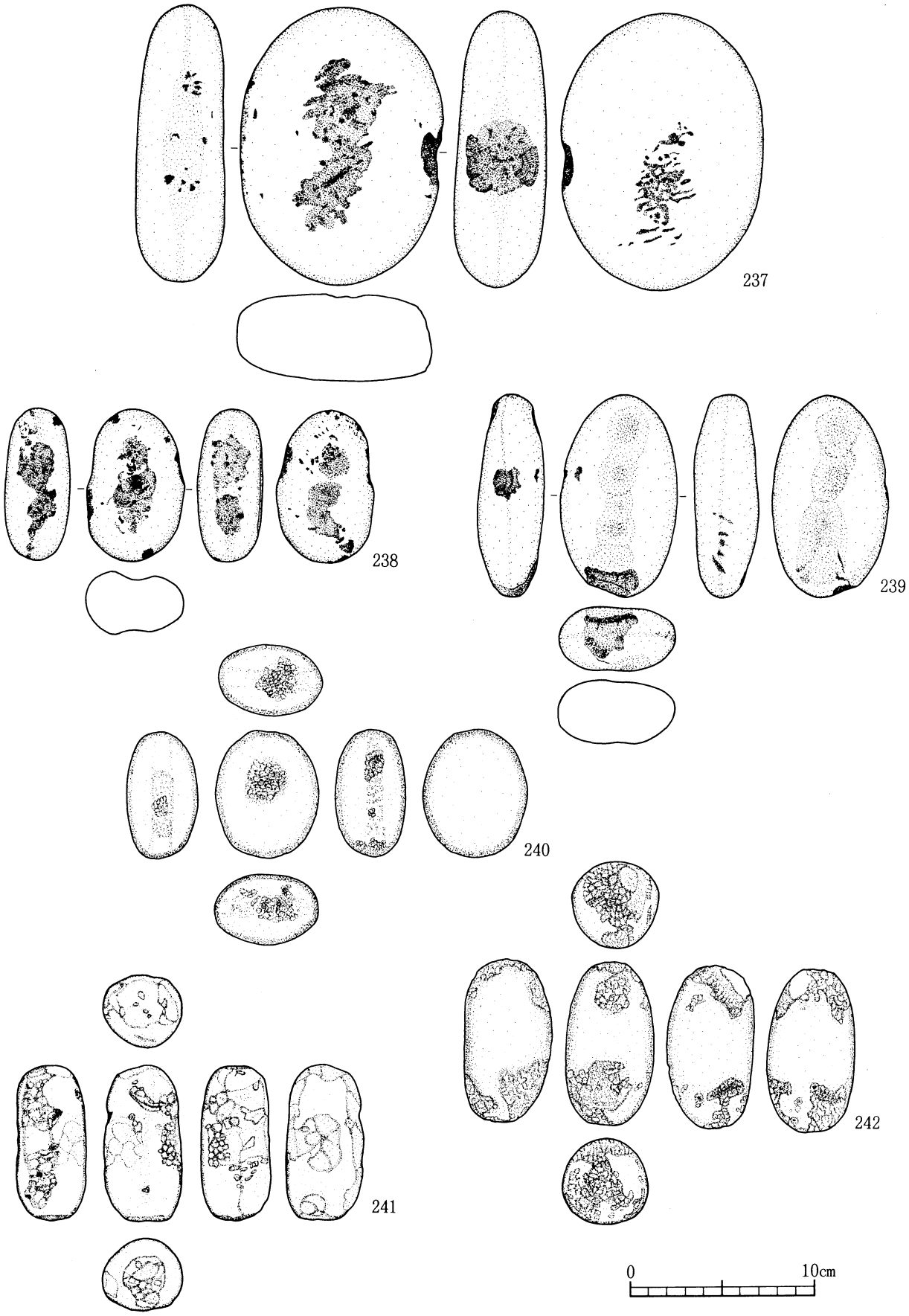
第34図　石器実測図



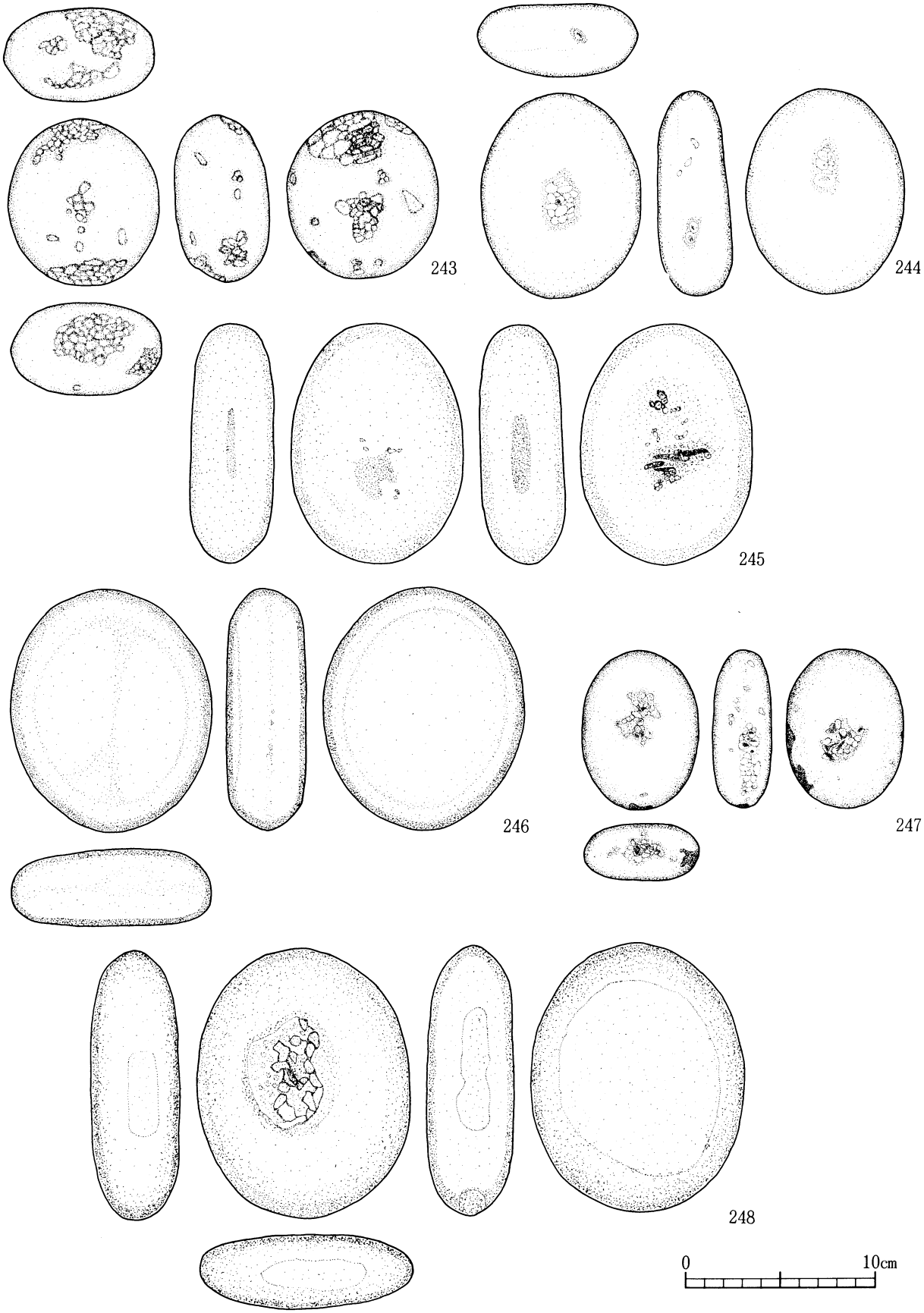
第35図　石器実測図



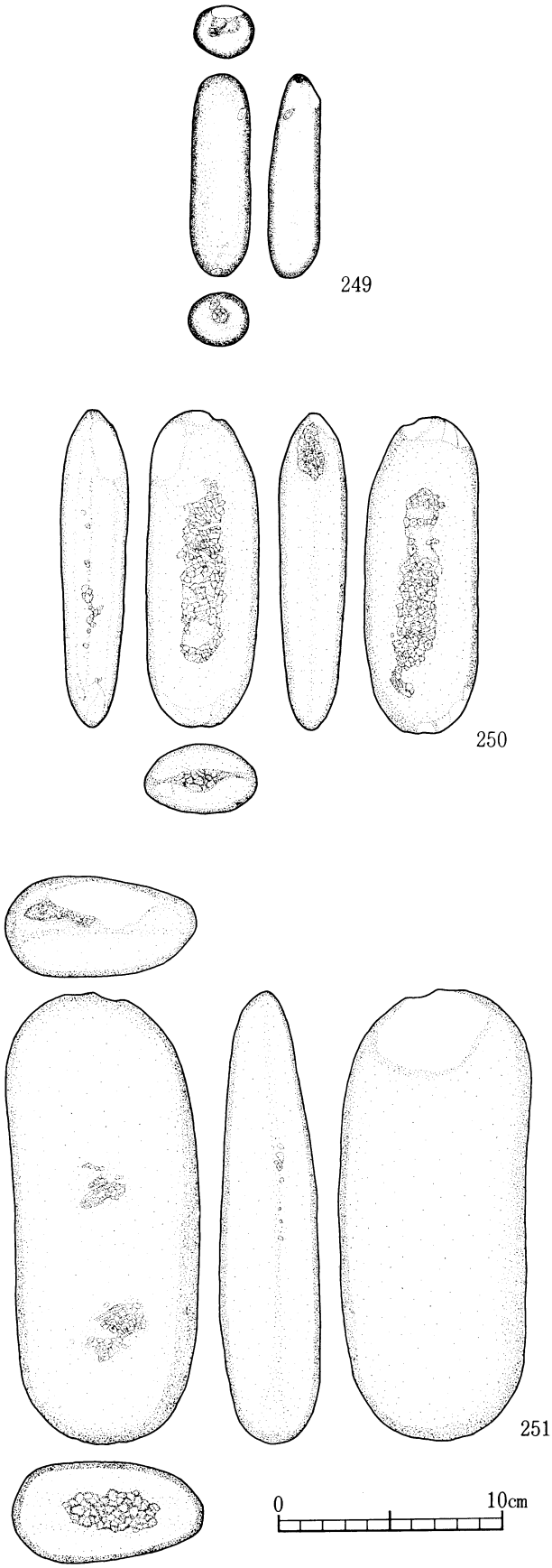
第36図　石器実測図



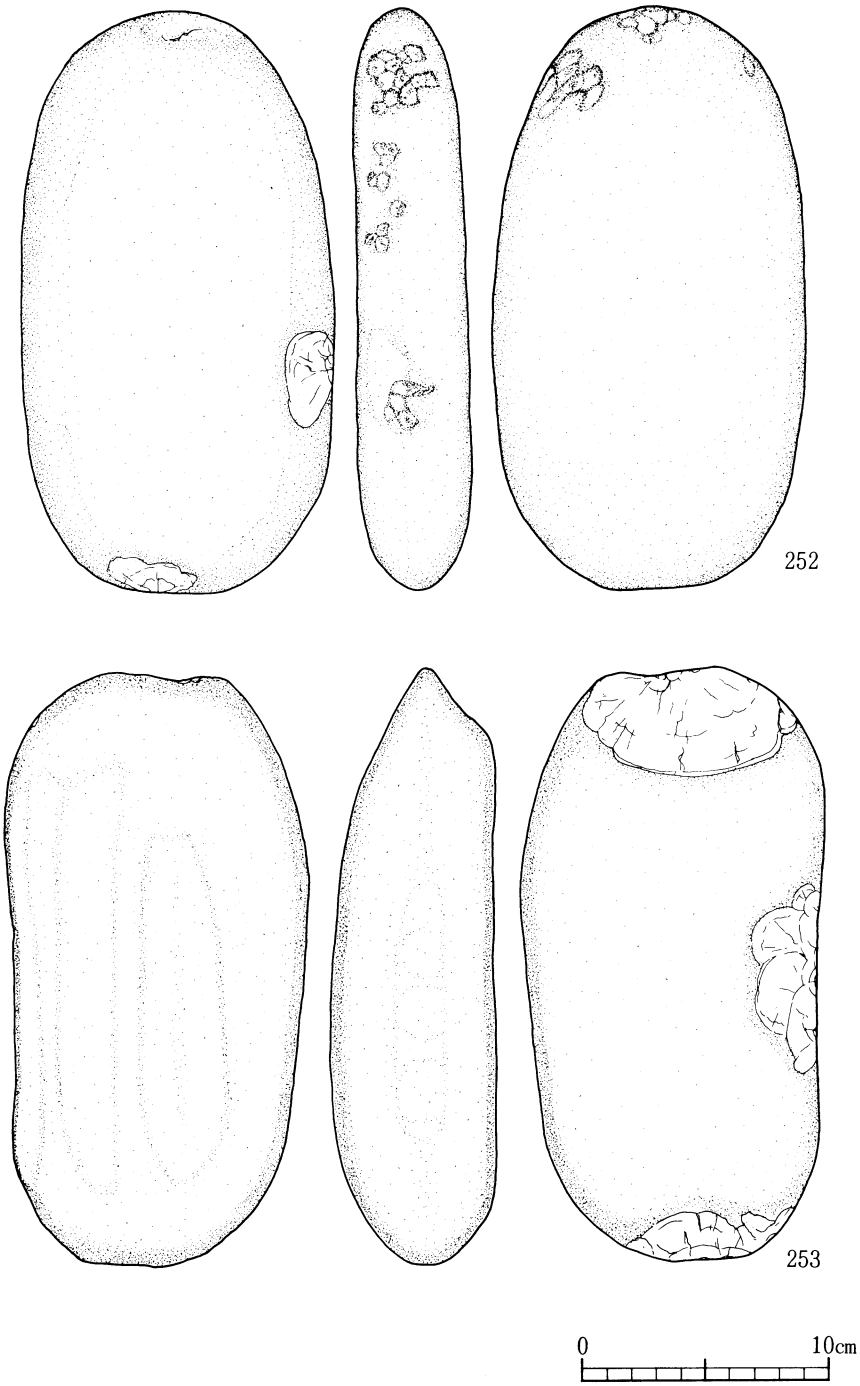
第37図　石器実測図



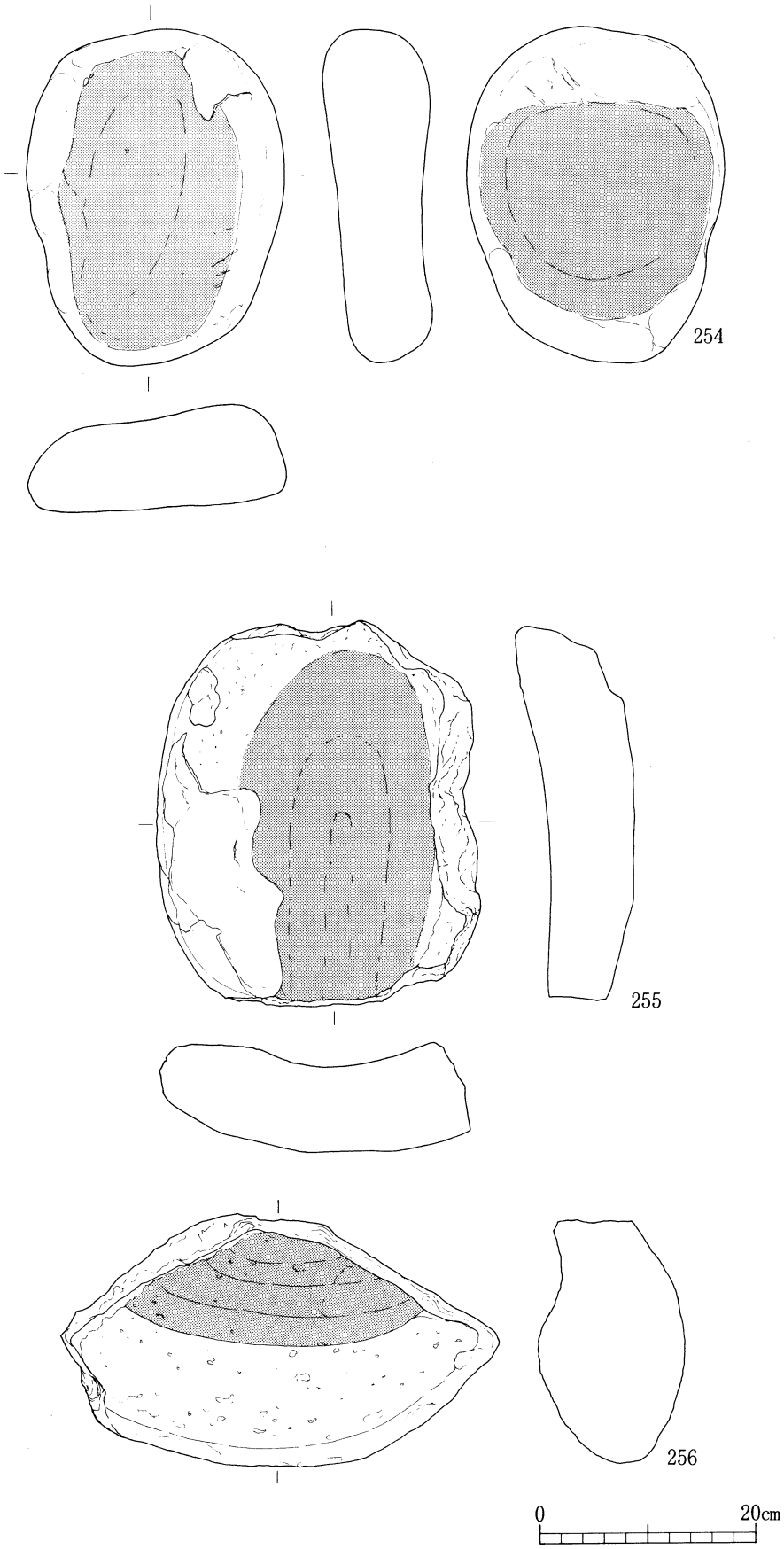
第38図　石器実測図



第39図　石器実測図



第40図　石器実測図

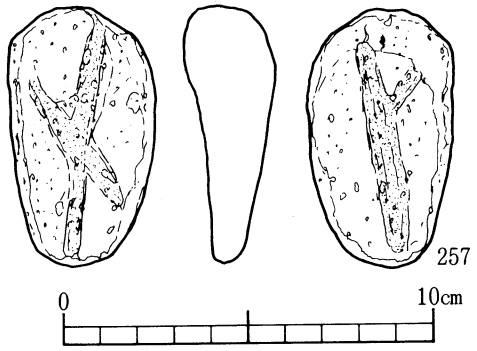


第41図　石器実測図

ている。195は両面とも線状に深く凹む。敲打痕が顕著である。赤化している。196は両面とも円状に凹み，片側は浅い。敲打痕はほとんど認められない。205・206は両面に細い線状の凹みが多数認められる。両側面に敲打痕が顕著である。206については赤化している。222は両面に円状の浅い凹みが縦に数カ所認められる。敲打痕はあまり顕著でない。223・225は叩石としての機能が強く，敲打痕が顕著である。破損も叩石として使用した時のものである。凹みは縦に数カ所認められるが，非常に浅い。破損の切り合いから，凹みとして使用した後，叩石に転用していることがわかる。224は両面の縦に3カ所ずつ認められる。敲打痕は顕著である。226は両面に円状～長楕円状の凹みが縦に複数認められる。敲打痕はあまり顕著でない。赤化している。229は両面と片側面に円状の凹みが認められる。231は両面，両側面，上下両端部の計6面に円状の凹みが認められる。赤化している。232は両面，両側面に円状の浅い凹みが認められる。233は両面に円状の凹みが，両側面には円状の浅い凹みが認められる。234は両面，両側面に円状の凹みが認められる。また，両側面には顕著な敲打痕も認められる。磨面は両面に認められる。凹み，叩き，磨りの前後関係については観察しきれない。235は両面に長楕円状の浅い凹みが，両側面に2つずつ円状の凹みが認められる。両側面には顕著な敲打痕も認められる。磨面は両面に認められる。237は片面に線状，円状の凹みがそれぞれ1つずつ，もう片面に線状の凹みが1つ認められる。また，片側面に円状の凹みが1つ，もう片側面には顕著な敲打痕が認められる。磨面は両面に認められる。238は両面に円状の凹みが縦に3つずつ認められ，両側面に2つずつ円状の凹みが認められる。239は両面に円状の凹みが縦に4つずつ認められ，片側面に小型の円状の凹みが1つ認められる。赤化している。

大薗遺跡出土の石器について

凹石の凹みの在り方について，線状に凹むものと円状に窪むものとの2通りある。線状に窪むものが多いのが特徴である。線状に窪むものの規格は大型のものが多いこと，円状に窪むものは小型のものが多いこと，円状の凹みの中に線状の痕跡が確認されるものがあることなどからまず何らかの先のとがった道具で大型の石の中央にいくらかの刻みを入れた後に台石として使用していることが考えられる。本遺跡の大型の凹石の円状の凹みは，線状の刻みに対して使用を重ねるにつれ形成された痕跡である可能性が高い。したがって，大型のものは置いて使用するネガ的な要素，小型のものは手にもって使用するポジ的な要素があるものと考えられる。



第42図　軽石加工品実測図

(3)　軽石加工品（第42図）

軽石製で，縦約7.2cm，横約4cmの楕円形を呈している。両面ともに最大幅約7mmの凹線を縦位，あるいは交叉させている。棒状のものを整形具として用いたものか。

第3節　弥生時代

第1節　遺構・遺物

弥生時代の遺構については検出されなかった。遺物は前期末～中期中葉の土器が出土している。

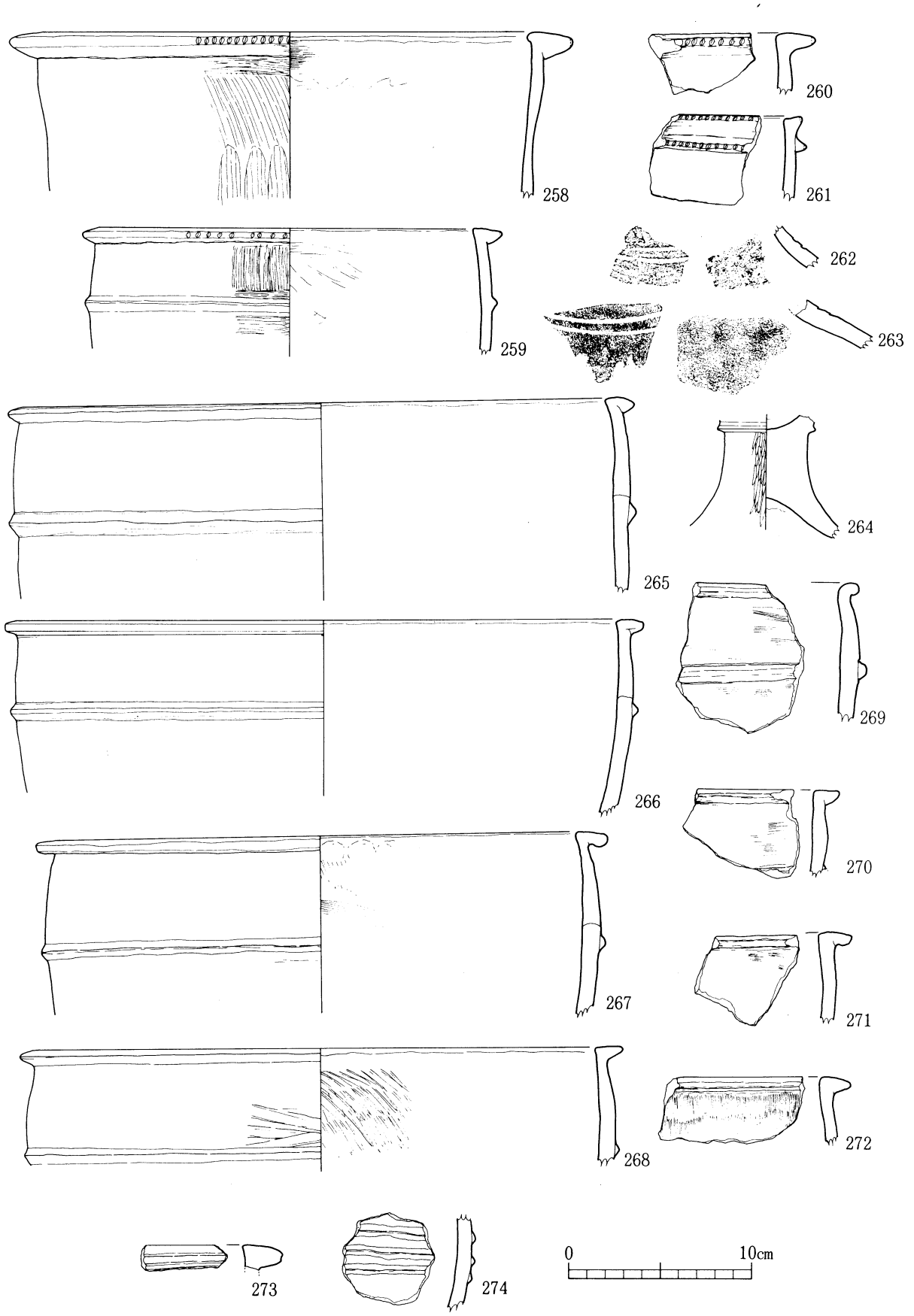
1．土　器（第43図・第44図）

弥生時代の土器は，図化できるものが17点である。258～264は前期後半と思われるものである。258～261は甕形土器。258は復元口縁部径20.2cmを測るもので，口縁部はL字状を呈する。また，口縁端部にはヘラによる刻目が見られる。口縁部は貼付けによるもので，内面にわずかに突出している。外面にはハケ目が認められる。259は復元口縁部径22.9cmを測るもので，口縁部はL字状を呈するが短めである。また，口縁端部には刻目が見られる。胴部上位にも突帯を廻らす。260は口縁部がL字状を呈し，端部には刻目が見られるもの。261は口縁部がL字状を呈するが短く突帯状である。また，口縁部直下に口縁部と同様の突帯を廻らす。口縁部・突帯共にヘラによる刻目が見られる。262･263は壺形土器の肩部で2条の沈線を廻らすものである。また，外面はヘラ磨きである。264は高坏の脚部である。坏部と脚部の接点の部分に三角形の突帯を廻らす。脚部外面は丁寧なヘラ磨きが施される。265～272は中期前半と思われるもので，いずれも甕形土器である。口縁部がL字状を呈するものであるが，断面が三角形を呈するものとやや丸みを帯びるものがある。また，胴部上位に突帯を廻らす。ただ，271･272は突帯が認められないが，突帯部分が欠損している可能性もある。273･274は中期中葉と思われる甕形土器である。273はL字状を呈する口縁部で，端部には凹みが認められる。274は3条の三角形貼付突帯を廻らす胴部である。

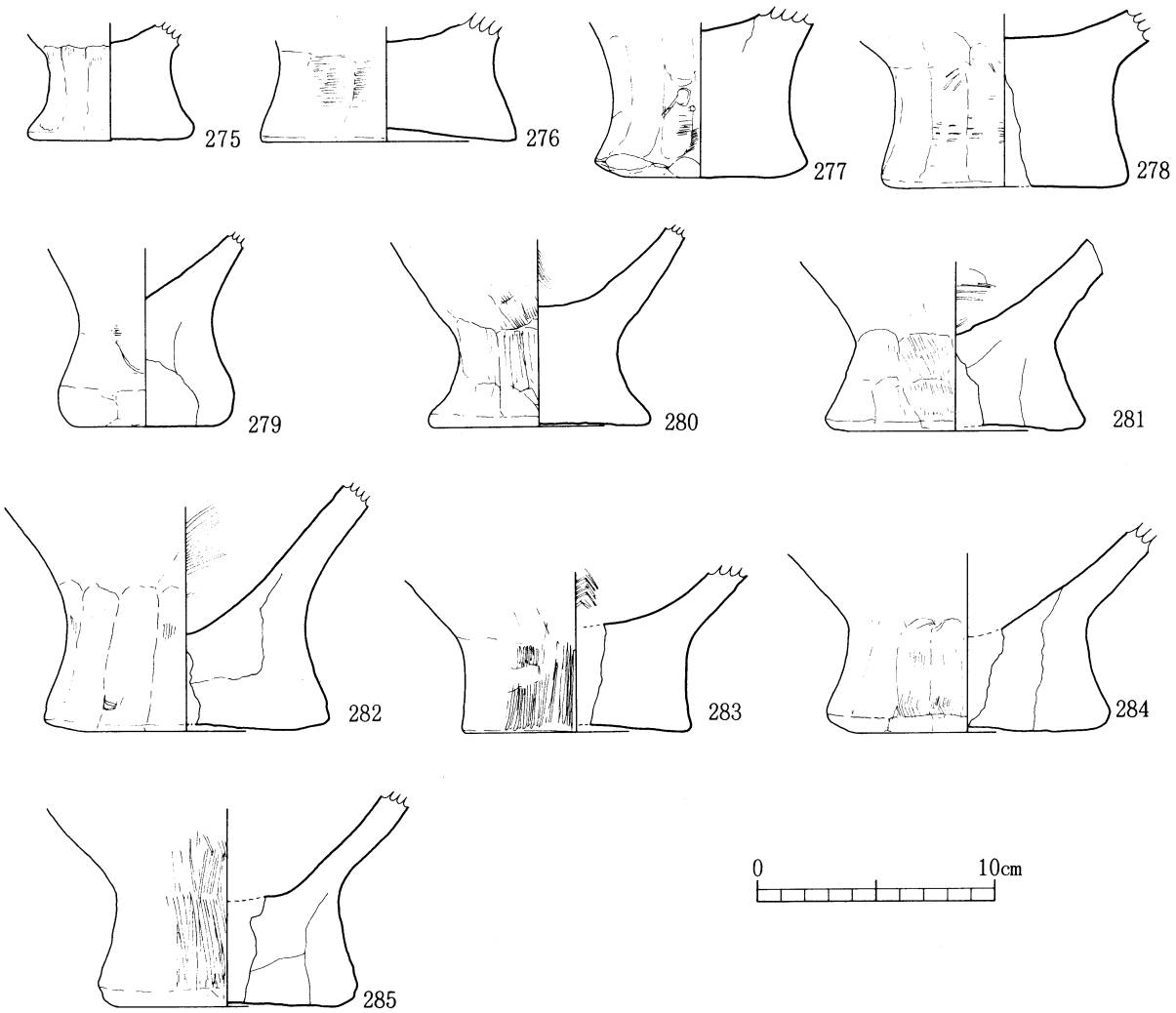
表2

遺物番号	出土区	層位	器種	部位	復元口径	復元底径	復元器高	備考	挿図
258	A－4	Ⅱ	甕	口縁	30.8			前期	第43図
259	A－4	－	〃	〃	22.9			〃	
260	A－3	Ⅱ	〃	〃				〃	
261	C－2	－	〃	〃				〃	
262	B－3	Ⅱ	壺	胴部				〃	
263	I－4	Ⅱ	〃	〃				〃	
264	A－4	Ⅱ	高坏	脚部				中期	
265	A－4	Ⅱ	甕	口縁	34.2			〃	
266	B－2 B－4）	Ⅱ	〃	〃	35.0			〃	
267	B－3	Ⅱ	〃	〃	31.4			〃	
268	A－3	Ⅱ	〃	〃	33.0			〃	
269	0－6	－	〃	〃				〃	
270	B－4	Ⅱ	〃	〃				〃	
271	A－4	Ⅱ	〃	〃				〃	
272	0－6	Ⅱ	〃	〃				〃	
273	B－4	Ⅱ	〃	〃				〃	
274	A－4	Ⅱ	〃	胴部				〃	

※ 単位cm


258
260
261
259
262
263
264
265
269
266
270
267
271
268
272
273
274
0
10cm

第43図　土器実測図

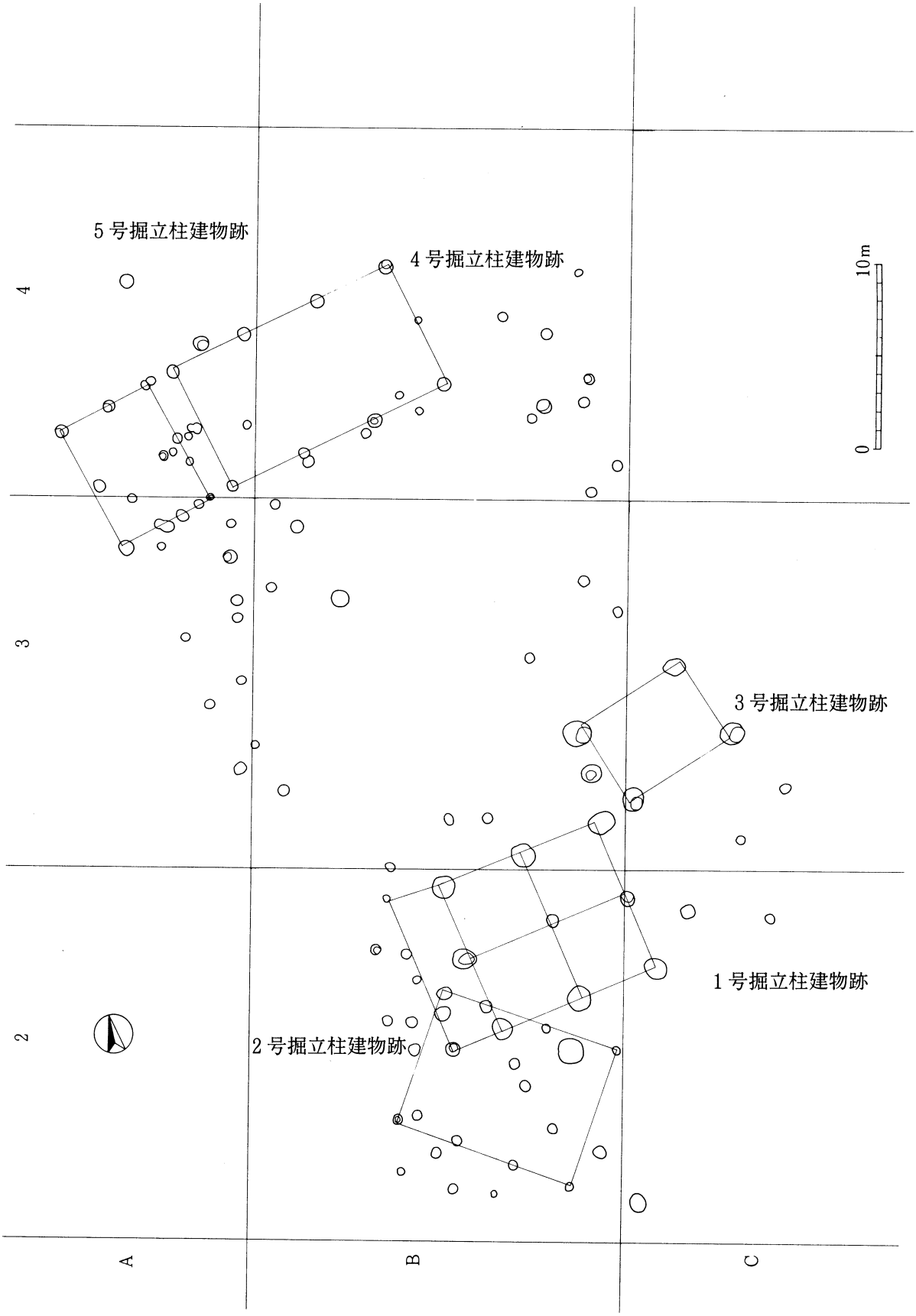


第44図　土器実測図

表 3

遺物番号	出土区	層位	器 種	部 位	復元口径	復元底径	復元器高	備　　考	挿 図
275	H－7	Ⅱ	甕	底 部		7.0			第44図
276	J－7	Ⅲ	〃	底 部		10.8			
277	I－7	Ⅲ	〃	底 部		9.0			
278			〃	底 部		10.4			
279	J－7	Ⅲ	〃	底 部		6.2			
280	J－7	Ⅲ	〃	底 部		9.4			
281	I－7	Ⅲ	〃	底 部		11.0			
282	J－7	Ⅲ	〃	底 部		12.0			
283	I－7	Ⅲ	〃	底 部		9.6			
284	J－6	Ⅲ	〃	底 部		12.0			
285	H－8	Ⅲ	〃	底 部		11.0			

※ 単位cm



第45図　掘立柱建物配置図

第4節　中　世

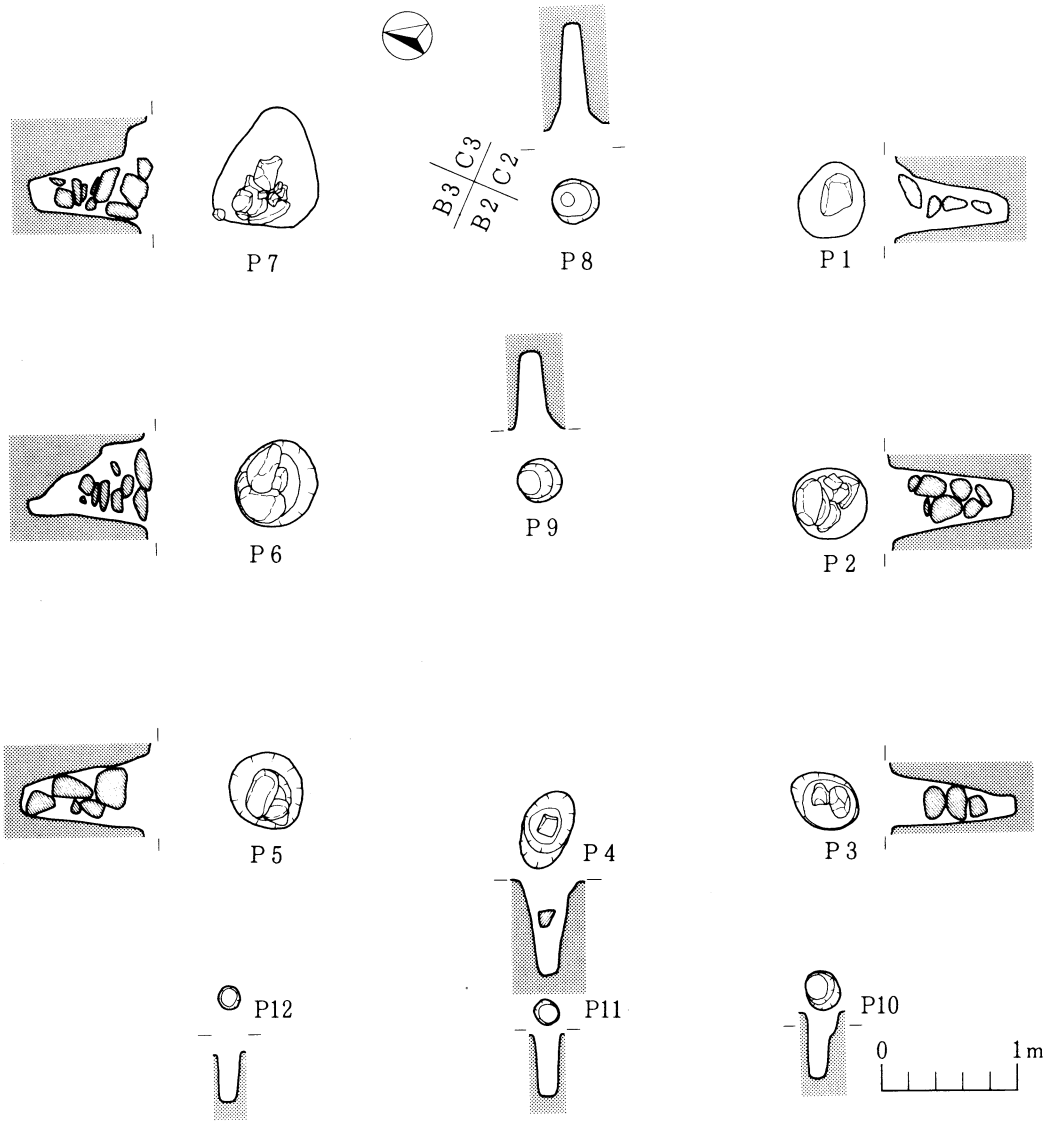
第1節

中世の遺構・遺物は主に調査区の南側の地域において検出された。

遺構は，Ⅲ層上面において堀立柱建物跡5棟が検出された。

1．1号掘立柱建物跡（第45図・第46図）

1号堀立柱建物跡は，調査区の南側（B・C－2・3区）に位置する2間×2間ま総柱建物で，東西約450cm×南北約450cmほぼ方形を呈する。柱穴は整然としており，西側に約150cmの庇と思われる柱穴が認められる。また，南西隅の一部が2号堀立柱建物跡と重なっているが，前後関係については判明しなかった。桁行方位はN－64°－Eである。この建物のほとんどの柱穴には根石と思われる拳大～人頭大の礫が入っていることが大きな特徴である。本跡の中世の建物の中で中心的な建物である可能性が高いものである。



第46図　1号掘立柱建物跡

表4　1号掘立柱建物跡

柱穴計測表　（単位はcm）

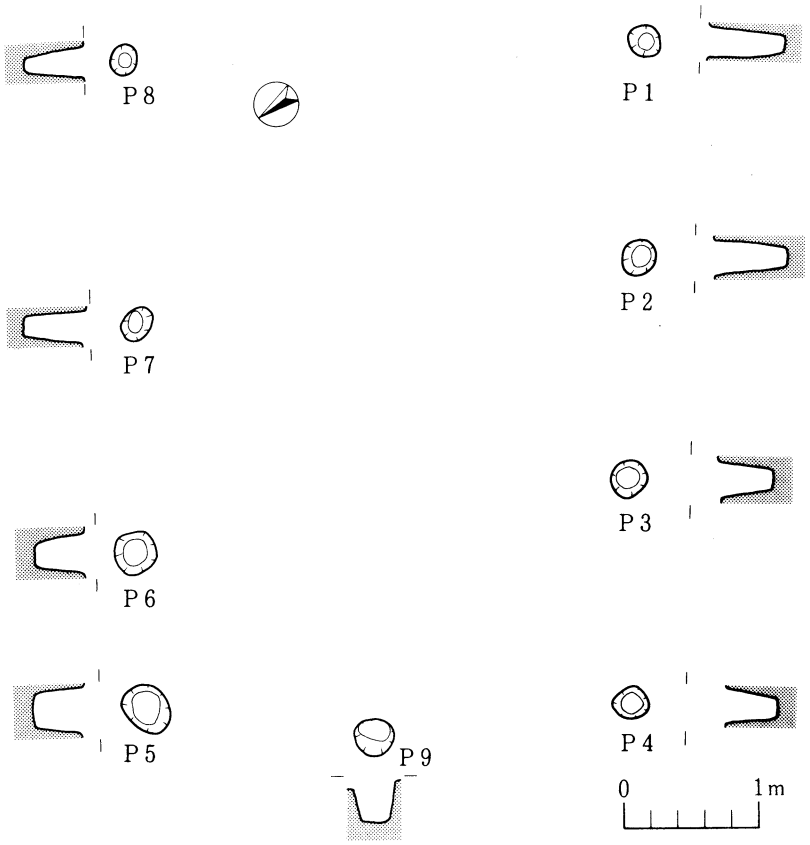
柱穴番号	長 径	短 径	深 さ	備　　考
1	64.0	57.0	86.0	根石4個有り
2	68.0	56.0	90.0	根石7個有り
3	56.0	49.0	92.0	根石3個有り
4	64.0	53.0	83.0	根石1個有り
5	63.0	60.0	94.0	根石5個有り
6	66.0	63.0	90.0	根石9個有り
7	71.0	57.0	90.0	根石10個有り
8	44.0	38.0	80.0	
9	35.0	32.0	50.0	
10	40.0	37.0	46.0	庇　部
11	24.0	21.0	46.0	〃
12	21.0	19.0	37.0	〃

柱間計測表　（計測値は柱穴の心心・単位はcm）

	柱穴番号	柱 間		柱穴番号	柱 間
棟	1～2	220.2	梁	3～4	212.0
	2～3	220.4		4～5	200.0
	1～3	444.0		3～5	410.0
	5～6	230.0		2～9	224.0
	6～7	226.0		6～9	190.0
	5～7	454.0	庇	3～10	138.0
	8～9	210.0		5～12	158.0
	4～9	250.0		4～11	145.0
	1～8	208.0		10～11	208.0
	7～8	216.0		11～12	234.0
	1～7	420.0		10～12	440.0

2．2号掘立柱建物跡（第45図・第47図）

2号掘立柱建物跡は，調査区の最南端（B－2区）に位置する3間×2間（長軸約480cm×短軸約370cm）の建物で長方形を呈する。柱穴の配置は整然としているが，P9に対応する柱穴は検出できなかった。桁行方位はN－60°－Wである。



第47図　2号掘立柱建物跡

表5　2号掘立柱建物跡

柱穴計測表　（単位はcm）

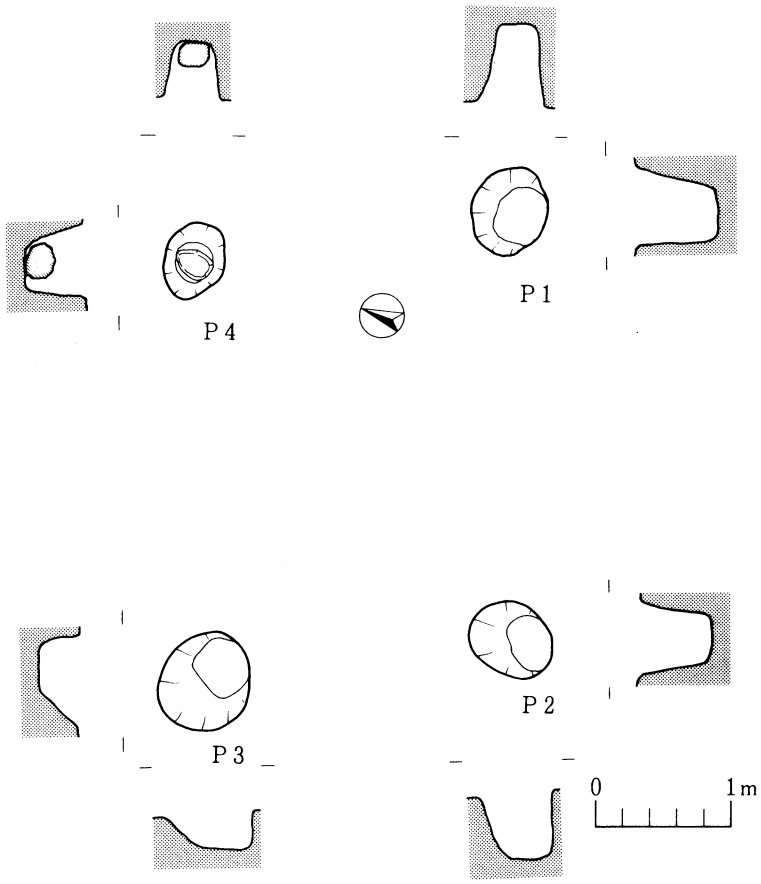
柱穴番号	長 径	短 径	深 さ	備　考
1	28.0	23.0	23.0	
2	29.0	25.0	22.0	
3	29.0	27.0	16.0	
4	30.0	24.0	15.0	
5	40.0	32.0	14.0	
6	35.0	32.0	16.0	
7	29.0	21.0	19.0	
8	25.0	19.0	20.0	
9	34.0	28.0		

柱間計測表　（計測値は柱穴の心心・単位はcm）

	柱穴番号	柱 間		柱穴番号	柱 間
棟	1～2	160.8	梁	4～9	190.2
	2～3	160.6		5～9	170.0
	3～4	170.0		4～5	362.0
	1～4	494.0		1～10	－
	5～8	478.0		8～10	－
	5～6	120.0		1～8	388.0
	6～7	170.2			
	7～8	200.0			
	1～8	388.0			

3．3号掘立柱建物跡（第45図・第48図）

3号掘立柱建物跡は，調査区の中央東側（B・C－3区）に位置する1間×1間（長軸約330cm×短軸約240cm）の長方形で柱穴の配置は整然としている。柱穴P4には根石と思われる人頭台の礫が入っている。桁行方位はN－58°－Eである。



第48図　3号掘立柱建物跡

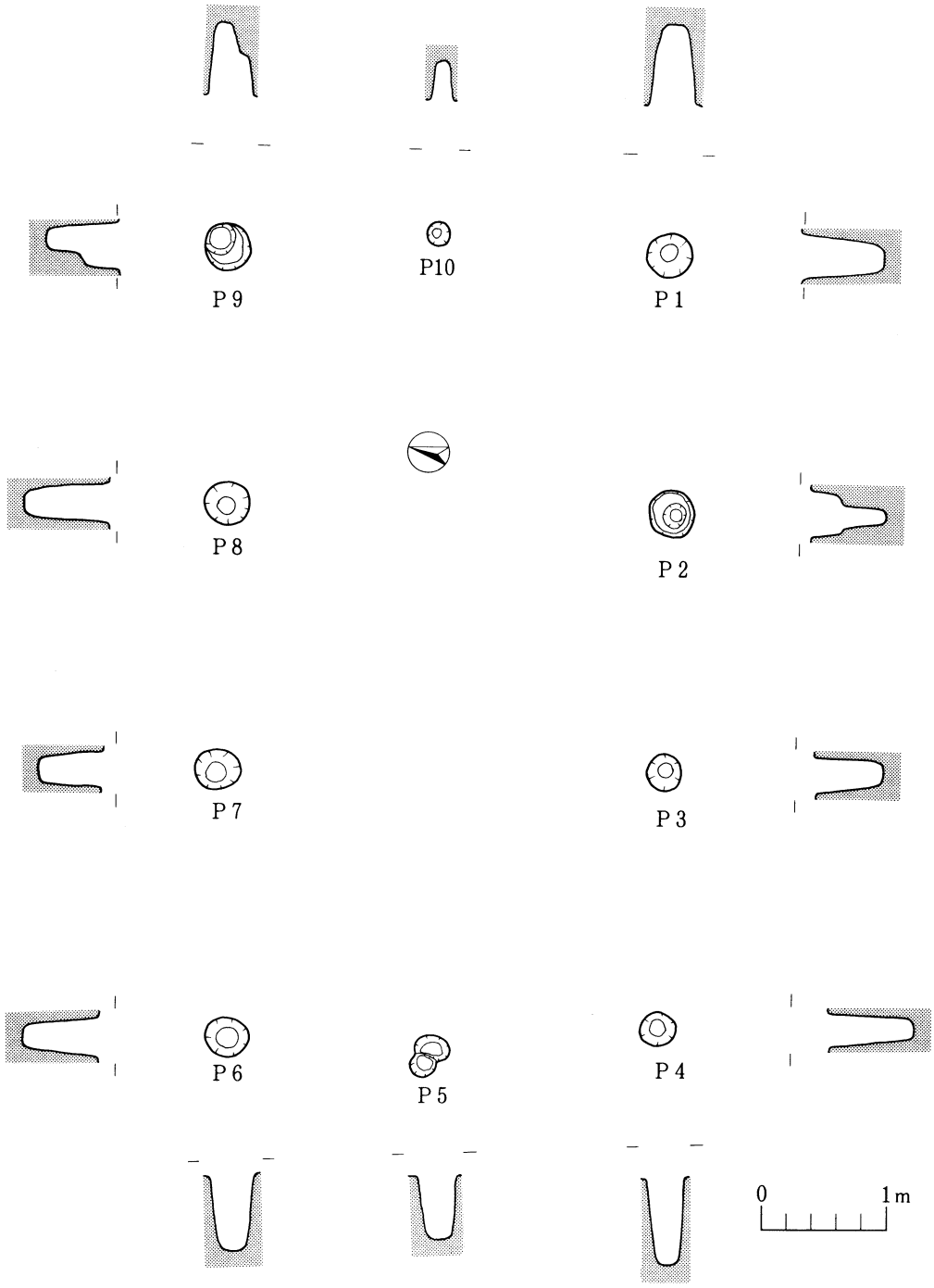
表6　3号掘立柱建物跡

柱穴計測表　（単位はcm）

柱穴番号	長 径	短 径	深 さ	備　　考
1	68.0	58.0	62.9	
2	67.0	54.0	54.4	
3	76.0	66.0	28.8	
4	60.0	46.0	41.4	

柱間計測表　（計測値は柱穴の心心・単位はcm）

	柱穴番号	柱 間
棟	1 ～ 2	334.0
	3 ～ 4	310.0
梁	2 ～ 3	232.0
	1 ～ 4	246.0



第49図　4号掘立柱建物跡

4．4号掘立柱建物跡

4号掘立柱建物跡は，調査区の北西隅（A・B－4区）に位置する3間×2間（長軸約640cm×短軸約360cm）の長方形で柱穴の配置は整然としている。この建物の南西側に5号掘立柱建物跡が並ぶようにして存在する。柱穴№5とP10は小さめで，柱穴№2と№9は2段掘り状を呈している。桁行方位はN－63°－Eである。

表7　4号掘立柱建物跡

柱穴計測表　（単位はcm）

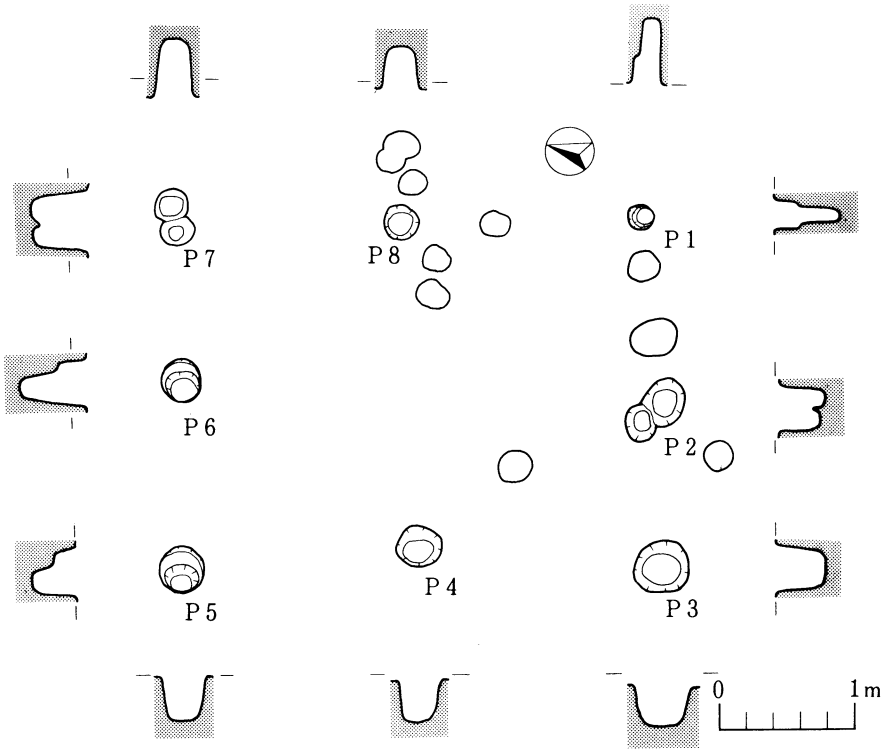
柱穴番号	長径	短径	深さ	備考
1	37.0	36.0	65.5	
2	41.0	37.0	60.4	
3	29.0	28.0	55.9	
4	32.0	28.0	70.8	
5	36.0	21.0	48.6	
6	36.0	32.0	62.4	
7	39.0	33.0	53.3	
8	38.0	36.0	70.3	
9	39.0	37.0	58.8	
10	20.0	20.0	36.3	

柱間計測表　（計測値は柱穴の心心・単位はcm）

	柱穴番号	柱間		柱穴番号	柱間
棟	1～3	208.0	梁	1～10	188.0
	2～3	206.0		9～10	174.0
	3～4	214.0		1～9	358.0
	1～4	628.0		4～5	136.0
	6～7	216.0		5～6	170.0
	7～8	218.0		4～6	54.0
	8～9	210.0			
	6～9	642.0			

5．5号掘立柱建物跡

5号掘立柱建物跡は，調査区の北西隅（A－3・4区）に位置する2間×2間（長軸約360cm×短軸約270cm）の長方形の建物で柱穴の配置は整然としている。4号掘立柱建物跡と並んだ状態で存在する。柱穴P1とP6は2段掘り状を呈する。桁行方位はN－18°－Wである。



第50図　5号掘立柱建物跡

表8　5号掘立柱建物跡

柱穴計測表　（単位はcm）

柱穴番号	長 径	短 径	深 さ	備　　考
1	22.0	18.0	49.5	
2	54.0	28.0	35.3	
3	44.0	41.0	28.5	
4	33.0	31.0	30.8	
5	35.0	34.0	33.9	
6	34.0	29.0	60.9	
7	44.0	16.0	41.4	
8	29.0	27.0	30.4	

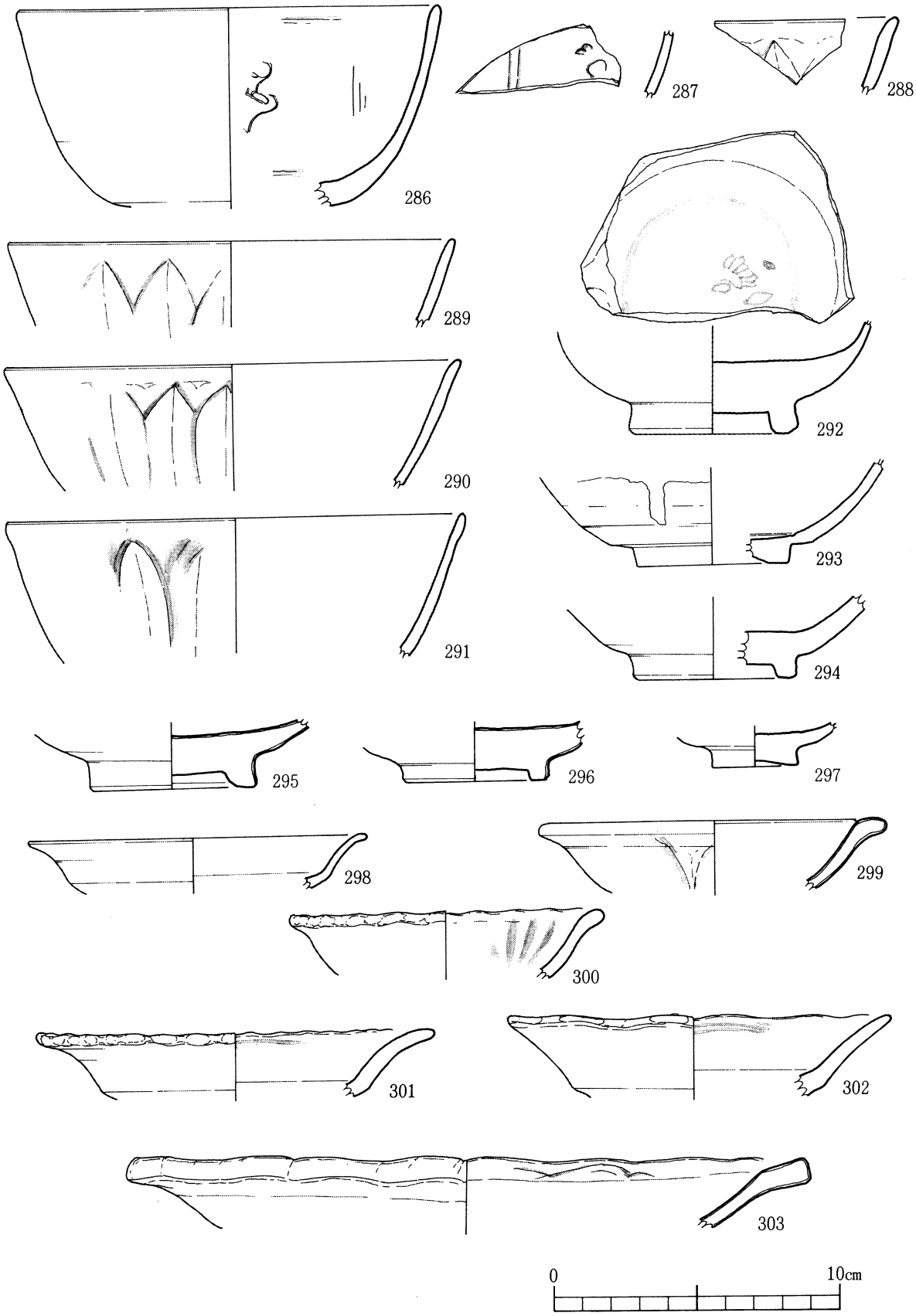
柱間計測表　（計測値は柱穴の心心・単位はcm）

	柱穴番号	柱 間		柱穴番号	柱 間
棟	1 ～ 2	138.0	梁	7 ～ 8	180.0
	2 ～ 3	128.0		1 ～ 8	170.0
	1 ～ 3	266.0		1 ～ 7	350.0
	5 ～ 6	140.0		3 ～ 4	186.0
	6 ～ 7	130.0		4 ～ 5	184.0
	5 ～ 7	270.0		3 ～ 5	364.0

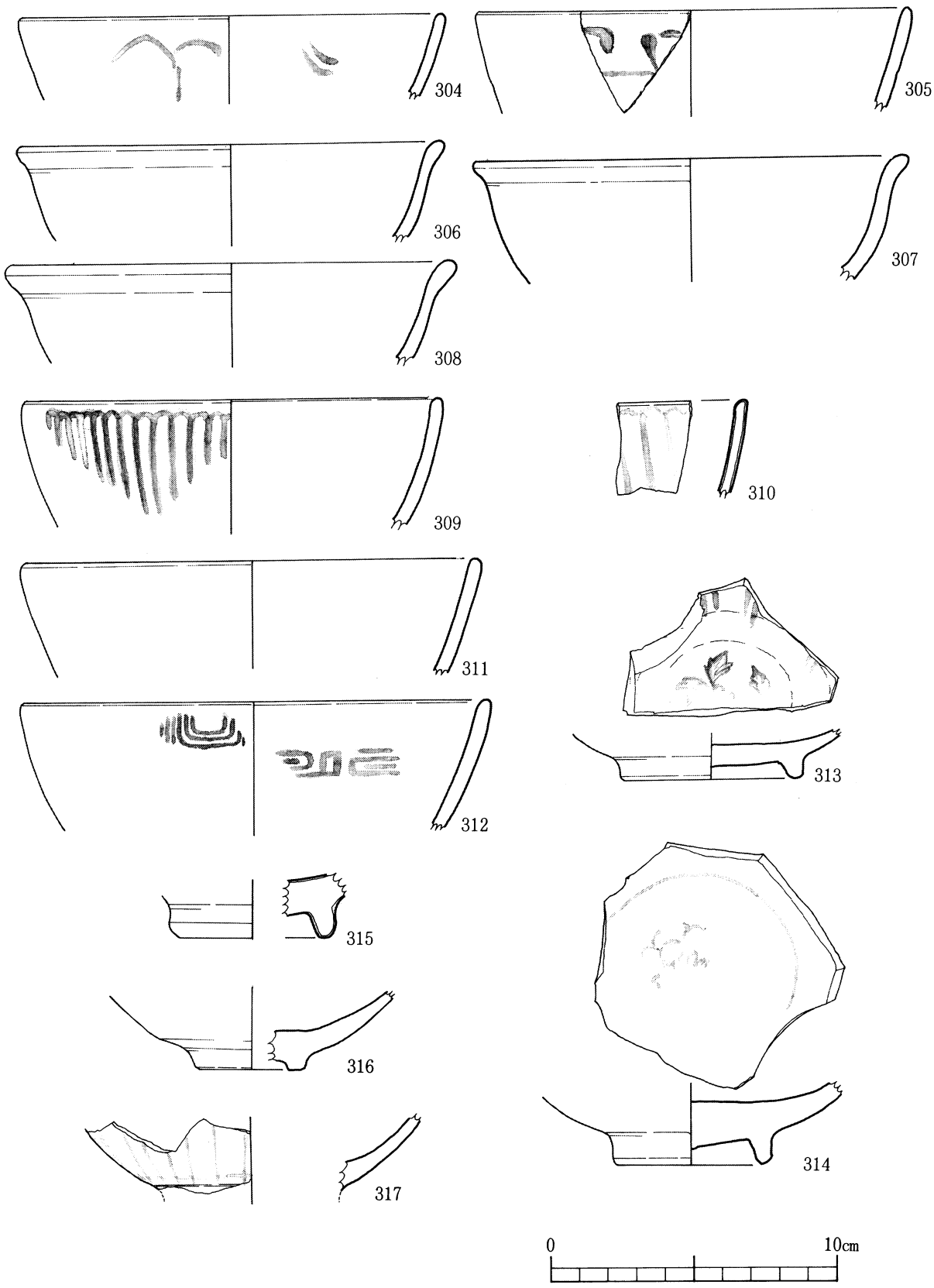
第2節　遺　物

1．青　磁（第51図・第52図）

青磁で図化出来るものは32点である。286と287は内面に花文が見られる碗で，12世紀後半～13世紀の竜泉窯産のものと思われる。286は復元口縁径15cmを測る。288～291は外面に鎬蓮弁文が見られる碗で，13世紀～14世紀の竜泉窯産のものと思われる。復元口縁径は289が15.8cm，290が16cm，291が16.2cmを測る。292～297は碗の底部で13～14世紀のものである。292は内面に界線と花文が見られるもので，畳付き及び外底面は露胎である。13世紀～14世紀中頃（南宗～元）のものと思われる。293は内面に沈線による界線が見られ，外面の体部界から底部にかけては露胎である。294～296も碗の底部である。294は外底面，295・296は畳付き及び外底面は露胎である。297はやや上底の充実高台を有する小型の碗である。底部外面は露胎で，見込み部分に灰かぶれが認められる。298～303は皿で，298はやや薄手で胴部に稜線を有するもの。300～302は稜花皿である。303は稜花盤で，復元口縁径24cmを測る。298～300は14世紀～15世紀。301・302は14～16世紀。303は14世紀後半～15世紀中頃のものと考えられる。304は無鎬の蓮弁文が見られるもので，14世紀中半～15世紀前半。305は14世紀中半～14世紀と考えられる。306～308は端反碗である。14世紀中半～15世紀中半と思われる。309・310はヘラ描き細蓮弁文の見られる碗で14世紀中半～15世紀中半と思われる。311は無文の碗で，14世紀～16世紀と思われる。312は印花雷文帯の碗で15世紀後半～16世紀前半と思われる。313～317は底部。313は見込みに花文がスタンプされているもので，高台部分まで釉がかかり露胎外底面だけである。14世紀中半～15世紀と思われる。314は見込みの界線文内に文様らしいものがみられるがはっきりしない。高台まで釉がかかり露胎は外底面のみである。14世紀～15世紀と思われる。315は竹節高台で，高台部分まで釉がかかるものである。14世紀～15世紀と思われる。316・317は細蓮弁文を有するものと思われる。316は畳付き・外底面は露胎である。15世紀末～16世紀と思われる。


286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
0
10cm

第51図　青磁実測図 1



第52図　青磁実測図 2

表9　青磁観察表

遺物番号	出土区	層位	器種	部位	復元口径	復元底径	復元器高	備考	挿図
286	O－10	Ⅱ	碗	口縁部	15			花文，12～13世紀，竜泉窯	第51図
287	B－4	Ⅱ	碗	体部				花文，12～13世紀，竜泉窯	
288	B－4	Ⅱ	碗	口縁				鎬蓮弁文，13～14世紀，竜泉窯	
289	B－3	Ⅱ	碗	口縁部	15.8			鎬蓮弁文，13～14世紀，竜泉窯	
290	P－6		碗	口縁部	16			鎬蓮弁文，13～14世紀，竜泉窯	
291	A－4	Ⅱ	碗	口縁部	16.2			鎬蓮弁文，13～14世紀，竜泉窯	
292	C－3	Ⅱ	碗	底部		6.0		界線・花文，畳付・外底面露胎，13～14世紀中頃	
293	J－7	Ⅰ	碗	底部		5.4		界泉，体部下位から底部露胎，13～14世紀	
294			碗	底部		5.8		外底面露胎，13～14世紀	
295	J－6	Ⅲ	碗	底部		5.8		畳付き・外底面露胎，13～14世紀	
296	A－3	土手	碗	底部		5.1		畳付き・外底面露胎，13～14世紀	
297	A－3	Ⅱ	碗	底部		3.0		充実高台状の小型碗，底部外面露胎，13～14世紀	
298	J－7	Ⅰ	Ⅲ	口縁	12.0			薄手，体部に稜線，14～15世紀	
299	J－7	Ⅰ	Ⅲ	口縁	12.2			14～15世紀	
300	J－7	Ⅰ	稜花Ⅲ	口縁	11.0			14～15世紀	
301	J－7	Ⅰ	稜花Ⅲ	口縁	14.0			14～16世紀	
302	J－6	Ⅰ	稜花Ⅲ	口縁	13.4			14～16世紀	
303	J－6	Ⅰ	稜花盤	口縁部	24			14世紀後半～15世紀中頃	
304	B－2	Ⅱ	碗	口縁	14.9			無鎬蓮弁文，14世紀中半～15世紀前半	第52図
305	I－8	Ⅱ	碗	口縁	15.2			14世紀中半～15世紀	
306	J－6	Ⅰ	碗	口縁	15.0			端反口縁，14世紀中半～15世紀中半	
307	J－7	Ⅰ	碗	口縁	15.2			端反口縁，14世紀中半～15世紀中半	
308	J－7	Ⅰ	碗	口縁	15.8			端反口縁，14世紀中半～15世紀中半	
309	J－6	Ⅰ	碗	口縁	14.7			ヘラ描き細蓮弁文，14世紀中半～15世紀中半	
310			碗	口縁				ヘラ描き細蓮弁文，14世紀中半～15世紀中半	
311	住居北号		碗	口縁	16.1			14～16世紀	
312	〃		碗	口縁	16.4			印花雷文帯碗，15世紀後半～16世紀前半	
313	A－3	土手	碗	底部		6.4		花文，外底面のみ露胎，14世紀中半～15世紀	
314	C－3	Ⅱ	碗	底部		5.5		界線文，外底面のみ露胎，14世紀～15世紀	
315	J－7	Ⅰ	碗	底部		5.2		竹節高台，高台まで釉がかかる，14世紀～15世紀	
316	I－7	Ⅱ	碗	底部		3.5		細蓮弁文，畳付・外底面露胎，15世紀末～16世紀	
317	J－6	Ⅰ	碗	胴部				細蓮弁文，15世紀末～16世紀	

※ 単位cm

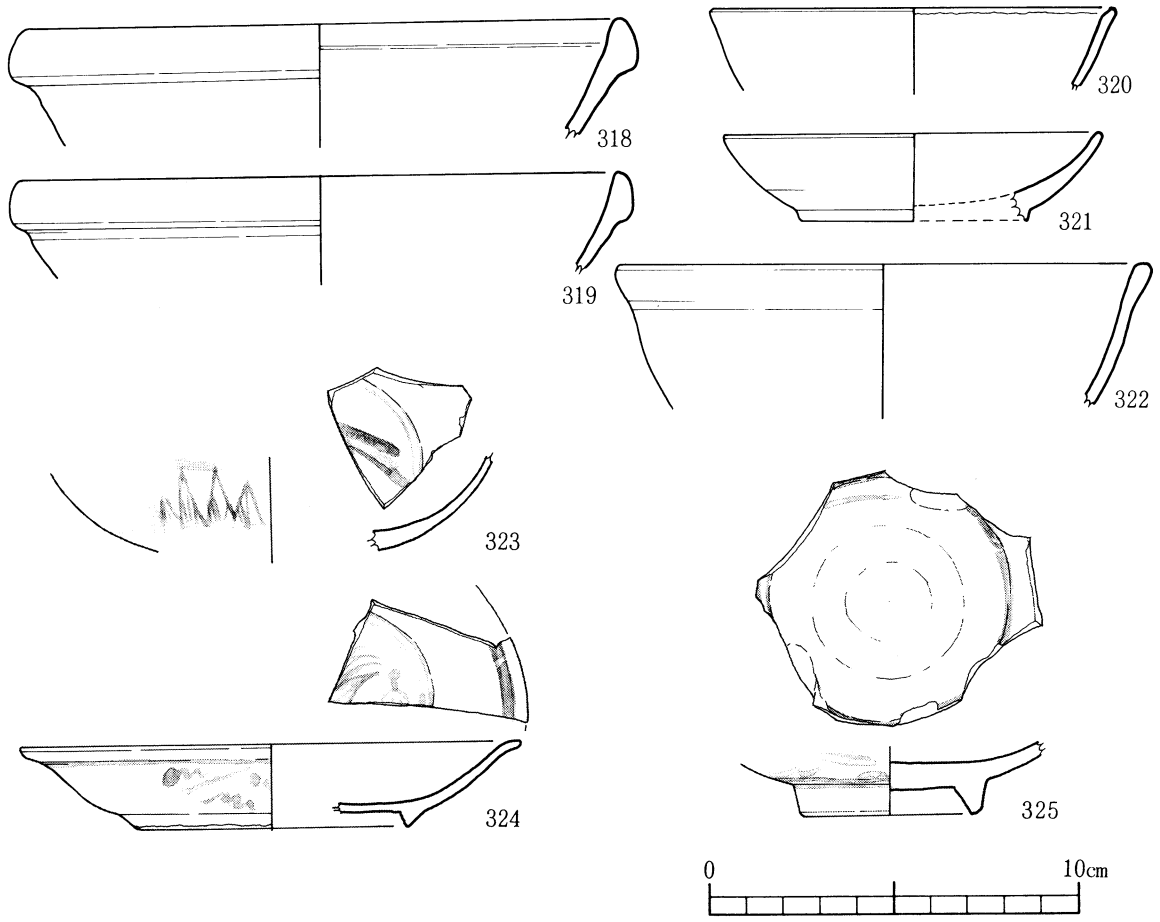
2．白　磁（第53図－318～322）

白磁で図化出来たものは5点だけである。318・319は玉縁口縁の碗である。復元口縁径は318・319共に17cmを測る。12世紀～13世紀と思われる。320は口ハゲの小皿で復元口縁径11cmを測るもので，13世紀～14世紀中半と思われる。321は高台を有する小皿で復元口縁径10.3cmを測る。14世紀中半～15世紀中半と思われる。322は端反口縁の碗で復元口縁径14.5cmを測る。14世紀～15世紀と思われる。

表10　白磁観察表

遺物番号	出土区	層位	器種	部位	復元口径	復元底径	復元器高	備考	挿図
318	J－7	I	碗	口縁	16.0			玉縁口縁	第53図
319	J－7	I	〃	口縁	16.1				
320		表	皿	口縁	10.8				
321	掘立II号		〃	口縁	10.1				
322	J－7	I	碗	口縁	14.0				

※ 単位cm



第53図　白磁実測図

3．染　付（第53図－323～325）

染付けで図化出来たものは３点である。323は碁笥底の皿で外面に芭蕉文が見られる。324は高台を有する皿で口縁部は端反り気味で，復元口縁径13.6cmを測る。畳付きは露胎である。325は碗であるが文様ははっきりしない。底部内面・高台・底部外面が露胎である。

表11　染付け観察表

遺物番号	出土区	層位	器種	部位	復元口径	復元底径	復元器高	備考	挿図
323	掘立Ⅱ号		皿	胴部				碁笥底，芭蕉文	第53図
324	J－6	Ⅰ	皿	口縁	13.6	7.3			
325		表	碗	底部		4.5			

※ 単位cm

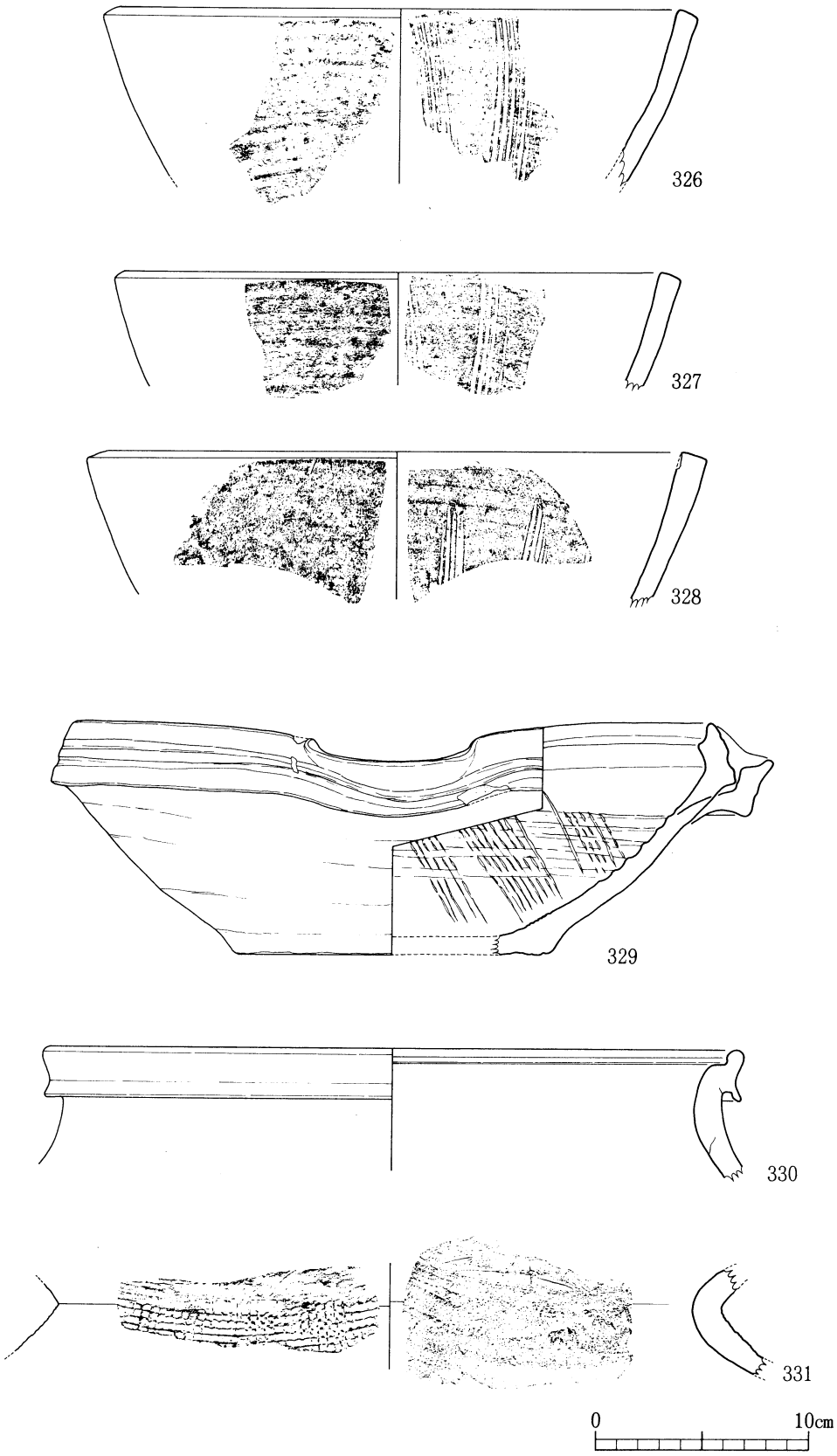
4．陶　器（第54図）

陶器もわずかではあるが出土している。326～329は備前焼きの擂鉢と思われる。口縁端部は平坦におさめるもので５～６条の櫛目が入る。328には注ぎ口部分がわずかに認められる。329は復元口縁径30cm・器高11cmを測るもので，注ぎ口が明瞭である。また，内面は，凹凸が著しく，９条の櫛目が斜位に施される。330は常滑焼きの甕である。肩部から内傾した口縁部は垂直気味におさめるものである。331は樺万夫窯のものと思われる甕である。頸部がしまるもので，外面には細かい格子目叩きが認められる。

表12

遺物番号	出土区	層位	器種	部位	復元口径	復元底径	復元器高	備考	挿図
326	A－3	土手	擂り鉢	口縁	26.0			備前焼	第54図
327	A－4	Ⅱ	〃	口縁	25.0			〃	
328	A－4	Ⅱ	〃	口縁	27.0			〃	
329	A－3	Ⅱ	〃	口縁，胴部底部あり	30	14.6	11	〃	
330	A－3	Ⅱ	甕	口縁	32.0			常滑焼	
331		表採	〃	胴部				樺万夫窯	

※ 単位cm



第54図　備前焼他実測図

まとめ

大園遺跡は，縄文前期・後期・晩期や弥生前・中期，中世の複合遺跡であるが，縄文晩期及び中世を主体とするものであった。全体的に耕作等によって遺物包含層は攪乱を受け残りは良好では無かった。

縄文時代の遺構には，縄文後期の指宿式土器を伴って，クスノキ科のバリバリまたは，ノキハマビワの炭化種子が出土した貯蔵穴が検出された。また，略円形の竪穴状遺構（竪穴住居を想定）3基があるが，遺物は見られず時期は定かでないが，遺跡の性格から縄文後期及び晩期相当のものと推定される。

出土土器は，縄文前期～晩期にかけて13類に分類した。詳しくは本文で述べたが，その中でⅣ類は縄文後期中葉の一湊式土器である。一湊式土器は上屋久町一湊遺跡出土の土器を標識とし，屋久島を中心に種子島などに分布するが，極めてローカル色の強い土器であるが，本土では上加世田遺跡で1点出土している。Ⅴ類a・b・c土器は，本遺跡の主体となる一群である。Ⅴ類aは，口縁部はわずかに「く」の字状に屈曲して外反し，内外面に稜を残す深鉢形土器である。Ⅴ類cも同様な器形となる鉢形土器である。器壁は約1.5cm前後と厚く，ダイナミックで全体的に雑な仕上がりとなる地域色の強い一群である。榎木崎B遺跡や榎木原遺跡タイプのもので，晩期黒川式に相当し，刻目文突帯文土器様式の前段階としてとらえることができよう。Ⅵ類は，小判形の胴部に広口の口縁部が付き，肩部に入組状沈線文を施し，口唇部に三角形の突起を有す小型鉢型土器である。全体的に磨耗しているが，研磨土器であることが伺われ，さらに丹塗りの痕跡を残している。器形や文様構成など，この種の土器は本県では初めての発見である。縄文は見られないが，大洞C2土器の特徴を残す土器である。なお，晩期中葉の関東を中心とした安行式系統の土器が中種子町や安行3D式土器系統のU字形双口土器が上加世田遺跡から出土していることなど，南九州および大隅諸島が関東・近畿との影響を受け，本土との交易など貴重な資料といえる。

中世については，掘立柱建物跡5棟が検出され，このなかで特に掘立柱建物1は，西側に庇が付随する総柱の3間×4間で，柱穴の規模，根石の状況から本遺跡の中心的な建物であるが，遺跡全体の位置づけ，性格等は現段階では不明である。

大園遺跡の組織痕土器は全部で11点であるが，平織や網目の組織痕はなくすべて編布の圧痕である。経糸及び緯糸の間隔がそれぞれ異なっており，数種類の編布があったと考えられる。特に経糸が広い部分と狭い部分を交互に繰り返している96と102は，デザインとしてもすぐれているものであり，縄文時代晩期における衣服の様相を探る上でも貴重なものである。尾関清子先生のご指摘によると，このような編布は南九州に分布しているという。

組織痕土器は九州地方の縄文時代晩期後半の黒川式土器期から弥生時代前期の刻目突帯土器に伴うものであり，鹿児島県内では平成10年3月段階で87遺跡が知られていたが，その後国分上野原遺跡・金峰町下原遺跡・鹿児島市不動寺遺跡及び大園遺跡を加え，91遺跡となった。しかも，これまで九州島内を出ることはなかったが，大園遺跡の発見で南島にもその分布が広がることになった。他の遺跡では，中華鍋形が主であるが，大園遺跡では底面が平坦でフライパン形の器形を呈する。他の例もそうであるが，煤やコゲ付きがみられることから，煮沸用として使われたと考えられる。食物調理用であるとの確証は得られていないが，その可能性は高い。組織痕は土器の整形に型取り法を用いる際，粘土をはがしやすくするために敷かれたものである。縄文時代の伝統的な輪積み法を変えてまで，なぜ型取り法を用いた浅鉢の器形が必要となったのかを考えなければならない。

中世については，掘立柱建物跡5棟が検出され，このなかで特に掘立柱建物1は，西側に庇が付随する総柱の3間×4間で，柱穴の規模，根石の状況から本遺跡の中心的な建物であるが，遺跡全体の位置づけ，性格等は現段階では不明である。

参考文献

堂込秀人「南九州縄文晩期土器の再検討」鹿児島考古　第31号　1997
橋口尚武「海を渡った縄文人」小学館1999
熊本県教育委員会「黒橋貝塚」「熊本県財調査報告書165集」1987. 3
鏡山猛「原生期の織布　－九州の組織痕土器を中心に－（上）（中）（下）」
『史淵』第86輯～第89輯　1961.3～1962.12　九州大学文学部
渡辺誠「組織痕土器研究の諸問題」『交流の考古学』三島格快調古希記念肥後考古第8号　1991.6.30
尾関清子『縄文の衣』学生社
東和幸「鹿児島県の組織痕土器」『南九州縄文通信』№12　1998.3　南九州縄文研究会

図版 1

（上）大園遺跡全景

（下）調査風景

図版 2

（上）土 層

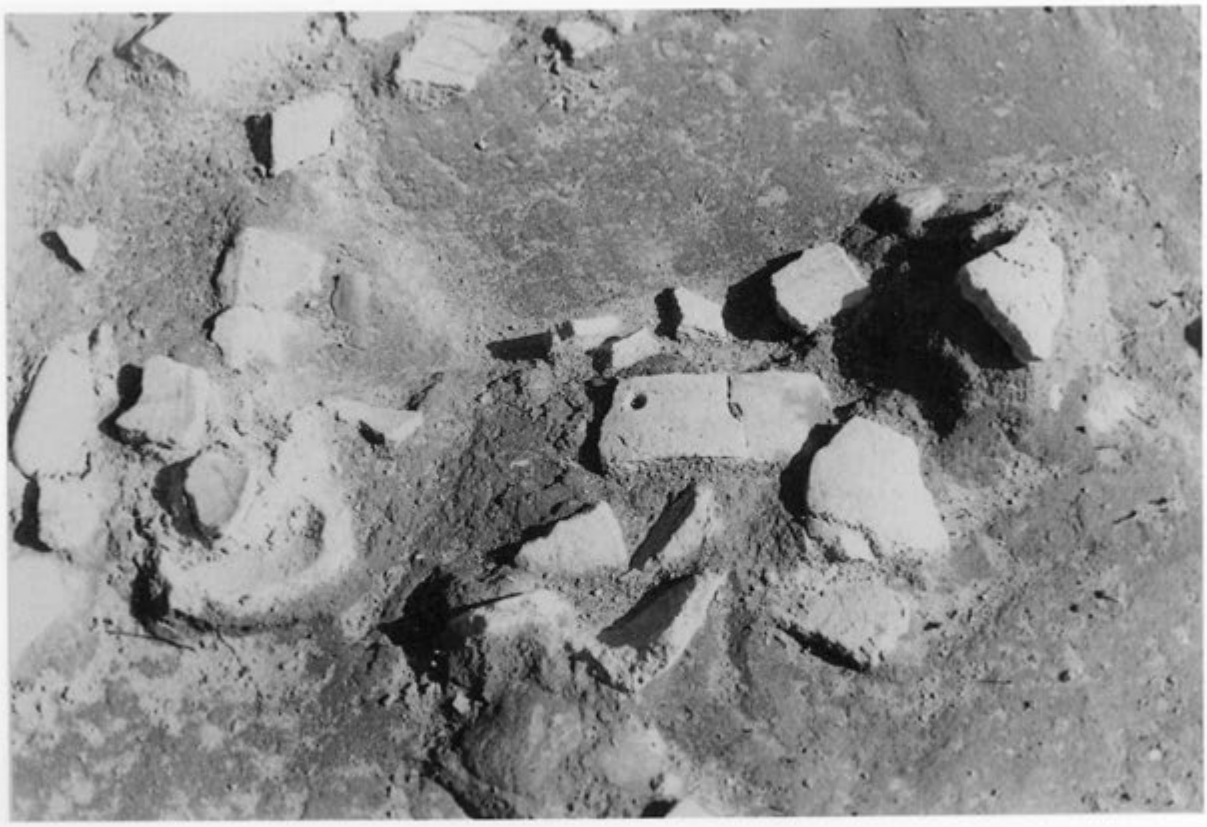
（下）遺物出土状況

図版 3

遺物出土状況

図版 4

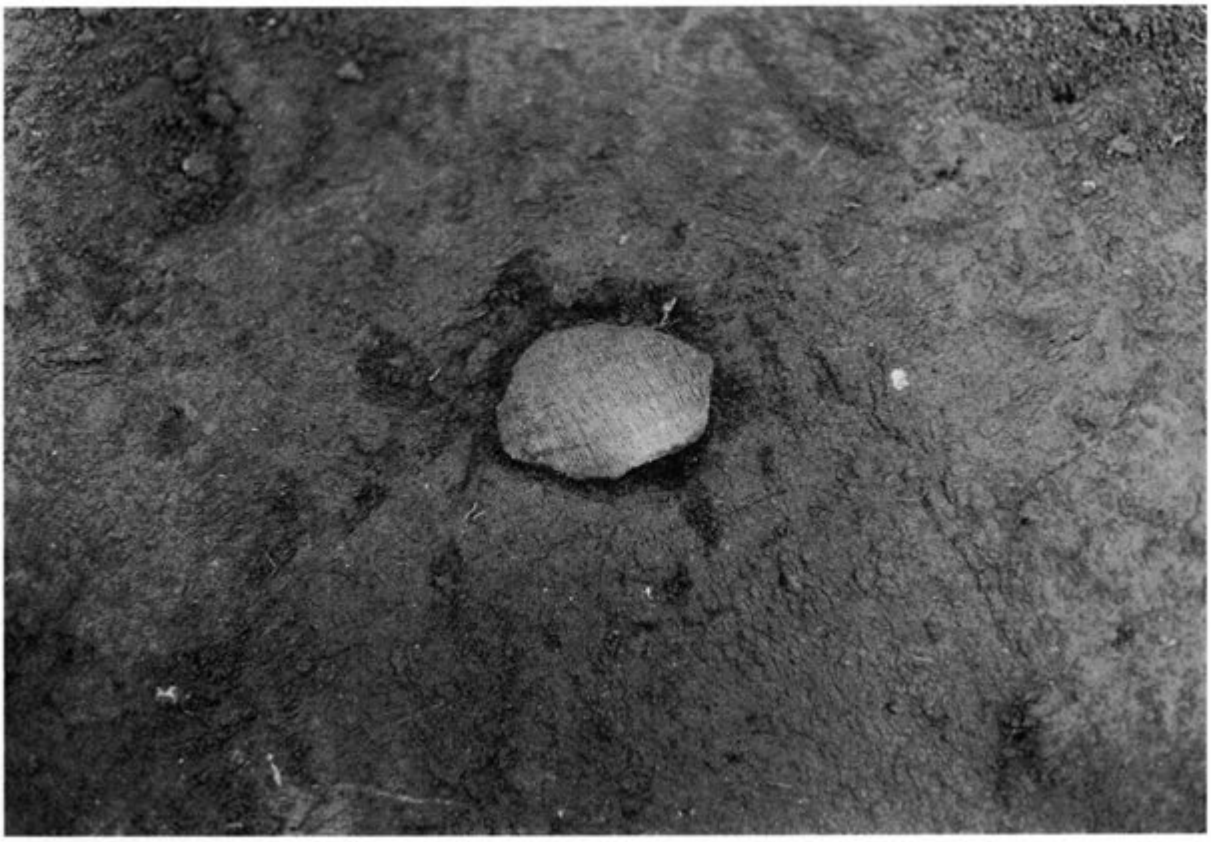
遺物出土状況



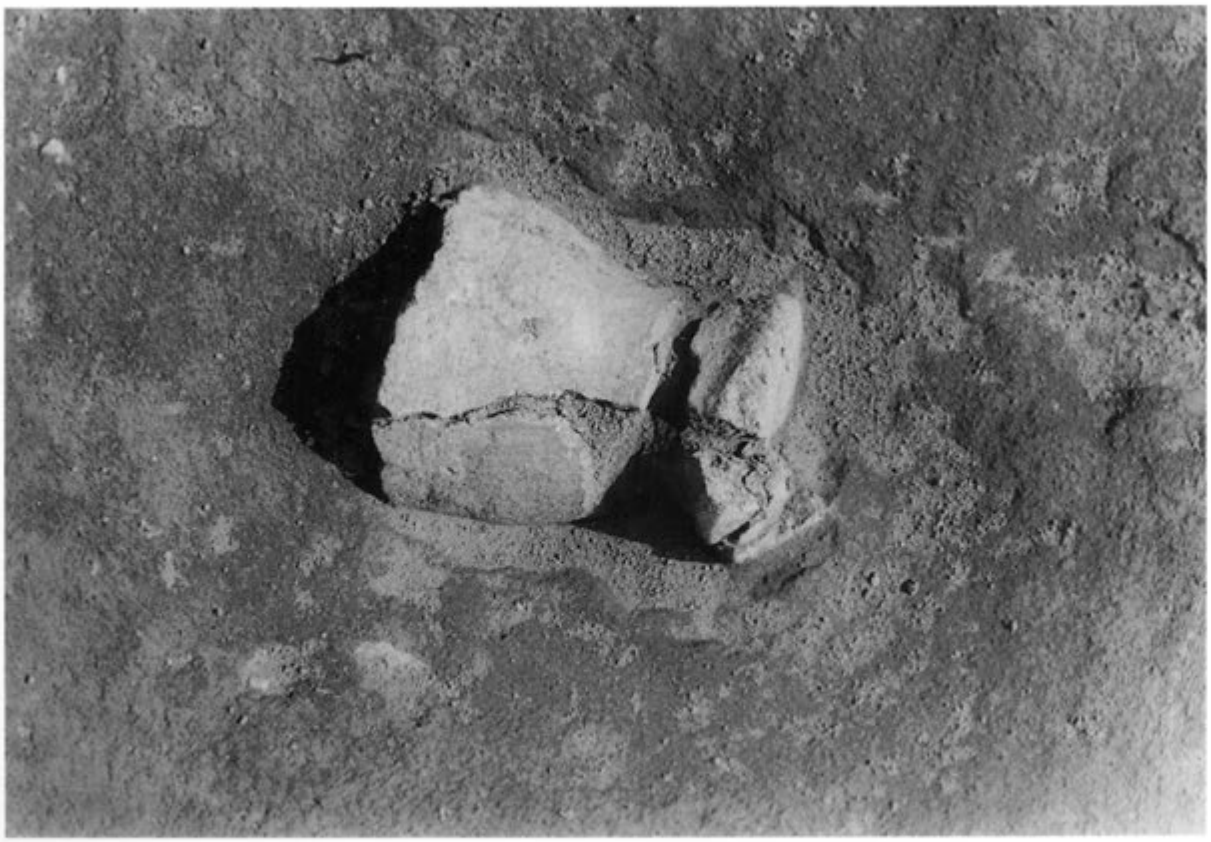
図版 5

土器出土状況

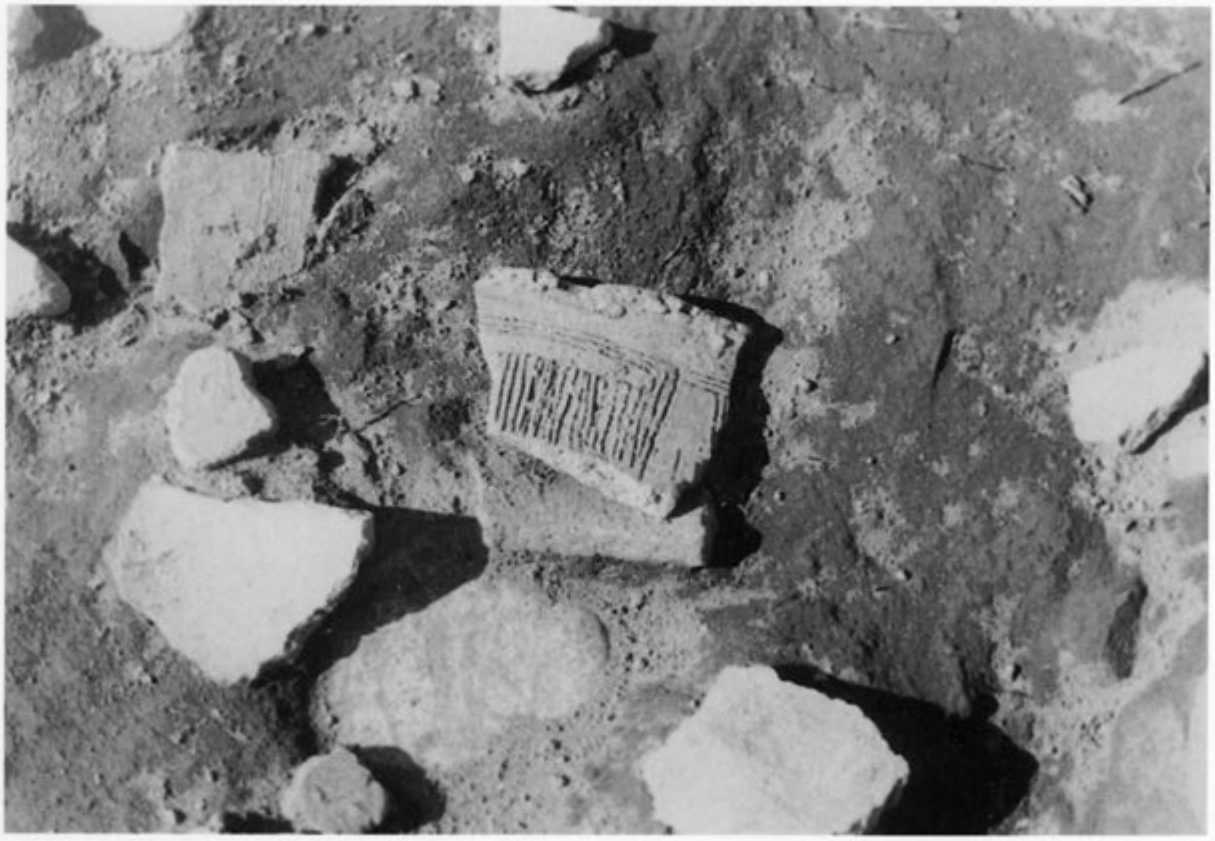
図版 6



土器出土状況



図版 7



土器出土状況

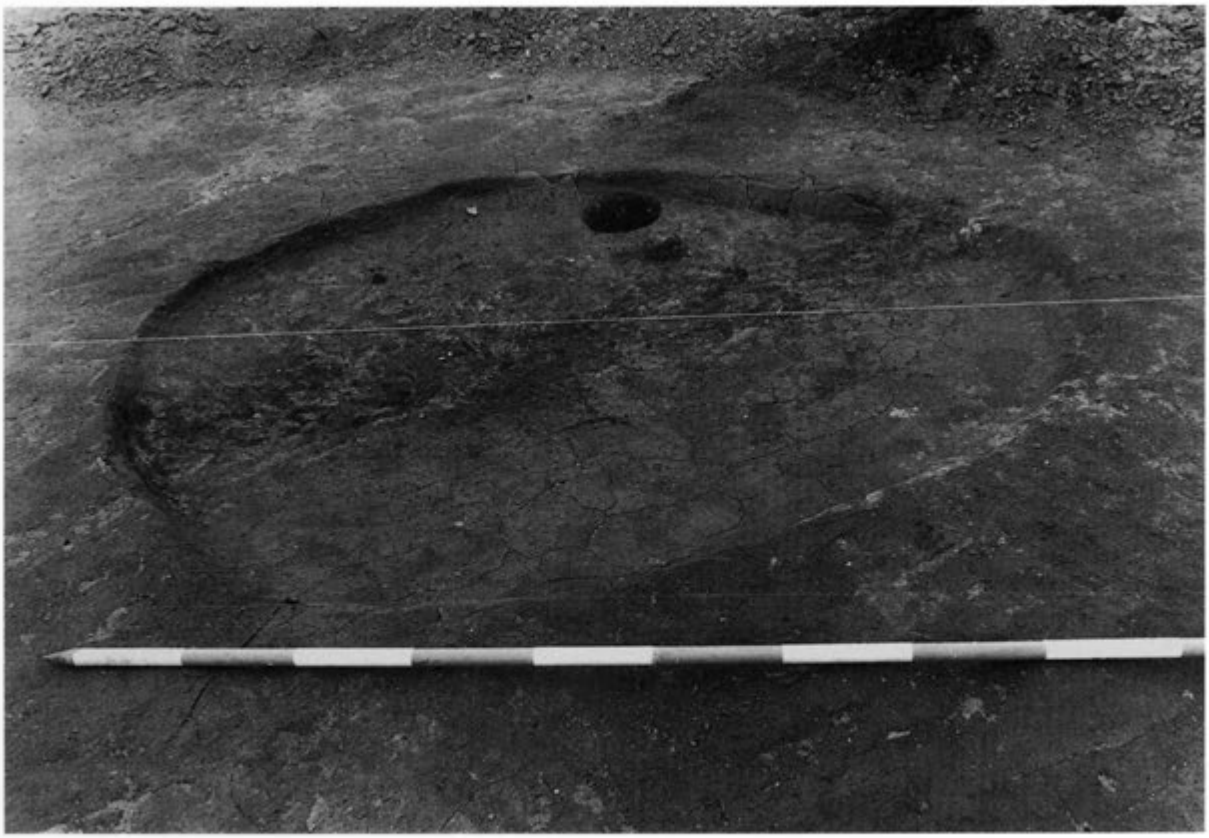
図版 8

（上）土器出土状況

（下）貯蔵穴

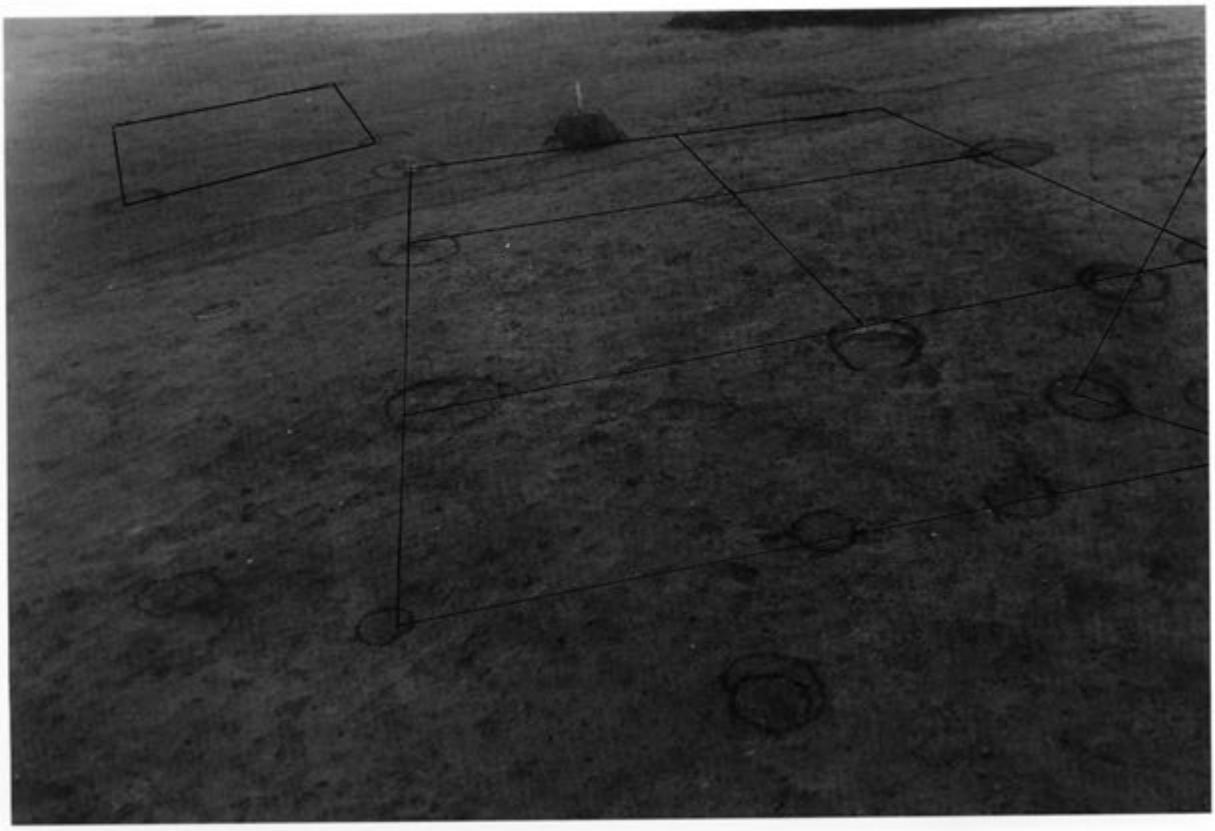
（上）貯蔵穴

（下）竪穴状遺構 1



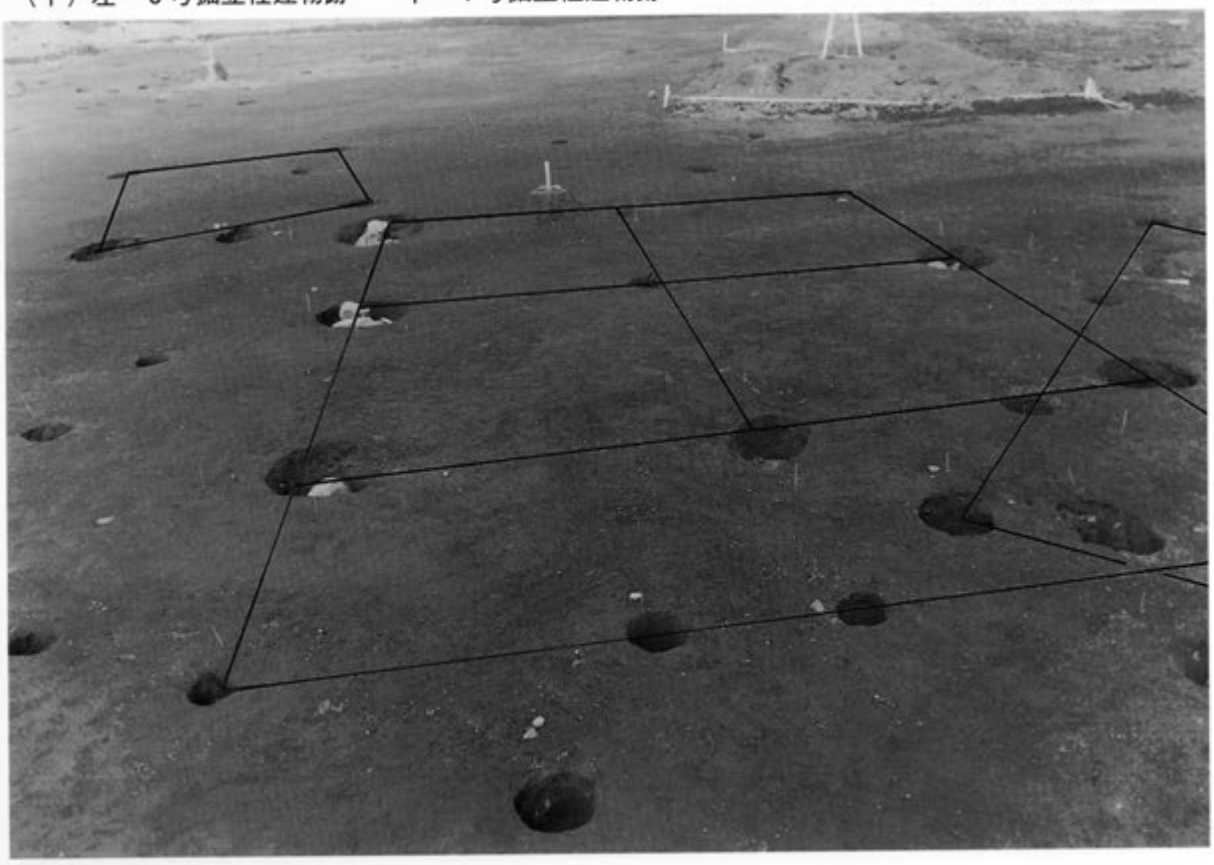
（上）竪穴状遺構 1

（下）竪穴状遺構 2



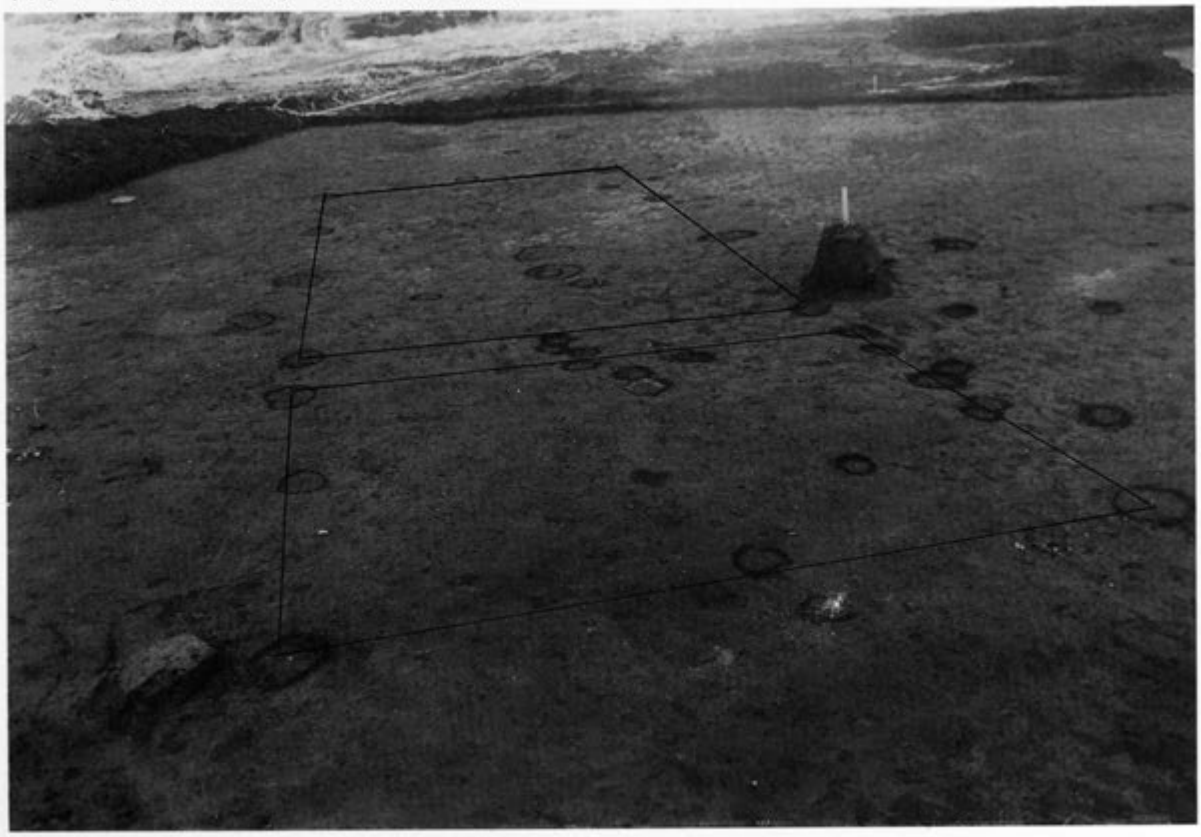
（上）掘立柱建物跡

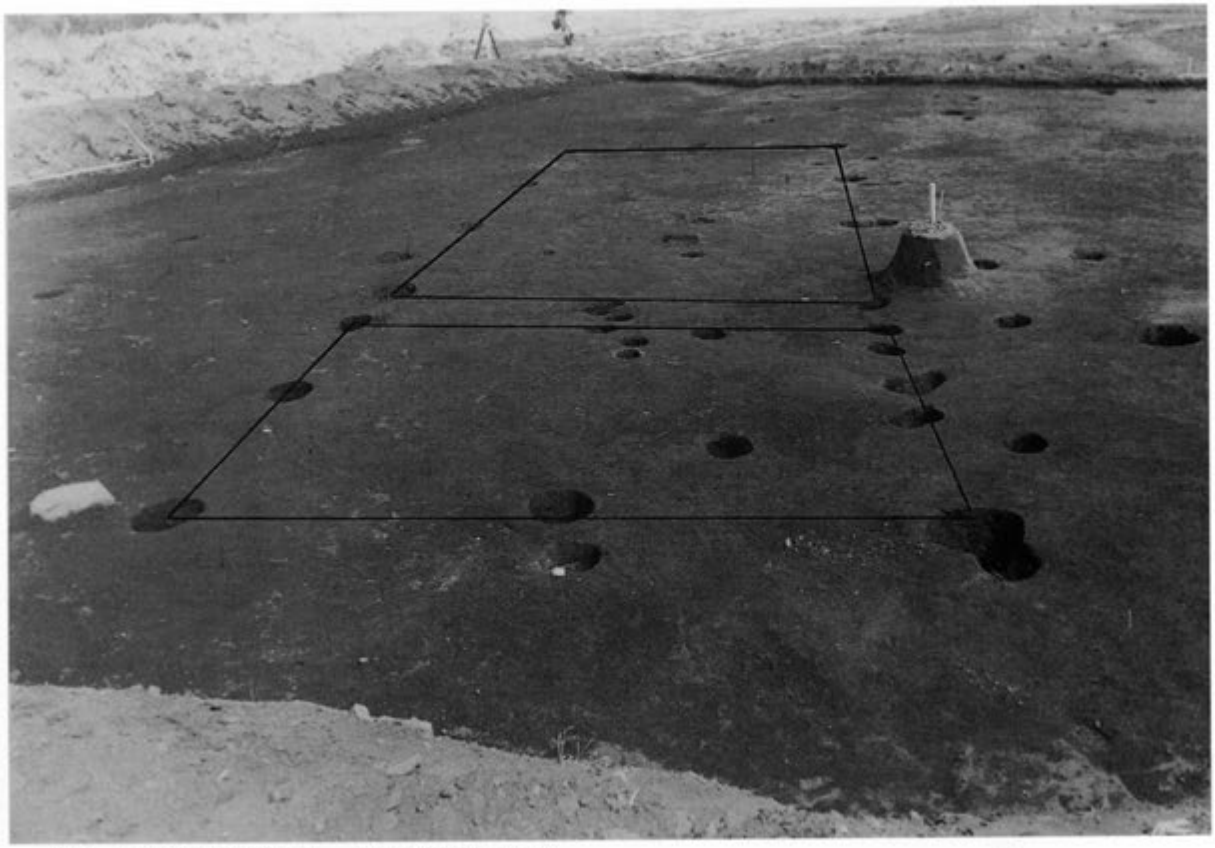
（下）左ー3号掘立柱建物跡　中ー1号掘立柱建物跡　右ー2号掘立柱建物跡



（上）１号掘立柱建物跡

（下）４号掘立柱建物跡，５号掘立柱建物跡

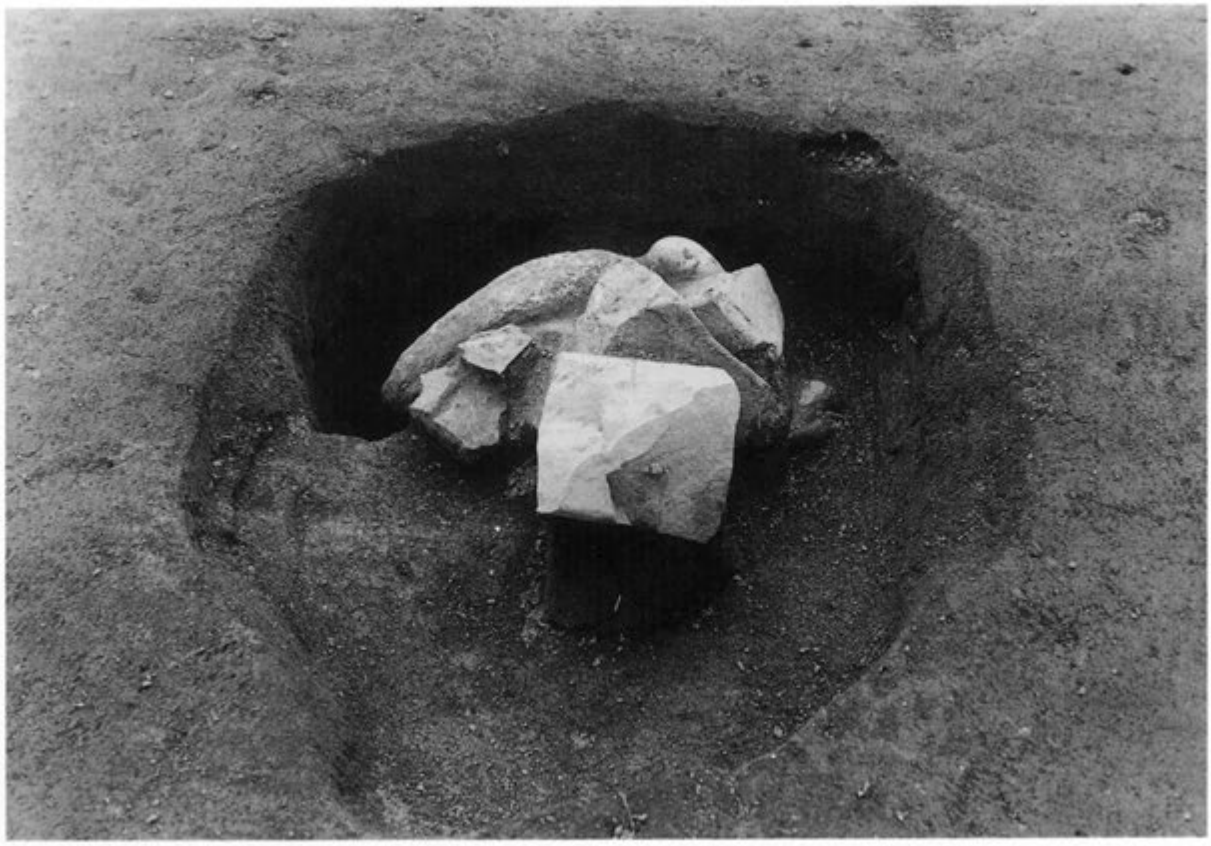




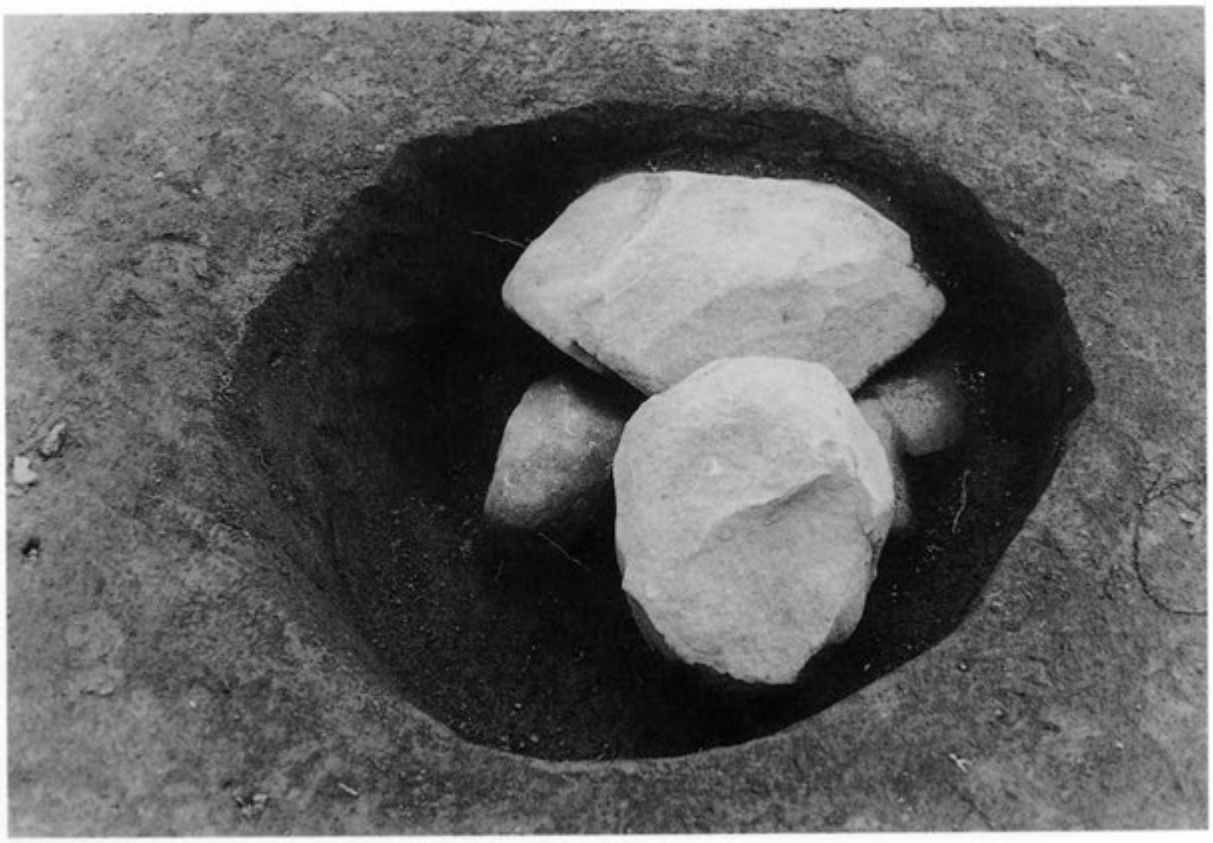
（上）５号掘立柱建物跡・４号掘立柱建物跡

（下）１号掘立柱建物跡　柱穴内グリ石検出状況

1号掘立柱建物跡　柱穴内グリ石検出状況



1号掘立柱建物跡　柱穴内グリ石検出状況

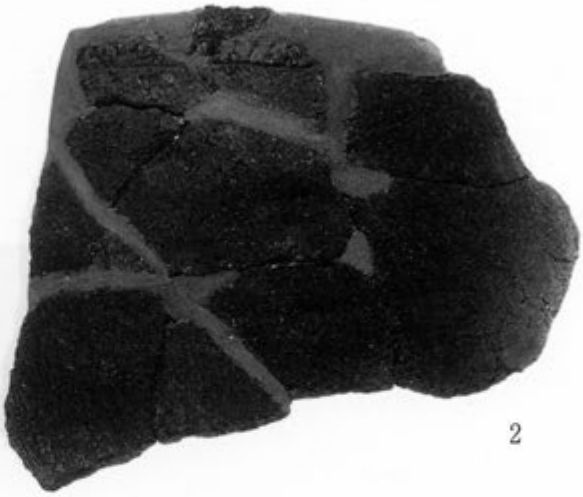


1号掘立柱建物跡　柱穴内グリ石検出状況

1

4

3



2

6

9

7

10

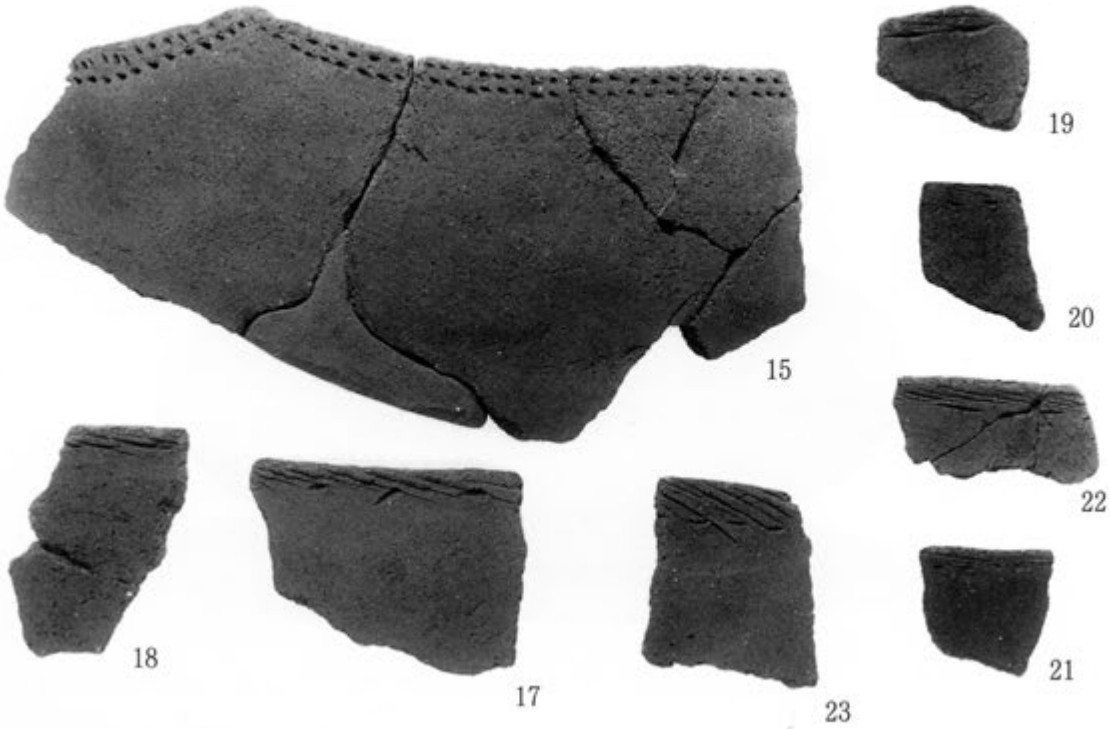
8

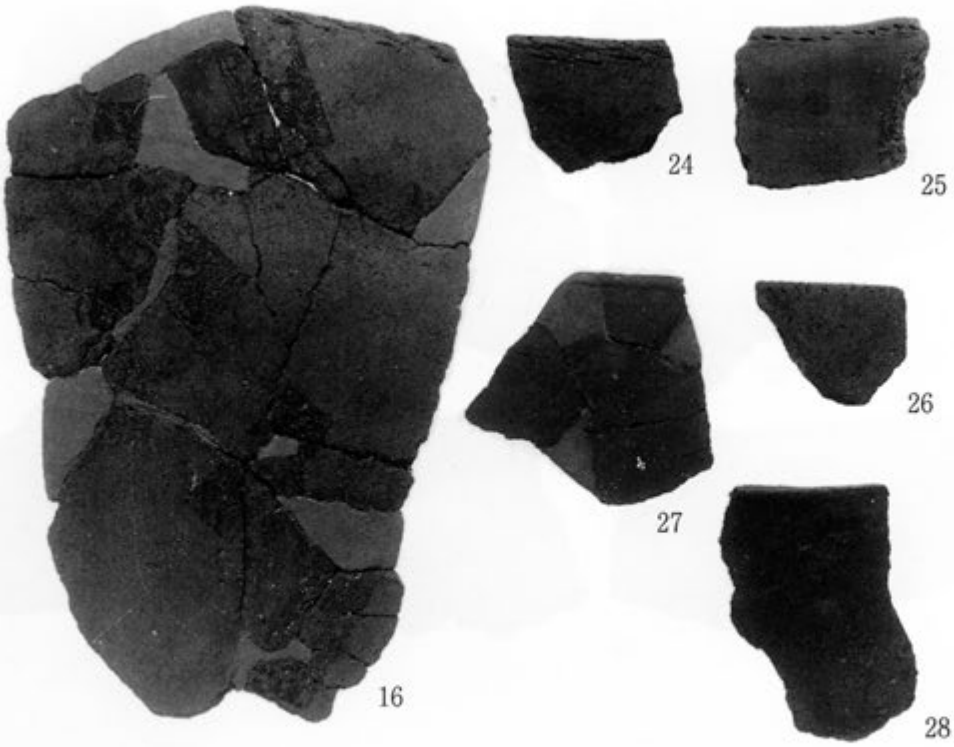
12

11

13

14


15
16
17
18
19
20
21
22
23


24
25
26
27
28

61

32 33 36

34 35 37

46

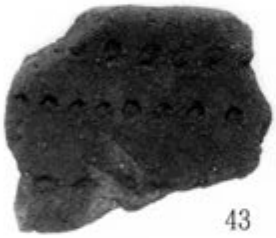
48

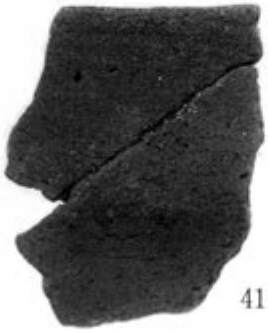
47

39

42

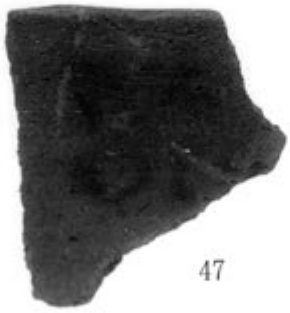
40


43


41

44

46



47

50

48

45

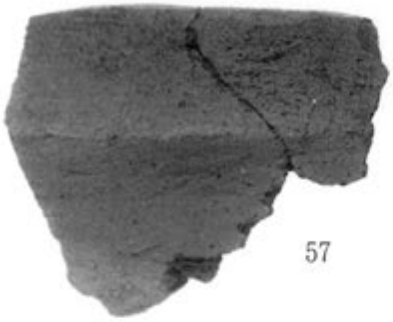
49

51

52

56

53

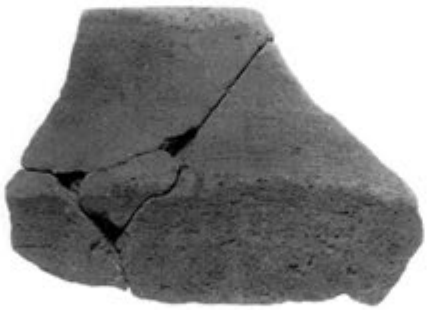


57

54

55

58



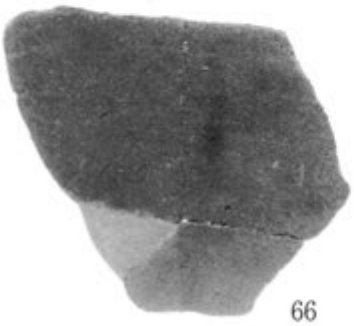
59

60

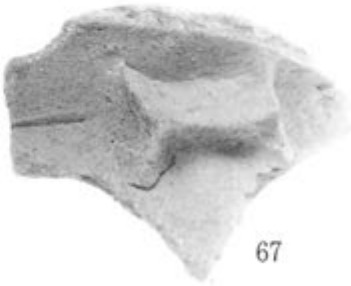
62

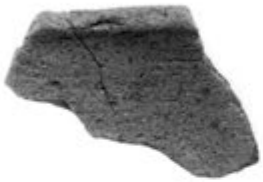
65

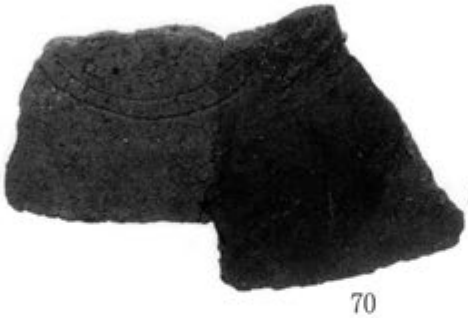
63


66

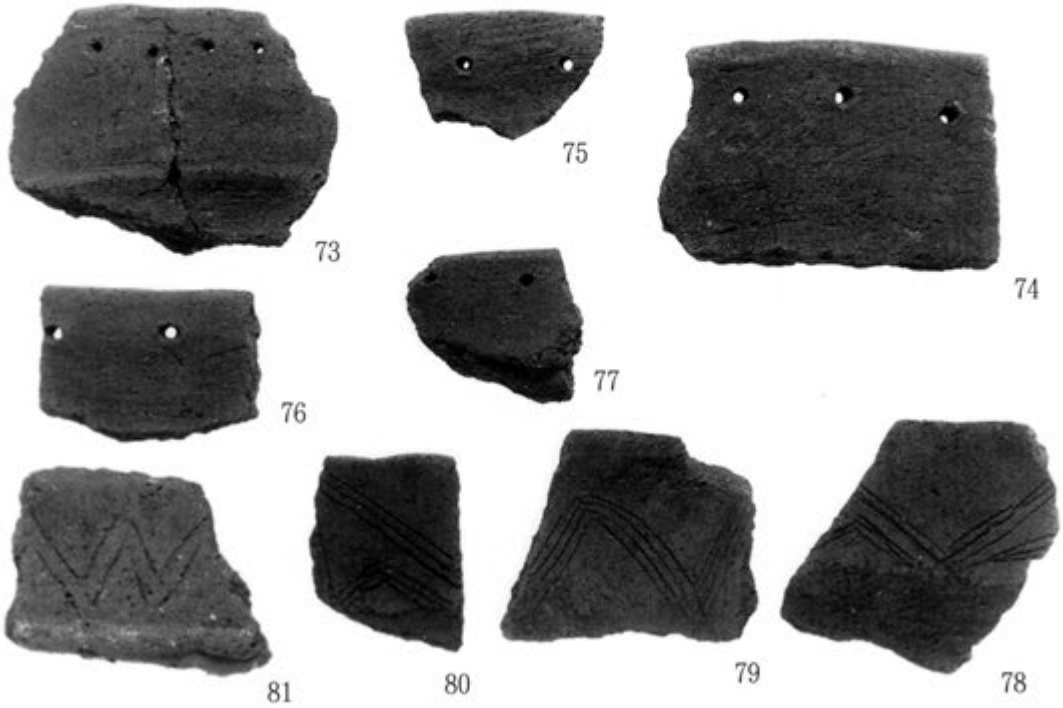
64

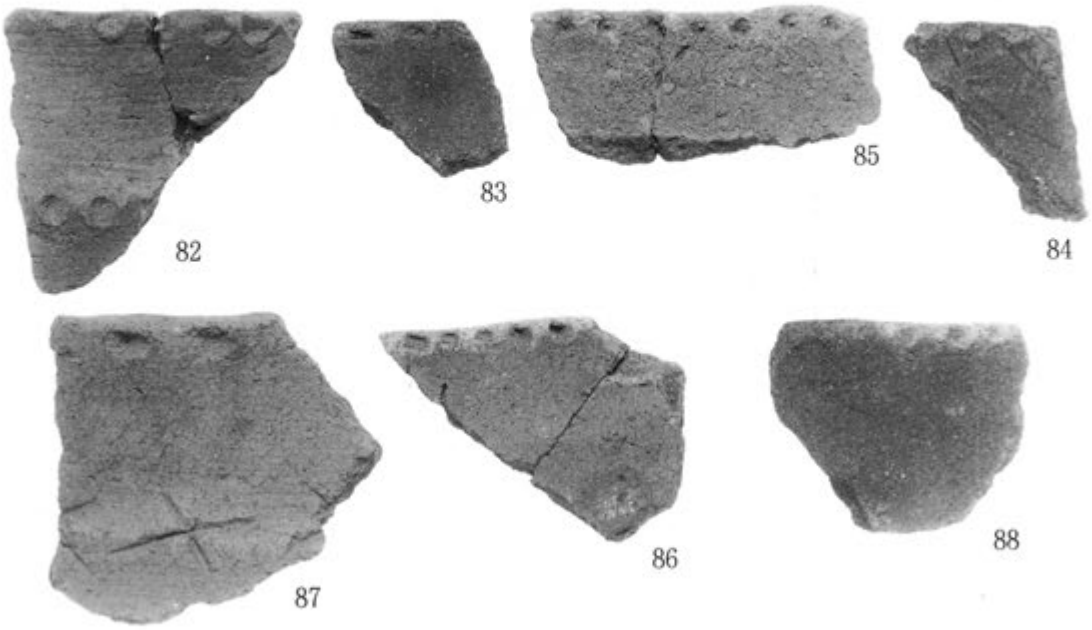

67

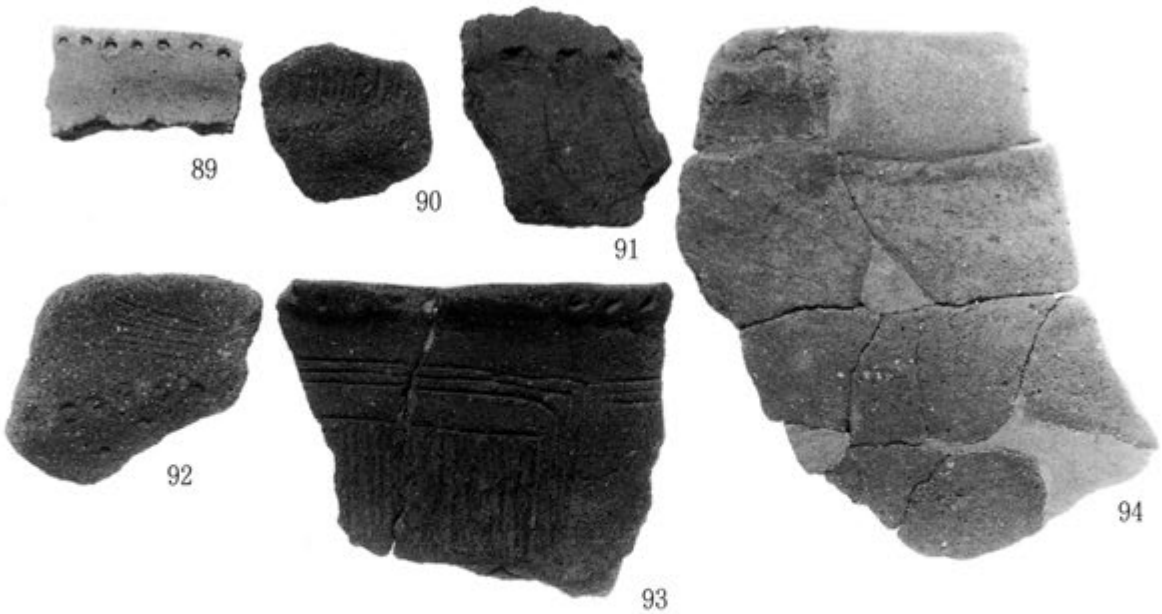

69

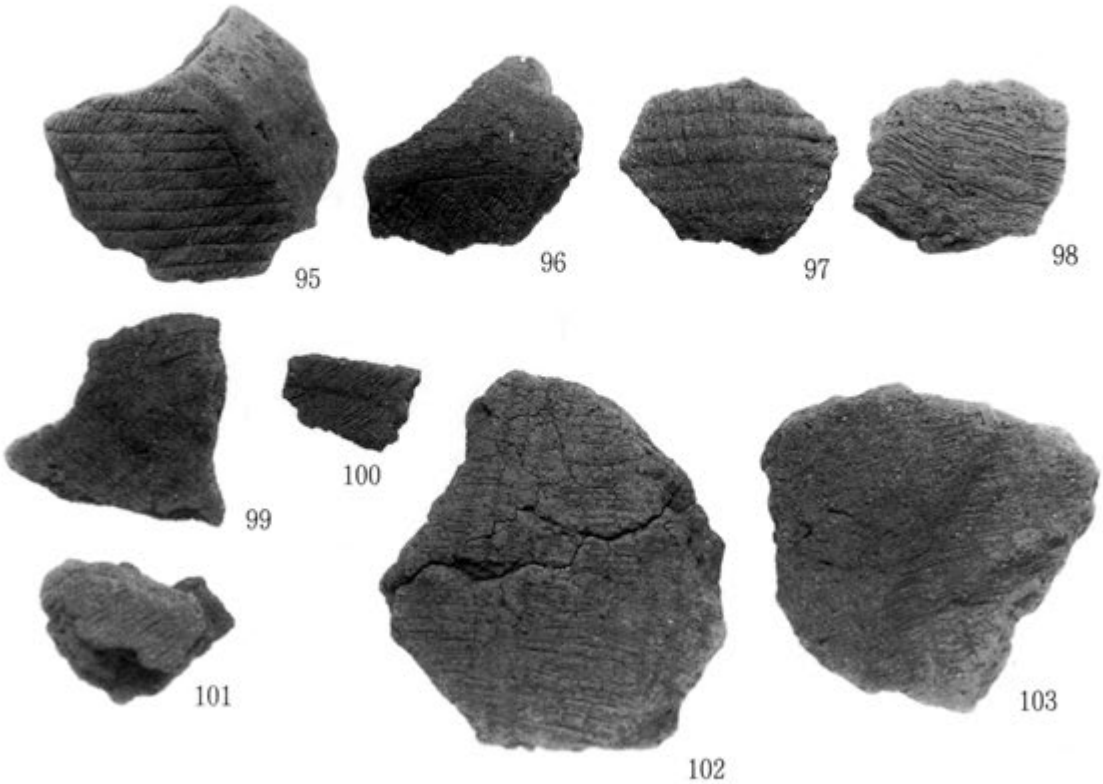

70

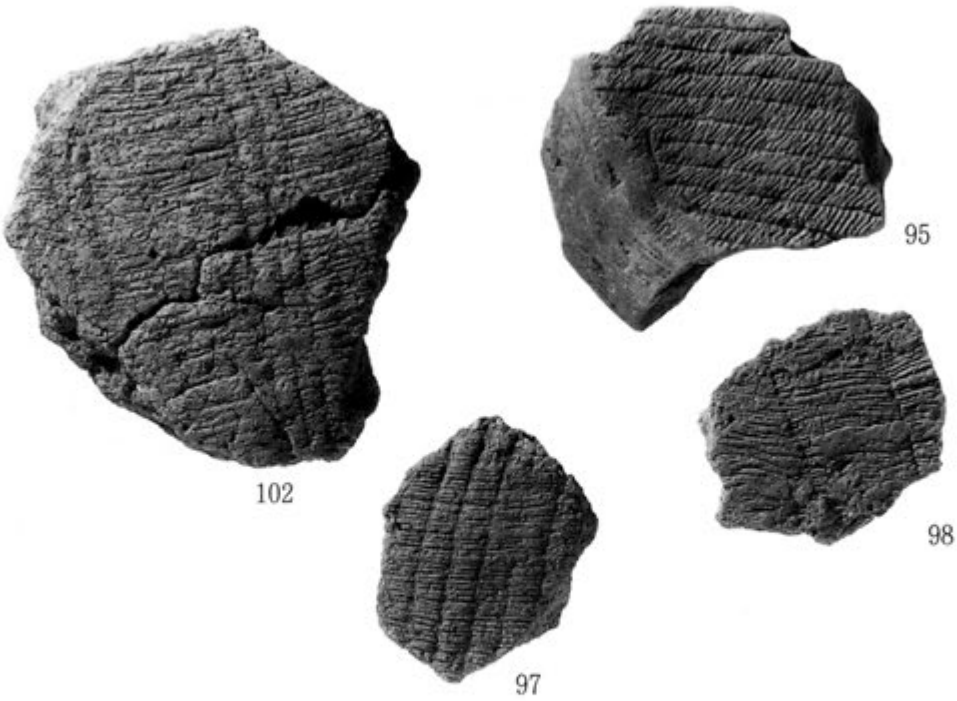
72


73
75
74
76
77
81
80
79
78


82
83
85
84
87
86
88


89
90
91
92
93
94


95
96
97
98
99
100
101
102
103


95
102
98
97

105

104

105

104

30

31

114

129

125

134

275

276

285

277

284

280

278

282

119

115

114

116

117

122

121

124

127

126

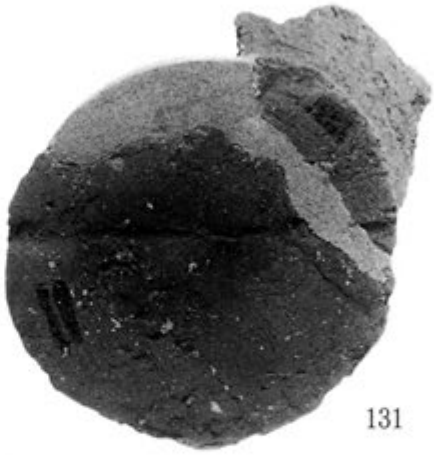
128

131

132

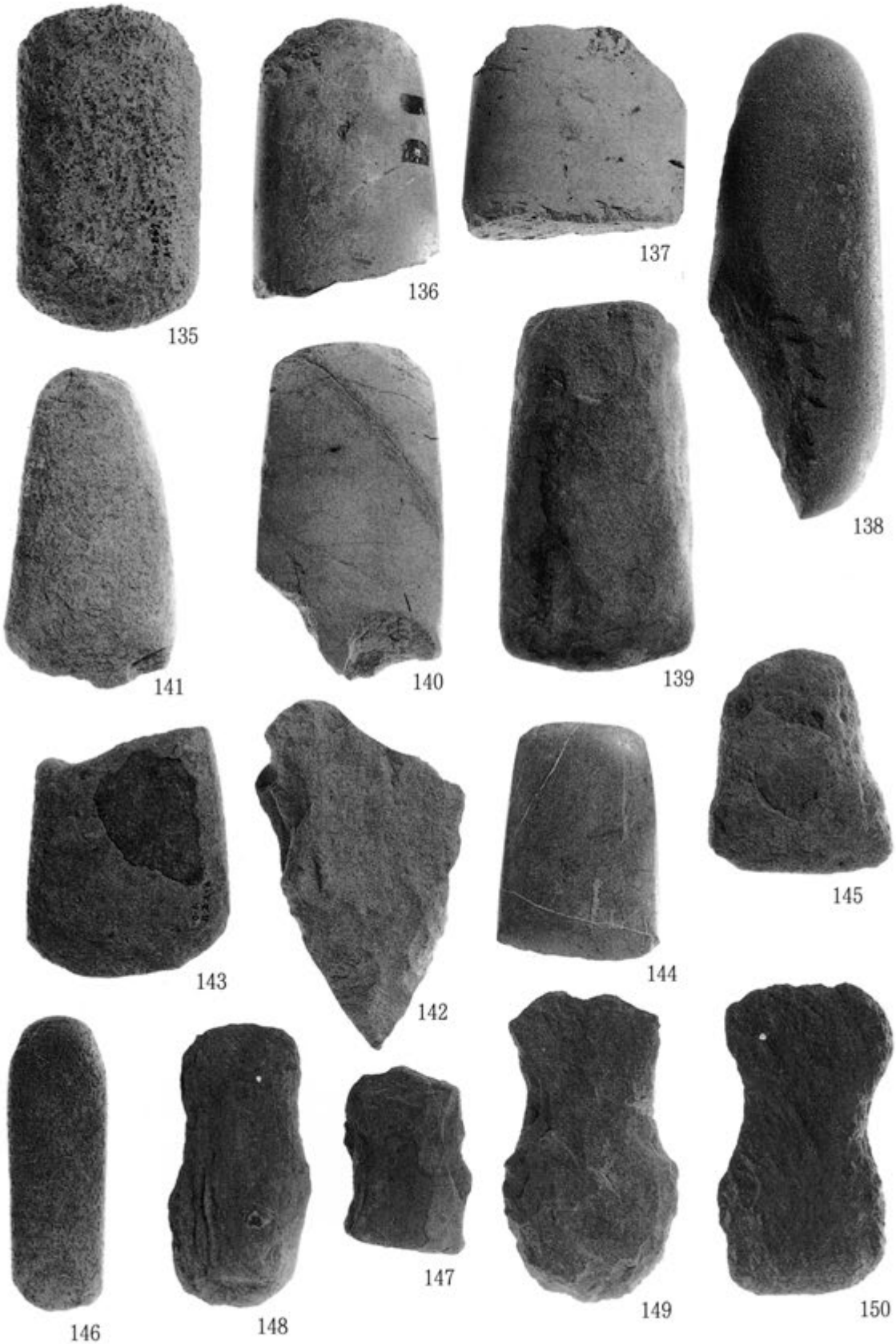
133

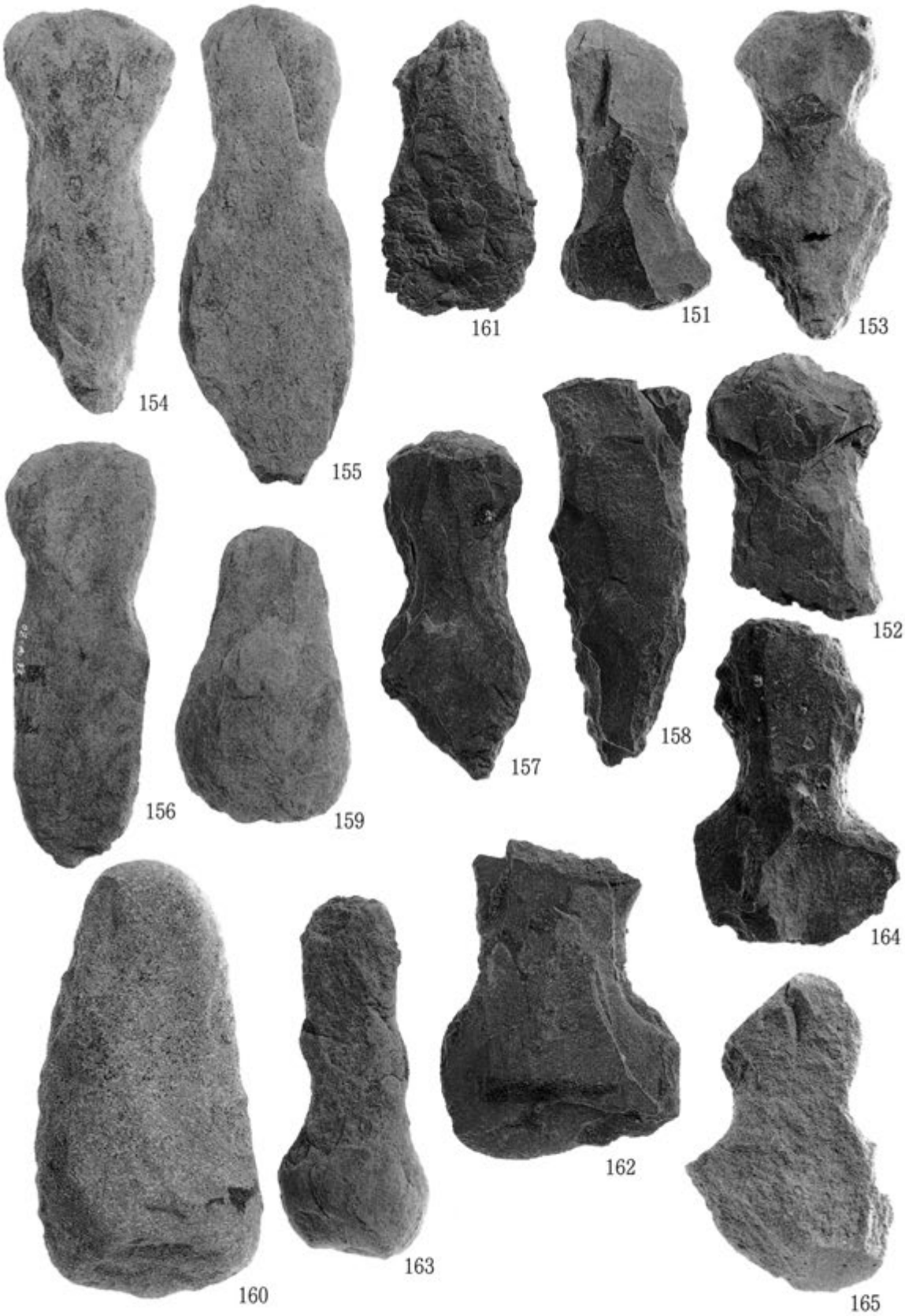
133

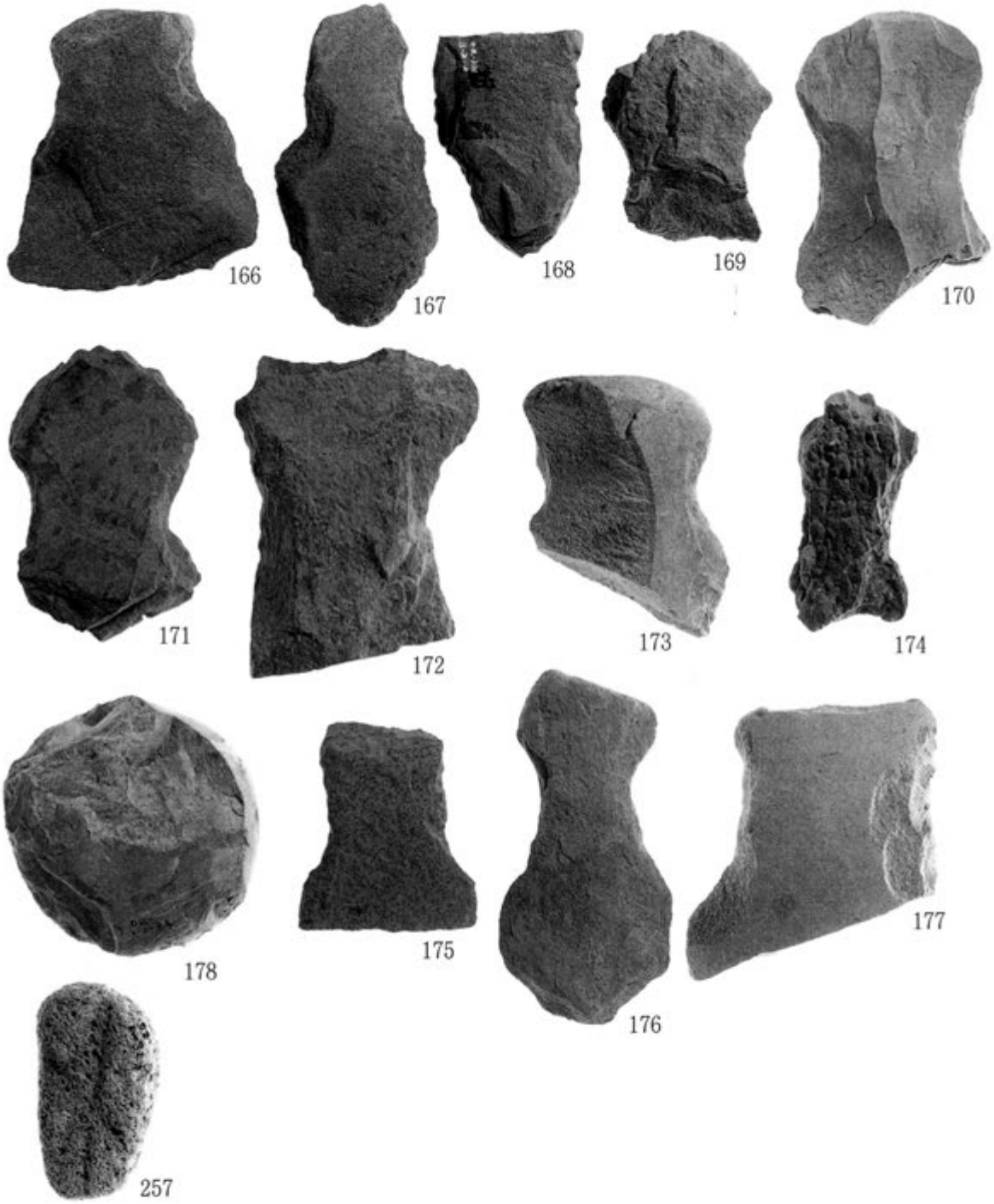


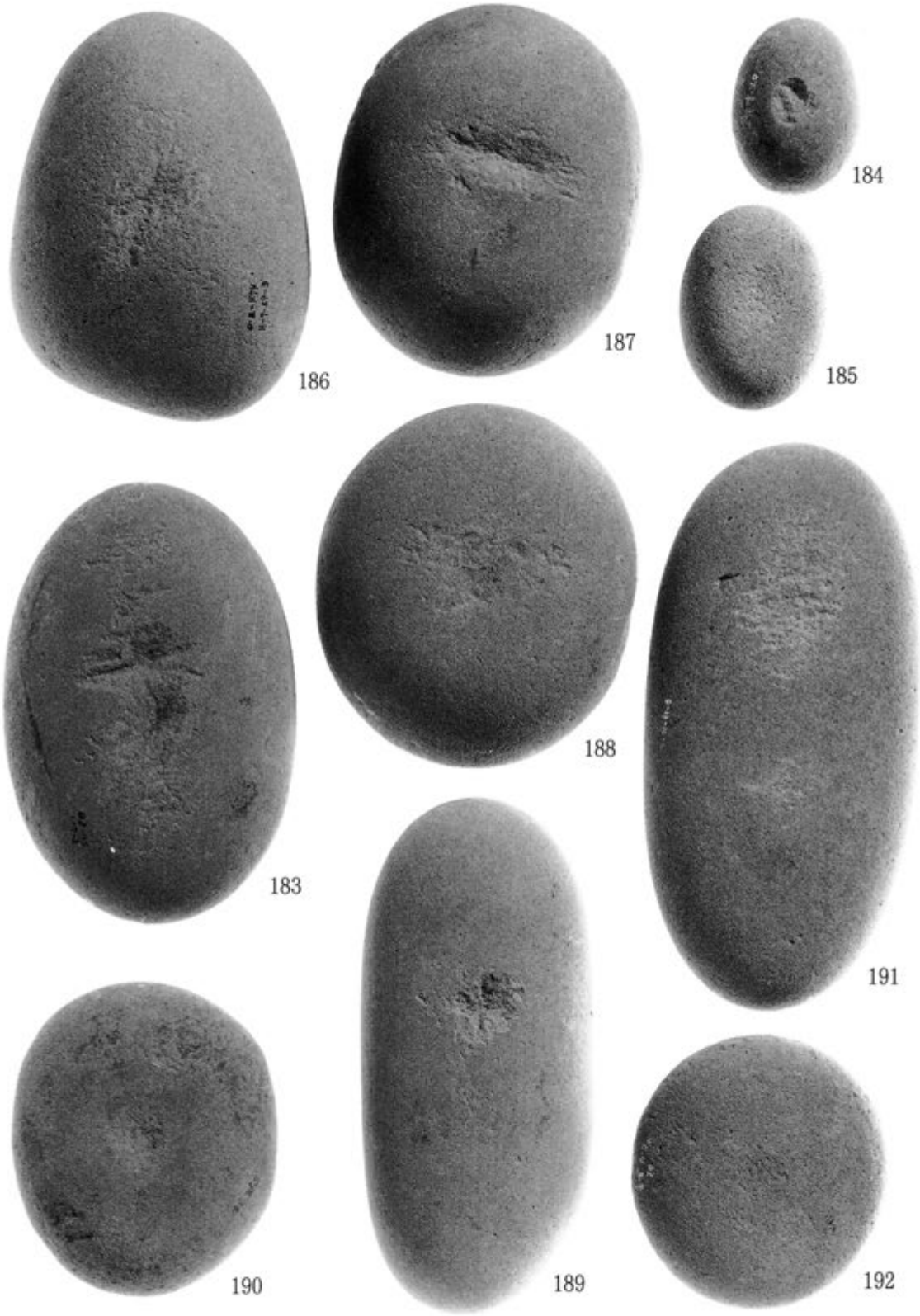
131

132

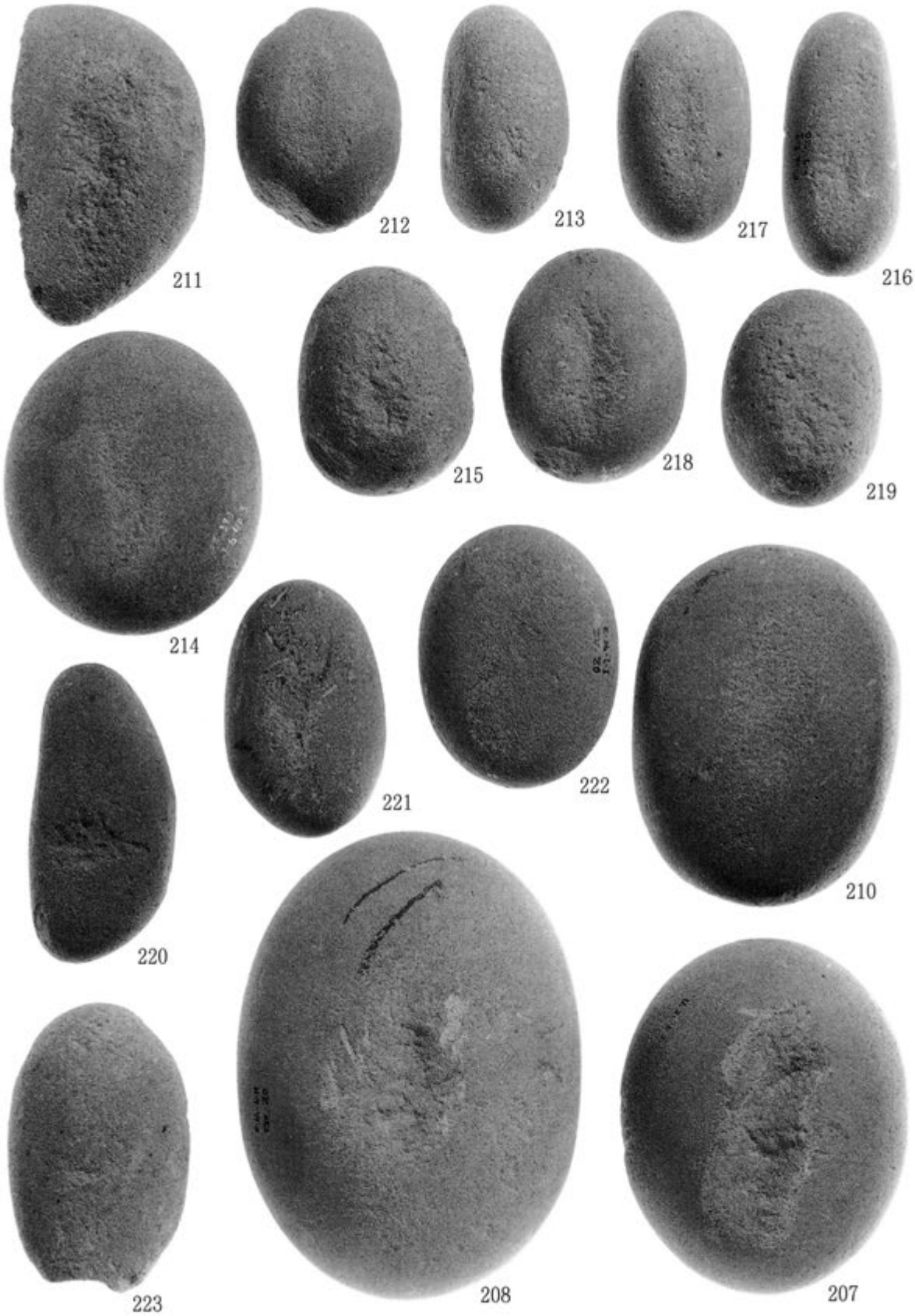

135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150

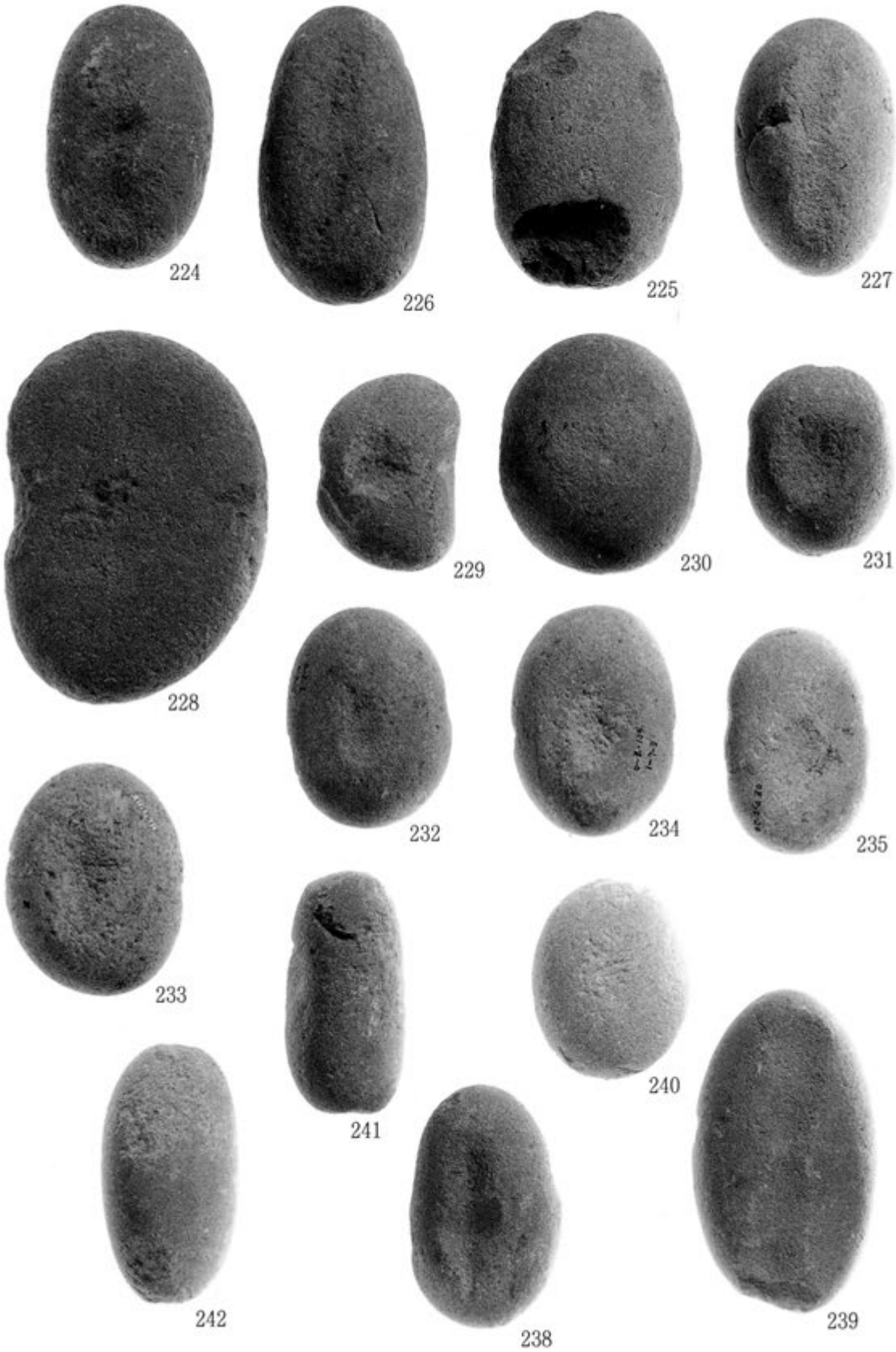

154
155
161
151
153
152
156
159
157
158
164
160
163
162
165

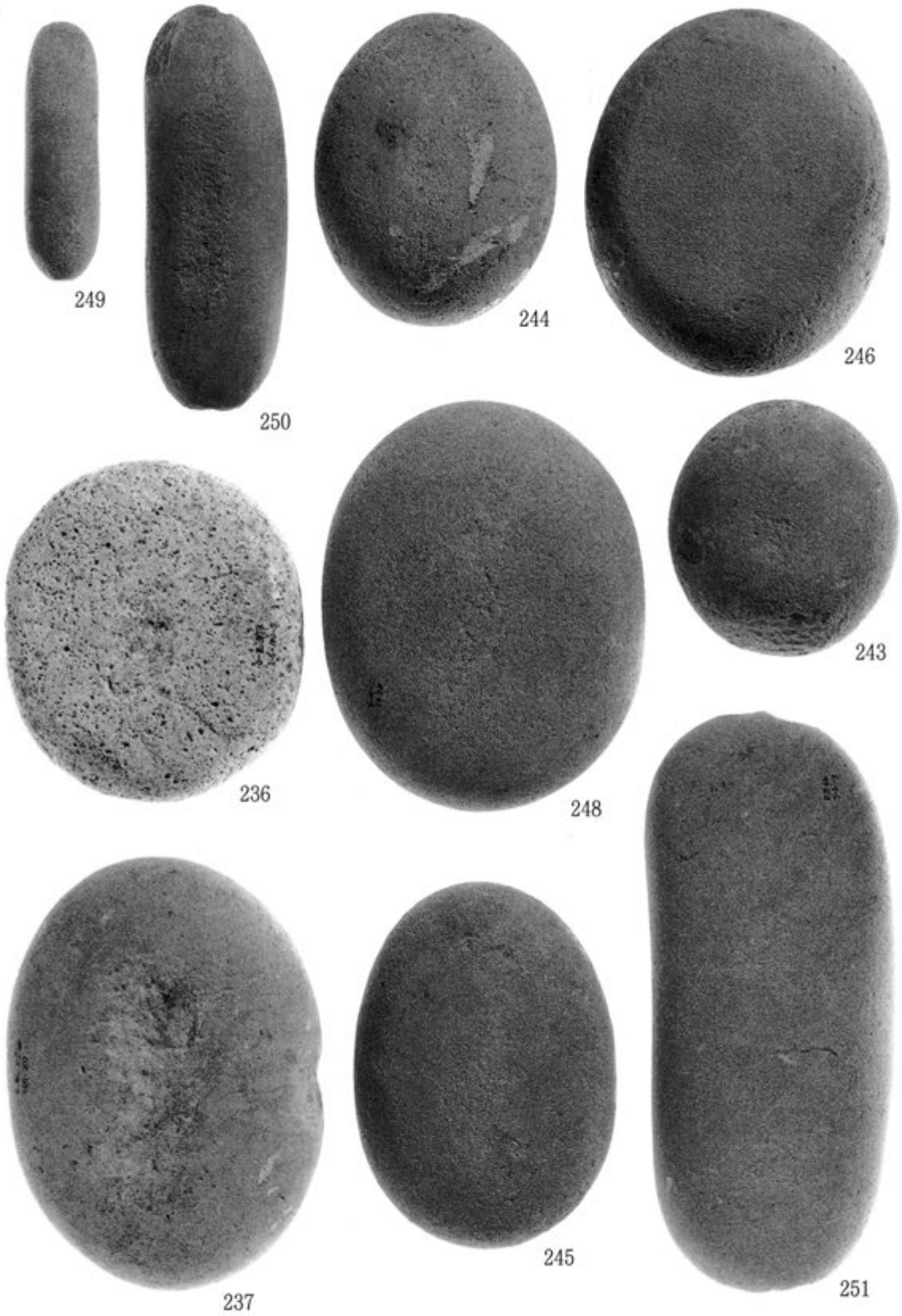

166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
257


186
187
184
185
183
188
191
190
189
192

193
194
196
197
198
199
200
201
203
202
204
206
195
205
209


211
212
213
217
216
214
215
218
219
221
222
210
220
223
208
207


224
226
225
227
228
229
230
231
232
234
235
233
241
240
242
238
239


249
250
244
246
236
248
243
237
245
251

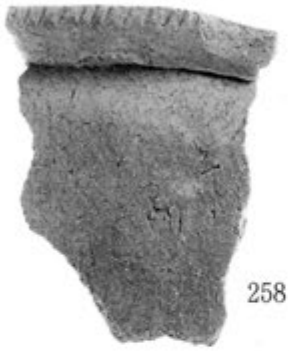
252

253

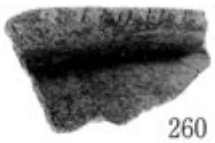
254

255

256


258

259


260

261

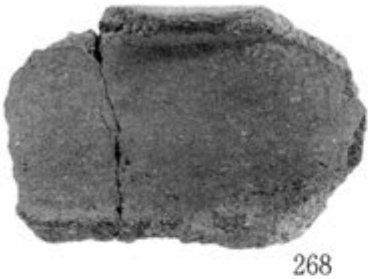
262

263

265

266

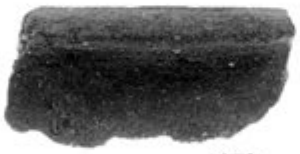
267


268

269

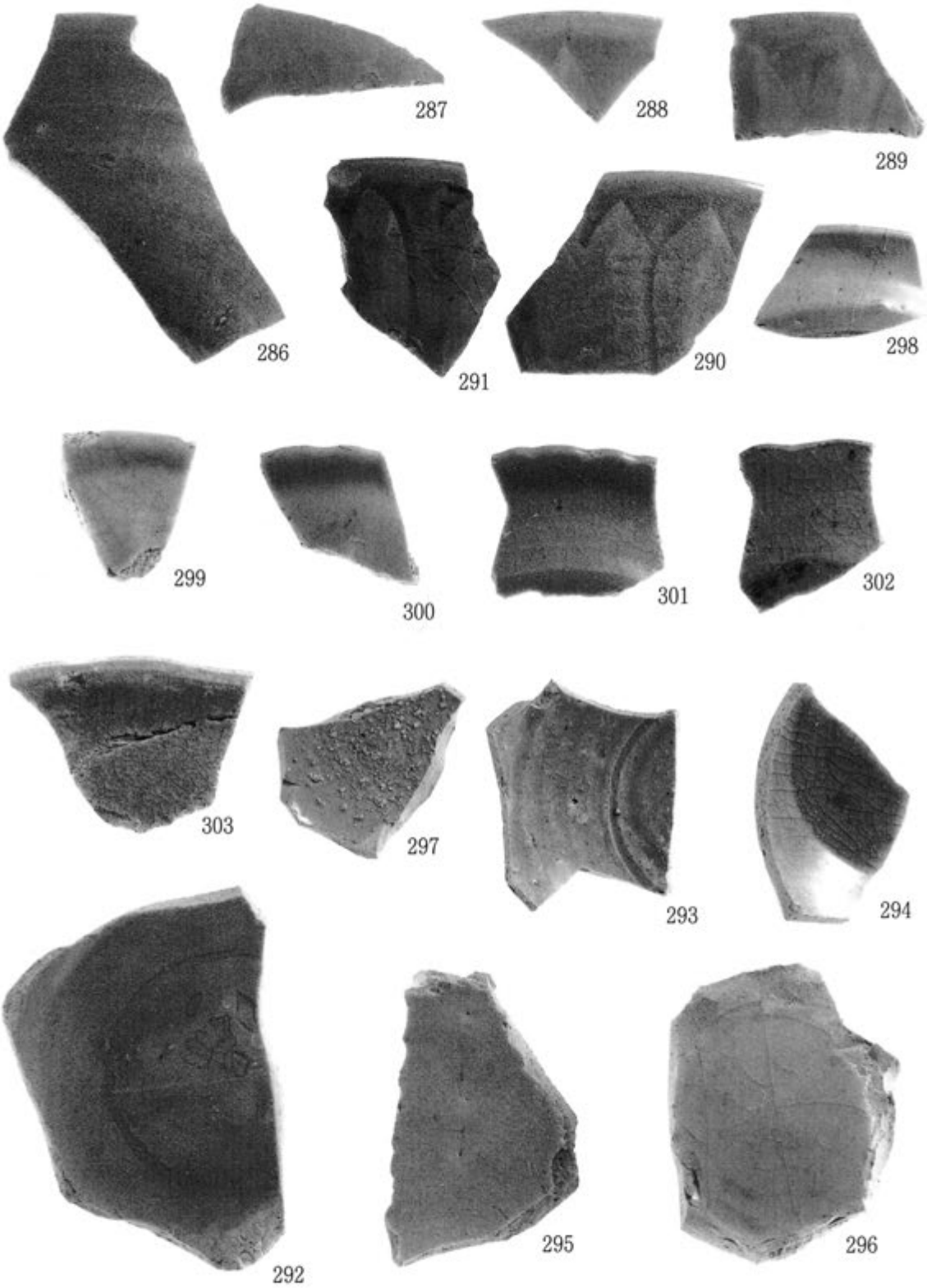
270

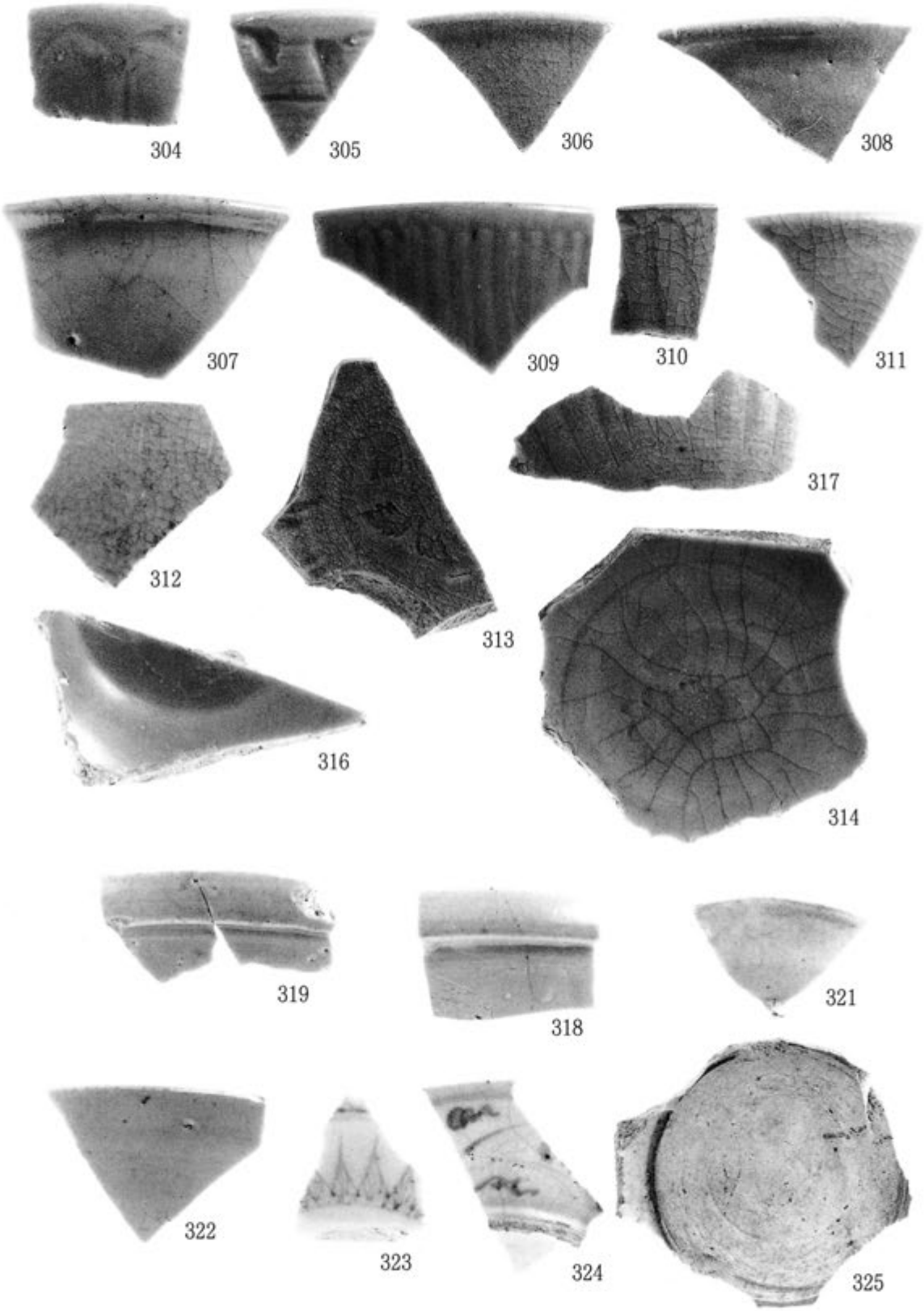
271


272

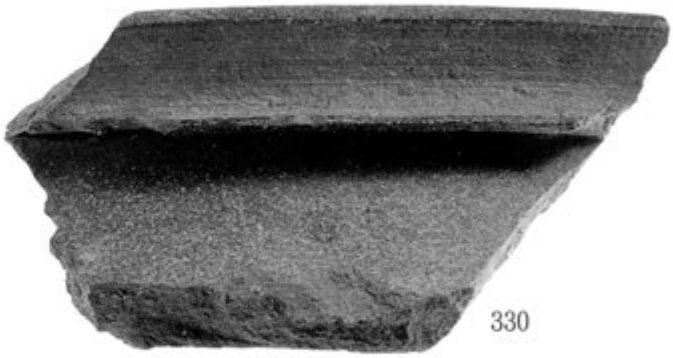
273

274


287
288
289
286
291
290
298
299
300
301
302
303
297
293
294
292
295
296

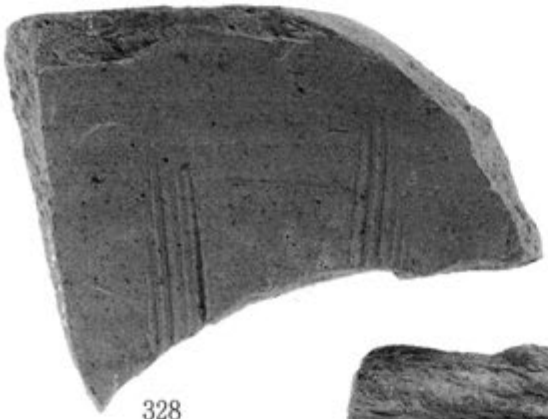

304
305
306
308
307
309
310
311
312
313
317
316
314
319
318
321
322
323
324
325

326



330

327



328

331

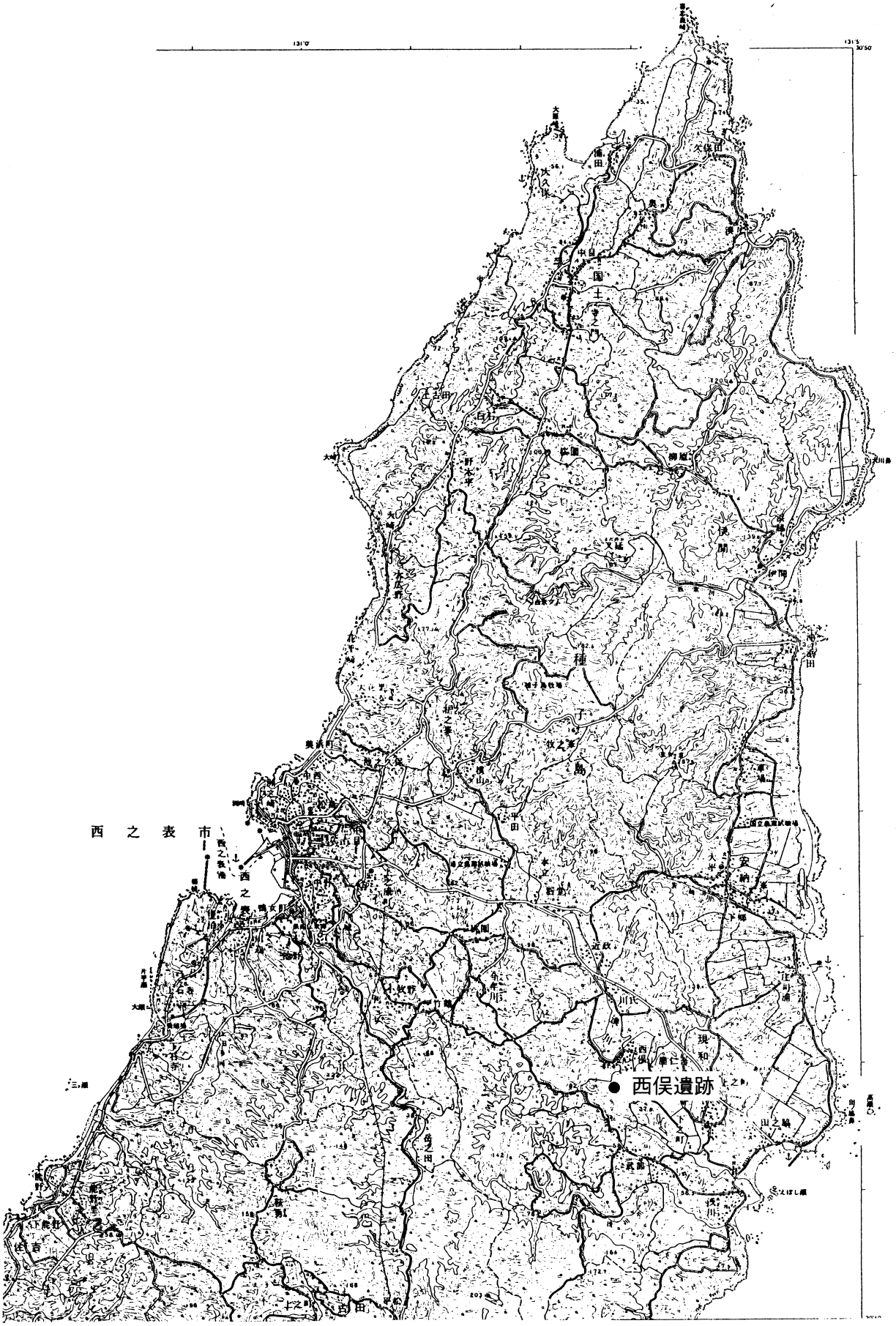
「西 俣 遺 跡」

報告書抄録

ふりがな	にしまた
書名	西俣遺跡
副書名	県営畑地帯総合土地改良事業（西俣地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(24)
シリーズ番号	（　）
編著者名	青﨑和憲
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-5652 鹿児島県姶良郡姶良町平松　TEL 0995－65－8787
発行年月日	西暦１９９９年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
西俣遺跡（にしまたいせき）	鹿児西之表市（かごにしのおもてし） 現和西俣 鹿児島県 西之表市現和西俣	西之表市		130° 41′ 80″	131° 2′ 80″		200m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西俣遺跡（にしまたいせき）		縄文時代 （早期）	無し	土器 縄文早期	



第１図　西俣遺跡位置図

例　　言

1　本報告書は、昭和54年度に発掘調査した西之表西俣地区の農地整備事業に伴う「西俣遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　遺跡番号は遺跡ごとに通し番号を付し，本文及び挿図・図版の番号は一致する。

3　「西俣遺跡」の整理，遺物の実測図，製図，写真撮影，編集執筆については青﨑が行った。なお整理については県立埋蔵文化センター作業員の協力を得た。

目　　次

西　俣　遺　跡 ―― 118
第Ⅰ章　調査の経過 ―― 123
　第1節　調査に至るまでの経過 ―― 123
　第2節　調査組織 ―― 123
　第3節　調査の経過 ――
第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境 ―― 124
第Ⅲ章　遺跡及び調査の概要 ―― 127
　第1節　層　位 ―― 127
　第2節　縄文時代 ―― 128
　　1　遺　物 ―― 128
　　(1)　土　器 ―― 128
まとめ ―― 133

挿　図　目　次

第1図　西俣遺跡位置図 ―― 120
第2図　周辺遺跡 ―― 125
第3図　西俣遺跡周辺地形図 ―― 126
第4図　出土遺物分布状況 ―― 129
第5図　土器実測図 ―― 130
第6図　土器実測図 ―― 131
第7図　土器実測図 ―― 132

表　目　次

表1　遺跡地各表 ―― 124

図　版　目　次

図版1　西俣遺跡全景・調査風景 ―― 134
図版2　土層・遺物出土状況 ―― 135
図版3　遺物出土状況 ―― 136
図版4　遺物出土状況 ―― 137
図版5　土器出土状況 ―― 138
図版6　土器出土状況 ―― 139

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過

鹿児島県農政部（以下，農政整備課）は，大園遺跡発掘調査の期間中に西之表市現和西俣地区において県営畑地総合土地改良工事を計画を発表し，事業に先立って県教育委員会文化課（以下，文化課）に当該地における埋蔵文化財の有無について照会した。事業対象地区は，かつて平安時代末の猿投窯産の長頸壺が出土した場所であることからその取り扱いについて県農地整備課及び西之表市教育委員会と協議した結果，昭和53年8月の中種子町大園遺跡発掘調査後，引き続き発掘調査を実施することとした。

調査対象地区については，猿投壺出土したと想定される地点を中心に，試掘溝を18ヵ所を設定し，古代の包含層や，下層の遺物包含層の確認を行ったが，一部を除き大半が耕作等によって包物包含層は削平されて存在していなかった。遺構等は発見されなかった。しかし，整備事業の工事が進行中の調査対象地外（C地点）から縄文早期の遺物が数点が露呈して発見されたことから，その取り扱いについて再度協議した結果，継続して発掘調査を実施することとなった。なお，B地点については設計変更して現地保存を図ることとなった。調査は昭和54年3月5日～3月7日にかけて文化課が発掘調査を実施した。

第2節　調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教育長	国分正明（当時）
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課長	谷崎哲夫（当時）
企画調整	〃	主幹	本蔵久三（当時）
調査者	〃	主事	青崎和憲（当時）
		主事	中村耕治（当時）

発掘調査に当たっては，鹿児島県熊毛支庁土地改良課及び熊毛教育事務所，西之表市土木課，同町教育委員会，作業員として発掘調査に従事された地元の方々の協力を得た。

日誌抄

3／5　大園遺跡発掘調査開始にあたって，熊毛支庁土地改良課，中種子町土木課と打ち合わせ。
遺跡発掘調査区，2m×4mのグリッド18ヵ所を設定し，確認調査を実施した。調査の結果，A地点には遺物遺構は発見されなかった。B地点については縄文早期の遺物が出土し現地保存を図った。なお，調査対象地外に縄文早期の土器片数点を発見し，その取り扱いについて熊毛支庁，西之表市教委と協議し，工事中発見による発掘調査で対応することとなった。

3／6　C地点の調査開始。アカホヤ層以上は工事による削平のため除去され，縄文早期の遺物包含層は残存していた。遺物包含層の掘り下げ作業。

3／7　約100点の土器片が出土した。遺構は発見されなかった。遺物出土状況写真撮影及び平板測量，遺物取り上げ。調査終了した。

第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境

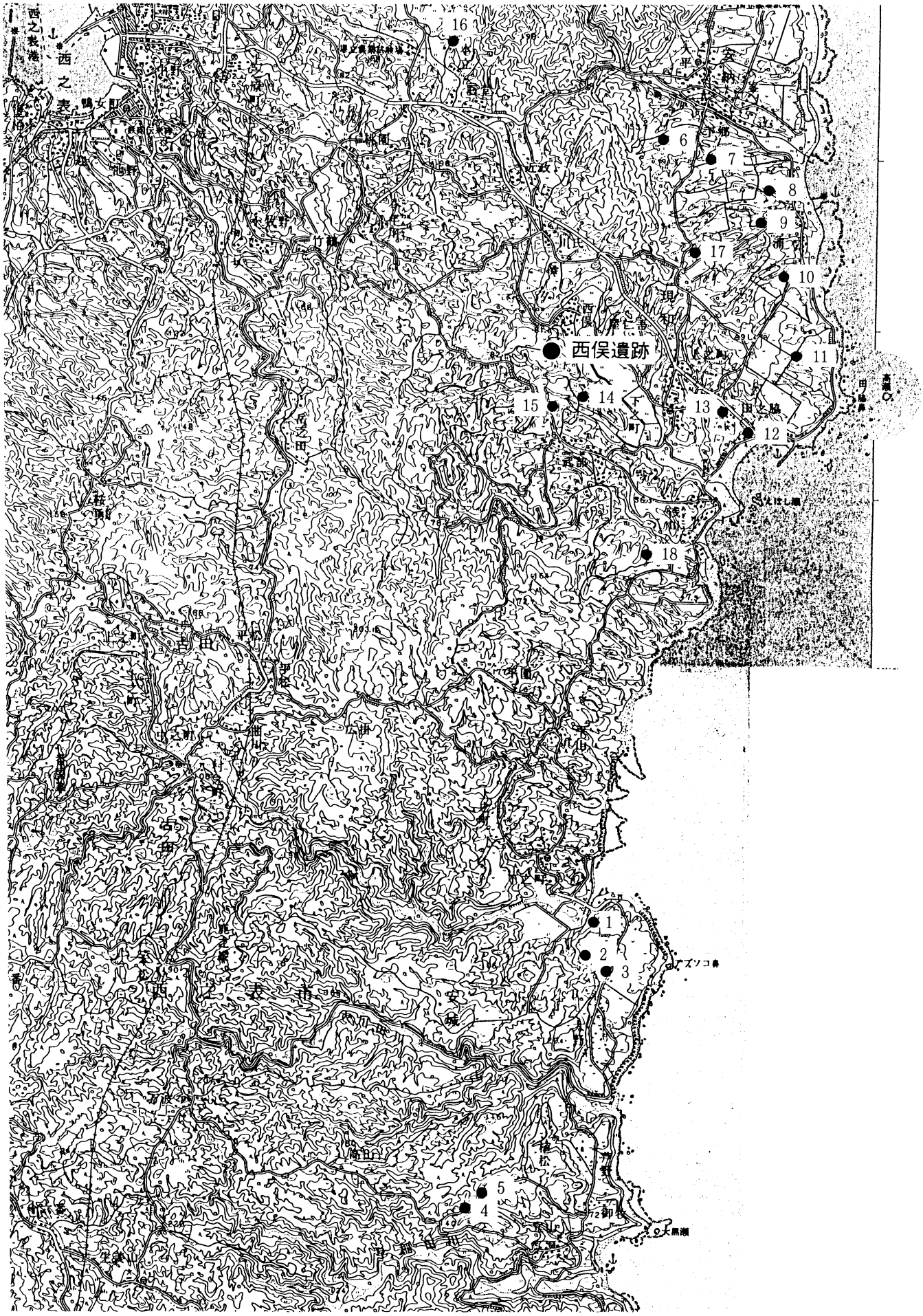
西俣遺跡（西之表市）の存在する種子島は，大隅半島の最南端にある佐多岬より約54kmの東南方向にある。

種子島は，西之表市・中種子町・南種子町の１市２町からなるが，標高282.3ｍが最高所である平坦な島である。種子島は古くより考古学の調査が行われており，縄文時代の千草原遺跡，納曽遺跡，下剥峯遺跡。弥生時代の広田遺跡，鳥ノ峯遺跡，上熊野貝塚等全国的にも知られている遺跡が数多い。また，近年では，３万年以上も以前の旧石器時代の遺跡である南種子町横峯Ｃ遺跡や，旧石器時代から定住を彷彿とさせる中種子町立切遺跡，縄文時代草創期の石槍がまとまって出土した園田遺跡等が相次いで調査され，ロケット基地があり宇宙へ近い島において，本県でも最も古い遺跡が発見されて全国の考古学関係者の注目を浴びている。

西之表市は，種子島の北部を占め３方を海に囲まれ，南は中種子町と隣接している。地勢は，標高200ｍの中央部より３方の海岸部へとなだらかに降っている。遺跡も山麓部から海岸部へかけて数多く発見，調査されており，縄文時代草創期の奥ノ仁田遺跡，早期の下剥峯遺跡・赤木遺跡・奥風遺跡・前期の指辺遺跡・本城遺跡・後期の浅川牧遺跡・田ノ脇遺跡・納曽遺跡等が知られている。特に平成８年に西之表市教育委員会で発掘調査が行われた奥ノ仁田遺跡では，夥しい量の縄文時代草創期の土器が出土し，種子島も南九州と同様の縄文時代草創期の文化が存在していたことを裏付けることとなった。また，平成6年に調査された日守遺跡では，縄文時代早期の遺物が出土している。

表１

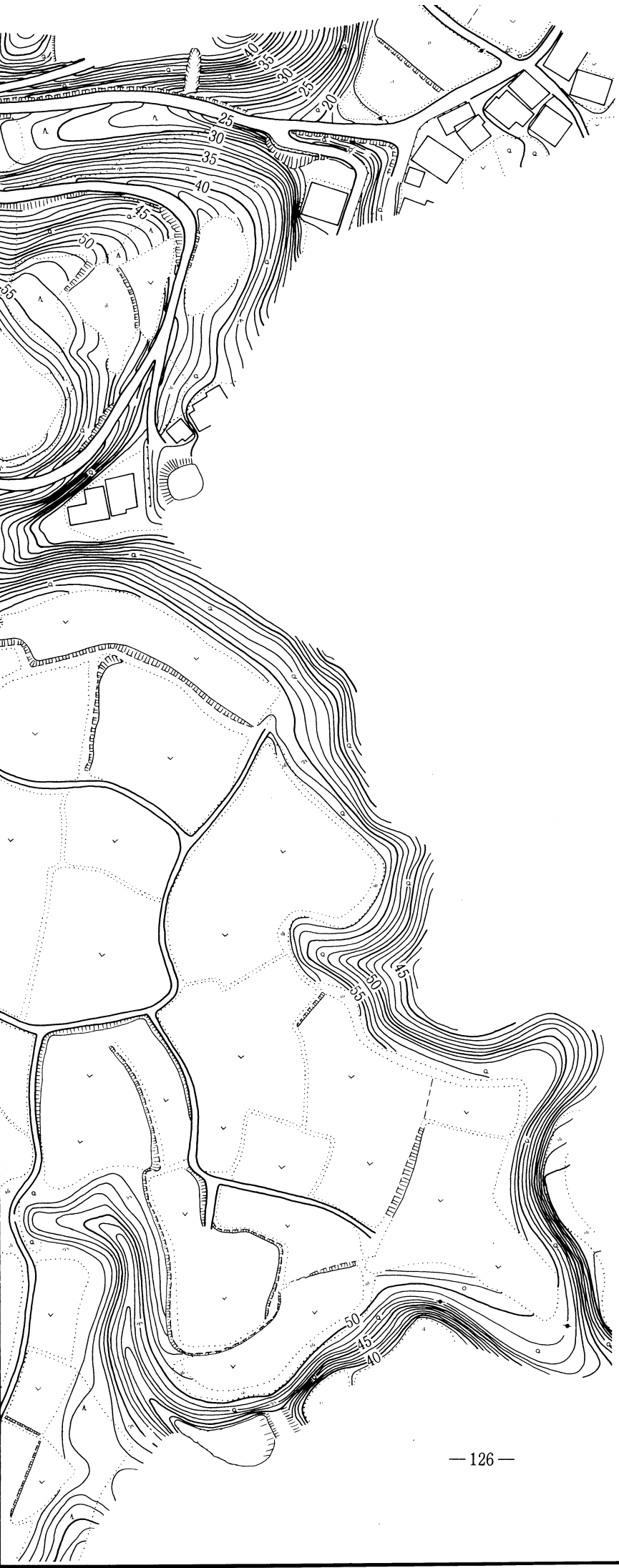
番号	遺跡名	所在地	地形	時期	遺物等
1	日守Ａ	安城日守	台地	縄文早期	土器片
2	日守Ｂ	安城日守	台地	縄文早期	土器片
3	日守Ｃ	安城日守	台地	縄文早期	土器片
4	奥ノ仁田	安城奥ノ仁田	台地	縄文創期・早期	隆帯文土器・石斧・石皿・すり石
5	奥嵐	安城奥嵐	台地	縄文早期・後期	苦浜式・市来式
6	赤木	現和庄司ヶ浦	台地	縄文早期	塞ノ神式
7	下剥峯	現和庄司ヶ浦	台地	縄文早期～弥生中期	吉田式･石坂式･轟式･山ノ口式･磨製石鏃
8	大四郎	現和庄司ヶ浦	台地	縄文前期	曽畑式
9	内和	現和庄司ヶ浦	台地	歴史時代	土師器・須恵器
10	指辺	現和庄司ヶ浦	台地	縄文前期	曽畑式・すり石・凹石
11	東方ノ平	現和庄司ヶ浦	台地	縄文前期	
12	田ノ脇	現和田ノ脇	砂丘	弥生後期	埋葬遺跡・貝輪
13	泉原	現和田ノ脇	台地	縄文～弥生	扶状耳飾り・磨製石斧
14	道月ノ峯	現和		中世	土師器・須恵器
15	武部	現和式部	台地	縄文後期	
16	本立	本立	平地	縄文前期～中世	石斧・紡錘事
17	横峰	現和庄司ヶ浦	台地	弥生時代	円形周溝墓
18	浅川牧	現和浅川	台地	縄文後期	住居跡・市来式



第2図　周辺遺跡

65
70
75
60
65
70
75
70
65
65
70
75
75
70
65
75
70
0
100 m

第３図　西俣遺跡周辺地形図


40
35
30
25
20
25
30
35
40
45
50
55
45
50
55
50
45
40

第Ⅲ章　遺跡及び調査の概要

調査対象地区については，猿投壺出土したと想定される地点を中心に，試掘溝を18ヵ所を設定し，古代の包含層や，下層の遺物包含層の確認を行ったが，一部分を除き遺物・遺構等は発見されなかった。しかし，整備事業の工事が進行中の調査対象地外（C地点）から縄文早期の遺物が数点が露呈して発見されたことから，その取り扱いについて再度協議した結果，継続して発掘調査を実施することとなった。なお，B地点については設計変更して現地保存を図ることとなった。調査は昭和54年3月5日～3月7日にかけて文化課が発掘調査を実施した。

第1節　層　位

西俣遺跡の遺物包含層は，表土下層は乳白色粘土層となり耕作等によってかなりの部分で削平されていた。

周辺の畑断面の路程した層から想定すると以下の状況であった。

Ⅰ層	現表土層（耕作）	種子島の地場産業であるサトウキビ畑，落花生畑となっている。
Ⅱ層	黒色土層	黒色火山灰土層である。耕作によって大部分は削平されている。
Ⅲ層	黄色土層	通称アカホヤ火山灰で，上部は火山灰の二次堆積層で，下部は粒子の細かい火砕流からなる。
Ⅳ層	乳白色粘土層	縄文時代早期の遺物包含層である。
Ⅴ層	明乳褐色粘土層	無遺物層である。
Ⅵ層	明黄褐色土	無遺物層である。

第2節　縄文時代

1　遺　物

(1)　土　器

調査の結果，縄文時代草創期及び早期の土器が発見された。

Ⅰ類土器（第5図）

1は縦3cm，横4cmの土器片である。体部に幅1.2cm，厚さ4mmの貼り付け突帯を波状1条がみられる。さらに突帯には貝殻腹縁による押圧文を施文する。器壁は薄く，色調は明褐色で焼成は脆い。縄文草創期の隆帯文土器である。

Ⅱ類土器（第5図）

Ⅱ類土器は縄文早期の貝殻円筒土器である。口縁部の形態により3類に分類した。

ⅡA類土器（第5図2～5）

口縁部は直行し，口唇部内側に稜を有すタイプの土器である。

2は口唇部の外側端部から内側へ棒状施文具による刻目を施し小さな波状となる。口縁部には縦列に，貝殻腹縁による刺突文を丁寧に施文する。なお，この文様帯の部位はわずかに肥厚する。

3は口唇部に小さな波状に刻目文を施し，口縁部は貝殻腹縁を縦位に押し引きし，さらに，貝殻腹縁刺突線文を3本巡らすものである。

4は口唇部には比較的太めの刻目文を施し，口縁部には貝殻腹縁による横位の刺突線文をさらに3本に巡らす。

5は復元口径22.3cmの円筒土器である。口縁部内側は，横位に弱いヘラ調整が施されている。内側口唇部は稜を有し口唇部外側端部から内側に押圧による刻目文を施し小さな波状を呈す。口縁部には一見山形押形文と見間違う，貝殻腹縁を施文具とする押し引きで，4条の山形文を巡らしている。2と同様に口縁部の文様帯は胴部の器壁の厚さよりやや肥厚する。

Ⅱ類B土器（第5図6～7）

口唇部内側端部が，わずかに内湾して舌状を呈すタイプである。

6，7は口縁部は直行し，口唇部内側はわずかに内湾して舌状を呈し，口唇部は平坦となる。外側口唇部には棒状施文具による刻目文を施し，口縁部には貝殻腹縁による刺突を縦位に施文し，さらに下位は1状の貝殻刺突線文を巡らせたものである。比較的器壁が厚い。

Ⅱ類C土器（第5図8～9）

口縁部は直行し，口唇部が平坦となるタイプである。

8，9は直行する口縁部で口唇部は平坦となる。両者とも口唇部外側に棒状施文具による浅い刻目文を施し，また8には2と同様な貝殻腹縁を，縦位に丁寧な刺突文を施している。9は口唇部外側に棒状施文具による押圧キザミを施す。

Ⅱ類胴部（第6図）

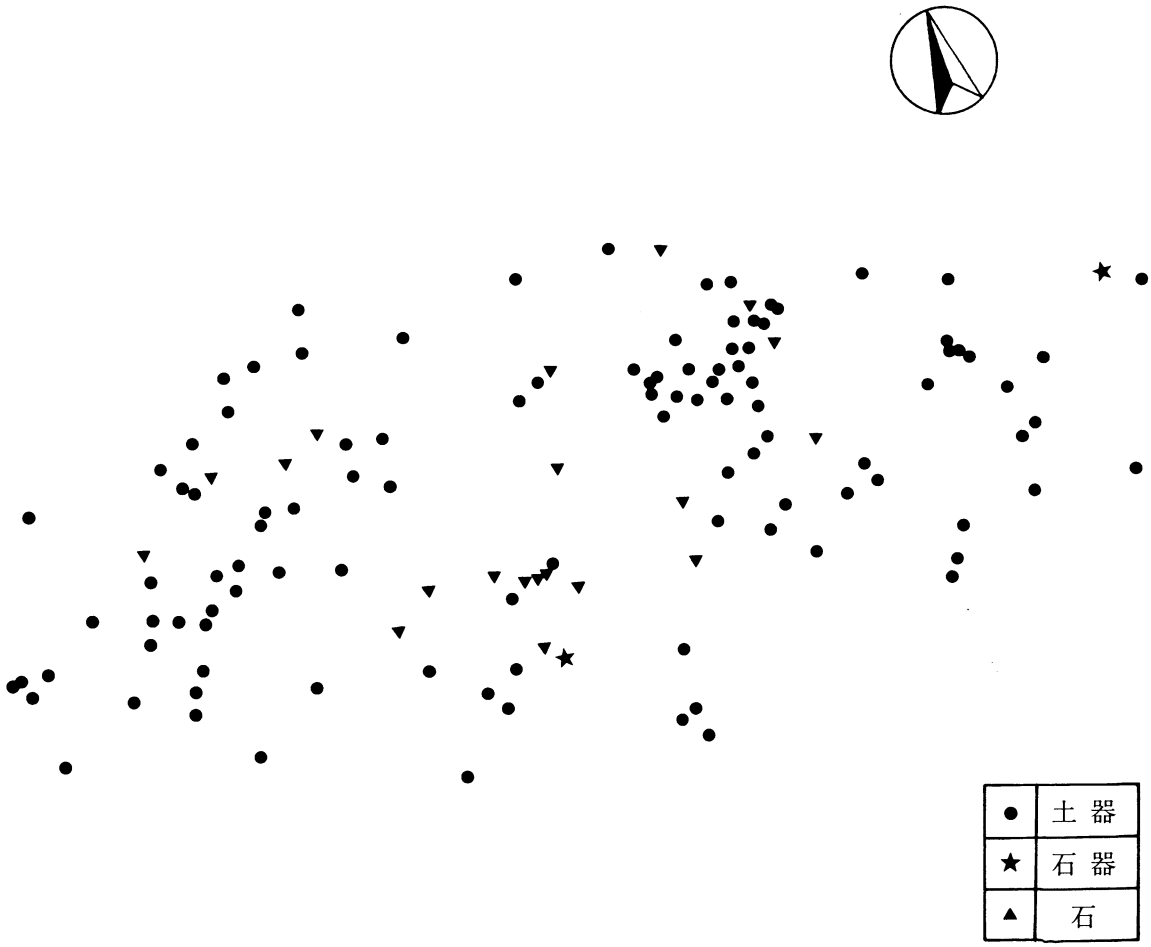
10～13は円筒土器の胴部である。胴部の復元径は約23cm～24cmである。外面には器面調整の貝殻腹縁による条痕文，内面はナデ及び弱い篦調整が施されている。

Ⅱ類底部（第７図）

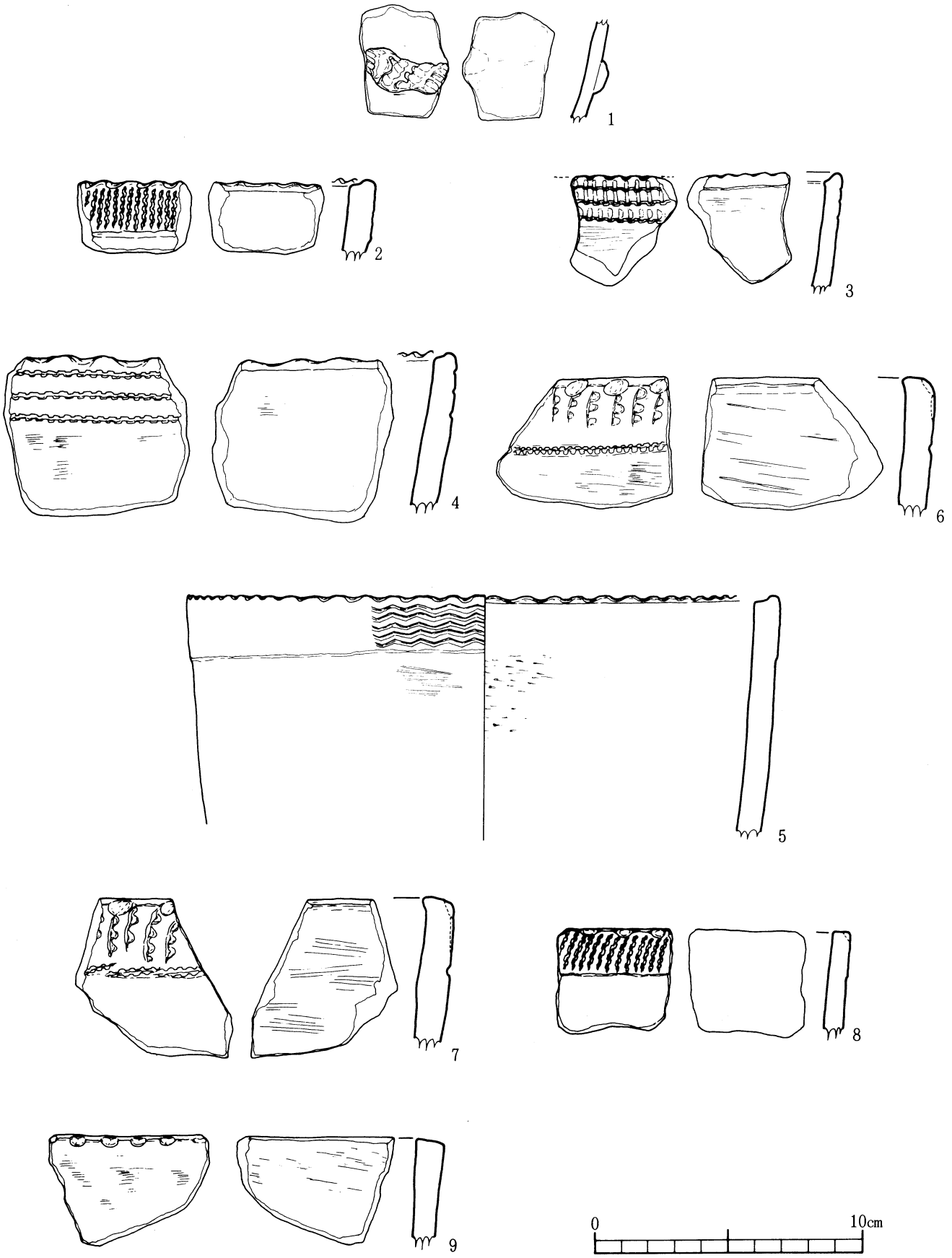
14，15は底部である。14は復元径14.5cmである。なお，外底部には網代圧痕が観察される。網代底は一般的には縄文後期に普遍的に見られるが，この時期まで溯ることが判明した最初の発見である。

Ⅲ類土器（第７図）

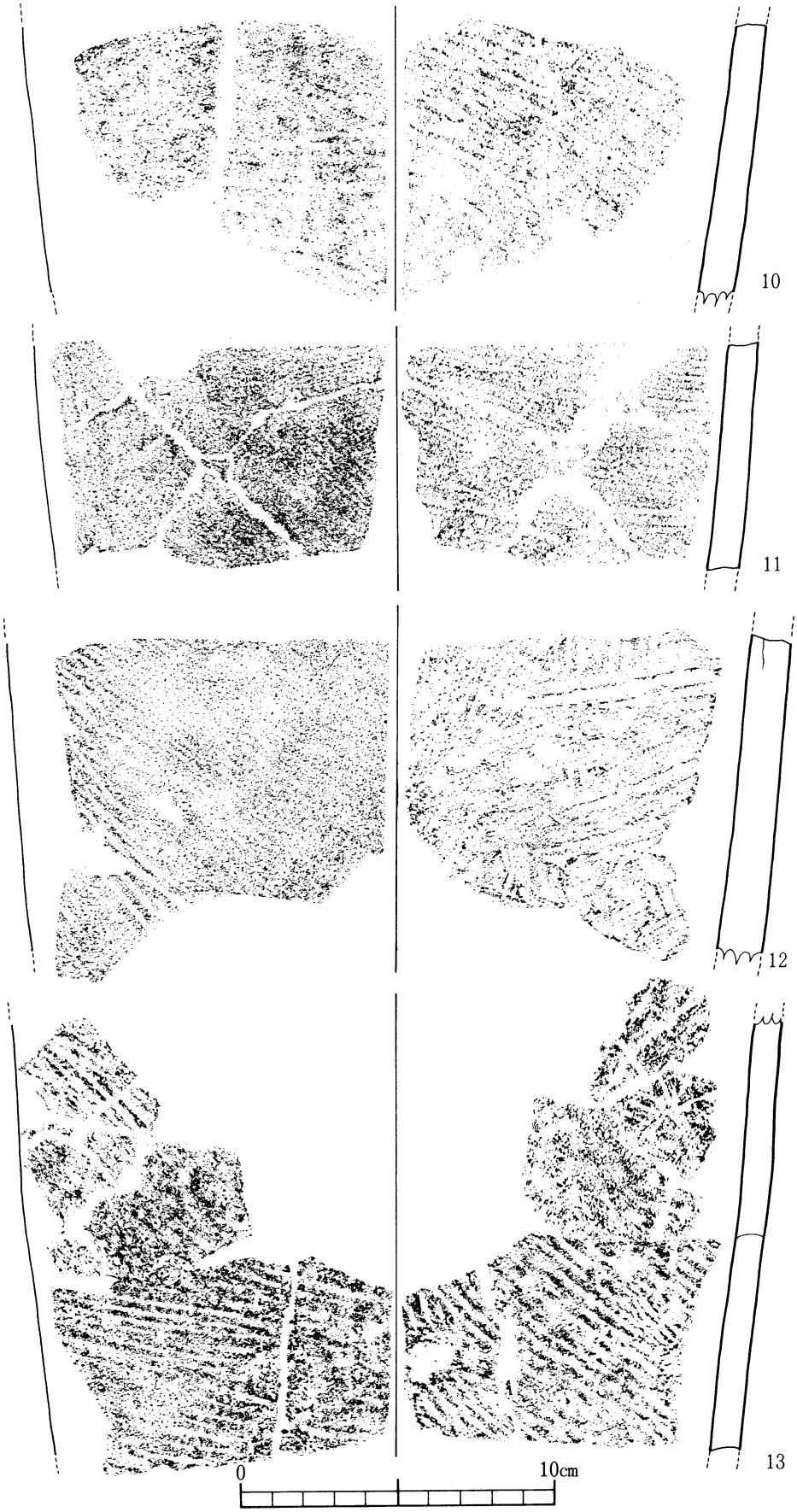
16は口縁部は直行し，口唇部は平坦となる。口縁部には貝殻腹縁による横位の重線文とその下位には，弧状の重線文を施文する。口縁部上位に約１cmの円形の補修孔が穿かれている。形式は不明であるが，縄文早期の土器と思われる。色調は灰褐色を呈し，胎土は脆い。



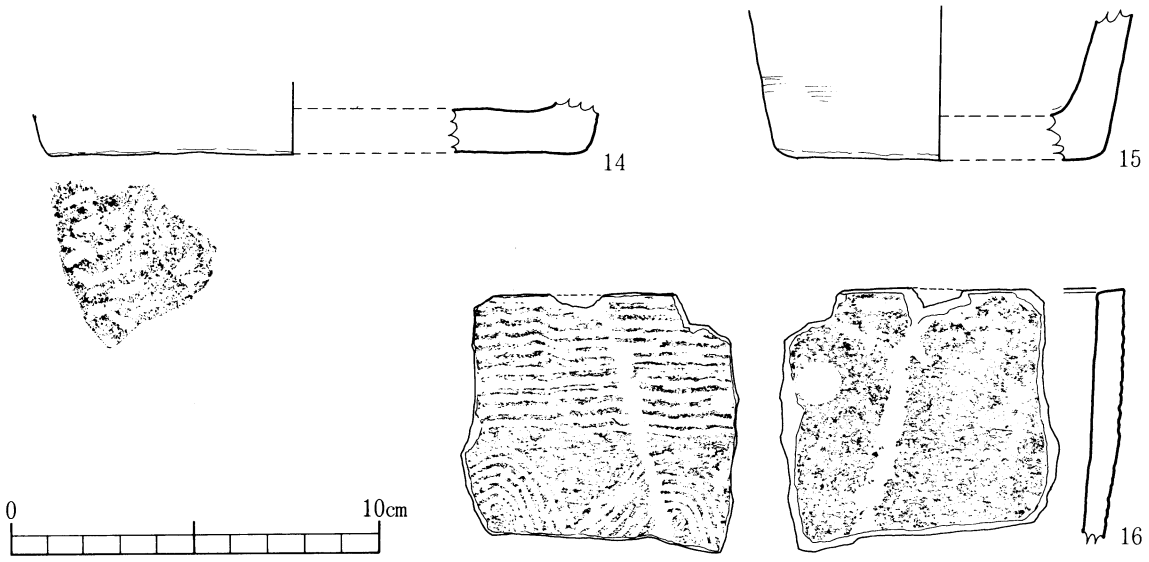
第４図　出土遺物分布状況



第5図　土器実測図



第6図　土器実測図



第7図　土器実測図

まとめ

今日の南九州における後期旧石器時代，縄文草創期・早期遺跡の発見と調査成果は目覚ましいものがある。その中でも特に，大隅諸島に位置する種子島における種子Ⅳ火山灰の下層から約31,000年前の土坑や礫群，焼土を伴う南種子町横峰C遺跡，中種子町立切遺跡や平成5年度に発掘調査された縄文草創期の隆帯文土器が出土した西之表市奥ノ仁田遺跡は，最終氷河期から急激に温暖化が始まる日本列島の後期旧石器や縄文草創期の位置づけや様相など今後の評価とともに課題を提供している。

本遺跡のⅠ類土器は，縄文草創期の隆帯文土器の小片の1点のみである。胎土には砂粒子を含み，色調は明褐色を呈する。文様は隆帯に貝殻腹縁による刺突を施していることから，奥ノ仁田遺跡出土の8b類に相当する。その他，種子島における草創期の出土遺跡には，西之表市屋久川遺跡，二本松遺跡の報告や，中種子町三角山遺跡があげられる。

Ⅱ類土器は，縄文早期前葉前平式土器である。口縁部は直行し，底部は平底の円筒土器である。口唇部の形態からⅡ類を3つに細分した。口唇部内側に稜を有し，口縁端部に刻目文を施し波状を呈すⅡ類A，口唇部はわずかにない湾して舌状を呈し，口唇部外側に刻目文を施すⅡ類B，口唇部が平坦で，口唇部外側に刻目文を施すⅡ類Cがある。9を除き，口縁部の文様帯部位の幅が広く，また，2，3，5のように文様帯が胴部器壁よりわずかに肥厚していることがあげられる。また，5は押し引きの山形文が施され今までに例のないものである。一般的な縄文早期前葉に位置づけされている前平式土器については，最古の前平式土器は岩本タイプの円筒土器で，口唇部と口縁部に主として貝殻・へら状施文具により連続圧痕文，連続刺突文を施したもので，その結果，口縁部が凸凹をなすものも知られ，口唇内側に稜を有するものも認められ，口唇部は平坦をなすもの，舌状の断面形を持つものなどがある。器面は貝殻腹縁による丁寧な条痕仕上げが行われる（長野1994）とし，これとⅡ類土器を比較すると，岩本タイプとの共通性及び類似点が見られ，従って本遺跡のⅡ類土器も古い段階の前平式に比定されよう。

これまで種子島においては，これに後続する吉田式土器は西之表市下剥峰遺跡や安城川脇，中種子町野間での出土例があるが，前平式土器は始めての発見例で，前平式土器分布の南限が明らかになり，草創期との繋がりを知る手がかりとなった。

図版 1

（上）西俣遺跡全景

（下）調査風景

図版 2

（上）遺物出土状況

（下）土 層

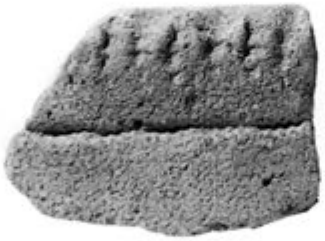
1

3

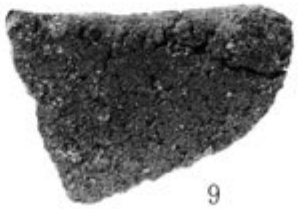
8

2

4


6

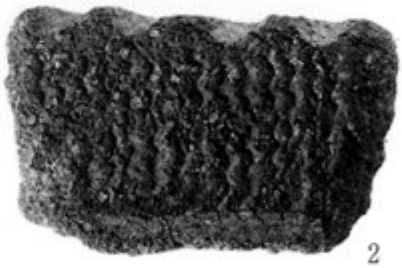
7

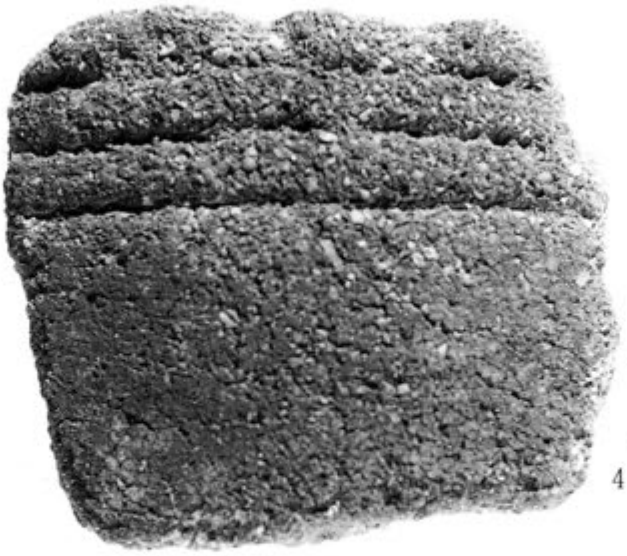

9

1

3

8

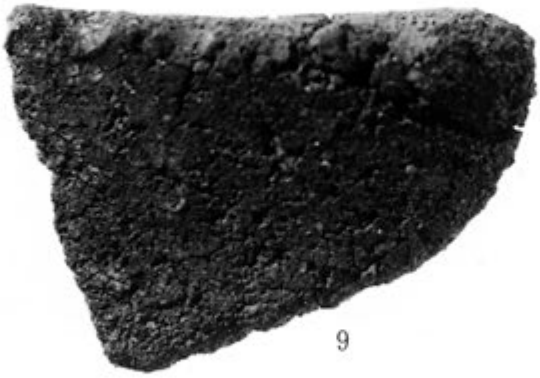

2



4

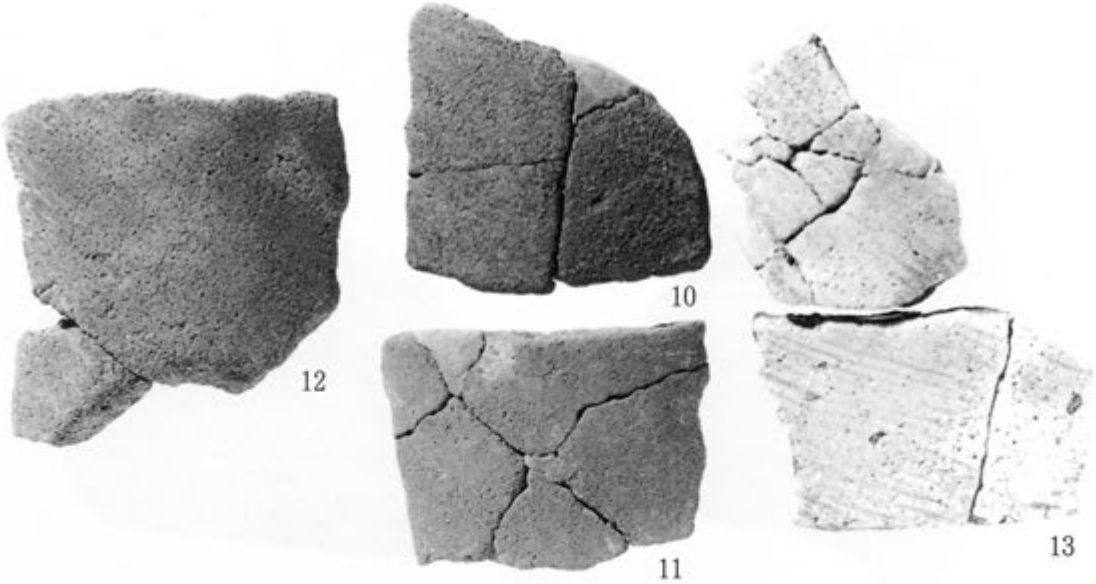
6

7



9

5



10

12

11

13

16

14

15

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告（24）

県営畑地総合土地改良事業に伴う発掘調査報告書

柿内遺跡
大園遺跡
西俣遺跡

発行日　平成11年３月31日
発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-5652 鹿児島県姶良郡姶良町平松6252
印　刷　中央印刷株式会社
〒892-0804 鹿児島市春日町12－16